

---

# ユージュリティオナ

ほーらい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ユジューティオナ

### 【Nコード】

N5461I

### 【作者名】

ほーらい

### 【あらすじ】

謎の病が世界を包む。

そんな中、一人の少女が人間の世界に降り立った。

少年は少女と出会い、そしてこの世界の裏に存在する別世界の存在を知る。

そして少年は『ティオナ』と『カード』と呼ばれる者達の戦いに巻き込まれていく……。

恋愛もちよっぴり交えた日常と戦いもちよっぴりなバトルアクションが交錯する妄想系ファンタジーです（お

## 第零話（前書き）

4月頃からmixiで連載していた小説です。

10月末に完成したので、こちらで再投稿させてもらっています。  
内容はmixiにて連載していた内容と全く同じとなっています。

## 第零話

### 第零話

深夜2時。日が沈んでから遙かに時は過ぎ、草木も眠る丑三つ時。むせび泣く声。こんな深夜には不釣り合いなほどの幼い声音。震えるようなその声は、誰かを引き寄せてしまう不思議な魔力を持っていた。

彼がその声に気付いたのは、自宅への帰路の真つ最中であつた。家に帰れば妻が待つている。こんな遅くまでご苦労様、と温め直した晩ご飯が出てくるはずである。

二人の時間は短いけれども、そこそこに幸せな毎日だつた。

「うええん……ぐずっ！」

彼はそれを不思議に思った。こんな夜中になぜ少女の泣き声が聞こえるのだろうか。何かの折檻に家を追い出されたのか、それとも家出か。そのどちらかであつても、大変なことには違いなかつた。

声の源へと彼は足を向ける。公園のベンチ。そこにその少女の姿はあつた。

腰まで届きそうな長い髪。真つ白な手足。とても小さな体。

それにもかかわらず、彼は今までに感じたことのない類の魅力を感じていた。

「お、お嬢ちゃん。こんな遅くにどうしたんだい？」

それでも、彼はその雑念を振り払って少女に声をかけた。

少女は少しだけ顔を上げると、泣きながら話し始める。

「ぐず……ひつく……寂しいの」

「……え？」

「誰かに抱いてもらいたいの。抱きしめてほしいの」

それは少女から飛び出すとは思えないような言葉。

いや、それは単純に胸に抱きしめてほしいという意味だろう。彼は

そう思い直すと少女を見据えた。

「おじさんは……私のこと、抱いてくれる？」

まだ20代半ばというのにおじさんと呼ばれたことに少し眉をひそめたが、それでもその妖艶な少女はそそられるような魔性の魅力をもって抱けと命じる。

「こ、こうかい……？」

彼は恐る恐る、少女の体を抱きしめる。だが、彼女は首を横に振った。

「そうじゃないの。そういうことじゃ……ないの」

少女は泣きながら彼の顔を見据える。そして、その円らな瞳で彼の目を見つめた。

「ちゅう……」

「!？」

次の瞬間、少女の唇は彼の唇と重なっていた。

舌は彼の口内へ侵入し、その中を冒していく。

「ちよ、ちよつと!？」

少女は無言で彼の口内を貪るように舐め、吸い、そして奪う。

狂おしいほどのディープキス。彼女は男の中の理性という名の堤防を崩していく。

「おじさん……私の言ってる意味、わかったかなあ？」

「そ、それは……」

「抱いてほしいの」

妻を一人家に待たせている彼としては、こんな少女に構っている暇はなかった。

だが、少女が持つ何かに強い魅力を感じていることは明らかだった。できることなら彼女の体を貪りたい。少女の体を犯し、その精をぶち込みたい。

そうできたらどれほどいいだろうか。正直なところ、彼の理性のタガは外れかけていた。

だが、最後の理性の糸がちぎれる前に彼は少女の体を突き飛ばした。

「だ、ダメだ！俺にはそんなことはできない！」

「こんなにも願ってもダメなの……？」

少女はふるふると瞳を震わせながら彼のことを見つめる。彼は顔を背けてその姿を見てしまわないようにする。さもなければ、理性が引きちぎれるのも時間の問題だった。

「そう……それじゃあ仕方ないね……」

彼は少女がそれは諦めてくれた声だと思い、ほっとする。これ以上彼女に求められてしまったら、それこそ襲いかかってしまいそうだった。

「せっかく“最期”に女の子と遊ばせてあげようと思ったのに」

「……最期……？」

それは本来ならば、命の終焉を意味する言葉。彼はその言葉の真意を理解することができなかった。

「おじさん、幸せそうだね。美味しそうだなあ。あはっ、あはははははっ！」

少女はゆるりと立ち上がると、大きく口を開けて笑い始める。その姿に彼は恐ろしさを感じる。彼の中で第六感が叫ぶ。ヤバイ、逃げる、と。

だが、その少女の視線は釘のように彼の姿をその場に打ちつけ、逃がすことを許さない。

「いただきます！」

次の瞬間、彼の胸の中へと少女は飛び込んでいく。その姿が彼の両腕の中に収まったとき、彼の体から気力という気力が全て消え失せた。

「……げぷ。美味しかったけど、やっぱり最期に遊んだ方が美味しいなあ。今度からは誘い方を考えないとねっ」

ぐったりとした彼をそこに残し、少女はスキップを踏みながら闇の中へと消えていく。

虫の鳴く声が響く。小さな音と、わずかな街灯の明かりだけが後には残っていた。

## 第零話（後書き）

まだまだ続きます。

ちなみに結構長いので、読むときは明るい部屋でディスプレイから離れて読んでください。

## 第一話（前書き）

mixiにて連載していたものを再投稿したものとなっております。

## 第一話

### 第一話

「感情を失い、人形のようになってしまふ奇病（心欠損活動消失症候群）（ハートレスアパシーシンドローム）（heartless apathy syndrome）（通称HAS）（）（）が大流行！ WHOは謎の奇病の調査に乗り出すも、その原因解明には困難を極める！」

僕……坂下 ユウタロウは新聞の第一面だけに目を通し、そして新聞を放り投げる。

今世界中で最もホットな話題である。全世界規模で発生している謎の奇病HAS。発展途上国、先進国、東西南北、いやそれぞれどこか世界中どの地域であっても関係なしに発生しているその奇病はもはや、世界中の紛争の進行すらも停滞させ、そしてどの地域であっても原因究明に向けて各種研究機関が全力で調査を行っていた。

今の時代、この病気の原因さえ解明できればノーベル賞を取ることができるとさえ言われているのだ。

「いよつ、今日も新聞か？」

知り合いのクラスメイトが声をかけてくる。今はもう、この教室に通う生徒の数も大分少なくなってしまった。

彼の名は瀬川 コウ。僕の友人であり、クラスメイトである。

「まあね。HASの脅威について読んでただけど、やっぱり酷いものだね」

「世界人口の1/10が減少だろ？ まったく、とんでもないよな」  
心欠損活動消失症候群ことハートレスアパシーシンドローム（heartless apathy syndrome）。それは文字通り心を失い、活動することもままなくなり、最後にはそのまま衰弱して死亡してしまう奇病だ。世界規模で突如発生し、WHOの調査によると世界人口の1/10を占めるほどの人間がこの病

気にかかっており、1 / 100 が死亡しているといわれている。このクラスでもつい先日、クラスメイトの一人がH A Sで死亡し、クラス単位で葬式に出かけてきたのだった。

「ウィルスらしいウィルスが見つからない。細菌でもない。そんなでもって感染した人間の環境に共通点が見られない。本当に奇病としか言いようがないよな」

原因については諸説ある。新しいウィルスや、現代という環境がもたら公害病、その他宇宙からの侵略者や、某国のN B C兵器だとか、トンデモ説まで千差万別である。

「共通点といえば…… 発症した瞬間を誰も見たことない、ってことくらいかな」

「ある日ある時突然発症……でも、ホントに不思議だよな。……俺達もいつかそうなっちゃうのかな？」

彼は不安そうに自身の未来を想像しているようだった。僕も不安ではないわけではない。ただ、なんとなく自分はそうならないような気がしていた。

自分のもとと無気力な人間だと思っている。だが、先月隣のクラスのア子園出場間違いなしと言われた野球部生徒がH A Sを発症して自宅休養だと言う。おそらく、元からの気力の有無は関係ないのだろう。

「そっぴや、お前部活どうしてるんだ？」

「いや……行ってないよ」

部員の半数以上がH A Sになってしまったのをいいことに、僕は所属していた剣道部も幽霊部員となっている。もともとイメージから先行して入った部活動だ。武士のように華々しく敵を倒すことをイメージしていただけに、スポーツと化した実際の剣道を見てやる気がなえたのも確かな事実だった。

「カツコよくないんだもん」

「お前、殺陣とか出てくる映画好きだからな」

「なんだか剣道って、そういうイメージから離れているから……」

元々根性もない僕にそんなことができるわけがないのは自明の理であつた。それでも、夢を見ていたかつた。だが、その夢までもが打ち碎かれたわけである。

「よし、今日映画見に行こうぜ！」

「何の映画……？」

「そうだな……お前の好きなのでいいよ」

彼はよくこうやって映画に誘ってくれる。毎日を楽しく過ごすことも、H A S対策になるのかもしれない。

こうして毎日をなんとなく、けれども楽しく過ごしている僕達はH A Sを発症することもなかった。

「……ユウタロウ君、本持ってきてくれた？」

そのとき、一人の少女が声をかける。

栗色のツインテールを腰まで下した、大きな黒い瞳の少女。

彼女の名は神崎 トモミ。このクラスの図書委員である。時折こうして本の返却を催促してくる。

「ま、まだ読み終わってないんだ。もうちょっと待ってくれる？」

しばらくの間彼女は僕のことを見つめていたが、やがて小さくため息を吐いた。

「……貸出期間延長手続きしておくから、来週持ってきてね」

「う、うん。ごめん」

そう言つて彼女は立ち去っていく。それにしても図書委員という仕事も大変なものだ。彼女はなんとクラス全員の図書の貸出期限を把握しているらしい。

僕は特に本をよく借り、そして読むのも遅いのでいつも彼女に文句を言われる。500ページから成るような小説を熟読するのはやっぱり大変だ。

「また彼女につつかれてんのか？」

「か、彼女じゃないよ！ トモミとは幼馴染みだけで……そんな特別な関係じゃないよ！」

「面白そうな話してるね？」

そのとき、ひよっこりと燃えるような赤髪の少女が顔を出す。日本人には見えない風貌の彼女は、留学生のリオナ。よくトモミとくっついて歩いている。

「私抜きでトモミンの話題をするのはダメよ？」

彼女はトモミのことをトモミンと呼ぶ。それをトモミは特に何も言わない。それだけ二人は親しいということだろう。

だが、活発なりオナとおとなしいトモミが親しい理由が未だに僕は理解できない。もしかすると、お互いが持っていないものを補い合う関係なのかもしれない。

「リオナは関係ねーだろ？」

「ダメよ？ トモミンと私は切っても切れない関係ね」

リオナはそう言って僕達の間割り込んだ。

「さっき映画に行くって言ってたね。私とトモミンも誘うといいよ。そうすればもつと楽しいね」

「おいおい、俺はユウタロウを誘おうと思ったんだぞ？ お前らを誘う義理も義務もねーよ」

「トモミンだって喜ぶね」

「アイツが映画なんか観て喜ぶのか？」

二人は相変わらずいがみ合うように戦っている。いつもの空気に慣れている僕はふいと横を向いた。

そのとき、一人の視線に気付く。それは当の神崎トモミのものだった。

彼女と一瞬目が合ったが、すぐに彼女の方からそらすとどこかへと行ってしまふ。

自分の話題が話されていれば気になるのは当然かと思い、僕は机につつ伏す。相変わらず二人は言い争いを続けている。

僕はゆっくり目を閉じる。映画に行けても行けなくても、どうせ明日には変わらない毎日が待っているに違いない。

そのまま眠りの世界へと身を委ねる。そうしてしばらくしていたら、僕は本当に眠りに落ちてしまった。

「とても面白かったね！」

興奮した様子でリオナが話す。

僕達は学校帰り、そのまま映画館へと向かった。平日というだけあって、映画館はガラガラだった。

「トモシントモミン！ あの武士が振り回す剣、凄く大きかったよ！ とつてもカッコよかったよ！」  
「そうだね」

結局二人も映画に付いてきた。映画の間リオナはずっと興奮して何かを騒いでいたが、僕の耳にはその声は届かなかった。なぜなら、それほどまでに映画の世界へと引きずり込まれていたからだ。

巨大な斬馬刀を片手で振り回す主人公。そして、数メートルの槍を振り回す敵役の男。その二人の殺陣のなんと熱かったことが。僕は周りのことも忘れて見惚れていた。

周りのことといえば、コウ達は映画の間どうしていたのだろうか。

僕はこういう映画は好きだし、コウはいつものことだが、彼女らはそうでもないだろうに。

リオナの様子を見れば、彼女が楽しんでいたということはわかるが、実際トモミは面白いと思ったのだろうか。

彼女の方を窺う。彼女は楽しそうに語るリオナの話をうんうんと頷きながら聞いていた。

「どうしたコウタロウ、彼女が気になるのか？」

コウが嫌らしい笑みを浮かべて僕の耳元で囁く。

「ば、馬鹿。気になってなんか……」

「さっきからトモミの方ばかり見てるじゃねーか。気になってんだろ？」

「う……今日、楽しんでくれたかなーって思ってたさ……。僕みたいな殺陣マニアならまだしも、彼女みたいな普通の人は……」

「そうでもないみたいだぜ？ なんだかんだいってギャグシーンで

笑ってたし、最後の見事な殺陣のシーンではすっかりシーンに呑まれてたしな」

「そっか、それならよかった」

僕はほっとしたように息をつく。自分だけ楽しんでいても、皆が楽しめなければなんとなく嫌な気分になってしまう。

「ところで……なんでコウはそんなにトモミが楽しんでたって知ってるの？」

「それはだな、ははっ、もう何度も見た映画だから、それを見てどんな反応するのか見てたくてな。リオナなんか大はしゃぎだったぜ？」

ちよつと怪しい言い訳だったが、ユウタロウはそれ以上追及することもなく息をつく。

東の空には低く満月が上っている。まだ夜7時。この月が空の天辺へと昇るまでまだ何時間あるだろうか。

「それじゃあここで」

十字路に差しかかって僕達は立ちどまる。ここで僕はまっすぐ、コウは右、トモミとリオナな左に行かなければならない。

「また明日学校で」

「うん、またね」

「おう、じゃあな」

僕達四人はそこで別れる。ここから僕の家まであと五分。それまでゆっくりと映画の余韻に浸ることができる。

映画のワンシーンワンシーンを思い出す。もうすでに何回も見に行った映画だが、それでも見る度に感動し、体の芯が熱くなる。

よく飽きないなとコウにはいつも言われるが、何度見ても飽きないものは飽きないのだ。コウはむしろ人間観察の方が楽しみになっているようで、毎度毎度よく誘ってくれる。

公園にさしかかる。ぐるっと公園の周りを回るより、公園を横切った方が早いのだ。

いつもの駅の方からの帰り道。いつも通りならば、それは虫の声だ

けが聞こえるはずの公園であるはずだった。

だが、いつもとは違う雰囲気。なんだか空気が違う。それと、ほのかに胸糞が悪くなるような臭い。

「はっはっはっ！」

「あっ！？ やっ！？ ダメ！？」

それは、僕の記憶が正しければ強姦というヤツではないだろうか。少女のモノと思われる悲鳴。荒げる男の声。僕は背中に凍りついた棒を突っ込まれたような気がする。

額から冷や汗が流れ落ちる。ねばつくような脂汗が体中から噴き出す。

どうするべきか。このまま放っておくか、それともどうにかするべきか。

僕はふと地面を見た。そこには手頃な木の棒が落ちていた。

今日の映画を思い出す。映画の主人公は悪を許せないまっすぐな精神の持ち主だった。できることなら僕もそうになりたい。

僕は棒を拾い上げてみる。軽く振ると、それは空気を切る音がある。とても信頼できる力強さだった。

僕はそれを持って声の元へと走る。そこには若い少女の服を脱がそうとする男と、半裸の少女がいた。まだ行為そのものには及んでいないようだった。間に合ったのである。

「お、おい！ や、やめろお！」

「ひ！？ お願いだから警察だけはやめてくださいお願いします！」  
男はそう言つと、頭を抱えてどこかへと走り去っていく。ぽかんとしたまま僕と少女はその場に立ちつくす。

「え、え……？」

少女は茫然としたまま露出した体を隠すこともせずに僕を見つめる。その視線に気付き、僕は後ろを向く。

「だ、大丈夫だった？」

「……」

少女は黙ったままだった。後ろを向いているので表情は読めない。

「えっと、襲われてたみたいだからつい飛び込んだけど……」  
「……余計なお世話だよお」

まさかそんな言葉をかけられるとは思いませんでした。僕は振り向いて少女に文句を言う。

「な、助けてあげたのになにさ！」

映画のシーンにも、襲われる女の人を主人公が助けるシーンがある。そのシーンで主人公はお礼を言われ、そのまま恋愛へまで発展するのだが……さすがにそこまでは期待していない。

だが、せめて礼くらい言うのが筋というものだろう。

「せつかくの……だったのにい」

「は……？」

僕は耳を疑った。見た目はまだ十歳かそこらの少女だ。そんな可愛いらしい年代の少女の言葉とは思えないような言葉を彼女が言ったからだ。

「せつかくの晩ご飯を逃がしちゃってえ……」

「晩……ご飯？」

「体だつて“人間”と同じだから快感もこそばゆいのにい……あなた台無しにしちゃったんだよお？ あ、お兄ちゃんって言った方が嬉しいのかなあ？」

黒髪黒眼の少女はそう言って舞うようにくるりと回る。その次の瞬間、彼女の服は元のようにしっかりと身に付けられていた。赤のアクセントが入った黒いドレス。黒薔薇のヘッドドレスが頭上に結ばれていた。

「もうこの際お兄ちゃんでもいいやあ。美味しく食べられれば誰でもいいやあ」

「た、食べるってどういうこと!？」

「人間の心は美味しいんだよ。喜びの記憶は甘くてえ、怒りの記憶は辛くてえ、哀しみの記憶はしょっぱいしい、楽しみの記憶は……こんなこと人間に語ってもわからないかなあ」

少女はそう言うと、大きくため息をつく。そして、キラキラと目を

輝かせてゆらりと立ち上がる。

「な、何！？ 君は何なの！？」

僕は棒を構える。こんな棒切れが何の役に立つというのだろうか。彼女の前にはそんな棒切れなど、言葉通りただの棒でしかない。

彼女を中心に闇が広がっていく。

「え、えい！」

僕は思い切り棒を投げつける。だが、それは彼女に当たる直前で碎け散り、粉々になってしまった。

「ひ、ひい！？」

「そんな攻撃は効かないんだよ？」

僕は彼女を中心に広がる闇から逃れようと走り出した。

「逃がしはしないわよお」

それは一つの迷宮を作り出した。僕は暗い迷宮に閉じ込められる。

もうそこはさつきまでの公園ではない。冥い闇の迷路。心を閉じ込める真つ暗な世界。

「な、何なんだよ！ このワケのわからない世界は！」

そこはさつきまでの街とは似ても似つかない、中世ヨーロッパのような街並み。石造りの家々が立ち並び、木の扉が重く閉ざされている。

僕はそんな街という名の迷宮を駆けめぐる。

「うふふふ、どこに逃げたのかしらあ」

彼女は僕の姿を探そうと、街並みの中をゆっくりと闊歩する。

僕は木箱の影にうずくまる。ワケのわからなさに歯がガチガチと鳴り、体がガタガタと震える。

直感で僕はわかった。これはあの少女の作り出した彼女の世界なのだ。どこへ行こうとも、僕に逃げ場はない。

「見いつけたあ！」

少女はついに僕の姿を見つけ出す。耳まで裂けたのではないかと思えるほどに口をニタリと開く。

「さ、最後に一つだけ教えて」

「なあにい？」

「き、君は……な、なな何者なんだ？」

「うふふふ、教えてあげよっかなあ〜、どうしよっかなあ〜」

彼女は手品のタネでも明かすかのように楽しそうに思案する。

「私達はねえ、ユジューっていうの。あなた達人間が住む世界の裏側に住んでてえ、人間の感情を食べて生活してるのお。人間の感情っていうのはあ、とっても美味しいんだよあ。でも、私達はそれだけじゃ我慢できなくなったのお。それで、人間の感情を生み出す源の心を食へにはるばるやってきたのお」

「こ、心を食へに……？ 心を食べられた人間は……！？」

彼の脳裏に一つの言葉が甦る。

「あはは、お兄ちゃんだつてわかってるくせにい。私の世界の中にいるお兄ちゃんの心なんか一発で読めちゃうんだからあ」

彼女の言わんとしていることは理解できる。それはつまり……。

「心欠損活動消失症候群……？」

「人間の世界で何て言うかは知らないけどあ、お兄ちゃんの考えているのは正解だよあ」

少女は快活に笑うとギラギラとした笑みを浮かべながら僕を見つめる。

「じゃあ、教えてあげたからあ、食べていいい？」

「ひ、や、ダメ！？ ダメに決まってるじゃないか！ 僕なんてそんな、おお、美味しくないよ！？」

「嘘言つたつてダメえ。こうやって焦らせば焦らすほど心は感情は強まって美味しくなるんだからあ」

長い黒髪を揺らしながら少女は迫る。僕は下がれるだけ下がろうとするが、既に壁が背中当たっている。これ以上は下がることはできない。

「待ちなさい！」

そのとき、二人だけしかいないはずのその世界に声が響いた。

「ま、まさかティオナあ！？」

「う、うわぁ！」

僕はその一瞬の隙をついて走り出した。少女の脇を駆け抜けて、街の路地裏へと飛び込んだ。

「あ、待ってえ！ 私の晩ご飯〜！」

少女はゆっくりと歩いて僕の後を追いかける。僕はどこまでもどこまでも走って逃げ出した。

ようやく彼女の姿が見えなくなったところで座り込む。心臓は破裂しそうなほど脈打ち、息は絶え絶えだった。

『あなた人間だよね』

「だ、誰!?」

どこからともなく声が響く。それは先ほど少女に制止をかけた声だった。

『あなたそのままじゃ食べられるちゃうわよ!?』

「そ、そんなこと言われたって……!」

そのとき、背中に何か柔らかいものが触れる。

「う、うわぁ!?!」

「そんなに驚くことないでしょ？」

そこには……先ほどの少女とは別の少女が立っていた。長い紺碧の髪。琥珀のような黄色い瞳。硬質なドレスパーツに彩られた甲冑のようなドレス。それは見たこともないような服装だった。

声を聞く限り、先ほど助けしてくれた少女に違いないだろう。

「き、君は……?」

「私はアリシア。人間、力を貸しなさい」

「ち、力を貸すって……?」

「あなたの心をもらおう」

僕は言葉を失った。この少女も僕の心が目当てなのだ。きっと、先ほどの少女とどちらが先に心を食えることができるか争っているに違いない。

「ひ、だ、ダメダメ！ 僕なんか美味しくないって！」

「見いつけたぁ」

そのとき、背後から声がかかる。振り向くと、先ほどのギラギラとした少女がそこには立っていた。

「もう逃がさなあい」

「人間！ つべこべ言わずに心を！」

僕は走り出した。だが、その手をアリシアという少女に掴まれる。

「あなたここで死にたいの!？」

「き、君に心を差し出したって同じじゃないか！ どうせ僕は廃人になるんだろ!？ そんなん嫌だよ!」

こんなことなら、正義のヒーローを気取って女の子なんて助けるべきではなかった。いまさら後悔してももう遅い。

「何を勘違いしてるのか知らないけど、私はあなたを食べに来たんじゃないわ。このままでは私もあなたもあいつにやられてしまう！

ムーティエンがなければサナリーカットを持つユジューカードには勝てないのよ!」

もはや言葉の意味がわからなかった。だが、もう迷っている暇はなかった。彼女の言う心もらうという言葉の意味はわからなかったが、廃人と化すよりか凄惨なことは死ぬことくらいしか思いつかなかった。

「わ、わかったよ！ なんだかわからないけど、助かるなら僕の心を使ってよ!」

その瞬間、僕の中を何かが強くと鼓動する。

僕は実感する。この強い鼓動の持ち主が心なのだと。

心が僕の中から抜き取られる。だが、それでもしつかりと体に繋がっていた。

「刃をまとえ！ その姿を武器と為せ!」

僕の心を刃が武装していくのを感じる。幾多もの感情が僕の心の中へと流れ込んできた。

「ムーティエン、ゲンチャ・ドルロス！ 顕現!」

アリシアの手には一本の剣があった。それはまさしく僕の心。心を感情で武装した感情の武器。

「ムーティエン！？ そんなんズルイわよお！」

少女の周りに幾重にも光が集まる。それは徐々に何か図形を描き出し、魔法陣のような模様を描き出す。

「シグマ……やっぱりそうくるのね！」

僕は木箱の影に隠れた。目の前で何か人外めいた戦いが始まるようにしていた。

少女の周りを回る光はやがて奇怪な文字を描き出す。それは高速で回転し、光の鞭となってアリシアへと迫る。アリシアはそれを手に持った剣で払う。

「うっ！」

剣が鞭にぶつかり合う度に僕の心が震えた。むき出しになっていないとはいえ、僕の心で攻撃を受けているのだ。離れているとはいっても、僕に影響がないわけがない。

「も、もう少し丁寧に……」

「まったく使いにくい人間ね！」

「え、僕のせい！？」

「打ちあう度にくねくね形が変わって……軟弱な心だわ！」

形が変化する剣を扱いにくそうに使いながら、アリシアは徐々に距離を詰める。

「やああッ！」

「きゃああああッ！」

一気に距離を縮めたアリシアはそのまま剣を振り抜きながら少女を切る。瞬間、世界が崩れていく。

今まで真っ暗な闇を描いていた夜の街にヒビが入る。そして、そのままガラスが砕けるように消えていく。

次の瞬間、僕は元の世界に立っていた。

あの不思議な少女はもういない。不可思議な空間も存在しない。

「ふう……まさかこんなのをリトマスにするとは思わなかったわ」

「うわあ！？ ゆ、夢じゃなかったの！？」

僕のすぐ後ろに先ほどのアリシアという少女が立っていた。彼女の

手には一振りの剣。七色に輝きながら形を変えるそれは地面に突き立てられている。

「な、何が何なの！？ その剣は何！？ とうか君達は何者！？」  
「……ふう……。説明するのも面倒だわ」

彼女は大きなため息をつくとき、剣から手を離れた。剣は七色の光に包まれながら光となって消えていった。

「私はユジューティオナのアリシア。ユジューっていう種族、あなた達と言えばヒトとか、サルとかそういうこと。で、ティオナってのは私達カードを討伐する者を指す言葉、わかる？」

「えっと、ユジューっていうのは僕達の世界の裏側に住んでいるんだよね？」

「そうよ。表裏一体をなす世界に私達ユジューは住んでいる」

「それが……こつちの世界に出てきたのは……」

「私達の同胞の中に、人間の感情だけでは飽き足らず、その源泉である心まで食おうとした愚か者がいたからよ。それがユジューカード」

「この剣は……？」

「ああもういちいち説明させないでよ！ これはムーティエン。あなたの心を核に、百人分の感情を鑄造して創った武器よ。あなたの場合はたまたま剣になったけど、核となる心によって形は変化するわ。鞭、斧、槍なんていう直接攻撃系の武器から弓、銃、スリングショットなんて飛び道具、それから魔導書までその姿はまさに千差万別よ」

そこまで一気に喋って少女はふらつく。僕は慌てて彼女の体を支えた。

「人間の体には慣れてないから……やっぱり無茶し過ぎた……かな……」

「え、ちよつと！？ 大丈夫！？」

そのまま彼女は僕の腕に抱かれたまま動かなくなってしまった。

「ねえ、ちよつと！ 起きてよ！」

彼女の息は荒い。本当に彼女は何か無茶をしたようだった。このまま放っておくわけにもいかないだろう。  
僕は彼女の体を抱え上げると、ひとまず自宅まで運ぶことにした。

## 第一話（後書き）

昔あらすじなどもほとんど考えずにぶっつけで書いた小説なので非常に荒いです。

展開などもめちゃくちゃな部分がありますが、そこは目を瞑っていただけると助かります。

## 第二話（前書き）

まだ小説の設定がしっかりしていない時期に書いたものなので、無駄な伏線張りまくってます。

なんか長いよくわからないのは流し読みしていただいて結構です。何かありましたら、メッセージ等送っていただけたらと思います。

## 第二話

### 第二話

僕の家庭には病気の母と、ずっと働き詰めの父がいる。

病気についてはほとんど説明いらないだろう。H A Sである。病院で点滴を受けながら細々と生き繋いでいる。

父は海外に赴任している。貿易会社の社長であり、世界各地様々な場所を転々としながら働いている。今は家にいない。

僕はひとまずアリシアをソファへと横たえる。苦しそうな息をしていた彼女だったが、未だに息を荒げながら眠っている。

「それにしても……なんで僕がこんな子の面倒を……」

見た目からして年齢12、3歳かそこらだろう。幼い顔つきと幼い体格のその少女は、時代錯誤も甚だしいような格好をしていた。

鎧のように硬い腕や腰などの要所所にあてがわれたパーツ、そして全体的に重厚な作りのドレス。こんな衣装は見たことも聞いたこともなかった。

……見た目は確かに可愛い。ユジューというヒトとは別の種族だと聞いたが、ここまで見た目が似ているものなのだろうか。目を覚ました後にしっかりと話を聞く必要があるそうだ。

体調が悪そうなのは気になったが、未知の生物に僕がしてやれるようなことは無さそうなので、ひとまず僕は晩ご飯の支度をする。既に時刻は7時。一般的な人間ならお腹が空く時間だ。

この家の家事はほとんど僕が一人です。父は僕が高校に上がると同時にほとんど海外で仕事をするようになり、母は僕が物心ついた頃にはすでにH A Sにかかっていた。だから、心を食われた母が二度と目覚めないと知っても、正直感慨は湧かない。

野菜を適当に刻み、水を張った鍋の中へと放っていく。あらかじめ朝炊いておいたご飯を電子レンジで温める。ご飯が温まったら、帰

りに買ったブリの煮付けを電子レンジで温める。その間にコンソメを鍋の中へと放り込む。そうして今日の晩ご飯は完成である。

「ん……」

そのとき、ソファの方でアリシアがむっくりと起き上がる。

「起きた？」

「……」

「僕の家だよ。まさかあのまま公園で放置するわけにはいかなかったからさ」

彼女は立ち上がると、ふらふらした足取りで食卓の方へとやってくる。

「これは……」

「僕の晩ご飯だけど……一緒に食べる？」

「うんうん！」

そう言うのと手が動くのはどちらが早かっただろうか。僕の箸を奪い取ってむしゃむしゃと食べ始めた。

「わ、ちよつと!?!」

「人間のご飯って食べたことなかったから美味しいのになって思ってたけど、なかなか美味ね。人間にしてはやるものね」

ほとんどすべて片付くまでに要した時間は何秒だろうか。瞬く間に、という言葉の意味を理解できたような気がした。

もはや僕は自分のご飯を全部食べられてしまったことを怒ることも忘れ、ただ茫然とその食べっぷりを見つめていた。

「ふう、ご馳走さま」

ぱたんと彼女は箸を置く。その瞬間、僕は自分の食べるものが何も無いという事実にようやく気付く。

「ちよ、ちよつと！ 全部食べることはないじゃないか！」

「あら、人間。あなたも食べる必要あったの？」

いつの間にか息の荒さがなくなっていることも微妙に癢に触った。少しは心配したというのに。

「当たり前だよ！ 誰のために用意したものだと思ってるの!」

「私じゃないの？」

僕は大きなため息をついた。

そして、自身の夕食を諦めて椅子に座る。ともかく、彼女から話を聞かなければ気が済まない。

「説明してもらえよね？」

「私が人間に何を説明する義務があるのかしら？」

「さっきの女の子……ユジューカードって言ったっけ？ それとか君達……ユジューティオナとか、っていかもう全部だよ！」

「……ふう」

彼女は諦めたようにため息をつく。そしてゆっくりと説明を始める。「私達はユジュー。それはもう説明したわよね。この世界の裏側に住んでいて、この世界の住人からあふれ出た感情を食べて生きているの。本当はそれだけで満足してただけど、中にはそれだけでは飽き足らず、人間の世界までわざわざ赴いて人間の心を食べにやってきたヤツらがいるの。こういった輩を私達はカードって呼んでいるわ。ユジューと人間は食物連鎖の関係で結ばれている存在。そんなふうにならぬように絶滅させるような勢いでエサにしたら人間が滅んでしまうわ。そうなれば私達も困るわけ。で、私達はそのカードを倒すために組織されたユジューのティオナ、通称ユジューティオナって呼ばれているわ」

「えっと、そのカードをやつつける討伐隊ってことでもいいのかな……？」

「まあそういうこと」

箸で茶碗についたご飯粒を拾いながら彼女は説明する。

「……お腹空いてるならお代わり出そうか？」

「お願い」

そう言っただけで彼女は茶碗を突き出す。僕は彼女から茶碗を受け取ると、もう一杯ご飯をよそう。

「で、さっきの剣……あれは何？」

「ああ、あれね。あれは感情の武装、ムーティエン。100人の感

情を刃に、1人の心を柄とした武器よ」

「100人の感情に1人の心……？」

「そう。カードは大量の人間の心を食らって強くなっている。だから、それに対抗するために私達も武器が必要になるの」

「それが……ムーティエン？」

「あなたの心を核に、メセブリーが集めた100人分の感情で武装した剣がゲンチャ・ドルラス。人間の言葉で言うとなんて意味だつたかしら……？ まあいいわ。もぐもぐ」

ご飯をかつこみ、三杯目のお代わりを要求するアリシア。

「メセブリーって？」

「ユジューの中から選ばれた代表の人達ね。法律を制定したり、法律を元に政治したりするの。それから、法律に違反した人を裁くのも仕事かな」

「国会と内閣と裁判所を足したみたいな存在だね……。っていうか、癒着とかはないの？」

「ああ、それは大丈夫。透明性を重視してるから、人間の政治みたいに腐敗することはないね。会議も裁判も全て公開されてるし、政党なんてものもない。私達は不完全な人間と違って不正解と正解を見分けられないようなことはないからね」

ご飯を食べながら彼女は説明する。つまり、彼女が言うにはユジューの方が人間よりも格上だという。

「でも、司法が存在するってことは悪いことをする人はいるんですよ？」

「んー、欲望に飲み込まれる者もたまにいますよ。それがユジューカード。人間の言葉で言えば犯罪者ってことだね」

「人間の欲望に飲み込まれる……？」

「人間の感情っていうのは、こうしたい、こうありたいっていう欲望の感情から生まれるものがほとんどでしょ？ 私達はそれを主にエネルギー源として生きてるから、たまに汚染されるわけ。人間の言葉にもあるけど、七つの強い感情が私達を不正解へと導くのよ。」

傲慢 (superbia)、嫉妬 (invidia)、憤怒 (ir  
a)、怠惰 (acedia)、強欲 (avaritia)、暴食 (g  
ula)、色欲 (luxuria) って知ってるでしょ？ こう  
いう感情のどれかに狂わされるとカードになっ  
てしまうの。今日戦ったカードは強欲と暴  
食、色欲に狂っていたわ。感情っていうのは  
強いエネルギーだからね。時たまこういう  
のに狂わされる者もいるのよまあ、私達  
はそれを克服できたからこそ、こ  
うやってティオナとなつてカードと戦  
っているのだけどもね」

「正解を見分けられるんでしょ？ どうして人間の感情なんかエネ  
ルギー源に選んだの？」  
彼女は大きくため息をつく。

「そんなこともわからないの？ なぜあなたは食事という形でエネ  
ルギーを得ているのか考えたことがあるのかしら？」

「む……それはそうだけど……」

「原始的な生物の感情にそんな不純物はなかったのよ。おかしくな  
ったのはここ2000年付近かしらね」

「そ、そんなに長生きなの……？」

「一個体の寿命はそこまで長くないけど、歴史の長さは人間に勝る  
わよ。この世界の生物が嫌気呼吸という形から好気呼吸という形の  
エネルギー確保の方法に移るのと同じくらいの時間の歴史はあるわ」  
そう言いながら、人間のご飯をむしゃむしゃと美味しそうに食べる  
アリシア。

「そう言うアリシアはどうして人間のご飯なんか食べてるの……？」

「それは……人間の世界だから人間の体で活動するのに人間と同じ  
方法のエネルギー摂取方法が必要だからよ！ べ、別に食べてみた  
かったとか、そういうわけじゃないんだから……」

僕は思った。この目の前にいる少女も暴食という名の罪に負けてい  
るな、と。

彼女はごほんごほんとして幾度か咳をすると、真剣な表情で言った。

「そういうわけで、しばらく世話になるわ。人間の世界で生きてい

く以上、人間のルールに則って生きていくつもりだから。がつこう、  
つていうのにもなんか入らなきゃいけないみたいだし。それがメセ  
ブリーの出した答えだから従うけどね」

「学校つて……戸籍とかはどうなってるの……？」

「私という人間が存在するまでに必要な法的手続きは全部メセブリ  
イが整えているわ。私はメセブリーから派遣された歴としたユジュ  
ーテイオナよ。そういうことに抜かりはないわ」

彼女はやや面倒くさそうに言う。こんな嫌らしいのがやってきたら  
それこそ面倒だろう。彼女の外見を考えると小学生だろうか。

「確か入学先は……桜崎高等学校だっけ？」

「ちよつと待つて！？ それつて僕がいる高校じゃん！ なんで君  
みたいな子供が……」

「あら、これでも17歳よ。知らなかった？」

僕は愕然とする。どう考えてもそんな年齢には見えない。

「外見はあなたのせいよ。私達は人間の欲望を糧として生きている。  
だから、この世界に降りるときの姿は最初に接触した人間の理想の  
形になるようになっていくわ。多くの場合、リトマス……ムーティ  
エンに心を提供する人間ね。それが最初に出会った人間になるから、  
リトマスの理想の姿になるのは合理的といえるわね」

「ええ！？ ぼ、僕の理想！？」

僕は驚いた。確かに年下の女の子が理想のタイプだが、ここまで小  
さな子供が好きだとは思っていない。そんなことは断じてありえな  
いと断言できる。

「それは嘘だよ！ だって見た目年齢がこんなに年下の子が理想の  
わけが……」

「事実よ。あなたの心の中にある様々な要素を抽出した結果がこの  
姿なんだから」

「それは間違った抽出の仕方だよ！ そりゃ、妹が欲しいなと思っ  
たことはあるけど、こんな子が理想のわけ……」

「まあ、時々ちぐはくな結果になることもあるみたいだけどね。そ

ういうわけで、私はそろそろ休ませてもらうわ。この世界に降り立つまでが結構大変なのよ。疲れたわ」

そう言つて彼女は再びソファへと戻る。

「え、まさか君、僕の家泊まるつもりなの!？」

「そうよ。まさか私を劣悪な環境へ放り出すというの? この家中だつて私の世界で言えばホテルの通路とそんなに変わらないわよ」

「ホテルの通路……」

彼女はそう言つとソファに横になる。

「そんなに言つたらちゃんとした寝室で寝かせてあげるよ! 付いて来て!」

そう言つて僕は彼女の腕を引つ張る。

「ふーん、なら見てみましょうか」

僕が連れていったのは親戚などが来たときに使われる来客用の客室だ。やや埃が被つているが、ここなら文句もないだろう。

「じゃあ使わせてもらうわね」

「……あれ?」

僕はいつの間にか彼女が泊まることを了承したのだろうか。

「ちょ、ちょっと待ってよ! 泊まるつていつまで!？」

「しばらくはお世話になるうかしら。こつちでの滞在先もそう簡単には見つからないでしょうし」

「その、メセブリーつてのからバックアップはないの!?! 普通、そういうのつてあるでしょ!?!」

「戸籍の捏造と住居の用意は一緒じゃないわよ。まさかそこのアパートに住むわけにもいかないし」

「だからつて僕の家の世話になるつていうの!?! それはなんだか話がおかしくない!?!」

「うるさい人間ねえ。あなたは私のリトマスになった以上、全面的に協力する義務があるのよ」

わけのわからないことを言つて、彼女はベッドに横になる。

「全然繋がりが見えないんだけど!?!」

「うるさいわね。それ以上わめくと 斬る わよ？」

そう言つて、彼女は小さな七色の短剣を取り出す。それはおそらく僕の心を使つて作ったムーティエンというヤツだろう。僕へと刃を向けているためか、その刃はかなり小さくなっているものの、凶器としては十分機能しそうだった。

「う……」

「まったく使いにくい剣ね。こんなに小さくちや野菜の皮を剥くのには使えやしない。戦場では頼むわよ」

そう言つて、彼女は剣をしまつとベッドへ横になった。

「うう……なんでこんなのが……」

こうして、僕と彼女の奇妙で珍妙な共生生活が始まつたのだった。

「……！」

僕は何か恐ろしいものの雰囲気と視線を感じた。それを一言で表現するなら、殺意。

「……はあ……はあ……」

獣のように荒い息。それは確実に僕の命を狙っているように感じた。だが、僕は礫にされたように動くことができない。目を開くことすら許されない。

まさに金縛りというヤツだった。

「じお……ハア……んう……」

それは唸り声だろうか。僕の顔にかかる吐息が生々しい。

その気配は僕の肩に手をかけた。そして、万力のような力でゆっさゆっさと揺さぶる。

「うわあああああああ！」

「きゃあああああああ！」

僕はその瞬間飛び起きる。その気配も突然の僕の叫び声に驚いたのか、一気に飛び退つてそのまま戦闘体制に入る。

「あ、アリシア……？」

「はあ……はあ……」

そこにいたのはアリシアだった。彼女は恐ろしい形相を浮かべたまま腰を落とした拳を構える。

やはり、彼女の目的も僕の心だったのだろうか。危うく寝ている隙を襲われるところだった。時刻を見れば午前五時。僕がいつも起きる時間よりも1時間も早い。

「やっぱり僕の心を……」

彼女は一歩ずつ僕の方へとにじみ寄る。そして、ある程度の距離へと近付いた後、そこから一気に跳躍した。

「うわあああっ！」

僕は彼女が僕の方へと蹴りを繰り出す瞬間に身を捻って回避する。大きな音がして壁が蹴破られる。

「昨日はあんなことを言って……僕を騙そうとしたんだね！」

「はあ……はあ……ちが……」

彼女は壁から足を引き抜くと、ふらふらとしながら僕の方へと歩み寄る。僕はそれから逃れようとしたが、両脇を机と本棚に挟まれて逃げるができない。

「く、来るな！」

だが、彼女は一歩一歩と近付いて来る。そして、僕の胸倉に手をかけた。

「ごはん……ちょうだい……」

そう言っつて、そこではったりと倒れる。僕は彼女の言葉を聞いて茫然とする。

「うは……ん……？」

じゅうじゅうというフライパンの上でベーコンが焦げる音が聞こえる。美味しそうなベーコンエッグが二つ、フライパンの上で踊っていた。

ほどよく半熟になったベーコンエッグを二つに分けてすくい上げる

と、それをトーストへと乗せる。これでトーストエッグの完成である。

それを皿に盛って彼女の前へと置いた。それを見て、まるで今までお預けを食らっていた犬のようにがつついた。いや、我慢ができない分犬より始末が悪いかもしれない。

「生き返ったー！」

「ホントに七つの大罪を克服してるの……？ どう考えても暴食そのものだと思うんだけど……」

「し、仕方がないじゃない……お腹が空くものは空くんだから……。この姿を維持するには人間の感情だけじゃ足りないし……」

「それで、僕の夢からにじみ出た感情をさっきまで食べてたってわけなのね」

「わ、私はまだ半人前のテイオナなのよ！ 欲望に打ち勝つのはとても大変なのよ……」

そう言いながらトーストをむしゃむしゃとかじる。僕もそんな彼女の言い訳を聞きながらトーストを食べる。

「あなただって……ベッドの下に（自主規制）を隠してる癖に……」

「な、ななななんでもそれを知ってるの！？ 誰にも話したことないのに！？」

「夢を食べたときにチラッと見えたのよ」

それもただの（自主規制）ではない。リものを扱ったちよつとマニア向けのレアアイテムである。通販でしか入手することができない、大きなお友達向けの雑誌である。

「私がこんな姿になったのも納得だわ。まあ、襲われたら殺すけど」

「襲わないよ！ ってかああああ絶対になんかそれを口外したらダメだよ！ 僕の唯一にして最大の秘密なんだから！」

「じゃあ、あなたも私の大好きな食事に文句を言わない。いい？」

僕は首がひきちぎれるのではないかと思うほど首を縦に振った。それを見て、彼女は満足したように頷く。

「じゃあそういうことで……もう一個用意なさい」

「……はあ。わかったよ」  
僕は立ち上がって台所へと向かった。

僕とアリシアは学校への通学路を歩いていた。

昨日のドレスではなく、きちんとした学校指定の制服だ。一体どこから入手したのだろうか。それを彼女に尋ねる、ただメセブリーから送られてきたものだと言った。

登校していくうちに他の学生もちらほらと視界に入ってくる。

「いよう、ユウタロウ！」

そのとき、昨日の十字路の辺りで元気よくコウが現れた。特に待ち合わせているわけではないぎゃ、このくらいの時間にいつも合流するのだ。

「この子どもどちら様？」

アリシアに気付いたのか、彼は不思議そうに尋ねる。

「えーと……」

僕は特に彼女に関する言い訳を考えてはいなかった。この先居座るつもりのようなから、適当な言い訳をするわけにもいかない。

「彼女は……」

「再従姉妹の従姉妹のアリシアよ。家庭の事情でこっちに引っ越してきたの。よろしく」

コウは不思議そうに首を傾げた。

「どんだけ関係遠いんだよ。つてか日本人じゃないのか？」

「か、彼女はハーフなんだよ！」

「ふーん、ハーフなあ。まあよろしく」

特に怪しむこともせず、コウも挨拶をする。そのことが僕にとっての唯一の救いだった。

「か、彼は瀬川コウ。僕の友達だよ」

「セガワ・・・コウ？」

「そうそう！ いいヤツだからさ！」

「ちょっとユウタロウ、いいか？」

「え……？」

彼はちょいちょいと手招きをする。僕は彼女を置いて少し離れたところまで呼び出される。

「おいてめえいい根性してんじゃねえかよ」

そう言つて彼は思い切り僕の首をロツクする。突然の攻撃に僕は反応できず、されるがままに押さえつけられる。

「あんなロリ美少女侍らすたあどこのエロゲ主人公だおい？」

「ぼ、僕も突然やつてきて迷惑してるんだよ……！」

「迷惑だあ？　なんだ随分生意気なセリフ叩くようになったなあおい。そこいらに落ちてる犬のフンでも叩き込まれたいと見えるな」

そう言つて、実際にそこらに落ちていないかと探し始める。コウはやると言つたらやるヤツだ。このままでは本当に叩き込まれかねない。

「ま、待つて待つて！　落ち着い……ヤバイヤバイマジでヤバイつて！」

絞めたら確実に逝きそうな位置を的確に絞めるコウ。僕は呼吸困難に陥りつつも、必死にロツクを解除しようともがく。

「ロリツ子侍らせてごめんなさいつて百万回言えたら許してやるよ」

「ひやくまんかい！？　な、そんな、むちゃあああああああ！」

「てめえばかりいい目は見させねーぞ？　ああ？」

「何してるよ？」

そのとき、救いの神が現れる。リオナとトモミだった。

「り、リオナ……へる……ぷ……」

「あいあいあーよっ！」

三回転の捻りの後、中段足刀蹴りが繰り出される。それは的確にコウの胴体のみを打ち抜き、吹き飛ばす。

「うごおおあッ！？」

そのまま数メートル吹き飛び、電柱なら叩き折れる勢いでブロック塀に飛び込む。

「私に勝とうなんて百年早いよ、下等生物。あはははは、勝とうと下等をかけたギャグ、うふふふ」

一人でくだらないダジャレで笑い始めるリオナ。それを茫然とした様子で僕とトモミは見つめる。

「この団体様はどちら様？」

そのとき、アリシアが現れる。

「アリシア、この二人は僕の友達の神崎トモミとリオナ」

「……アリシア？」

そのとき、はつとしたような表情を浮かべてリオナはアリシアを見つめる。二人は数秒の間見つめあっていたが、やがて視線を反らした。

「見間違いね。留学前の友達にアリシアって馬鹿娘がいたね。でも、違うみたいよ」

「……？」

「よろしくね。私楽しいの好きよ。仲間が増えるのは楽しいよ」

「私も歓迎です。アリシアさん、よろしくお願いします」

二人はぺこりと頭を下げる。

「アリシアは転校生ね？」

「ええ、今日から桜崎高等学校に転入するの。よろしく」

アリシアもぺこりと頭を下げた。

「よし、今日も元気に学校へゴーね！」

そう言つてリオナは元気そうに歩き出す。

「さすが留学生……お勉強熱心なことだ」

五人は再び学校への道を歩き始めた。

まだ太陽は上り始めたばかりだった。

「では、入ってきてください。アリシアさん」

HRの担任の教師が入室を促す。扉が開き、澄ました様子のアリシアが現れた。

「名前はアリシア。好きなことは食事。嫌いなことは絶食。以上」  
わずか数秒で自己紹介が終了する。そのあまりの進行の速さにクラ  
ス一同は茫然とする。

「あの！ 甘いものとか好きなんですか？」

「好き」

「辛いものとかもいけます？」

「いける」

「すっぱい系は？」

「無問題」

ありとあらゆる質問を一言で叩き斬る彼女に、質問攻めもすぐに種  
が尽きてしまう。

「えーっと……空いてる席はユウタロウの隣ですね」

そう言っ、お決まりのパターンで僕の隣に彼女は着席する。

「教科書はいらないわ。既に高校レベルの学問ならば完璧にしてき  
たから」

そう言っ彼女はノートだけを取り出す。

「では、授業を始めます」

彼女の言う通り、勉強面に関しては完璧だった。

先生の繰り出す難問をことごとく正解し、いい印象も与えたようだ。  
そして授業が終わり、休み時間が始まる。それと同時に彼女の周りに  
人だかりができた。

「ねえ食事が好きなら美味しいカフェがあるんだけど今度いかない  
？」

「いやいや、たくさん食べるファーストフードワクドナルドはどう  
だ？」

「美味しい喫茶店があるのよ！ 甘味がピカイチでさあ！ 今度一  
緒に行きましょう！」

「週末に暇があれば」

「部活とかどうするの？　ウチの卓球部なんかどう？」

「いやいや、その小さい体を生かして新体操部なんてどうだい？」

「軟式野球をしたい」

「というか、高校生にしては体小さいね。いままで間違えられて大変だったんじゃない？」

「まったく不自由しない」

マシンガンのごとく質問が繰り返されるが、それにたいして一瞬で返答を返すアリシア。こんな面は僕には見せなかったが、ひよっとすると彼女はとても凄い人間なのかもしれない。いや、人間ですらないが……。

「はいはい、新生が入っているいろいろ大変なのもわかるけど授業よ授業」

気付くと10分しかない休み時間はいつの間にか終わっていた。

「うわ、やばい！　支度しないと！」

僕は急いで国語の教科書を取り出す。

アリシアの周りに群がっていた群衆もすぐに席へと戻っていく。こうして、数分前とまったく同じ風景に戻った。

先生の現代文の解釈の説明が始まる。正直なところ、聞いていても退屈なだけだ。

隣にいたアリシアも座りながら話を聞いていたが、やがて手を高く掲げた。

「その解釈は間違っているわ」

「……え？　何か間違えたかしら……？」

「筆者はここで解釈という言葉についての説明をしているけど、これは広義の解釈という意味を含んではいけないのよ。文中にて使われる解釈の意味に関する説明だから、ここで辞書を取り出すのは愚の骨頂。それと、釈の字の書き順が間違っているわ」

啞然とする国語教師。茫然とする生徒一同。それだけ言うと、彼女は何かをさらさらとノートに書き出す。そのページをびりりと破り、そして先生に差し出した。

「これを元に授業をするといいわ。こう説明した方が百倍わかりやすいもの」

そう言つて教壇にノートの切れ端を叩きつけると、元の席へと戻つた。

「……これは……わ、私にはできない……こんな高度なことは……  
く、覚えている！ いつかお前を超えてやるからな！」

そう言つて、彼は叫びながら教室を後にする。

「授業放棄つて普通立場逆じゃね？」

コウのツツコミに反応するものは誰一人としていない。

「仕方がないわね。私が説明するわよ」

そう言つとアリシアは立ち上がり、チョークを持って説明を……始めることができなかつた。

「んー！ んーっ！」

黒板の上段まで背が届かないのだ。上から書くことを諦めると、低い位置から彼女は書き始める。

「なあユウタロウ、あの子何者？」

「さあ……僕もわからない」

先生に代わつてアリシアの始める授業を受けることになつた僕達。確かに彼女の授業の方がわかりやすかつた。

こうして一見平和に授業が進んだかに見えたが、その異変は11時頃に発生した。

次の授業の教師である数学教師も追い出した彼女は相変わらず授業を進めていたが、やがて苦しそうにうなりながら呼吸を荒くし始めた。

「はあ……はあ……ちよつと……」

そう言つて彼女は僕を呼ぶ。突然の事態に何事かと僕は立ち上がった。

彼女によって強制的に教室の外に連行される僕。

「ど、どうしたの！？ なんだか凄く体調悪そうだけど……」

「あ、あなた……何か食べ物持つてない？」

「……………はあ？」

突然僕の体をまさぐり始めるアリシア。

「ちよ、ちよつと！？ いきなりなに！？」

「はあ……………はあ……………み、見てわからない？ お腹が空いたのよ」

「へ？ ……………ふごあッ！」

食べ物が見つからないことに苛ついたのか、僕に正拳突きを叩き込むと彼女はどこかへと走り出す。

「ま、待って！ げほっげほっ！」

僕は必死に彼女の後を追いかける。あんなに短い足のどこにあんな素早さがあるのだろうか。僕も人のことを言えるほど長くはないが、それでも体の小さい彼女より長い自信はある。

「あつたわ！」

そう言っ指差すのはパンの自動販売機。彼女はどこからともなくムーティエンを取り出すと、大きく振りかぶって構える。

「あ、アリシア！？」

「やあああああッ！」

そして思い切り振り抜いた。が、その瞬間刃が急に小さくなり、自動販売機を両断するはずだった刃は寸でのところで消失した。

「邪魔しないで！」

「それはヤバイって！」

今のは僕がうまく心をコントロールできたから起きたのだろうか。ともかく自販機を破壊されたらこの学校に通う150人の生徒からクレームが付きまくることは間違いない。

「待って待って！ 今買うから！」

僕は慌てて財布を取り出すと、五百円玉を自販機に投入してあんパンを購入する。

「はい」

それを彼女に差し出す。すると、一瞬でビニールの包装を剥いで数秒でその胃の中へと収める。その時間、手に取ってからわずか一秒。

「ん、まあまあね」

「ともかく、物を破壊するようなことは……」

突如、彼女の周囲に光が集まる。それはやがて幾何学的な模様を描き出すと、風の刃を生み出した。

僕の言葉が終わる前に両断される自動販売機。中からどさどさと大量のパンが転がり出てくる。

「最初からシグマを使えばよかったわ」

「……」

僕は言葉を失ってその様を茫然と見つめる。彼女は嬉しそうにパンを拾い上げると、むしゃむしゃと食べ始める。

「あんがちよつと甘すぎるわね」

「……はっ！」

僕は逆転の発想だと思いつく。なかったことにすればいいのだ、と。「あ、アリシア！ そのシグマって魔法みたいなもの！？」

「ん？ シグマは心の力を具現化させるものよ。まあ、人間にわかりやすく説明するなら魔法かしら？」

「そ、それじゃあこの自動販売機を直せる！？」

「んー、私の属性は風だから、そういうのは無理かな」

「……」

僕は茫然とする。こうなつたら、なかったことにするのではなく、誰がやったか発覚されない方針に切り替えることにする。

幸い、今は授業時間だ。この場から早急に立ち去ればバレないだろう。そもそも、こんな風に自動販売機がばっさりと切断されるなんて誰が考えるだろうか。

「アリシア！ 逃げよう！ このままここにいれば見つかるよ！」

「え、見つかるとか問題でも？」

「ーッ！ 正解を見分けられるんじゃないの！？ このままここにいれば自販機を壊した犯人がアリシア……いや、このまま見つければ僕も危険だ！？ ともかく見つかりたくないから早く！」

落ちていくつかのパンを名残惜しそうに見ていたが、ともかく彼女を手を引いて走り出す。この時間でもっとも人との遭遇率が低

いのは屋上だろうか。

階段を駆け上がる。誰とも出会うことなく屋上に行くことができたのは不幸中の幸いだと言えるだろう。

「はあ……はあ……危なかった……」

未だバクバクと鳴り続ける心臓を落ち着かせるため、僕は座り込む。彼女はむしゃむしゃと美味しそうにパンを食べる。

「あなたも食べる？」

「いや……いいよ」

僕は丁重にお断りすることにする。そもそも、今はそんな余裕はない。

空をゆつくりと見上げる。僕を襲うこの奇妙な非日常とは裏腹に、どこまでも広がる真つ青な空がなんだか恨めしい。

「やっぱりアリシアね」

そのとき、どこからともなく聞き覚えがある声が響いてくる。

ドアの方から歩いてきたのはリオナだった。

「誰？」

「リオナよ。忘れてないね？」

しばらくの間考え込んでいたが、ようやく何かを思い出したのか手に持っていたパンを取り落とす。

「リオナって、あのリオナ！？ 出来損ないで落第しかけてたくせに、なぜかテイオナに早々抜擢されたクラスメイトの！？」

「なんだか余計なところだけ覚えてるね」

「ああ、なるほどなるほど。久しぶりね」

「とても久しぶりよ」

「相変わらずバカなのは治ってないのね。日本語が微妙に間違ってるわよ」

「そつでもないね。これでけっこう伝わるね」

僕はぼかんとする。目の前の突然やってきた未知の生命体と、ずっと前からクラスメイトの留学生が知り合いだという。

「え、ええ！？ リオナも！？ リオナもユジューとかいうやつな

の!？」

「そうね。でも何も嘘言っていないね。留学生なのは本当ね」

「まあ、言い方によっちゃあ留学とも言えるかしらね……」

リオナの周りに光が集まり、幾何学的な模様を描き出す。シグマを扱えることがユジューの証なのだろう。

「相変わらず大食らいなのは変わっていないね」

「すぐに実力を比較したがるあなたも変わっていないわ」

アリシアの周囲にも同様に光が集まる。

「な、何するつもり!？」

「あなたはそこらへんに隠れてなさい」

アリシアの周囲で不可思議な模様を描いていた紋様は空気の流れをねじ曲げ、風の刃を作り出す。

一方、リオナの方は炎。真っ赤な火炎は竜の如くとぐるを巻いて風を打ち破らんとアリシアへと襲いかかる。

「うわああああああ!」

僕は物影へと飛び込んだ。後方で爆風が爆ぜる。風と炎が混じり合っ  
って火柱が立ち上る。

「ふうん、実戦で実力を上げたのかしら」

「もうガリ勉には負けないね! ムーティエン、フィニティン・モ  
グリレイ、顕現!」

リオナの手に光が集まる。それは徐々に一冊の本を作り上げる。

「フィニティン・モグリレイは百七の属性を扱うモグリレイね!  
なにも風に火をぶつける必要はないね!」

屋上の床がもりもりと隆起する。それは何百本ものトゲになってア  
リシアへと襲いかかる。

「くっ!」

アリシアは風をまとって高く飛んだ。トゲはアリシアを捉え損なっ  
て何も無い空を切る。

「風には石ね!」

トゲは徐々に形を崩し、石の槍を作り出す。それはまっすぐにアリ

シアへと射出される。

アリシアは風を集めて盾を作り出す。石の槍は削れながらも、それでもまっすぐアリシアへと飛ぶ。

「リオナ！」

石の槍がアリシアへと突き刺さる直前で動きを止める。その瞬間、槍は粉々に砕けてただの土へと還っていった。トゲだらけになった屋上の床もサラサラと崩れていく。

リオナの手にあった本が光の粒となって消えていった。彼女の背後にはトモミが立っていた。

「と、トモミ!？」

「何やってるの……?」

「あ、これは……その……あ、新しい化学の実験を……」

リオナはいくらなんでも無理がありすぎる説明をトモミにする。トモミの表情には明らかな疑惑と不満が浮かんでいた。

「トイレに行ってたんじゃないの?」

「つ、ついでに屋上に寄ったね! そう、アリシアとユウタロが屋上の方へ行くのが見えたらからね!」

「ユウタロウ君も……?」

僕は物影が姿を表す。彼女は不安そうな表情を浮かべて立っていた。

「怪我はない?」

「いや、大丈夫だけど……」

彼女はどこからともなく分厚い辞書を取り出すと、それを思い切り振りかぶった。

「いぎやあああ!」

「お仕置き」

辞書がリオナの側頭部にヒットする。それはとてつもなく痛そうだった。

「ぐ、ぐわんぐわんするね」

「カードの攻撃に比べたら大したことない」

「と、トモミもユジューに関わってるの!？」

「……………」

彼女はこくと頷いた。

リオナだけでなく、トモミまでもが関わっていたことに僕は驚きを隠せなかった。

「と、トモミはリオナのリトマスね」

「じゃあ、さっきの本はトモミの心……………」

「これのことね？」

リオナは先ほどの本を取り出す。

「これはフィニティン・モグリレイ。トモミの心を映し出したモグリレイね」

「も、もぐり……………」

「日本語だと魔導書つてのが意味が近いのかな」

「じゃ、じゃあ僕の心の剣…………げ、げんちゃ…………なんだっけ？」

アリシアはふう、とため息をつく。

「ともかく、リオナはムーティエンを使った。私が負けそうになつたのは私のムーティエンが使いものにならないからよ」

「ええ！？ それって僕が使いものにならないってこと！？」

「そうよ。あんな戦い難しいものが私のムーティエンになるなんて…………最悪だわ」

トモミは不思議そうに尋ねる。

「ユウタロウ君もリトマス？」

「まあ、なんかそうなっちゃったみたい」

僕はぱりぱりと頭を掻きながら答える。だが、僕にはあまりそのつもりはない。

「じゃあ、これからは協力して戦えるね」

そう、彼女は微笑を浮かべながら言った。彼女はちょっと嬉しそうに言つて、僕は少し申し訳ない気分になる。

「協力？ 私一人で十分よ！」

「ムーティエンが使えないのに何が十分ね。そんなのありえないね」  
「まるきゅうリオナは黙つてなさい」

「ま、まるきゅうって何ね！ 埋めるね!？」

再びリオナはモグリレイを取り出す。だが、トモミの辞書によって一撃で粛清される。

「それをやたら取り出さないの」

「ば、馬鹿にされるのは悔しいね!」

トモミは僕の方に向き直ると、辞書をしまつてから言う。

「戻ろう。もうすぐ休み時間が終わってしまうわ」

「え、もう休み時間になつてたの!？ たしか次って体育だったよね!？」

彼女はこくこくと頷いた。そうとわかれば急いで戻つて支度をしなければならぬ。

「アリシア、戻ろう！ 僕着替えないと!」

「ちよつと、待ちなさい！ まだ決着は……」

僕はアリシアの手を引いて走り出す。もう既にトモミとリオナは着替え終えていた。

「アリシアは体操着を持ってないからいいけど、僕は見学つてわけにはいかないから!」

「この決着、いつかきちんと付けるわよ!」

このとき、僕はまだきちんとわかつていなかった。

この戦いに巻き込まれたということがどういうことを意味しているのか、まだ理解してはいなかった。

## 第二話（後書き）

この先長いですが、まだまだ続きます。

### 第三話（前書き）

特に広く公開しようと思っていたので、後悔したくなるような二次ネタが入っております。  
わからない方は軽くスルーしてください。

## 第三話

### 第三話

「ここが顕界……」

深夜2時。草木も眠る丑三つ時、摩天楼の頂上にて一人の少女がくすりと笑う。

烈風が吹きつける。彼女は揺らぐことなくビルの上にて微笑んだ。

「やっと……やっと来れた」

彼女はとても嬉しそうにっこり笑った。

少女の周囲に暗い闇色の光が集まる。それはユジューであることの証、シグマの姿。

それは幾何学的な模様を描き出し、街全域へと広がっていく。

街そのものを覆いつくす巨大なシグマ。そのとき、街は顕界から隔離された。

「あとは食べ放題……くすくす」

次の瞬間、闇色のシグマは形跡を残さずに消え去る。後には元のようにならずに静かにたたずむ街だけが残される。

彼女の姿はない。暗黒に溶け込むように、彼女の姿はかき消えていた。

不気味なほど静かな街がゆっくりと震える。それは自身の中に不純物を溶かし込まれたことに対する不快感か、それとも受け入れた満足感か。

ともかく、その姿は数日前とわずかに変わっていた。影は強まり、光は薄く……。

後には黒色の霧だけが残されていた。

アリシアが僕の家に来て一週間が経過した。

彼女の食事のタイミングさえ把握してしまえば、問題らしいことは特に起きることはなかった。

面倒なことといえば、僕がエサやりと呼んでいる食事時間が地味に授業時間に重なることくらいだろうか。そういう場合は少し時間を早めてエサを与える。

ここ数日のお気に入りはあんパンのようで、数個ほど与えると数分で平らげる。それだけで一時間は保つので最近はずっとあんパンを常備している。

教師達もアリシアという存在にいくら慣れたのか、初期の頃のように追い返される回数は減った。相変わらずアリシアの指導は厳しいが、それに負けじと授業のレベルも上がる。今回の期末試験の平均点が大変なことになりそうだった。

「 $n$ が3以上であるとき $a$ の $n$ 乗プラス $b$ の $n$ 乗イコール $c$ の $n$ 乗という等式が成り立つことを証明せよ。アリシア君、これならできまい」

「ちょっと時間がかかるけどいいかしら」

そう言っただけで、彼女はノートにせっせと何かを書き始める。こうやって、何かしら時間にかかる課題を与えておき、その間に普通の生徒に対する授業を進めるというスタイルでなんとかやっている。これでも時折アリシアの指導が入るため、教師達も大変なようだ。

「なあコウタロウ……アリシアちゃんって何者なんだよ」

コウがそつと囁く。この問題を解くことができたらもはや高校生であると言いきえることは無茶である。いやそれ以前に見かけが小学生な時点で高校生には見えないが。

「わ、わかんないよ……。突然海外からやってきたんだもの」

最近彼女のことで、答えられないことを聞かれたとき、こう答えるようにしている。これならほとんどの人が納得してくれる。

「大定理だぞ？ 解けたらもはや人類じゃないだろ」

「それは言い過ぎだと思っただけ……」

彼女は時折何か考え込むような様子を見せながらノートに延々と書

き続けている。聞いた感じは簡単そうな問題だが、一体何枚のノートのページを使っているのだろうか。

そのときチャイムが鳴る。教師はほとんど教科書の類を整理しながら言った。

「アリシア君、その問題の続きは次の授業のときにやりたまえ。わざわざ自分に時間を使ってやる必要はない。途中経過を確認したいので、ノートを預かってもらわないかね」

もちろんこれは方便だろう。次の授業時間の暇潰しをわざわざ用意しなくても済むようにするために違いない。アリシアはやや不服そうにノートを提出する。

「それでは授業を終える。日直、礼」

「ありがとうございます」

昼休みになった。僕とアリシア、リオナにトモミ、そしてコウの五人は日当たりのいい屋上へと集まる。そこで昼食を突っつきながら昼休みを過ごすのが恒例となっていた。

「うげ、相変わらずアリシアちゃん、凄い量のパンだな……」

「うん、最近はあるパンが気に入った。でも、メロンパンとチヨココロネもなかなかいいわ。それと、この前見つけた古川パンっていうパン屋のヒトデパンがなかなかいいのよ！」

そう言っつて、どう見ても星型に見えるパンを取り出す。そのカリカリのところとモフモフのところを交互に食べるのが彼女のマイブームらしい。

「やっぱりトモミのお弁当が一番ね」

「ありがとう」

リオナはトモミのところにホームステイしている（という設定）なので、弁当は同じものだ。聞いた話によると毎朝トモミが作っているらしい。

「で、俺とコウタロウは仲良くコンビ二弁当……と」

「個人的にはサークルキューのあんこ入りパスタライスが美味しいと思うな」

「……お前よく食べるな、んなに甘いの……。っつかあその食べ物企画開発はバカだろ。どろどろ濃厚ジュースとか、吸っても出てこないゲル状ジュースとか……人間が食べるもんじゃねえ」

彼はいつも別のコンビニで弁当を買っている。今日の昼食はハンバーグ弁当のようだ。

「そんなことないよ。どろり濃厚もゲルルンジュースも味は普通に美味しいよ」

「っつか、あんまり人様のネタばかり使っていると訴えられるぞ……」

「そう？ 商用じゃないし、それにこのくらいしか思いつかないもん」

そう言つて、僕は悪びれた様子もなくパスタをすする。いわゆる、反省の様子なし、情状酌量の余地なしというヤツである。

「あんまり混ぜすぎると混乱するからよくないと思うな……」

「そっか。まあ少しは自重した方がいいね」

「それより、今日学校終わったらまた映画行きたい！」

リオナがウサギ型にカットされたリンゴを箸で串刺しにしながら要求する。

僕は映画と言われて現在公開されている映画リストを頭の中に思い浮かべる。

「この前はファイナルブシドウを観たから……今度は何を観よっか？」

「クリームゾプレシピスもなかなか評価高いよ？」

「だからパロネタをそろそろやめないとアメリカの丸耳ネズミの部下に消されるぞ……」

「大丈夫、〇。〇。〇ー系のネタは命が怖いから引つ張る気はないからさ」

「そこまで伏せると読者にもわからない気が……」

「なら問題ないと思うよ」

「ところで、映画ってどこが面白いの？」

ふと、アリシアがとんでもない質問をする。それは僕に対する宣戦布告と受け取ってもいいのだろうか。

「アリシア、喧嘩売ってる？」

「だって観たことないし、テレビと一緒にじゃないの？」

これだから映画初心者は困る。劇場はお茶の間と一緒に考えている時点で根底から映画に対する認識が間違っている。

「何言ってるんだよ！ 映画は一つの作品をたくさんの人と共有できるスペースなんだよ？ ああ素晴らしきかな、全員のエモーションが最高まで高まり、スピリッツが限界までバーンアウトする瞬間……いや、リミットブレイクして超究神……」

「まあこいつの言ってることはメチャクチャだが、臨場感があつてテレビとは違う感動が味わえることは確かだな。地元ではやってないのか？」

「ふーん……まあ、試しに行ってみる価値はあるかもね」

そう言つて彼女はヒトデパンをかじる。何個買ったのだろうか。おそらくメセブリーからお小遣いのようなものが支給されているのだろうが、それにしても買い過ぎである。もしかすると、紙幣についでる通し番号が全部同じだったりしないだろうか。そうでないことを祈るのみである。

「で、映画館には美味しいものがあるの？」

「結局そつちかよ！」

「うん、ポップコーンとかナチヨスとか冷凍英吉牛とか……」

「だからそういうネタ振りはやめような」

放課後、僕達は映画館を訪れる。

学生なので料金はわずか800円。かなりお得である。

五人で多数決をとった結果、今日も雨に打たれてという映画を見る

こととなった。元々作者が細々とホームページで公開していた小説だったが、後に書籍化されて爆発的な人気を得て、ついに映画化された作品だ。双子の姉妹と主人公の間に描かれる血みどろで微笑ましい愛の物語である。

『あなたが……好きなんだよ?』

『れ、レウ……? 一体どういうつもりなんだ?』

『お姉ちゃんには渡さない……私のキョウタロウ君は絶対に渡さない……!』

ナイフを持った妹がゆらゆらと揺れながら主人公と、彼女の姉へと迫る。盛られた催眠薬が引き起こす眠りから目を覚ますために、その左手は真つ赤な血で彩られていた。

『レウ! ダメだ!』

『お姉ちゃんなんか……死んじゃえ!』

その瞬間、ナイフが突き出される。

それはまっすぐに彼女の姉へと飛び出て……そして主人公の少年を貫いた。

『え……?』

『そんなことしたら……ダメだ……』

主人公は蛮行を止めるために二人の間に割って入ったのだ。

そのまま膝について崩れ落ちる主人公。妹の手からぼろりとナイフがこぼれ落ちる。

『いや……イヤだよ……キョウタロウ君……キョウタロウ君!』

姉は必死に彼の体を揺さぶる。だが、彼は目を瞑ったまま答えることはなかった。

『なんで……なんで……?』

妹もその場に膝をつく。そして、自らの愚行を悔やみ、切齒扼腕する。

『イヤよ……イヤあああああああ!』

「凄かったわ……」

未だ映画の興奮が冷めないのか、アリシアは胸を押さえてふらふらしながら通路を歩く。

「でしょ。映画館の臨場感はこのものとは比べものにならないよ！」

「ポップコーンがこんなに美味しいなんて……映画の方はまあまあだったけど」

「……」

僕は大きいため息をつく。彼女には映画の素晴らしさを理解することはできないようだ。

「まさか妹のレウさんがあそこまでやるとは思いませんでした……」

「ヤンデレ映画と銘打つだけあって実に病んだヒロイン達だったな

……」

「特に、姉妹と主人公、そして友人の女の子を交えた四角関係には舌を巻くな……」

「友人が姉妹のことを好きだったっていう百合展開ってのが超展開過ぎて俺には思考がついていけなかったぜ……」

僕達は一度併設されたデパートに設置された喫茶店に入る。スターフロンツという全国展開のチェーン喫茶店だ。下手なコーヒーショップよりもコーヒーが美味しいことで非常に有名だ。

「このサテライトアイスコーヒーが美味しい」

「ネーミングセンスは疑うけどな」

仲良く皆でサテライトアイスコーヒーを注文する。なんでも、宇宙空間のように真空状態で沸騰させながら凍らせることにより味により深みが増すらしい。

「あ、私チーズサンドも」

そうやってチーズサンドを注文するアリシア。まったく、映画を見ながらポップコーンのXLサイズを一人で消化したというのに、まだ食べるつもりなのだろうか。

「まったく、アリシアは食欲魔人ね。その胃の許容容量こそ宇宙空間ね」

「あら、頭のスカスカさが宇宙空間並のリオナには言われたくないわね」

「何か言ったね？」

こうして二人はいつも通り喧嘩を始める。そんな様子に僕とコウ、トモミは乾いた笑いを浮かべる。

「ねえ」

そう言っつて、アリシアは喧嘩の真っ最中に突然僕に声をかける。

「さっきとても美味しそうなパンを見かけたんだけど、ちよつと見てきてもいいかしら」

「パン？ パン屋さんなんかあつたっけ？」

「ええ、あつたわ。サクサクメロンパンっていうのが美味しそつだつたの。ちよつと買つてきてもいいかしら」

「え、まあ自分のお金を使う分にはいいけど……」

「どつも」

そう言っつて彼女は立ち上がる。どことなくソワソワしているのは、お腹が空いてたまらないからだろう。

彼女は急いで立ち去つていく。そんなに急ぐことはないだろう。

「いきなりどこ行くね」

「ちよつと野暮用よ」

アリシアは足早に退出していく。リオナは仕方ないというような様子でため息をつく。

「よほどパンが好きなんだな」

「そつみたいね」

トモミはさつず、とコーヒーをすすする。

「パンといえつば、トモミがこの前焼いてくれたパンはとても美味しかつたね！」

「あれはケーキ。パウンドケーキつて言つたの」

「ばんど……けーき？ ロック音楽とかを演奏する……」

「それはバンド。パウンド、つまりいろいろな材料を1ポンドずつの割合で混ぜて焼いたケーキなの。最近のものはふわつとさせたり

するのに1ポンドぴったりってわけじゃないけど……でも、大体1ポンドくらいかな」

「へえ、トモミちゃんはケーキも焼けるんだな」

「これでも料理検定準1級持つてるの」

準1級ともなれば、かなり凄いことができるのだろう。準1級という数字は資格試験で獲得するにはかなりの高難易度を要するのだ。

「準1級!? 凄いね……」

僕はそのことにただただ驚く。英語検定の準2級を受けたことがあるから、準1級ともなればどれだけ大変かはすぐにわかる。

「料理はね、とても簡単なんだよ。そんな特別な技術なんていらない。それは一部の料理人さんだけが必要とするんだよ。ただ美味しいものを作って、人に食べてもらうのはそんな難しいことじゃない。その気になれば、誰だってできることなんだよ?」

「僕も普段から料理をしてるけど、さすがにケーキなんかは作れないよ」

「教えてあげようか? パウンドケーキ、シフォンケーキ、フルーツケーキ……やり始めればそんなに難しいことなんかじゃない。まずは簡単なクッキーから始めよ? 今度の土曜日空いてるかな……?」

彼女は上目遣いで尋ねる。その様子に少しドキっとする。

「ど、土曜日? えーと……だ、大丈夫だよ」

そのとき、けほんけほんとかうが咳払いする。

「あー、二人で親しく会話するのはいいんだが、俺も混ぜてくれな  
いか?」

「コウ君とリオナも来る?」

しばらく彼は悩んでいたようだったが、やがて首を横に振る。

「いや、俺はその日用事があるな。市の写真展があるんだよ」

「あいやー、残念ね。私もちょっと私用があるね」

「じゃ、じゃあ二人つきり……」

僕はトモミと二人でクッキーを焼く様を思い浮かべる。

トモミは女性的魅力がないといえれば嘘になる。長い髪、適度に発達した細い肢体、整った顔立ち……特別可愛いというわけではないが、十分高ランクだといえる容姿を持っている。

(な、なに僕はそんな意識してるんだ！ トモミとはただの幼馴染みで……)

「アリシアちゃんって確か今ユウタロウ君のところに住んでるんだよね？ 三人一緒だよ？」

「……あ、そうか」

僕はちよつとだけ落胆する。女の子と二人つきりでクッキーを焼くというシチュエーションは確かに萌えるものがある。

(何萌えるとか言ってるんだ！ 相手はトモミだよ!?)

今まで何をするにも皆と一緒にだったためか、突然彼女と距離が縮まることを想像してからよからぬ妄想が浮かんで消えていく。少しはそういうことを考えたことはあったが、ここまで現実的に起き得ることだとは思っていなかった。

「……ユウタロウ君」

「……え、あ、何？」

先ほどまでちよつと艶っぽく見えた彼女だったが、突然真剣な様子で僕を見つめる。

「ちよつと本を見に行きたいんだけど、付き合ってもらってもいいかな？」

「……あ、え、なに、本？」

「うん、この前話した小説が入荷したらしいの。ちよつとだけでいいからお願い」

突然の話題のチェンジ、そしていつになく強引な様子。何か裏があるとと思った僕は立ち上がる。

「おいおい、二人つきりでどこ行くんだよ？ そうやって俺達は置

いてけぼりか？」

「ちよつとそこまで」

そう言っただけで彼女は足早に歩いていく。僕も慌てて彼女の後を追いか

けた。

トモミは黙ってエレベーターの方へと歩いていく。その足は普段の彼女よりも幾分か速い。

「ちよつと、トモミ、どうしたの？」

「ユウタロウ君……」

彼女は突然立ち止まると、人気のない非常階段の方へと僕の手を引いていく。

屋外に設置された非常階段は少し肌寒い。まだ季節は春。少し夜は冷えてくる。

しきりに注意に気を配り、誰もいないことを確認した彼女は僕を目をじっと見つめる。

「え、な、何……？」

「……カードがいる」

「いや、いきなりそんなこと言われても……え、カード？」

てつきり愛の告白かと思った僕は肩透かしを食らったかのように尋ねる。

彼女はこくこくと頷いた。

「それって、ユジューの犯罪者の……？」

「うん。リオナがそう言ってた。リオナもすぐに来る」

彼女が突然立ち上がった理由に納得する。別に、突発的に心の内を打ち明けようと思ったわけではないようだった。

「それも、誰かユジューテイオナが戦っているみたい」

「ユジューテイオナって……まさかアリシア!？」

「そこまではわからないって言ってた。ともかく行ってみないことには……」

二人で話していると、ようやくリオナがやってくる。

「コウがやけにしつこかったね。一人になるのが寂しかったみたいね」

「リオナ、カードは？」

「上ね。このまま階段で上がるね」

リオナを先頭に僕達は階段を上っていく。このまま行くと、一般は入ることのできない屋上にまで出ることとなる。

「屋上？」

「うん、そこで今、カードと誰かが戦ってる。……多分テイオナの誰かだと思う。人間だったらこんな風にぶつかり合うことはないだろうから……」

上へと登っていくにつれて何かがぶつかり合うような音が聞こえてくる。

立ち入り禁止の柵をよじ登って超え、普段は入ることができない屋上へと進む。

「がつ！」

そのとき、僕らの方に誰かが吹き飛ばされて転がってくる。……それは予想通りアリシアだった。

「アリシア！」

「何よ……人間が何しに来たのよ」

「あら、お仲間？ くすくす……」

給水塔の上に立っていたのは真っ黒な女性。いや、正確には彼女がまとっている気配が黒色をしているからそう見えるのだろう。

「テイオナみたいだけど、ムーティエンを使わないものだから、ボロ雑巾にしちゃったわ」

「アリシア！ なんでムーティエンを使わないね！」

「……」

彼女は体を押さえながらフラフラと立ち上がる。

「その……その人間のムーティエンがまったく使いものにならないからよ！」

「だからって、ムーティエンもなしにカードと戦うなんて無茶ね！」

「あなたは強いのか？ 私を楽しませてくれるのか？」

彼女は楽しそうに両手を広げる。すると、そこを中心に真っ黒な霧が広がっていく。

「……来るわよ！」

徐々に闇色の霧が広がっていく。それは少しずつ人間の世界を侵食し、異色の異空間へと変えていく。

黒い薔薇が蠢く、闇の荊が揺れる荒れ果てた花畑。それは庭師を失った庭園だろうか。いや、彼女という庭師が美しい花園をここまで恐ろしい世界に変えてしまったのだらう。

「ムーティエン、フィニティン・モグリレイ、顕現！」

リオナの手中に光が集まり、一冊の魔導書を喚び出す。

それは複数の光を描きながら幾重にも真円を映し出す。それはまるで月。死の神苑を照らす一筋の光輪。

「月光の小夜曲、ヌーム・アデセレン！」

描き出されるは幾重にも重ねられた月光の刃。軽い響きを持った29・5枚の刃は甘い旋律を奏でながらカードへと襲いかかる。

「あら、自己紹介する前に攻撃するなんて無粋ね」

黒い光の環が彼女の周りをぐるぐると回る。それは小夜曲とは異なつた響きを持つ音楽を奏でる。

「遊んであげましょう」

彼女が演じるはディベルティメント。言葉通り遊ぶようにゆらゆらと揺れる不思議な旋律を持つ。リオナが奏でた音楽に絡まるようにまといつくと、相殺するように刃を殺していく。

「なっ!？」

「新月の登る空に無節操な明かりはいらなくてよ？」

再びあたりは闇色の輝きに支配される。月光を食らい尽くした嬉遊曲は余韻を残しながら消えていく。

「まあまあ、まずは自己紹介くらいさせてもらってもいいじゃない。そう言うとな彼女はゆっくりと優雅な動きでお辞儀する。

「私の名前はレルフィム。闇に生きる吸血鬼。情を食うことを忘れた、生き血をすするユジューの中の変わり者。以後、お見知りおきを」

そのとき、彼女をまとっていた闇色の霧が晴れる。

そこに現れるは一人の少女。アリシアとさほど背の丈は変わらない、

それでいて死神のような雰囲気を持つ漆黒の少女だった。

「そのあなたの心を少し覗かせてもらったの」

「え、僕!？」

「そう、名前を伺ってもいいかしら？」

突然彼女に話し掛けられ、僕はうろたえる。

「え、えつと……坂下……ユウタロウ」

「そう、ユウタロウ……いい名前ね」

彼女は妖艶な笑みを浮かべると、再び闇の円を描き出す。

「でも残念ね。すぐに私の庭の肥やしになるんだから」

そう言つと同時に、幾重にも黒い輪が広がる。

「光の前奏曲! ミアブ・レプルド!」

光の盾が出現する。それは闇の波動を受け止め、ぎしぎしと唸りながらもなんとか耐え凌ぐ。

「うふふ、いいわよいわよ。楽しくなってきたわ!」

レルフィムはそう嬉しそうに微笑むと、黒い光弾を幾百も呼び出す。波動に加えてそれらをさらに飛来させ、光の盾に更なる負荷を加える。

「く、限界……ね……」

みしみしと唸りながら光の盾に亀裂が入る。

「アリシア!」

「わかつてるわよ!」

アリシアの周囲にシグマの光が浮かび上がる。それは風を集め、光の盾を補強する。

拮抗するように光と闇がぶつかり合うが、アリシア達の表情には苦悶が浮かび、対するレルフィムには余裕さえも窺える。

「あははは、二人がかりでかかってらっしゃい! それでも私は負けないわよ!」

光の盾が砕けると同時に波動も光弾も消失する。それは相殺して消えたというより、レルフィムが意図して消したようにすら思える。

「さあさあいくわよ!」

レルフイムは給水塔から飛び降りると、闇の鞭を唸らせながら一気に距離を縮める。

「剣の舞踊！ ドルロス・ナセツド！」

くるくると踊るように何本もの剣が舞う。それは闇の鞭を数で圧倒する。

「あら、ちよつと不利かしら？」

「負けないね！」

徐々にレルフイムを追い詰める。それは一見リオナが有利に見える。「なーんてね」

瞬間、クラゲの触手のような鞭が数百本出現する。それは数においても、大きさにおいてもリオナに勝る。

「嘘……なのね」

「本当よん」

全ての剣に数十本の触手のような鞭が絡み付く。もはや剣は舞うこともできず、がちりと固定されてしまう。

「リオナ！」

「く、心が……相手の力に比べて強すぎるのね！」

「ごめんなさい、私なんかリトマスだから……」

アリシアが風の刃を放つ。だが鞭を数本切断するのみで、剣を解き放つには威力が足りない。

「アリシア！ ムーティエンを使うね！」

「そんなものに頼らなくて……」

「無理ね！ 人のことを食べたユジューカードにはムーティエンがなければ対抗できないね！ そんな意地張らないで素直に使うね！」

「リオナなんて使ったって勝てないじゃない！」

「私のことはいいね！ 余計なお世話ね！」

「アリシア！」

僕は思わず叫んでいた。邪魔くさいと思っていたアリシアをまるで励ますかのように。

「僕の心を使ってよ！」



突如炎がレルフイムへと襲いかかる。レルフイムは僕を放り投げて、その方を振り向いた。

「うわあああっ！」

再び激しく体をぶつける。すぐ手の届くところにアリシアが倒れていた。

「あなた……まだやる気……？」

「人間を……友達を目の前で食べられるわけにはいかないね！」

リオナは大きな声で吠え猛る。レルフイムは汚いものでも見下すような表情でリオナを見つめた。

「たかが人間を友達とは笑えるわね。あなたはユジュー。人間より格上の存在、人間を肥やしにする高等生物なのよ？」

「格上も格下もないね！ 意思の疎通ができる時点で友達になれるね！ そんなの、人間が白人と黒人を区別すること並に愚かね！」

「とも……だち……？」

アリシアの口から言葉が漏れる。

彼女は今日の今日まで僕達のことをどのように思っていたのだろうか。

「人間の愚行と一緒にされるとは気分が悪いわ。あなたから先に消されたいようだから、お望み通り私の糧にしてあげる」

そう言うと、彼女は僕からリオナへと標的を変える。

「アリシア！ アリシア！」

僕はアリシアを強く揺さぶる。アリシアは目を開いたまま、再び小さな声で友達、と呟いた。

「僕は……アリシアの友達じゃないの？」

「あなた……人間が……私の友達……？」

「そうだよ！ 僕達こんなに楽しく過ごしてきたじゃないか！ 今日だって楽しかったじゃないか！ それはただ情性で付き合っただけなの！？」

アリシアは黙ったまま僕を見つめる。

彼女は今、僕という存在をどのように思っているのだろうか。同格

の友達として見てくれているのだろうか。

「僕のことを信じてよ！ 僕も……僕も一緒に戦う！」

「人間……いえ、ユウタロウ……」

アリシアは僕の瞳を見つめている。彼女は……僕のことを信じてくれるのだろうか。

彼女の手の中で七色の光が輝く。それはまさに先週、一瞬だけ見ることができた心の輝き。

「私は……人間を……友達を……信じる！ ムーティエン、ゲンチヤ・ドルラス……顕現！」

七色の光が集まり、それは一振りの剣と変化した。

アリシアは体を起こすと、大剣を両手にレルフィムへと構えた。

「やああああああああああ！」

「ボロ雑巾が……無駄だというのに……」

レルフィムはリオナの首に片手をかけながら、左手に黒い光を集める。それは先ほどの鞭と同じもの。いくらか本数は少ないが、その力強さは健在だった。

「私は……ユウタロウを信じる！」

剣の輝きが一層増す。僕の心が……信頼という絆によって一際強く輝く。

「な……」

それは数十本の鞭を断ち切り、レルフィムの体を横断する。

「ああああああああッ！」

赤黒い鮮血が噴き出す。それは黒い花園を一瞬で赤く染めた。

瞬間、庭園が一点に集中する。それはすべてを飲み込み、やがて僕達を元の世界へと引き戻した。

「や、やったの……？」

「まだ……まだ倒せない！」

レルフィムは胸を押さえながら荒い息を吐く。

「この私を……傷付けるなんて……」

彼女はふらふらと歩きながら給水塔に寄りかかる。かなりの痛手を

与えたのだろう。傷はかなり深そうだった。

「私は……こんな簡単に滅びるわけにはいかない……！　まだ死ぬわけにいかないの……！」

彼女は大きな漆黒の翼をはためかせると、墨を流したような空へと飛び去った。

「待ちなさい！」

アリシアは風をまとって飛び立とうとするが、ふらふらと揺れて剣を杖代わりにしてなんとか立つ。

「く……」

「アリシア！　大丈夫！？」

僕はアリシアへと駆け寄った。彼女も満身創痍の体で僕に体を預ける。

「ユウタロウ……」

「無茶をしちゃダメだ。全員助かったんだから、それを喜ぼうよ」

僕はアリシアの体を抱き寄せる。彼女はそれを不快そうにせず、そのまま身を任せた。

「悔しい……自分の力が及ばなかったことが……」

「アリシア……誰もが一人だけで全てを成し遂げるなんて無理なんだよ。だから……疲れたときは僕を頼ってよ、ね？」

アリシアの手から剣がこぼれ落ちる。僕は力の抜けた彼女の体を支えた。

「私一人で……なんでもやらなくていいの？」

「うん。もう、そんな大変なこととはしなくていいんだよ」

彼女は優等生だった。何事も一人で解決してきた彼女だからこそ、意地でも自分の力だけで倒したかったのだろう。

だが、それは決して最善手ではない。

時には人の手を借りることも大切なことなのだ。

「私は常に正解を選び続けてきたと思ってた。でも……それは間違っていたのね」

「間違いじゃないけど、一番の方法じゃなかったことは確かだよ」

彼女のことを疎ましく思っていたはずなのに、僕はいつの間にか彼女を励ますようなことを口走っていた。

「僕、ヘタレだけどさ。ここまでやってこれたのは色々な人の力を借りたからなんだよ？」

「私は……私は……」

彼女の中にあつたアイデンティティーが崩れると同時に、新たな価値観が現れる。

それは彼女にとって新しい、そして僕達は当たり前だと思っていたこと。

友達の力を借りるということ。それは決して恥ずかしいことなんかではないということ。

「ユウタロウ……ありがとう」

僕は彼女の一言によって、彼女に対する見方がまるで変わったことを追認したのだった。

### 第三話（後書き）

遙か昔に書いた小説ネタが少し出てきています。と、いつても当時作ったHPの認知度自体がかなり低かったので、知っている方は恐らくいないと思われませんが。現在、そのHPも消滅していますし、データ自体が残っているか定かではないので、投下できるかもわかりませんが。データを発見して、読み直していけそうだと思うたら投下するかもしれないので、そのときはよろしくお願いします。

## 第四話（前書き）

またしても後悔したくなるようなネタが詰まっています。  
その辺は華麗にスルーしていただけると助かります。

## 第四話

### 第四話

「あの……感触……」

彼女は胸の傷を癒しながら、少年の心の一端に触れたときの感触を思い返していた。

今まで命を食らって生きてきた彼女が久しぶりに舐め取った心、感情。

それはかつて忘れかけていた欲望という名の蜜の味を思い出させるには十分だった。

「あの少年……欲しい」

彼女は久しぶりに心を欲望に支配される。

長年吸血鬼として恐れられる生活を送ってきた彼女だったが、再び昔のようにお茶を楽しみながら感情を舐める生活も楽しいかもしれない。

「うふふふ、決めた」

熱い感情を持っていた少年のことを思い描く。彼の心は熱く、燃えるような勢いを秘めていたにもかかわらず、蕩ける和合水のように淫らで甘い。辛味と甘味の融合、これはなんて脳裏を刺激するデザートだろうか。

「ユウタロウが欲しい。ユウタロウの様々な感情が欲しい。怒り、悲しみ、喜び、楽しみ、それらを混ぜ合わせたモノは一体どんな味がするのかしら……」

闇の環が彼女の胸の傷を癒す。それはほぼ塞がりつつあった。

「元気になったら彼に会いに行きましょう。そして、私のものにするの。死ぬような苦痛を与え、天にも昇るような快楽を与え、理性を壊しながらミックスジュースを作り、生き血を混ぜて飲み干すの。ああっ！ 想像するだけでも背筋がゾクゾクするわあっ！」

漆黒の翼を広げ、彼女自身の姿を包み込む。

それは更なる力を胸部に集中させ、傷の治りを早くする。

「そのためには治療が先…… お楽しみは後にとっておかないと……  
ね」

「ごめんごめん、機嫌直してよ……、ね？」

「……」

翌日の教室、僕は不機嫌な表情を浮かべるコウにひたすら謝る。

僕達は昨日レルフイムを退けた後、喫茶店で一人待つコウのことを忘れて帰宅してしまったのだ。

彼は実に閉館する10時まで待っていたという。映画が終わったのが7時頃であることを考えると、物凄い忍耐力である。

「先に帰るとか酷くないか？ しかも四人だぜ？ 誰か一人くらい俺のことを思い出さなかったのか？」

「いや、その……あの後色々あってさ、それで皆自分のことで精いっぱいだったんだよ。それで、つい……」

「つい、じゃねーよ！ そんなことで人のこと忘れるなよ！」

彼の目はふるふると潤んでいる。やっぱり寂しかったのだろう。

「今度やったらただじゃおかねーぞ？ 全員に罰金10000円は払ってもらわないと気が済まないぞ？」

やけに現実的な値段に、彼が本気でそう考えていることがわかる。

「わ、わかったよ。今度やったら10000円払うよ」

誰の了承も得ないまま、僕は彼の言葉を承諾する。いざというときは僕が思い出してあげればいいのだ。そうすればわざわざ全員で彼に10000円ずつ支払う必要はない。

「ったく……疑心暗鬼に陥りそうだけ……」

彼はふいとそっぽを向いて椅子に座り直す。一応機嫌は直ったのだろう。

「コウタロウ君」

そのとき、トモミが現れる。

「明日の土曜日どうしようか。クッキー作る約束……」

「あ……」

コウのことは忘れていたのに、こっちの約束は覚えているようだった。

「材料とか買いたいんだけど、付き合ってもらえるかな」

「うん、いいよ」

クッキーの材料とはどんなものなのだろうか。クッキーというと、チョコチップクッキー、ジンジャークッキー、アイスボックスクッキーなど、色々な種類が思いつく。

「コウタロウ君は甘いのが苦手？」

「ううん、好きだけど？」

「よかった。それならどんなクッキーでも美味しく食べられると思うよ。それと、コウ君とリオナにもお土産にしないと可哀想だよ。多めに作るっか」

「お、俺の分も焼いてくれるの!? ラッキー」

彼はとても嬉しそうに笑う。

「なんだか美味しそうな話ね」

そのとき、ポテトチップスの袋を片手に持ったアリシアが現れる。

「アリシア、休み時間中だから……」

「いいじゃない。お腹空いちやうんだから。じゃないとまた自動販売……もごもご！」

僕はアリシアの口を押さえた。あの後自動販売機が破壊されたことによつて全校集会が実施され、外部からの侵入者によつて自動販売機が破壊されたということになっている。あれ以来学校全体の警備が厳しくなり、一時的に不審者対策として警備員が雇用された。それほどまでの大事件となつているので、アレを生徒のせいだと誰かに知られるのは非常にマズイのである。

「自動販売機は壊されちゃったからもうないよ！」

「あれは酷い事件だったね。あそこのパンを楽しみにしている生徒

はいつぱいいいたのに……」

「食堂のメシなんかより美味しいモンもあるからな。まったく……壊したヤツがわかったらとっちめてやる！」

というように、そのことを恨んでいる生徒はかなり多い。生命線として使っていた者すらいたほどだ。これがアリシア（と僕）のせいだとわかれば一体どんな目にあうか……想像に難くない。

「仕方がないから今日は食堂のお弁当だね」

「でもアレは競争率が高いぞ？ 先にコンビニで買ってくるんだっ  
たな」

「というわけでアリシア、頑張つてね！ と、ところでどんなクッキーを作るの？」

どうにかして話を自動販売機から逸らそうとする。なんとしてでも暴露するわけにはいかない。

「うーん……簡単なプレーンクッキーからかな……。普通に小麦粉とバター、卵を練って型にはめて作るの。ユウタロウ君の家にはクッキーの型とか、そういう道具はあるかな？」

「多分ないと思う。母がそういうお菓子を作っていたという話は聞かないし、父も忙しくてそんな暇はなかったはずだから……」

「じゃあ、道具とかも持っていくね。オーブンはある？」

「あるよ」

彼女はうんうんと頷きながら必要な道具を挙げていく。

「じゃあ、私がついていく物はクッキーの型くらいかな。小麦粉とバター、お砂糖はある？」

「どれくらい必要？」

彼女は次々に必要な材料を挙げていく。どうやら一部の材料が足りなそうだった。

「うん、今確認しといてよかった。一日で材料も買ったら、夕方に  
なっちゃっ」

「何か夕方に用事でもあるの？」

「せっかくだからティータイムに合うほうがいいかなって思う

の。あんまり遅いとお腹いっぱいになっちゃうでしょ?」

「なるほど……」

「じゃあまた放課後にね」

彼女は軽い足取りで教室から出ていく。

「話は聞いていたね」

「うわ、リオナ!？」

どこからともなく突然現れるリオナ。

「凄く嬉しそうにしてたね。私を知る限りでは初デートね」

「で、ででデートなんてそんな!？」

僕は思わず慌ててしまう。デートだなんてことは考えてもいなかった。

「で、でもアリシアもいるんじゃない……」

「あら、私は今日はまっすぐ帰るつもりよ。四時半から夢の美食ツアーがあるのよ」

「それって……テレビ番組の?」

彼女はこくこくと頷いた。そういえば、毎週金曜日の夕方から始まる低視聴率の番組である。美食とは名ばかり、世界中の珍品妙品を紹介する番組でこの世界の知識を仕入れるためと言いつつ毎週見ている。おそらく、ただ単に美味しそうなものを見たいからだろう。200ペソ賭ける。

「じゃあ俺は200人民元賭ける」

「じゃあ私は200SEED賭けるね」

「どこの通貨だよ……」

「TWね。とても面白いね」

ともかく、今日の寄り道には僕の他にはトモミしかいない。これは実質デートということになる。

そう考えると、途端に心臓が高鳴る。

よく考えてみる、と自分に促す。彼女とは何度も二人きりで帰り道を共にした仲である。そんなに構えることはないではないか、と。

だが、二人きりで出かけたことなどあったらどうか。いずれの場合

もコウヤリオナと一緒に着いてきた場合がほとんどだ。いや、ほとんどというよりだけと言った方が正しい。

「どどどどうしよう!? 何着て行こう!?!」

「帰り道だろ。制服のままなんじゃないのか?」

冷静になれ。いや、クールになれ。クールになれ、坂下ユウタロウ。こんなことでは彼女に笑われてしまう。いや、呆れられてしまうだろう。

「トモミに何かあったら絶対に許さないね。一木一草鼠一匹彼女に触れさせずに死守するね!」

「Yes, Sir!」

「いや、そこまでする必要はないだろ……」

「ば、バターってどれを買えばいいのかな?」

「有塩バターだったらどれでもいいよ。一番安い『俺のバター』がいいかな?」

「名前がアレだね……」

トモミは仰々しい字体で刻印されたバターを手取る。

ユウタロウはそれを震える手で受け取った。

「おいおい大丈夫か……?」

「ダメダメなのね」

「アリシアは本当に薄情ね。テレビ見たさに本当に帰るとかありえないのね」

「まあアリシアちゃんにはアリシアちゃんの事情があるんだから察してやるうぜ?」

スーパーを学生服の少年少女が二人……コウとユウタロウが怪しげな様子で歩いている。それは明らかに目立つものではあったが、ユウタロウ達は気付かないようだ。

「強力粉はあるよね? 打ち粉に少し使うんだけど……」

「うん。それならまだ余ってたと思う」

「じゃあ薄力粉を買いましょう」

二人は製菓コーナーへと向かう。その後をやはり二人はこっそりと後を付ける。

「何を言ってるかわかるか？」

「全然わからないね」

製菓コーナーには様々なお菓子の材料が並んでいた。

アーモンド、チョコレート、ナッツなどのデコレーション材料、簡単なお菓子の作成キットなどが並べられている。その中からトモミは薄力粉を選び出す。

「あれ……？」

そんな製菓コーナーに並ぶ人影の中、ユウタロウは頭を抱えたくないような立ちつくしているのを発見する。

「あ、アリシア……？」

彼女はこんにやくゼリー作成キットを右手に、そして左手に携帯テレビを持って目を皿のようにして見つめていた。

「寒天ゼリー……寒天ゼリー……いえ、そんなことより二人を探さない」と……」

彼女は私服……最初に現れたときも着ていたあのドレスをベースとした、鎧姿で悩み続けていた。周りでは主婦達がまるで別世界の生物を眺めるかのような目で彼女を見つめている。

「アリシアちゃん……？ 何やってるの？」

そんな彼女にトモミは何のためらいもなく話し掛ける。

「え、あ、ユウタロウ！？ それにトモミ！？」

「えーっと……テレビ見に帰ったんじゃないの？」

「て、テレビなら見てるわよ！」

そう言っただけから入手したのか、携帯テレビを見せつけるように掲げる。

「……いつも家のテレビで見てるよね」

「べ、別にあなた達が気になったから来たとか、そういうわけじゃないわよ！？」

ユウタロウは大きいため息をつく。その後方でコウとリオナもため息をつく。

「何してるね……」

「あちゃー……台無しだな……。ってかあの服なんだよ……。なんていうか、RPGのお姫様みたいな服だな」

「アリシアは常識がわかってないね。だから平然とあんな格好ができるね」

アリシアは発見されたことに慌てつつも、こんにやくゼリーを片手にテレビを突き出す。

「ともかく、私はこの寒天ゼリーを買いに来たのよ！」

彼女の言葉もあながち間違いはないようだ。テレビではどこその名物である寒天ゼリーについて、ゲスト達がよくわからないことを議論していた。

「言い訳がすごいな」

「もうメチャクチャね」

ユウタロウはもう一度盛大なため息をつく。

「それ、寒天じゃなくてこんにやくだよ……」

「わ、わかってるわよ！ 私だって寒天を探していたんだから！」

トモミはしばらくの間棚を見つめていたが、やがてゆっくりと手を伸ばす。

「はい、寒天」

彼女が差し出したのは棒寒天。寒天を使用した料理を作る際には必須といえるアイテムである。

「あ……ありがと……」

アリシアはゆっくりと寒天を受け取る。

「寒天を使ったゼリーはゼラチンのゼリーと比べて固くなるから注意してね」

「う、うん……」

アリシアはぱかんとしたまま棒寒天を持って啞然としたままその場につっ立っていた。それに対し、トモミは声をかける。

「一緒にお買い物する?」

「え、あ、い、いいの?」

彼女はさも当然だという様子で頷いた。

「じゃ、じゃあ一緒にしちゃおうかな」

ぎしぎしと鎧の一部が音を立てて動く。

「なんなのね。まったくユウタロウは役立たずなのね。一木一草鼠一匹触れさせるなという命令を無視してるのね。これは軍法会議ものなのね」

「いや、厳密には守ってるぞ? アリシアは物理的には触ってない。そこは近付けさせるなって命令を出しておくべきだったな」

「はッ! 一生の不覚ね!」

リオナはどんよりとした空気をまとって落ち込む。コウは慰めるようにぽんぽんと肩を叩いた。

「あ、アリシア? ところでアリシアは何を買ったつもりなの?」

「うーん……あとはフルーツの缶詰かな……」

「缶詰はあつちだね! 僕達もう終わりだから、じゃあね!」

「待ちなさい、ユウタロウ。ここまで来たからには付き合ってもらおうわ」

「ええ!? なんで!?!」

ユウタロウからはありありと拒否のオーラがにじみ出る。今まで二人つきりでいられたという空間を崩されたくないのだ。だが、トモミはすぐに頷いた。

「せっかくだし、付き合っただけよっか」

「ええ!? なんで!?!」

数秒前と同じセリフを言うユウタロウ。しかしその意見は聞き届けられず、すでに歩き出す二人。

「あー、なんだかユウタロウが可哀想だな……」

「なのね。まったく、アリシアは全然空気が読めないのね」

だが、アリシアはずんずんと缶詰コーナーへと突き進む。

「あ、アリシア〜!」

「あつたわ。何の缶詰がいいの？」

「好きなフルーツの缶詰がいいかな。桃とかみたいに一種類のもいいし、ミックスフルーツでいるんな種類を楽しむのもOKだよ」  
二人はどんなフルーツにするかの話で盛り上がる。まるでユウタロウなどそこには存在しないのではないかというほどの盛り上がりっぷりだった。

「ホントユウタロウ可哀想だな」

「完全にアリシアにリードを持ってかれたのね。ユウタロウに期待した私がバカだったね」

「あ、その、そろそろ会計行こうよ。ね？」

「あとジュースを買わないと。寒天とフルーツミックスだけじゃ具だけでゼリーに味がつかないよ」

そう言つて、今度はジュースコーナーへと向かう。

「そろそろ助けてやるしかないな」

「まったくダメダメなのね」

二人は諦めて物影から体を出し、三人の前に姿を表す。

「おい、お前ら偶然だな」

「え、コウにリオナ！？ ど、どうしてここに!？」

「明日写真展があるって話したる。結構缶詰にされるっばいから、食糧とか買いに来たんだ。で、リオナが手伝ってくれるっっていうからな」

「そ、そついうわけで買い物に来たのね」

いつの間にも用意したのか、彼の手には買い物カートと山積みの菓子。そして飲料物。

「リオナが？」

トモミが不思議そうに首を傾げる。

「いや、俺の写真を見たいっつってな。それで、会場の設営とかその辺手伝ってもらっことになったんだよ」

「え、写真展つてコウの写真も載るの？」

「当たり前だろ？ 現役写真部エースを舐めんなよ？」

そうやって彼はガッツポーズを取る。今の瞬間まで、ここにいる全員が彼が写真部所属であることを忘れていた。

「帰宅部だと思ってたよ」

「私も」

「私もね」

「部活なんか入ってたの？」

コウは全力どんよりモードに突入する。

「俺なんか……俺なんか……どうせ空気だよ。アルゴンよりも存在感薄くていてもいなくてもあんまり変わらない存在なんだよ」

「ま、まあ写真展に出品できるんだから、きききつと凄いいことなんだよー！」

「……はあ。俺の存在感の薄さが認識できた時点でもういいよ。十分すぎる収穫だな」

「い、行くよ！ 一日だけじゃないんでしょ!？」

「そうだよ。明日と明後日の二日間だな」

「じゃあ明後日行くよ！ 明後日だったら空いてるし!」

「ほ、ホントに来てくれるのか……?」

「うん、絶対行く!」

コウは先ほどまでのどんよりモードを吹き飛ばし、一気に元気になる。

「うおっしゃあ！ リオナ、明日の設置頑張るぞ!」

「あいさーなのね!」

こうして、五人は今日もダベりながらスーパ―を後にした。

通学路。それは長いようで短い雑談場。ちょっとした報告、告白、漫才を繰り広げるのである。

だが、そんな楽しい時間はあっという間に過ぎてしまう。

「じゃあアリシアちゃん、ユウタロウ君。また明日ね」

「うん。明日はよろしくね」

「ゼリーの作り方も教えなさいよね」

「うん、明日一緒に教えてあげる」

それだけ言うと、リオナを伴って歩き始める。

「俺も明日は写真展の準備があるからな。じゃあな」

たくさんのお食糧を両手に彼も十字路で曲がって進んでいく。

「じゃあ僕達は帰ろうか」

「そうしましょう」

こうして僕達はまっすぐに進む。

やがて、彼女と出会った公園にたどり着く。あの事件以来、通るは自重してきたが、たまにはいいかもしれない。

「こっちの方が近いよ」

僕は公園の方へと一歩一歩、足を踏み出す。

彼女も黙って後をついて歩く。

公園には緑の木々が生い茂り、夏と春の境目らしい世界を作り上げていた。

夕闇は西に傾き、徐々に辺りを闇が支配つつある。

「ちょっと待って」

彼女が突然制止の声をかける。

「これを見て」

彼女が指をさす方を見る。

「これは……シグマ……？」

「エルフィドを形成するシグマの一端ね」

そこにはシグマ特有の陣が広がり、中央に一本の黒い剣が深々と突き刺さっていた。

「エルフィド……？」

「今までのカードは皆自分の世界を展開していたでしょ。あれをエルフィドというんだけど……これはそんな小規模のものじゃない。

街そのものを飲み込むほどの強力なエルフィドの一端ね」

アリシアは何のためらいもなく剣を引き抜く。すると、シグマを形成していた陣は崩れ、そして剣と共に消滅する。

「消えた……」

「これはたくさん張られている陣の内の一つでしょうね。これと同じものが数十……いえ、下手すると数百は設置されている可能性があるわ」

「そんなにたくさん……」

「これほどの陣を張り、維持するには、それだけ力が必要よ。つまり、これを作って回っているヤツはとんでもない力の持ち主ってことね」

それは、この先とてつもなく強い敵と戦わなければならないかもしれないということの意味している。先日の戦いなど、ただの試し撃ちなのかもしれない。

「これは……レルフイム？」

「恐らくそうね。下手をすると大変なことになるわ。この街の人々全てをそのエルフィドの中に収めることができれば、それこそ世界のバランスを崩しかねないほどの力が生まれることになるわ。彼女は純粋な生命力を糧としていただけあってかなり手強い。これが発動する前に倒さないと……大変なことになるわ」

今までシグマが展開されていた場所をじつと見つめるアリシア。これと同じものが数十数百存在する。もしそれが一斉に効力を発揮すれば、この街はまさに地獄となる。

「帰りましょう。今出来ることはもうないわ。さすがにシグマ全てを見つけ出してエルフィドの発動を阻止することはできなさそうだし……」

「となると、発動する前に本体を叩くしかないね」

彼女は複雑な表情を浮かべて考え込む。

「そう簡単にいけたらいいんだけどね……」

何を考えているのか、僕にはそれはわからなかった。

けれども、街を守るために彼女が戦ってくれるということが純粋に嬉しかった。

「ありがとう、アリシア」

「……え？」

「ううん、なんでもない。帰ろう。寒天ゼリーが待ってるよ」  
寒天ゼリーを思い出した瞬間、彼女の表情が変化する。

「そうよそうよ！ 早く帰って作らないと！ こんなことをしてる  
場合じゃないわ！」

そう言うと、まっすぐに僕の家の方へと全力疾走を始めるアリシア。  
僕もそれに倣って少しだけ走ってみることにする。

たまにはこうやって運動をすることもいいのかもしれない。  
だが、後に僕は嘆くこととなる。

適当にこなしていた運動程度の体力では捌ききれない過酷な戦いが  
待っていたのだった。

#### 第四話（後書き）

特に書くこともないので、以降は後書きなどは真っ白になる可能性大です。

## 第五話（前書き）

ファンタジーなのかラブコメなのかわかりません。

他作品のオマージユ（という名のパクリ）も今後出てくると思いますが。

そのとき僕がハマっていた作品が小説に影響される場合がほとんどです。

そんなオマージユネタを探しながら読むのもまた一興かもしれません。

## 第五話

### 第五話

翌朝、早朝午前4時。

そのとき、僕は目覚めた。

ほのかに見える朝の太陽。未だ天上に星々が彩られている。こんな朝早くになぜ目が覚めたかはわからない。

「……………」

やはり、いる。

今日も“ヤツ”が僕のことを狙っている。

“ヤツ”はゆっくりと僕の様子を窺いながら背を屈める。

僕はゆっくりと起き上がると、いつでも動ける体制を取ながら少しずつ距離を取る。

「はぁ……………はぁ……………」

“ヤツ”は荒い息を吐きながら体を揺らす。その息は空腹の証。獲物を求めて僕を狙っている。

電灯の明かりへと手を伸ばす。だが、電気を付ける紐があるべき場所へと手が届いたとき、“ヤツ”は動いた。

「ッ！」

僕は床を転がって攻撃を回避する。そして、急いで扉の方へと走る。部屋から出さえすればこちらのものだ。

すぐ後ろを爪が空をかく。もう少し走り出すのが遅ければどうなっていたことか。それを想像して僕は背筋が寒くなるのを感じる。

扉のノブへと手が届く。素早く、それでいて確実にドアノブを捻ると扉を押した。ドアは音もなく開く。

部屋から飛び出ると、僕は後ろ手に扉を閉じて台所へと向かう。“ヤツ”を鎮めるためにはそれしかない。

後ろから荒い鼻息が聞こえる。“ヤツ”も僕を追って部屋を飛び出

してきた。

あとは時間との勝負。僕が台所へと到着するのが先か、“ヤツ”が僕を叩き伏せるのが先か。

階段を飛ぶように駆け降り、台所への扉を開く。そして戸棚へと手を伸ばし、それを引っ張り出すと後ろに放り投げた。

がちん、という恐ろしい音がする。“ヤツ”がそれを噛み砕いたときの歯の音だろう。一歩間違えれば僕が同じように食われていたのだと思うと、脂汗が額に浮かぶ。

「もういいかい？」

「もぐ……むしゃむしゃ……はぐ……ん？」

僕は落ち着いて電気を付ける。そこにはあんパンを貪り食らうアリスアの姿があった。

「僕の夢を食べに部屋まで押しかけないでもらえるかな？」

「し、仕方ないじゃない！ お腹が空くんだから……」  
彼女はうつむいてあんパンをしゃぶるように食べる。

アリスアがこうして毎朝のように僕の部屋を訪れるおかげで、朝の運動とエサやりが日課となってしまった。正直、こんなに早い時間に起きても特にすることはない。

「寝る前にあんパン一個あげてるんだから、それで我慢してよ」

「我慢できるわけじゃないじゃない！ たった一個じゃないの！」

「あんパン代が日にいくらかかるか知ってる？」

「は、半分は出してるじゃないの」

「全部出してよ！ まったくもう……」

僕は大きなため息をつく。

彼女はあんパンを食べ終わったようで、はむはむと指をしゃぶっている。

「もう一個ちょうだい」

「……はあ」

朝食を食べ終わり、ようやくアリシアも静かになった。

僕は新聞を広げながら、外見上は平静を装いつつ、内面では内なる敵と戦いながら彼女のことを待っていた。

そう、彼女とはトモミのことである。

時計をちらりと見上げる。時刻は10時5分前。予定では10時に来る予定だった。

アリシアは相変わらず夢の美食ツアー（再放送）を見ながらあんどーナツを食べていた。低視聴率なのに、なぜか再放送枠があるという不思議な番組だが、今はそんなことを気にしている暇はなかった。

「あと4分……」

時計の分針がかちりと動く。僕はごくりと唾液を飲み込んだ。

「ねえユウタロウ、もうすぐトモミが来るんでしょ？」

「う、うん」

自分でも上ずった声になっているのがわかる。こんなことでは彼女に笑われてしまう。

「やけに緊張してるじゃない。相手はトモミでしょ？」

「そそ、そんなことはないよ!? は、ははは」

自分で言っておきながら自分で笑ってしまう。彼女の言う通り、相手はトモミだというのに緊張する必要などあるのだろうか。

分針が動く。残り3分。

かちかち、と秒針が時を刻む音と、アリシアの見るテレビだけが音声を発する。

「ねえユウタロウ、寒天ゼリー今度一緒に作らない？」

「う、うん」

彼女の質問の内容もほとんど頭に入ってこない。反射的に返事するだけだ。

「ホントに？ 緊張し過ぎておかしくなっていない？」

「そそ、そんなことはないよ!? は、ははは」

落ち着け、落ち着いて素数を数えるんだ。

そうすれば、少しは落ち着くハズだ。

分針が動く。あと2分。

アリシアはつまらなさそうにテレビを見る。

「ねえユウタロウ、あんパン食べたい」

「う、うん」

あんパン？ そんなもの自分で買ってきて食べればいいじゃないか。僕は今それどころではないのだ。

分針が動く。10時まで1分。

アリシアはあくびをしながらソファに寝転ぶ。

「ねえユウタロウ、明日デートに行かない？」

「う、うん」

デートなんて勝手に行けばいいじゃないか。

……でーと？

「ちよつと待つて！？ 今なんて言った！？」

「デート行かないかって聞いたのよ。ホントにいいの？」

「なななな、いきなり何！？」

「見てこのテレビ。ちょうど今この街のお店のことをやってるんだけど……」

『今巷で流行りつつあるあんこ入りパスタライスをアレンジ！ あんこ入りフルーツクリームパスタライスパフェ！ 今なら特別セールで980円！ 番組を見たと言ってもらえれば抹茶クリームをタダでサービス！』

「これが食べたいのよ。あんこ通としては押さえておきたい一品だわ！」

そのとき、玄関のチャイムが鳴り響く。

僕は反射的に立ち上がる。ついに彼女が来たのだ。

「来た！」

「え、ちよつと？ ユウタロウ？ 返事まだ聞いてないわよ！」

僕は急いで玄関へと向かう。

「トモミ！？」

扉を開く。そこには私服姿のトモミの姿があった。

桃色のブラウスと若草色のミニスカート。春という季節にはぴったりのものだった。

「こんにちは、ユウタロウ君」

「こここんにちは！」

彼女はくすくすとおかしそうに笑う。

「ユウタロウ君、おかしいよ」

案の定、彼女は面白そうに笑う。僕はぼりぼりと頭を掻く。

「じゃあ上がって！」

僕は彼女を部屋の中へと案内する。彼女を家に上げたのは何年ぶりだろうか。もはやもう、いつだったか思い出すこともできない。

「お邪魔します」

トモミは靴を脱ぎ、几帳面に揃える。

「今お母さんはいないんだよね。全部掃除とかは自分でしてるの？」

「そうだよ。家事全般は僕が全部やってる。父は仕事で海外だからね」

リビングへと移動する。アリシアは相変わらずテレビを見ながらお汁粉を食べていた。

「アリシアちゃん、こんにちは」

「こんにちは」

適当に挨拶をして済ませる。

「アリシアちゃんって、家だとあのドレスなんだね」

いつもの彼女の格好……ドレスと甲冑を組み合わせたような不思議な服を指して彼女は言う。

「あはは、リオナもそうだったの？」

「リオナもそうだったよ。最初はすごく変な格好で、ずっとそれを着てて……。今はもう普通の服を着ているけどね」

「どんな格好してたの？」

「チャイナ服みたいな格好だったかなあ。この前のカードは黒薔薇のドレスだったし……なんで向こうの世界のユジュー達って変な格好なんだろっね」

「そのうちとか羽かばんとか、ベレー帽とか虚無僧とか出てくるかもね」

「それなんてTWね」

「いきなりなんだよ!？」

「独り言ね」

その頃、リオナとコウは少し離れたビルの屋上から望遠鏡を操っていた。ユウタロウの家は意外とビル街から近い場所に建っているのだ。

「あいつら仲良さそうに何話してるんだ？」

「読唇術なんて使えないね」

「どこのスパイだよ……」

「いつだったか小説で読んだ未来の特殊部隊は副隊長が隊長に盗聴機仕掛けてたね」

「俺らは高校生だからな？」

「というか、写真展はいいのね？」

「副部長に全部任せてるから問題ナシだ」

コウはキリリとした笑顔で清々しく言った。

「なら問題ないのね」

リオナは双眼鏡を覗き込む。視界の中には一人の少年が慌ただしい様子で小麦粉をこねている姿が窓からよく見える。

「それにしても、よくこんな場所見つけたね」

「ヤフーグルマップ様々だ」

コウはレンズを交換してさらに拡大する。

「うお！ アイツらあんなにくつついてるぞ!？」

「私のトモミにこれ以上触ったら焼き殺すね」

「くつつそ、羨しいな!」

「な、アリシアが飛び込んできたぞ!」

「これ以上邪魔したら焼き殺すね」

もはやどちらの側についているかわからないリオナ。女の子とイチヤイチャできることを単純に羨しがるコウ。

「お前、トモミにどうなってほしいんだよ」

「トモミの思う通りになってほしいね。でも、トモミを取られるのも嫌ね」

「複雑だな……」

僕の家では混沌とした何かが繰り広げられていた。

ゼリーを作ろうとせがむアリシア。クッキー作りでそれどころではない僕。淡々とオーブンの調子を整えるトモミ。

「ユウタロウ！ ゼリークッキー作りましょ！」

「いや、それマズそうじゃん」

アリシアは棒寒天を振り回す。

だが、僕はクッキーの生地をこねるのでそれどころではない。なんとか棒寒天の注入を阻止しながら、柔らかい生地をこね回す。

「オーブンの予熱の準備完了。後は生地の準備だけだよ？」

「わかった。って、アリシア、あんこを注入するのは絶対ヤバイって！」

「あなたはあんこの良さをわかっていないわ！ ご飯ともパンともパスタとも合うんだもの！ 絶対小麦粉にだって合うはずだわ！」

「だ、ダメだって！」

今度はあんこを注入しようと企むアリシア。棒寒天よりもガードするのが難しい。

「ちえ、美味しくしてあげようと思ったのに……」

ようやく諦めてくれたのか、新しくボウルを取り出して、その中に棒寒天とあんこを突っ込んだ。僕達に対抗してあんこゼリーでも作るつもりなのだろうか。

「寒天はよく煮立てて溶かさないとダメだよ」

トモミはアリシアのゼリー作りにも協力する。アリシアはそれを聞

くと、ボウルの中身を鍋にぶちまけて熱し始めた。

「そのままだと焦げちゃうよ?」

「水を入れてお湯で煮れば大丈夫なはずよ!」

その鍋に今度は水を注ぎ入れる。みるみるウチにワケのわからないものの精製を始めるアリシア。

「トモミ、アリシアは放つところよ……」

「でも、あのままだと……」

「おお! 寒天が溶けてきたわ!」

魔女が大鍋をかき回すように彼女は鍋の中身をかき混ぜる。

「えーと……クリームは……牛乳ね!」

今度は牛乳を取り出して鍋に注ぎ込む。それも一リットルパック一本分。

「こ、こぼれないのかな……」

「次はお砂糖よ! ゼリーの表示にもなんとか糖って書いてあったわよね!」

トモミはもはや傍観するだけで、もうアリシアに指示を出すことを諦めたようだった。

「うわ……何かよくわからないものが……」

「それから抹茶よ抹茶! 確かここに抹茶カルピルが……」

今度は抹茶味のカルピルを注ぎ込む。

「いや、それはヤバイって……」

「乳酸菌が全てを台無しにするような気がする……」

トモミも不安そうにぼそりと言った。

「それから……あとは隠し味ね! そう言えば美食ツアーで、隠し味になんとかソースを入れるって言ってたわ!」

「確かベリーソースだったような……」

「ないから中濃ソース入れましょう!」

僕は思わず目を背ける。

これはモザイクが必要だ。

「あとは冷やして固めるだけっ!」

彼女はどこからか弁当箱を取り出すと、その中へ沸騰する謎の物体Xを注ぎ込む。色からして不気味だ。

「れっついぞっつこっつ！」

そう言つて、それをアツアツなまま冷蔵庫へとしまふ。熱いものをそのまま入れると確かエネルギー効率がよくないとかつて聞いたよ  
うな気がする。

「ユウタロウ君、こつちの方はもう大丈夫みたいだね」

その声で僕はクッキー作りの方へと引き戻される。

見るとなんだかよさそうな感じに生地がまとまっていた。

「あとは型を抜いてオーブンで焼くだけだよ」

彼女が持つてきた紙袋から色々な形のクッキーの型が現れる。ハート型、クローバー型、ヒトデ型など実に多彩だ。

「まず、こつちやつて広げて……」

テーブルの上に紙を敷いて、そこに生地をまんべんなく伸ばす。そして、それを次々型を抜いていく。

「抜いたやつはこつち」

型を抜かれた生地はオーブンの天板へと並べる。型を抜き終わった生地はもう一度こねて大きな塊にした後、同じように再び伸ばして型を抜く。

「こんな感じかな」

トモミと二人で型を抜き終わると、オーブンへ天板を戻す。あとは時間をセツトして焼くだけだ。

「うふふ、楽しみだね」

「そうだね」

僕とトモミはリビングのソファの方へと移動する。既にゼリー(?)作りを終えたアリシアが横になって録画した夢の美食ツアーを見ていた。

「ぶー、ユウタロウ、ゼリー一緒に作ってくれなかった」

「何も僕がクッキー作つてるときにやることないじゃない」

「だってだって……」

アリシアはクッションをぎゅうと抱え込む。

「ユウタロウのどあほう！」

クッションを僕めがけて投げつけると、彼女はどこかへと走り去ってしまう。

「あ、アリシア!？」

僕はアリシアを追いかけようとしたが、僕の手をトモミが掴んだ。

「トモミ？」

彼女は首を横にふるふると振る。今はそっとしておいてやれ、ということなのだろうか。

僕は一度ソファに腰を下すと、付けっ放しになっていたテレビの方へと視線を移す。

『今巷で流行りつつあるあんこ入りパスタライスのアレンジ! あんこ入りフルーツクリームパスタライスパフェ! 今なら特別セールで980円! 番組を見たと言ってもらえれば抹茶クリームをタダでサービス!』

そう言えば、アリシアはこれを食べに行きたいと言っていたのを思い出した。明日は何か用事があっただろうか。もし、何もなければお詫びに連れて行ってあげようと僕は思った。

「ユウタロウ君、アリシアちゃんのこと、どう思ってる?」

「え、いきなりどうしたの?」

「普段は落ち着いていてクールだけれど、時々子供みたいに手が付けられなっちゃうでしょ? リオナはここまで感情の起伏は激しくないけど、リオナでも一緒にいると時々疲れちゃうこともあるの。こんなに元気なアリシアちゃんと一緒にいて、ユウタロウ君は疲れてないかな?」

どこらへんがクールなのか小一時間ほどじっくり話し合いたいと思っただが、確かに彼女の言う通りである。

毎朝早朝に命を狙われ、学校でも自販機を破壊しないように目を光らせ、放課後は放課後であんパンを買えとうるさいアリシア。一緒にいると正直疲れてくる。

「リオナから聞いたんだけど、リトマスとなった人間が望めば、テイオナとの契約を解き、テイオナを強制的に元の世界に返すことができるらしいの」

「それ、本当!？」

そんなことはアリシアから一言も聞いてはいなかった。

「テイオナになるまでに色々な試験があつて、性格的や能力的に問題があるユジューはテイオナ候補から外されるんだけど、テイオナになった後もきちんと任務を執行できなかったり、人間に迷惑ばかりにかけているようなテイオナは資格を失うってリオナが言っていたよ。きつとユウタロウ君が本気でアリシアちゃんのことを疎ましいと思えば、元の生活に戻ることができるかもしれない」

「元の……生活……」

平穏な生活。あんパン代がかからない生活。自販機の監視をしなくてもいい生活。それはとても魅力的な生活である。毎日疲れることもなく、ゆつくりのんびり生活することができるのだ。

「アリシアが……いない生活……」

確かに少しは仲良くなったが、正直なところ迷惑している部分も多々ある。彼女のせいで何度映画を見逃したことだろうか。彼女のあんパン代さえなければ何本映画を見ることができただろうか。

「アリシアさえいなければ……」

「ユウタロウ君、なんだか無理してるように見えたから……ちょっと心配だなんて思ってたの」

彼女は不安そうに僕のことを見つめる。本当に彼女は心配してくれているのだろう。

「どうしよう……」

僕は本気で悩んでいた。最初は彼女のことを疎ましいと思っていた。そして、今も若干思っている。もう、彼女に振り回される生活は正直なところうんざりだった。

「あ、クッキー焼けたみたい」

チーン、というオーブンの焼き時間が終了した音が鳴る。トモミは

立ち上がると、台所の方へと様子を見に行つた。  
僕はすぐには立ち上がることができなかつた。

「なんだか凄くいい雰囲気だったのね」

「なんか深刻そうな顔してたな。何かあつたんだ？」

コウとリオナはほとんど真逆の意見を述べる。

彼は一度望遠鏡から目を放すと、体の凝りをほぐすために大きく背伸びした。

「リオナはトモミとユウタロウが付き合うようになったらどうする？」

「表では祝福しながらトモミの目の届かないところでユウタロウを暗殺するね。あ、でもそれだとトモミが悲しむね……どうすればいいのね……」

彼女は彼女なりに悩んでいるようだった。正直なところ、コウももしそうなれば祝福したいのは山々だが、なんとなく気に食わないというような気もしていた。

「友達、って関係だったのがアイツらだけ急接近すると、なんだか俺だけ置いて行かれるような気がしてな……」

「トモミともユウタロウとも友達でいたいね。トモミには悪いけど、今のままがいいのね」

リオナは悲しそうにそう言う。

「というか、まだアイツらが付き合うつて決まってるじゃないしな」

「アリシアがいい感じに妨害してくれて助かるのね。そう考えるとアリシアはいい仕事してるね」

「俺達、ずっと友達のままだよな？」

コウは不安そうにそう呟く。

リオナは腕を組んで複雑そうな表情を浮かべた。

「そうじゃないと嫌なのね」

リオナは小さなため息をついて双眼鏡をケースにしまった。それを

見てコウも望遠鏡を片付け始める。

「……俺達、何してたんだろう。こんな風にこそこそこそアイツらの様子隠れて窺うようなこととして……くっついてほしくないなら俺達が割り込めばいいんじゃないか」

「まったくもってその通りだったね」

ペしん、とりオナは拳を叩いた。

コウは望遠鏡を担ぎ上げると、出口の方へと向かう。

「行くか」

「行くね」

二人は決意を固めると、ゆっくりと階段を踏みしめながら彼の家へと向かった。

僕はクッキーの生地をこねるのに使ったボウルを洗っていた。出来上がったクッキーは今冷ましているところだ。アツアツのうちに試食してみたが、いい感じに焼けていて、とても美味しかった。

「大成功だね」

「うん。うまくできてよかったよ」

だが、それ以上に僕の頭の中はアリシアでいっぱいだった。

彼女と生活を共にしてそろそろ二週間が経つが、いいことなどあったらだろうか。

ワケのわからない戦いに巻き込まれたり、痛い目に合ったり、怖い目に合ったり、ロクなことが起こっていない。

確かに同居人ができて生活が楽しくなった面もあったが、それを差し引いても彼女が存在することによって発生するデメリットが大きすぎる。

僕は考える。彼女がここに存在することは僕にとってプラスになる面はあるのだろうか。そして、彼女が存在することによってどれだけマイナスとなるのだろうか。

……アリシアの存在が疎ましい。

はっとして僕は洗っていたボウルを見る。  
そこにはあんこのこびり付いたボウルも並んでいた。  
片付けをしないアリシアに苛付きながら、僕はボウルを片付ける。

「ふう……」

ようやく使った機材の片付けが終わった。あとはクッキーを食べながらお茶を飲むだけだ。

「紅茶、私やるね」

トモミが手際よく紅茶の茶葉を扱うと、すぐに二杯分の紅茶が用意される。香りもばっちりし、葉も開いている。

「紅茶煎れるの、上手いね」

「慣れてるからね」

彼女は僕の向かい側に座ると、できたてのクッキーを食べながら紅茶を飲む。

僕もそれに倣ってクッキーを摘み、紅茶を一口飲んだ。暖かく柔らかな味が口の中を満たしていく。

「美味しいね」

「うん。とても上手くできたと思うよ」

彼女はそう言うと、クッキーをかじった。

時間はもうお昼。これをお昼ご飯にしまっしてもいいだろう。

「パンケーキならあるけど、出そうか？」

「うん、これだけじゃちょっとお腹空いちやうしね」

僕は買い置きしていたパンケーキを取り出した。それを包丁で二つに切って、片方をトモミに渡す。

「甘くて美味しいね」

「川崎パンのだけどね」

そうして僕達は昼食を済ませる。

「そういえばアリシアちゃんは……？」

彼女はまだいじけているのだろうか。僕はあんパンを持って階段の

方へと向かう。

「アリシアー！ ご飯いいの？」

声が返ってこない。僕は肩をすくめると、トモミの方へと視線を送った。彼女はこくと頷いた。

僕は階段に足をかける。わざと足音が聞こえるように少し強めに床を踏む。

「アリシアー！ 入るよ？」

客室のドアを開く。ベッドの上では寝そべりながらはむはむとおはぎを食べるアリシアがいた。

「アリシア、さっきはごめんね」

僕はあんパンを差し出す。彼女は奪い取るようにあんパンを掴むと、封を開いてむしゃむしゃ食べ始めた。

「明日のデート」

彼女はそう、小さな声で、それでいてしっかりと呟いた。

それは確かに僕の耳にまで届いた。

「わかったよ。明日はあんこ入りフルーツクリームパスタライスパフェを食べに行こう。ね、機嫌直してよ」

僕がなぜ彼女の機嫌をとってやらなければいけないのかわからなかったが、ともかく声をかける。

「明日、絶対の絶対だからね」

「わかったよ。絶対の絶対だ」

それで少し落ち着いたのか、むしゃむしゃとあんパンを食べながらおはぎを食べ始める。

「どっちかにしたら？」

「どっちも美味しいもん」

そのとき、ピンポンと来客を知らせるチャイムが鳴る。

「ちよつと行って来るね」

僕は彼女をその場に残して玄関へと向かう。

「はい、どちら様ですが？」

「リオナ様ね」

「それとコウ様だぜ」

二人は横に並んで胸を張る。そんな様子に思わずあっけに取られる僕。

「写真展は……？」

「副部長に任せた。そうしたら暇になつてな。クッキー食いに来たぜ」

そう言つてコウは勝手に上がり込む。その後にリオナも続く。僕は大きなため息をついた。これではいつもの展開と同じである。

「あれ、コウ君もリオナも来られないんじゃないの？」

「用事なくなつてな。俺にも紅茶煎れてくれよ」

「私もほしいね」

トモミは二人分の紅茶を用意する。

「お、クッキー美味そうだな」

さつそくクッキーに手を伸ばすコウ。

「うーん、サクサク感ハベストだし、甘味もいいんだが……なんか足りないな……」

「あと何を足したらいいと思う？」

「うーん……風味だ！ レモン風味とかにすればいいじゃねえか？」

「レモンクッキーですか……。いいですね。今度やつてみます」

そう頷くと、トモミはクッキーを食べた。

「結局皆集まつちやつたね」

僕は椅子に腰を下すと紅茶をすすった。

「そうだな……つて、アリシアは？」

「すねちやつてるの」

「まあ、少し機嫌よくなつたみたいだけどね」

僕はクッキーを口に含み、紅茶を飲む。紅茶をクッキーに染み込ませて、少しずつ砕きながら食べるのが以外と美味しいことに気付いた。

「ま、しばらくすれば降りてくるだろう」

「あんだけ凶太いんだから、よほどのことがない限り大丈夫ね」

アリシアでさえ堪えるよほどのこととはなんだろうか。やはり、レルフィムのような強いカードと戦うことだろうか。だが、むしろあれはこっちの方の寿命が縮みかねない。

「ともかく今はクツキーに集中するね」

「あ！ あれだけあったクツキーがもう半分しかない！」

こうしてクツキー争奪戦が始まった。

アリシアのことは心の片隅に置いておくことにしよう。彼女が僕にとって必要な存在か、それを決めるのは今すぐである必要はない。僕もクツキー争奪戦に参加する。僕達が作ったクツキーだ。僕が食べないわけにはいかない。

……アリシアは結局、最後まで階下へと降りてくることはなかった。

## 第五話（後書き）

どっかで読んだ小説、というのはやっぱり僕が書いた小説ですが、こちらは未公開のため知っている人はいないかと思えます。機会があったら投稿していきたいと思えます。

## 第六話（前書き）

あまりにオマージュネタが多いので、飽きた方もいらっしゃるかと思います。スルーしてください。自分でも、今になると恥ずかしいんです！（え

## 第六話

### 第六話

早朝4時。

窓の外からは薄い光が射しており、うつすらと目の裏を刺激する。いつも通りの時間に僕は目を覚ます。

「……？」

いつも通りの気配がない。何かの畏だろうか。

僕はゆっくりと体を起こすと、何かの気配がないかと僕は目を凝らして耳を澄ませてみるが、アリシアの姿は部屋の中にない。

電気をつける紐を手探ってみる。部屋の明かりがついたが、彼女の姿はどこにもなかった。

「アリシア？」

ユジューは身体的よりも、精神的な存在の方が重要なので、短い時間の睡眠でも問題ないとアリシアは言っていた。そのため、毎朝のように早朝彼女はやってくる。

僕はゆっくりとドアを開く。扉の外には誰もいなかった。

何か畏でも仕掛けられているのではないかと、僕は慎重に歩む。

「アリシアー？ 今日はいないの？」

彼女が住まう客室の前へと向かう。

僕は部屋の扉をノックした。返事はない。

「アリシア？」

ゆっくりと扉を開く。部屋の中は暗闇に包まれていた。

僕はゆっくりと足を進める。

ベッドにかけられた布団は大きく膨らんでいた。時々小さく上下する。

アリシアはベッドで眠っていた。今日はどつやら空腹で目覚めることはなかったようだ。

それがわかってほっとすると同時に頭の中を疑問が満たす。どうして彼女は今日、起きて来なかったのだろうか。

「ん……ゆうたる……」

僕はいきなり名前を呼ばれてドキっとする。そういえば、僕は女の子が寝ている部屋に無断侵入しているのだ。状況を考えれば僕は大変なことをしているのだ。

僕は急いで部屋を後にする。心臓は大きな音を立てて脈を刻む。そして、ちよつとばかりの罪悪感が心に芽生えてくる。

「は、はは。いつもアリシアだって勝手に僕の部屋に入ってるじゃないか。何を今更戸惑う必要なんかあるんだよ……」

そうは言い聞かせても動悸は止まらない。彼女の寝顔を思い出すと、思わず頬が熱くなる。

そういえば、彼女の寝顔を拝んだのは初めてではないだろうか。疲れなどないかというほどはしゃぎ回り、授業中もしっかり勉強（と）いつても彼女にとっては暇潰しにしかならないのだろうか（し、夜遅くまで昼寝もしない彼女の寝顔はそうそう拝めるものではない。そう思うと、じっくり鑑賞できなかったのは残念だ。

「何考えてるんだ、僕！ アリシアの寝顔なんて別に……」

そう、彼女には散々迷惑をかけられている。正直いらない方がどれだけマシか。そんな相手にときめいてどうしようというのだ。

「そもそも勝手に住みついて、何様のつもりなんだよ！」

彼女の寝顔が頭の中からかき消える。どんどんイライラだけが募つていき、心は不満に満たされる。

「……ふう」

だが、そんなことを彼女に言っても仕方がない。そう、アリシアは迷惑な存在なのだ。

こう考えると、さっきまでの動悸もいくらか落ち着いてくる。

「寝よう。どうせ今日は日曜日だ。遅くなっても大丈夫……」

僕はフラフラと自分の部屋へと向かう。

布団の中に収まり、目を瞑る。日頃疲れが溜まっているからだろう

か、すぐに眠気は襲ってきた。  
それでも意識が途切れる直前、彼女の寝顔がもう一度浮かんできた。  
僕は顔をしかめた。

「おつきつろっ！ ゆーたるーっ！」

「う、うわ、何事!？」

僕は突然の攻撃で目が覚める。いつもの夢食い攻撃ではなく、物理的手段に訴える方法だった。

僕はベッドから転げ落ちる。目の前にはアリシアの姿。だが、いつもとなんだか違う。

「あ、アリシア!？」

「ユウタロウ、目が覚めた？」

「それより、その格好どうしたの？」

視界の端に時計が映る。時刻は午前6時。結局大して眠れなかった計算だ。

彼女が身にまとっていたのは……桃色のブラウスに若草色のミニスカート。そう、昨日トモミが着ていた格好とほとんど変わらない。

「えへへ、可愛い？ メセブライに言っつて作らせたの」

彼女はくるくると回る。ミニスカートがひらひらと宙を舞い、けしからんこと大間違いだった。僕はふいと視線を逸らす。正直見ていてこっちが気恥ずかしい。

「何、視線なんか逸らしちゃって？ そんなに私が着ると似合わない？」

「いや、そのぱんつが……」

時々白い下着が見える。というのも、僕はベッドから転がり落ちて床に寝転んでいるわけで、角度的にどうしても見えてしまう。

「何よ、もつと見る？」

「見ないよ!」

ユジューの辞書にはしたないという言葉は存在しないのだろうか。

僕は起き上がってぼりぼりと頭を搔く。

「で、そんな格好して今日はどうしたの？」

彼女はぼかんとした表情を浮かべる。

「昨日の話、聞いてなかったの？ 今日デートに行く約束でしょ？」

「え、ええ！？」

記憶を漁ると、そういえばそんな約束をしたような気がする。いや、あれはただ反射的に頷いただけで、行くと決めただけではない。

「うんって言ったじゃない」

「あれはだつてその、行かつて意味じゃなくて……」

彼女からは無言のオーラが立ち上っている。行かなければどうなってしまうだろうか。恐らくとんでもない目に合わされるに違いない。

「わ、わかったよ！ 行かつて！」

「今日は絹布茶房に行くわよー！」

絹布茶房といえば甘味処として有名なチェーン店である。先日モテレビで紹介されたばかりだ。

「まったくもう……あれ、何か忘れてるような……」

何か先約が入っていたような気がする。だが、思い出すことはできない。

「でも、その前に朝ご飯ね」

「はいはい……」

エサやり業務を思うと、そんな思い出せもしないことはどうでもよかった。

僕は諦めて台所へと向かう。僕の周りを嬉しそうにアリシアがくるくる回っていた。

絹布茶房は商店街を奥に行ったところにあるデパートの一角にある。そこまでステップを踏む彼女と一緒に歩くことになったわけだが……。

「ねえユウタロウ、見て見て！ これ美味しそう！」  
一区画歩く度に様々な店のショーウィンドウに張り付く彼女は物凄く目立っていた。

下手に顔立ちがいいだけでなく、紺碧の流れるような髪に美しい琥珀色の瞳は黒髪黒目の日本人の中では異彩を放つ。彼女が一步步く度に視線が集中することがとても恥ずかしかった。

「ね、ねえアリシア、もう少しこう、節度を持ってさあ……」

「あ、あの中華まん！」

もはや僕の言葉など聞こえていないようだった。サークルキューの中華まんのケースに張り付いて涎をこぼしている。僕は頭を抱えたてうずくまりたくなかった。

「アリシア！ 早く行くよ！」

「あーん、中華まんが私を呼んでいる」

未練タラタラの彼女を引きずりながら、僕はデパートへとまっすぐ邁進する。

ようやくデパートに到着して少し静かになった彼女を連れて、まっすぐに絹布茶房へと向かう。

「着いたよ」

と思いきや、早速ショーウィンドウにびったりと張り付いている。

「わあ……早速目移りしそうだよ！」

「……はあ」

ショーウィンドウの中には色とりどりなデザートが溢れ返っている。

「何を目的に来たの」

「……はっ！ そうだったわね！ さあ〜あんこ入りフルーツクリームパスタライスパフェ、食べるわよ！」

彼女の元気な行進を先頭に入店する。

「いらっしやいませ、お二人様で……」

そこでウェイトレスの言葉が途切れる。なんだか聞き覚えのあるような声だった気がする。

「ユウタロウ君？」

「え、あ、まさかトモミ!?!」

そう、僕の目の前にはトモミがウェイトレスの格好をして立っていた。

「あら、なんでここにあなたがいるのかしら」

アリシアが不思議そうな顔をして尋ねる。

「ここで私、バイトしてるの。時給結構いいし、日曜日だけでもいって言ってくれたからね。それより二人はどうしてここに?」

「デー……」

「このパフェをアリシアが食べたいってうるさいんだよ! それで仕方なく連れてきたんだよ!」

「ふーん……なるほどね」

面白くなさそうな顔でそう言つと、彼女は僕達を席へと案内する。ちよつと奥まったところにある四人席だった。

「トモミ! 私あんこ入りフルーツクリームパスタライスパフェね! あと、テレビ見たから抹茶クリームサービスしてね!」

アリシアは席につくやいきなり注文する。トモミはポケットから伝票を取り出してさらさらと書く。

「うん、ユウタロウ君は?」

「え、あ、僕はアイス抹茶でいいよ」

「かしこまりました」

そう言つて彼女は一礼した後にメニューを持って下がる。

「そうか、ここでバイトしてたんだなあ……」

トモミがどこかで週一でバイトしていることは知っていたが、まさかここでやっているとは思っていもいなかった。ということは、ここでの会話は全て彼女に筒抜けということになる。迂闊なことは話せない。

「ねえねえユウタロウ。あんこ入りフルーツクリームパスタライスパフェってどんな味なんだろう」

「食べたことないっていうか、名前から中身が想像できないからなとも言えないよ……。とりあえず甘いんじゃない?」

「あれを頼む人、初めて見たよ」

気付くと、トモミは椅子に座って普通にお喋りに混じっていた。

「あ、え、仕事は？」

「今の時間帯はまだ忙しくないの。忙しくなるのはお昼から夕方にかけてかな。ここ、レストランもやってるから、お昼ご飯に利用する人も結構多いの。その後は甘味目当ての人達でいっぱい。だけど、午前中は比較的楽なんだよ」

「なるほど……って、だからってサボっていいの？」

「大丈夫だよ」

そう言うと、彼女はお冷やのコップを傾ける。わざわざ自分の分も用意したようだ。

「作るのは裏方の仕事だし、私達の仕事はお客さんの注文を承ってそれを運ぶだけ。あのパフェはかなり時間かかるだろうし、他のお客さんなんて小説家のあの人しかいないから大丈夫」

「小説家のあの人って……？」

彼女はゆっくりと指を差す。その先にはコーヒー片手にひたすらノートパソコンに向かって何かを打ち続けているおじさんの姿があった。

「そこそこ売れてる小説家なんだって。毎日コーヒーとスイーツポテトを注文しに来てるらしいよ」

「コーヒーはともかく……スイーツポテト？」

「ここの名物で、あつたかいスイーツポテトの上にソフトクリーム載せたやつなの。あ、ほら運ばれてきた」

それは確かに彼女の言う通りのものだった。黄色いポテトの塊の上にとっかかりとソフトクリームが居座っている。ポテトはアツアツなのか、ソフトクリームの根本の方から徐々にとろけ始めている。

彼はスプーン片手に原稿を打ち続ける。スプーンが舞う度にソフトクリームの山は崩され、ポテトと一緒に口へと運ばれていく。そして、一口咀嚼する度に原稿の文字が打ち込まれていく。

「いつもあんな感じだよ」

「小説家って仕事も大変なんだな」

「神崎さん！ パスタライスパフェ入りました」

「はい、今行きます」

彼女は立ち上がると、巨大なパフェとアイス抹茶をトレイに乗せて運んでくる。それを重そうにテーブルへと下す。

「あんこ入りフルーツクリームパスタライスパフェと、アイス抹茶です」

「キター！」

それはテーブルに置かれて彼女の首元まで届く巨大なカップに飾られて出現した。

下部にはもち米とあんこをミックスしたものが入れられ、中段にはクリームパスタ。上段には数々のフルーツとアイスクリーム、あんこで彩られている。その上から抹茶のクリームソースがかけられてこの作品は出来上がった。

「凄いポリューム……」

「あはは！ 美味しそう！」

「実はこれ、大食いメニューのうちの一つなんだよね。十分以内に完食したら10000円の賞金付き。負けたら2000円だけだね。どうする、挑戦する？」

「それ、挑戦しなかつたらどうなるの……？」

「普通に15000円……今はセールで9800円かな」

彼女は一瞬で答えを決める。

「挑戦する！」

その言葉を待っていたと言わんばかりに、トモミはストップウォッチを取り出した。

「心の準備はいい？」

「任せちゃってよ！」

「じゃあいくよ……。よい、どん！」

ストップウォッチのボタンが押された。少しずつ時間が刻まれていく。

まずはアイスを押しのけフルーツから片付ける作戦に出るようだ。メロン、イチゴ、リンゴ、オレンジなどのフルーツの盛り合わせだけでもかなりの量がある。だが、そんなものなどモロともせずアリスアは平らげる。

次の難関はアイスクリームだ。冷たいのをそのまま頬張れば頭にキーンとくること間違いなしだ。

だが、あえて彼女はそれをする。だが、彼女は冷静だった。そのまま塊ごとではなく、細かく崩してあんこと混ぜこんで口へと運んでいく。こうすることによって、一度に受けるダメージは微々たる物となる。

「アイスとあんこ……新しい組み合わせね」

彼女はう頷きながらあんこアイスを食べていく。

「早い……」

「いえ、まだこれからだよ」

続いてパスタゾーンだ。パスタには甘い生クリームが絡められており、ここまで甘味続きの相手にはなかなか手強い相手である。だが、アリスアはそんなものはモロともせず完食する。

「残り5分！」

残り5分で半分以上平らげた計算になる。普通の人ならお腹いっぱいになってしまいが、彼女はそうはいかない。

最終段階はもち米とあんこのミックスだ。

もち米は案外腹に溜まるものだ。事前にパスタを食べている身には堪えるはずだ。

だが、そんなことなどまるでなかったかのようにもち米をすくい上げて口に運ぶ。

「ん〜あんこが美味しいっ！ それにもちもちした食感……たまたまなあいわあ！」

器を一気に傾け、まさに流し込むという表現が正しいような勢いで飲み干す。

「くっくっくっ……ぷはあ。美味しかったわ！」

ストップウォッチが止められる。残時間3分12秒。十分好成绩だと言えるだろう。

「アリシア、やったじゃん！」

「美味しかったわ。あ、ありがと」

アリシアは千円分のキャッシュバックを受ける。

「ところで、もう一杯おかわりしていい？」

「ちょ、アリシア!？」

彼女の表情は本気だった。このままでは本当にやりかねない。

トモミ達の表情にも困惑が浮かんでいる。このままでは店が潰される。そんな危機感を覚えたのだろう。

「今度は普通に食べるわよ。それならいいでしょ？」

「それだったら……」

トモミは向こうの方にいる店員と何かを話をしている。

「普通に食べる分なら構わないって」

「やったね！ じゃあお願いね」

トモミは伝票に書き足す。そして、注文をしに一度店の裏方へと消えていった。

「お腹いっぱいじゃないの？」

「うーん……ちょっと？」

普段からかなりの量を食べるアリシアだ。このくらいではビクともしないのだろう。

「もち米一合、パスタ二束茹でてるはずなんだけどなあ」

「うわ、トモミ!？」

いつの間にか戻ってきたのか、トモミはまたしても会話に溶け込んでいた。

「それだけあったら普通、お腹いっぱいになるよね」

「でも、アリシアちゃんだからなあ……。普段食べてる量を思い返すと、これくらいすぐ入っちゃうそう……。それで太らないんだからびっくりだよ。ユジューって本当に不思議」

「リオナはどうなの？」

「リオナは……普段は私の感情と夢を食べてるし、お弁当もちよつと多めにしてるから大丈夫みたい」

「大丈夫なの……?」

彼女はこくりと頷く。思えば、彼女が感情を爆発させたというのは見たことがない。それは普段から感情をリオナに食べさせているからだろうか。

「リオナは……凄くいい子だよ。私の感情を食べて、私に共感してくれるの。楽しかったこと、辛かったこと、悲しかったこと……そういうことを全部共有して、私のことを思ってくれて……本当にいい友達だと思ってるの。まあ、ちよつと扱いが大変だけだね」

彼女はうまくユジューとの共同生活に適応しているようだ。だが、僕の場合はストレスが溜まりっぱなしで、彼女のようにうまくアリアと付き合えていないような気がする。

ならば、アリアシアにこのストレスを食べてもらうというのはどうだろうか。だが、僕としてはこんな感情を他人とは共有したくない。できることなら自分の胸の内に秘めていたかった。

「神崎さん!」

「はい、今行きます!」

トモミは立ち上がると、店の裏側に消えていく。やがて大きなトレイにこれまた大きなカップを載せてトモミが戻ってくる。

「あんこ入りフルーツクリームパスタライスパフェです」

トモミは重そうにカップをグラスを置いた。アリアシアの目はすぐに輝き、むしゃむしゃと食べ始める。

それを見届けると、トモミは僕の隣に腰を下した。

「ねえユウタロウ君、アリアシアちゃんとはうまくやれてる?」

「うーん……やっぱり扱いが大変だよ……」

「私も最初はそうだった。なかなかこつちの常識に馴染めないリオナを何度も投げ出したくなったよ。でも、リオナは私の心を共有して、それでどんどんこつちの知識を学んでいった。だから今のリオナがあるのかな」

「じゃあ……僕もアリシアと心を共有した方がいいのかな？」  
トモミは寂しそうな表情を浮かべて首を振る。

「これは最善手じゃないよ。自分の嫌なところも、そういうところも全部知られてしまう。そういうの、特にユウタロウ君は嫌でしょ？」

「それは……」

自分の嫌な部分……それを日の元に晒し出そうというのか。

僕は……そんなことは耐えられない。

「じゃあ、一つずつ教えていくしかないね」

「ユウタロウ君……無理してるでしょ？」

彼女の言葉は核心をついていた。そう、僕は確かに無理をしている。今までの生活から比べれば、今の生活はとてつもなく負荷がかかる生活を送っている。毎晩夜には勉強をする間もなくぶっ倒れてしまう。それほどまでにアリシアには振り回されていた。

「これは私がリオナと暮らしてきて思ったことだけど……そこまでして、私達にユジューを養う必要があるのかな……？」

僕はアリシアを見る。彼女はすでに三段目のパスタゾーンに入っていた。話など一言も聞いてはいない。

「ユウタロウ君は男の子でしょ？ 女の子に見られるの、嫌なこととかたたくさんないのかな……？ 私、もしリオナが男の子だったら……放っぼり出しちゃったかもしれない」

彼女の顔は真剣だ。同性だから我慢できた。その顔はそう物語っている。

だが、僕の場合はどうだ。アリシアは女の子で、僕は男だ。

正直、心の中を探られるなんてことは絶対にされたくない。暗い過去を詮索され、暴き出されるだなんて絶対に嫌だ。

「ユウタロウ君……無理だけはしちゃダメだよ？」

かたり、とアイス抹茶の氷が音を立てて溶ける。僕は一口も飲んでいないアイス抹茶を見つめながら、一人思索に耽っていた。

「お帰りくださいませお客様。またのご来店をお待ちしております  
ん」  
ギャグなのか本気なのかわからない口調でトモミが言う。半分は恐  
らく本心だろう。

「今度来るとしたら僕だけで来るよ。アリシアを連れてくるとやや  
こしいからさ、ね」

「そうしてもらえると嬉しいよ……」  
彼女はどんよりと落ち着いている。これで彼女達の給料カットなん  
てことになったら大変である。

「後片付けだけしたら休憩だから、後で少しお茶でもする？」

「いや、アリシアが元気に動き回るからちよつと休憩ってわけには  
いかなそう……また今度にしてもらってもいいかな？」

「そう……ちよつと残念だな」

彼女は本当に残念そうに言った。

「きつとこの埋め合わせはするからさ！　じゃ、また明日ね」

「うん、またね」

僕はトモミと別れてアリシアを探す。まったく一体どこへ行っ  
てしまったのだろうか。

「あ、ユウタロウ！」

アリシアの声が聞こえてくる。だが、姿が見えない。

「ユウタロウ、こっちこっち」

「……え？」

いつの間にこんなに買い込んだのだろうか。両腕一杯にあんパンや  
クリームパン、チョコレートパンにジャムパン……様々なパンが入  
った紙袋が彼女の手にあった。

「いつの間に……」

「さっきあそのパン屋さんで買ったの。美味しいよ」

そう言っ  
て彼女はあんパンを一個差し出す。僕はありがたく一個い  
ただくことにする。

「あ、ホントだ、美味しい」

「でしょ？ さすが北海道産小豆を厳選使用ね。特に生クリームと混ぜ合わせているあたりが素晴らしいと思うわ……あ！」

何かを見つけたのか、彼女はパンの紙袋を僕に押し付けると、突然どこかへと走り出す。

「何を見つけたんだろう……」

しばらくして彼女は紙袋を手に戻ってきた。

「あん団子、美味しいっ！」

「あの……パンは？」

「ちゃんと食べるわよ。はい、ジャムパンちょうだい」

僕は紙袋の中に入れていたジャムパンを取り出すと、アリスアへと手渡した。彼女はもさもさとジャムパンを食べながら、左手に持ったあん団子を食べる。

「これぞまさしく和と洋の融合……和洋折衷ね！」

これを和洋折衷と言ってもよいのだろうか。僕にはただあん団子を食べながらジャムパンを食べているようにしか思えない。だが、その消費スピードの早いこと。気付くとジャムパンはすでになく、あん団子も串だけになっていた。

「次メロンパンちょうだい。メロンパンはこのサクサクのところとモフモフのところを交互に食べるのがいいのよ！」

「それ、どっかでも聞いたことがあるんだけど……」

彼女はリスのようにカリカリとメロンパンの端っこを食べ、もさもさと熊のように柔らかい部分を食べる。

「次あんパンね。確かあんパンは坂を上りきったときに……」

「あんまりやりすぎると原作者に怒られるからね？ ほどほどにしておきなよ」

僕は一応注意をしておく。あまり放っておくと、つい行き過ぎてしまう。たまにストップをかけなければならぬ。

「じゃああんパンは普通に食べるわよ。あー美味しいわ」

僕はパンの入った袋を手に椅子へ腰かける。

……なぜ僕はこんなところで荷物持ちをさせられているのだろう。気付くとパンだけでなく、いつの間にか団子のケースまで持っていた。このままでは衝動買いしたものの全てを持たされるかもしれないとなると最悪の場合、瓦煎餅とかを背負うことになりそうだ。

「あ、見て！ あの変な形のお煎餅！」

そもそも、なんで僕は彼女に付き合っってこんなことをしているのだろうか。

「かわら……せんべい？」

よく考えてみよう。

僕にこんな義務はないはずだ。

せつかくの休日を下らないことに使っって、前の僕ならば絶対に考えられない。

……逃げだそう。いや、正しい姿に戻るといえばいいのだろうか。

僕は彼女に気付かれないようにこっそり店から離れる。

「あ、待ってよー！ ユウタロー！」

もう、こんな日々はうんざりだ。

急ぎ足は徐々に駆け足へと変化する。

僕は家の方へと向かって走り出していた。

## 第六話（後書き）

ラブコメ編急展開です。

こっちの後書きはmixiで自分でつけたコメを参考に書くことにしました。

ただし、後半になるにつれてあんまりコメントが付かなくなったので、今後真っ白になる可能性がなきにしもあらずです・・・。

## 第七話（前書き）

煮詰まっていた時期です。

一度は書き直そうかと思いましたが、やっぱりそのまま投稿することに決めました。

ちよつとつまらないかもしれませんが。

## 第七話

### 第七話

ようやくいつもの公園にたどり着く。

僕は一度荷物を下して一息つく。これではデートではなく、ただの荷物持ちだ。

「ユウタロウ！」

アリシアが駆けてやってくる。その顔には困惑と不満が浮かんでいた。

「早く戻りましょ！ まだ見たいもの、買いたいもの、いっぱいあるんだから！」

「嫌だ」

「……え？」

アリシアが不思議そうに尋ねる。

「ユウタロウ、誰に向かってそんな口聞いているのかなあ？」

「アリシアに向かってだよ」

彼女はぶーっと口を尖らせると、腕を組んでベンチに腰かけた。

「何よ何よ何よ。ユウタロウの癖に生意気ね」

「僕の癖？ 僕の癖って何様のつもりだよ？」

僕が本気で怒っていることに気付いたのか、彼女は困惑した表情を浮かべる。

「ちょ、ちよつと、ユウタロ……」

「もううんざりだよ」

……それは僕すらもが予想しえなかった言葉。

気付くと口から飛び出していた、不思議な言葉。

それは場の空気を凍らせる。

「なんでこんなに君の面倒を見なきゃいけないのさ！」

朝考えていたことが次々頭を過る。自然にそれが言葉となって口を

ついて出てきた。

もはや、決壊した堤防のように留まることを知らない。

「僕は普通の高校生だよ？　なんでこんな戦いに巻き込まれなきゃいけないのさ！　僕は平穏な生活を送りたいんだ！　こんな……こんな戦いに参加する義務も義理もないじゃないか！　なんで僕を巻き込むんだよ！」

普段から溜まりに溜まりこんでいた言葉が後をついて出てくる。理不尽な彼女の在り方に関する怒り、不満、疑問、そういったものが様々な言葉へと形を変えて波のように蠢く。

それは恐ろしいほどのうねりを生み出し、津波となってアリシアへと襲いかかった。

「邪魔なんだよ！　アリシアなんか……どうせ僕のこと、便利なりトマスくらいにしか思っていないでしょ？」

「そ、そんなことなんか……！」

パンの袋も団子のケースも放り投げる。それはばらばらと中身をぶちまけながら地面に散らばった。

「もういい加減にしてくれ。これ以上……我慢できないよ」

僕はきびすを返して歩き始める。

「ユウタロウ！」

後ろの方から声が聞こえてくる。だが、僕はそれを無視してひたすらに歩き続ける。それは徐々に駆け足へと変わっていく。

彼女の言葉が甦る。

『元気なアリシアちゃんと一緒にいて、ユウタロウ君は疲れてないかな？』

疲れているに決まっている。今だって現に疲れている。今日一日突き合わされて疲れている。

『ユウタロウ君……無理してるでしょ？』

無理だつてしている。僕の生活リズムは完全に狂い、早朝は早く夜は遅いというユジューの生活リズムに無理やり適合させられ、かつてないほどの負担を体に強いている。

『そこまでして、私達にユージュを養う必要があるのかな……？』

「そんなの……そんな必要あるわけないッ！」

時間が止まる。今まで僕を追って走っていたアリシアの足音も止まる。

「僕が君を養う義務なんてあるの？　なんで僕が君の面倒を見なきゃいけないわけ？　なんで僕が自分を犠牲にしてまでこんなことをしなきゃいけないの？　なんで……なんで！」

「ユウタ……ロウ……」

「目障りなんだよ！　どつか……どつか行ってよ！　それが嫌なら僕がいなくなる！　これで文句ないでしょ！？」

「ユウタロウ！　待っ……」

耳を塞ぎ、目を瞑って走り出す。

聞きたくない。見たくない。

もう誰からも干渉を受けたくない。

僕には僕の世界があったはずだ。そこにアリシアは土足で踏み入り、荒らしてしかも住みつこうとしている。そんなことを許していいのか。いや、いいわけがない！

僕は自分の世界を守る。これは絶対的に不可侵の世界であって何人たりとも冒してはいけない。

そういう世界が誰しも必要なはずだ。嫌な過去をしまいこみ、恐ろしい考えを溜め込み、一人良がりの思いを封じ込める開かずの部屋が誰だつて持っている。

だが、アリシアはそんなことはお構いなしに鍵を破って入ってくる。今までの朝のことを思い出せ。彼女は僕の夢へと侵入し、そこから心へとたどり着き、少しずつ侵食していたはずだ。

そうやって彼女の侵入を許せば、やがて自分でも封じてしまいたい牢獄のような物置部屋の扉まで緩んでしまう。そうだったが最後、僕が僕でいられる自信はない。

「はあ……はあ……」

ようやくアリシアを振り切れたのか、耳障りな声は聞こえてこなくなつた。

「なんで僕が……アリシアを……養わないといけないんだ……」

僕はとぼとぼと住宅街を歩く。行く宛もない。行きたい場所もない。ただ、アリシアから離れたかつた。

そうやってずっと歩いていると、いつの間にか見覚えのない河川敷へと出ていた。

さらさらと川が流れている。僕以外誰もいない、静かな場所だつた。僕はゆつくりと河原へと降りる。柵があつて川のすぐそばまでしか降りることができなかったが、もう目の前を水が流れている。

「あれでよかつたんだ……」

そう、これでよかつたのだ。

アリシアはテイオナとして不適合。メセブリイとやらが勝手に連れて行つてくれるだろう。

そうなれば、僕はまた一人の生活に戻ることができる。友達と毎日を気楽に過ごし、のんびりと学校に通う毎日。それが今ほど恋しいと思つたことはなかつた。

こんな変な戦いになんか巻き込まれたくない。平和に暮らしたい。

それが僕の願いであり、本望であつた。

「アリシアなんか……帰つちやえばいいんだ」

それを具現するかのようには、僕の周りに光が集まる。それは黒い環を描きながら僕を包み込む。

「あら、お一人？」

そのとき、上空から漆黒の翼を携えた少女が舞い降りてくる。

「れ、レル फिल्म!？」

「そう、私は悲劇を生む闇の吸血鬼レル फिल्म。またの名を死神レル फिल्मとも呼ばれているわ」

これは彼女のシグマが生み出したものだったのだろうか。今ではこの感覚がなんだか心地よい。

「そんなご体操な人が何しに来たの？」

彼女が笑う。その度に、僕の背筋は凍りつく。

「うふふ、また新しい通り名ができそうね」

氷のように冷たい視線。そして耳まで切れこむのではないかというほどの笑み。

「それは簡単。テイオナとも別れたあなたを捕らえ、私の玩具にするのが目的よ」

「お、玩具？ それって一体……」

「こういうこと」

彼女は両手を広げる。瞬間床に魔法陣が発生し、大きく広がっていく。

「これは……」

「私が作り出した聖域。あなたを捕らえて決して逃がさず、無限の槍にてあなたを貫き、苦痛を与え続ける。それと同時に甘い蜜を指に染み込ませ、それを舐めとってもらおうわ」

そう彼女が言った途端、辺りは闇に包まれる。以前、デパートの屋上で展開されたあの闇のバラ園だった。

僕の足元からは黒い触手が何本も生えてくる。それはがっちり僕のをホルドして離さない。

「まだ殺さないから安心して？ 天にも昇りそうなほどの快感と、地の底へと向かうかのような苦痛をあなたに与えてあげる」

彼女は僕の体を抱きしめると、耳たぶにキスし、甘くかじる。

「うふふ、感じちゃったあ？」

「な……」

「ぴちゃ……はむ……」

彼女が舌を動かすたびに脳裏に刺激が走る。

これは…… 快樂なのだろうか。未知の感覚に僕は戸惑いを覚えつつも、それを受け入れつつあった。

「うふふ……」

次に彼女は唇を重ねてくる。僕の腕はぴんと引き延ばされて固定さ

れ、抵抗することもままならない。

「これが……キス……」

舌が口内へと侵入してくる。それは僕の口の中をかき回し、その唾液を吸い尽くす。

「甘くて……何、この感じは……」

舌が触れ合う度に電撃のような刺激が体中を走る。

これが……これが情事というものなのだろうか。色事を一度も経験したことのない僕には何がなんだかわけがわからなかった。

「あなたの心が流れ込んでくる」

唇を合わせる度に僕の中の何かが溢れ出していく。彼女はそれを蜜を吸う蝶のようにすくい舐めとる。

「甘い……これが甘い感情……。なら、恐怖はどんな味？」

ざくり。

そのとき、何か鈍い音が聞こえたような気がした。

首をひねり、その音の発生源を探す。それはすぐに見つかった。

僕の広げられた左手の手の平に黒い杭が深々と突き刺さっている。

「ッ!？」

その光景の意味を理解すると同時に、恐ろしい激痛が襲いかかってきた。

「ぎゃああああああああッ!？」

「痛い? 痛いかかしらあ?」

彼女は心底楽しそうに杭を握り、ぐりぐりと更に押し込む。彼女が杭に触れる度に恐ろしいまでの痛みが僕の体に襲いかかる。

「こっちもね」

質素な言葉と同時に右手にも杭が打ち込まれる。

「があああああああッ!」

「痛い? 痛いわよねえ? あはははははッ! 苦痛の心ほど辛

味が強いものがあるかしらあ?」

ぺろりと舌を出して血を舐め取る。その度に彼女の顔に恍惚とした表情が浮かび上がる。

「激情と血のミックスジュース……絶品ね」

「……はぁ……はぁ……」

「甘い味と辛い味が重なって、不思議な味がする……」  
彼女が僕の傷口に舌を這わせる度に激痛が襲いかかる。

闇の中から一本の細剣が現れる。

「これは私がティオナを殺して奪い取った感情の塊を刃に、一人の奪った人間の心をはめ込んで作ったもの。素晴らしい力を誇るムーティエンよ」

彼女はそれをくるくると振り回すと、何のためらいもなく僕の胸に突き刺した。

「さあ、苦しみを謳いなさい。命を失う感覚を味わい、そして一つしか知らない歌を謳うの」

「が……ああ……あ……」

ぐりぐりとねじ込むように刃を突き刺していく。それはやがて心臓にまで届き、メチャクチャに切り裂いていく。

意識が徐々に遠のいていく。心臓へ突き刺したのだ。このまま僕は死んでしまうのだろう。

「まだ、レクイエムは始まったばかり。本当の讚美歌はこれから始まるの」

レルフィムは血に染まった細剣を引き抜いた。そして、大きく振って血を払う。

「まだ、あなたは死なない。これが私のムーティエン、レミトネイシヨン・ドルラスの特殊能力。相手から力を奪ったり、逆に与えたりすることができるの」

傷が徐々に塞がっていく。胸の痛みは少しずつ引いていき、さつきまで薄れかけていた意識も呼び戻される。

「こうして、私はあなたを永遠に殺し続けることができる」

細剣が翻る。それは僕の胸の上を斜めに通り過ぎた。鮮血がほとば

しり、お腹の中身がだらしなく垂れ下がる。

「うふふ、人間って本当に面白いわ。こんな袋の集まりで生きていけるなんてね」

彼女は適当な臓器を串刺しにして眼前に掲げる。僕の記憶が正しければ、それは肝臓、脾臓、膵臓だったはずだ。

剣を振って臓器の串刺しを振り払うと、それを底の厚いブーツで踏み砕いた。辺り真っ赤な血液と、その他いくらかの体液が飛び散る。「ここまでメチャクチャにして、私のムーティエンはあなたをすぐに治してくれる」

彼女が剣を振るだけでえぐり出された内臓は再生し、腹の傷もすぐに治っていく。

「そろそろおしまいにしましうかね」

彼女が腕を振るうと僕の体を押さえつけていた闇の触手はするすると解ける。僕はそのまま地面に崩れ落ちた。

「はあ……はあ……これでやっと……終わり？」

僕の中に芽生えた淡い希望。だが、それすらも彼女は粉々に打ち砕く。

四つの魔法陣が現れ、僕の四肢を固定する。

「ケトカス」

彼女が呪文を唱えると、僕の周囲にいくつもの壁が現れる。それは徐々に組みあわさり、一つの箱を作り出す。

「人間世界では『リッサの鉄棺』と呼ぶそうね」

「え、え……？」

それはぎりぎり人間が収まる程度の箱。頭の方には何かを調節するネジがついている。

「これを少しずつ絞めていくの」

レルフイムはネジを操作する。それと同時に、箱が徐々にきしみ始める。

「え、な、ちょ、ちょっと待ってよー！」

僕は内側からバンバンと強く叩く。だが、それなどびくともしない

かのように箱の中身が狭まっていく。

「人間も残酷なことを考えるのね。こうやって少しずつネジを絞めていけば確実に中の人間は押し潰されてしまうわ。それも、何日も何日も。水も食事も与えず、長い時間をかけて棺桶の中身を狭めていく。生きた棺桶とはまさにこれのことね」

レルフイムはくるくるとネジをしめていく。どうやら彼女は数日かけるつもりはないようだ。そう、この場で決着をつけるつもりなのだろう。

「レルフイム！ こ、殺すなんて冗談だよね！？」

「あら、私が冗談なんか言うと思ってる？」

みしみしと軋むような音が響く。もう手を振り上げて蓋を叩く余裕もない。

「私は吸血鬼。人の血を吸い、そして人の命を刈り取る死神。こうして私があるの命を奪い去ることは決しておかしなことではないわ」

「なんで僕なんだよ！？ 別に他の人だって……」

「あなたのことが好きなのよ。殺して心を奪い取り、瓶に詰めて永遠に眺めていたいほどにね」

「どうして……？」

「あなたの心を少しかじったとき、私は今まで感じたこともないような幸福に包まれ、空虚な心が満たされた。今まで何百人の人の心を奪い、何千人の人の生き血をすすってきたけれども、私の心は満たされることはなかった。それが、あなたの一口で私は恍惚に陥ることができた。それを思い出すと、今すぐにもあなたの心を奪って貪り食いたい気分だわ」

レルフイムはゆっくりと棺桶を撫でる。

「だから……私のために、私に捧げるために死んでちょうだい」

僕は鉄の棺桶を内側から蹴り飛ばす。だが、その程度ではビクともしない。

「アリシ……」

そこまで僕は彼女の名前を呼んで、自ら彼女のことを否定したことを思い出す。

「あ……」

僕は彼女のことを突き放した。彼女の名を呼ぶ権利などあるわけがない。

心の中をあきらめが支配する。すると、走馬灯のように今までの記憶が思い出される。

小学校の頃、僕は母親がいないことを馬鹿にされていた。

母無し、拾い子と蔑まされ、僕はクラスメイトの半分以上の人間にいじめられていた。

トモミは頑張つて僕に降りかかる被害を振り払ってくれた。彼女のおかげで今ではそんなことはない。

だが、このときアリシアがいればどうなっていただろうか。

アリシアはああ見えても、強い正義感を秘めている。悪の集団に毅然として立ち向かい、全員倒して帰ってくるだろうか。

中学生のときだってそうだ。掃除をサボったやつ濡れ衣を着せられた僕は一人教室清掃をしていた。だが、部活の合間を縫うようにしてトモミは少しだけ助けてくれた。

だが、ここにアリシアがいたらどうなっていただろうか。濡れ衣を着せたヤツを暴きだし、そいつになんとしても掃除をさせるだろう。

そして高校生になった。夜、公園を歩いていてユジューの少女に襲われた。

そのとき現れたのがアリシアだった。……もし、このときアリシアが現れなければどうなっていたのだろうか。

「アリシ……ア……」

僕の心の中に浮かんできたのは彼女の姿だった。

天真爛漫の彼女。カードを滅ぼすためにこの世界に顕現した一人の少女。

彼女は今、何をしてるのだろうか。  
みしり、という音がして僕の右腕の骨が悲鳴を上げる。次はあばらの骨。

もう、僕に残された時間はわずかしかない。

けれども、今更あんな酷いことを言ってしまったアリシアに頼ろうというのか。いや、そんな都合のいい使い方なんかしてはいけない。彼女は来ない。僕は彼女を信じていなかった。

でも、彼女は僕が死んだときに泣いてくれるだろう。泣いて仇を取ってくれるのだろう。

「あれ……なんで僕はこんなにアリシアのことを……」

みしみし。左足の太ももの骨が悲鳴を上げている。

彼女を見捨てて初めてわかった。彼女を失って初めて理解した。

彼女の寝顔を見て、僕が感じた心のざわめきは決して男性特有の現象なんかじゃなかった。僕だから感じたのだ。

僕は上辺だけでは彼女を否定していながら……心の奥底では彼女を求めていた。

彼女の笑顔が甦る。彼女の仕草が……言葉が目の前に甦ってくる。

「アリシア、ごめん。でも、もう迷わない。僕は……僕は認める。アリシアのことを認めるよ」

僕は現実を引き戻される。

目の前では黒い少女が妖艶な笑みを浮かべながら僕のことを見つめていた。

「あなたの顔を支配していたのは諦めだった。でも、なぜ今更そんな毅然とした表情を浮かべられるの？」

「僕は……大事な人に酷いことをしてしまった。僕のことを彼女は許してくれるかな？」

「あはは、何を言っているの？心が壊れちゃったのかしら？」

「僕の心を今持っているのは僕じゃない。だから心が壊れるなんて

「ことはないよ」

「じゃあ何？ 頭のネジが飛んじやったのかしら？」

「はは、そうかもしれない。だってさっきまであんなに否定していたのに、今ではあっさり彼女の行動を認めてる。確かに自分勝手だったかもしれないけど、彼女がいなければ今の僕はいない。だから、逆に感謝するような気持ちにもなっているんだよ」

「感……謝？」

「君は知らないかもね。他者を必要とせず、皆を殺してきた君にはその感情が理解できないかもしれない」

絞められるネジの動きが止まる。

「私に今、何を言っても私はあなたを殺してしまうわよ？ それどころか、あなたは私をさらに怒らせたのかしら？」

「ふ、それならいい気味だね。君は怒るだけ怒って……僕を手に入れることも殺すこともできないんだから」

心が震える。強い想いに満たされていく。  
心の内側から光が溢れ出していく。

「やあああああああああああッ！」

今まで僕を閉じ込めていた鉄棺は一瞬で風に切り裂かれ、そして紺碧の少女が降臨する。

「ムーティエン、ゲンチャ・ゲルラス、顕現」

静かにそう、彼女は言った。

そして、目の前の敵を見据えて刃を構える。それはもはやツヴァイハンダーのように膨れ上がり、彼女の背をも超えるほどの長さとなっていた。

彼女は背中を見せたまま語る。

「助けに……来た」

「……うん」

ツヴァイハンダー級の大きさを誇る刃は更に輝きを増す。

「私はユウタロウがいなくなっただけで、ずっと考えていた。私にとってのユウタロウってなんだろうって」

「……答えは出たの？」

「……うん」

瞬間、彼女の姿が消える。

一瞬で距離を詰めたアリシアは七色の剣を横に大きく振る。突然の攻撃に、レルフィムはガードすることできずに空中へと飛び立つ。

「チツ！ いきなりかしら？」

「構えないあなたが悪い」

「あ、そう」

彼女は背中黒い羽を一本抜き取り、それを手に持って構える。それは瞬く間に黒い薔薇に包まれ、すぐに剣の形を成す。

「ただのテイオナに勝つのに、ムーティエンなんて必要ないわ」

彼女はレミトネイション・ドルラスを地面に突き立てると、黒翼の刃を構える。

「望むところ……」

アリシアは姿が一瞬にして消失すると同時に、レルフィムの姿も消滅する。次の瞬間、二人はぶつかり合っただけで烈風が吹きすさんだ。

「はぁッ！」

気合一閃、横殴りに大きく払われる。それを剣でガードするレルフィム。

「やああああああッ！」

続けざまに畳みかけるアリシア。その勢いに押され、レルフィムの額に汗が浮かぶ。

「く……！？ これが……ムーティエンを持ったテイオナの力！？」  
闇の光輪がレルフィムを包む。彼女の周りから闇の鞭が何本も現れ、アリシアへと襲いかかる。

「こんなもの……ッ！」

それを次から次へと切り払う。そのあまりの処理速度の速さにレルフイムに顔に驚きが浮かび上がる。

「は、早い……ッ!?」

大剣を思い切り叩きつけられる。それを受けるには羽の剣はあまりにも脆い。

レルフイムは大きく後ろへ飛ぶと、闇の力を解放する。

「ラブデ！」

闇の刃が空気を切り裂きながら飛翔する。

だが、それをアリシアは大剣で弾いてみせる。

「ネヴィ・デインブ！」

アリシアの足元から真っ黒い蔭が生えてくる。それは彼女の体を拘束し、動きを制限する。

「こんなもの！」

しかし、アリシアの体を風がまとう。一瞬で蔭は切り裂かれ、バラになって朽ちてゆく。

「なんで……なんで効かない!?!」

レルフイムは羽ばたきながら驚愕を顔に浮かべる。

「やあああああああ！」

アリシアは風を身に黒い空へと駆け上がる。

空中でレルフイムとぶつかり合い、激しい剣戟を繰り広げた。

「く……!! センラ！」

地面から何本もの黒い槍が突き出す。だが、その間を縫うようにアリシアは飛んだ。

「この私が……負ける……!?!」

レルフイムは一度地面へと降りると、地面に突き立てていた己のムーティエンを手にとった。

そして、僕の方へと飛んでくる。

「剣を収めなさい! でないとあなたのリトマスを斬るわよ!」

体中を強く締め付けられて未だに体を動かすことができない僕へと剣を向ける。だが、アリシアは強い表情を浮かべて剣を向ける。

「そんなことをしたら……お前を斬る」

「く……」

レルフィムの表情は歪んでいく。

「逃げ……いや、そんなことできるわけが……」

彼女の表情は屈辱に歪んでいる。その表情からは強い憎しみが伝わってきた。

「なら……最後の手段を使うまで……！」

彼女は剣を高く掲げると、それを自分に突き刺した。

「があああああああッ！」

「な……！」

レルフィムはうずくまって荒く呼吸する。みるみるうちに彼女の体を闇色のオーラが包み込む。

それをゆっくりと引き抜く。黒い滴がぼたりと落ち、そして傷口は塞がっていく。

「レミトネイション・ドルラスは吸授の剣。力を与え、そして奪う、云わば力の容れ物。今まで私はこの剣で何人ものユジューヤ人々を殺めてきた。その力は……ティオナー人と人間一人如きに負けるよ  
うなものではないわ！」

黒翼が大きく広げられる。それは天をも覆うかと思われるほどに力強く、大きい。

巨大な翼を一度はためかせる度に黒い旋風が吹きすさぶ。

「この力は……一体なんなの!？」

身の丈を超えるほどの翼。それを羽ばたかせてレルフィムは天上へと翔け上がる。

そして片手に黒い剣を持って不敵に笑う。

「さあ、始めま……」

その時、世界が震える。

「な……ん……」

レルフィムは突然胸を抱えて苦しそくに体を縮こませる。

「う……げほっげほっ！」

彼女が咳をする度に薔薇園が揺れる。

「力が……制御でき……ああッ！」

突然世界が消失する。気付くと、元の河原へと戻っていた。

「ぐ……この次は……ないと思いなさ……い」

レルフィムは翼を大きく動かすと、いつの間にか広がっていた月夜へと飛んでいく。

それをアリシアは追うこともせずに見ていた。

「アリ……シア……」

僕はそこで意識を失う。

緊張の糸が切れたためか、それとも疲労の限界か。

ともかく、僕の意識は暗い闇の底へと落ちていった。

## 第七話（後書き）

この話のときはコメントが付きませんでした。  
やっぱり面白くなかったんでしょうね・・・。  
レルフィムの能力がいまいち微妙なのは仕様です。

## 第八話（前書き）

展開が微妙です。

オマージユネタは減りましたが、またしばらくすると調子に乗って書きまくるようになります。

## 第八話

### 第八話

『君は自分の意見を決めるべきだ』

僕は心の中の“僕”に問い掛けられる。

僕の周りにたくさんの“僕”がいた。彼らは全部が全部“僕”。色々な思考回路の“僕”。

僕は皆に非難される。僕が意見を一つにまとめないから、こんなにも沢山の“僕”に責められる。

『君はどうしたいの？』

“僕”が僕に尋ねてくる。そう、それは彼女のことだ。

「僕は……」

『彼女のことを遠ざけたり、認めたり……君は自分の中でころころすぐに意見を変えて、こんなにも沢山の“僕”を生み出してしまった』

『こんなにたくさんいたら、どうすればいいか迷ってしまうよ！』

『収拾がつかないじゃないか！』

“僕”達はそう一斉に非難する。

僕が思った考えの数だけ“僕”が存在する。すぐに意見を変えることは“僕”を無駄に生み出してしまうことを意味する。それはそれだけ心を分裂させ、心の力を弱めてしまうことに繋がる。

「だって、彼女は……」

『だって？ 君は一度彼女のことを否定したはずだ。なのになんでもまた突然認めるなんて言い出したんだい？』

『過去と照らし合わせたって、そこに彼女はいない。だからもしいたらなんて考えたって意味がないよ』

「それは……そうだけど……。でも彼女は僕を助けてくれた。だから

「僕は今ここにいるんじゃないか！」

そう、もし彼女がいなかったら僕は最初のカードに出会った時点でH A Sを発症して人間としての一生を終えていたはずである。

「そうれがどうしたんだい？　彼女は人間を助ける使命を帯びていて、その使命に従って人間を助けただけで、『僕』を助けたわけじゃない」

「それは……」

「それは人間であれば誰でも同じだったんだ」

「僕である必要はないよ」

「僕じゃなくてコウが襲われていたら、今ごろ彼女はコウの家に居候してたかもね」

あはははは、と僕を嘲笑う声が響く。

“僕”達が言っていることは間違っていない。そう、彼女は別に僕である必要はなかったのだ。

人間であれば誰でもいい。住処と心さえ提供すれば誰だっていいのだ。

「それはそうだけど……！」

「だけど？　心を閉ざしてしまえば今すぐにも彼女は僕の家を出ていくんじゃないかな？　要領のいいアリシアだもの。すぐに代わりの相手を見つけると思っよ」

「だけど……だけどだけどだけど……！」

言葉が見つからなかった。

アリシアは別に誰だってよかった。それは僕である必要はないのだ。そんなことは少し考えれば誰にでもわかることだ。思い出せ。最初、彼女は人間である僕を頼ることを嫌がってカード退治に必須なムーティエンを使うことすらしなかったではないか。

「でも、あの時彼女は言ったじゃないか！　アリシアにとっての僕は何なのか……答えは出たって！」

「そんなの簡単でしょ？」

“僕”達は優しく、そして残酷にその“答”を言う。

『アリシアにとっての僕は……ただの武器だよ』

「ぶ……き……?」

『そう。モノと同じ扱い。どうせそんなふうにはか思っていない。だから彼女のことを認める必要なんてないんだよ』

「そんな……」

僕のことをただの武器としか思っていない。それはとてつもなくやるせない考えだった。

『決別するんだ。もう、馴れ合いなんか必要ない』

この一言は僕の心の奥深くに突き刺さった。そして、傷口を広げるかのようにぐりぐりとねじ込まれていく。

『ほつといてよ』

『どうせただの武器だ』

『友達としてなんか見ていない』

『人なんて彼女にとっては道具だ』

『道具、そう道具』

『僕はモノなんかじゃない』

『使い捨ての道具なんかじゃないんだ』

心の中をいくつもの言葉が埋め尽くしていく。

『さあ、目覚めよう』

“僕”達の意識が薄れていく。

そう、それは目覚め。現実世界への帰還。

心との対話は終わった。もう、これ以上考える必要なんかない。

僕は流されるままに意識を任せた。薄れつつある感覚を感じ、そして言葉の刺を受け続けながら……。

ゆっくりと目を開く。

見覚えのある天井。白い光。

そこは僕の部屋だった。

体を少し動かしてみる。まだ若干体の節々が痛むが、なんとか動か

せそうだった。

起き上がってみると、すぐ隣の椅子に誰かが座っていることに気づいた。

そこにいたのはアリシア。彼女には珍しく、目を閉じて眠っている。僕は彼女を起こさないように起き上がる。そして、黙って部屋を後にした。

台所に向かい、冷蔵庫を開いた。中に入っていたインスタントコーヒーを取り出し、牛乳と一緒にコップへと注ぎこむ。

「ん……」

口の中に苦味が広がる。それは少しだけ、甘味を残して薄れていく。ようやく頭がはつきりしてくる。この家まで誰が運んでくれたのだろうか。

「お、起きたのか？」

聞き覚えのある声。いつの間に入りこんだのか、リビングにはコウがいた。

「びっくりしたぜ？ 散歩してたらいきなりアリシアちゃんが泣きながら走ってきてな。話を聞いたら、お前が倒れたっていうじゃねえか。ここまで運んでくるのは結構骨だったぜ？」

彼の話によると、コウがこの家まで運んでくれたようだ。冷蔵庫にコーヒーと牛乳をしまつと、彼の隣に腰かける。

「アリシアちゃんは？」

「今寝てるよ」

「後で礼言っておけよ？ 付きつきりですつとお前の側にいたんだぜ？」

時計を見上げる。時刻は午後10時。かなりの時間が経過していた。「さて、俺は帰るかな。お前が起きたのを見届けたし、大丈夫そうだからな」

「ありがと、コウ」

「俺じゃねえ、アリシアちゃんに礼を言っとけ。じゃあ、また明日学校でな」

彼はそれだけ言い残すと、僕の家から出ていった。

こんなに遅い時間までいたのだ。心配していてくれたのだろう。

口ではぶっきらぼうな言い方だったが、そんな気遣いに心が温まる。

「ユウタロウ!? ユウタロウ! どこ行ったの!」

ふと、部屋の方からアリシアの声が聞こえてくる。起きたのだろう。

勢いよくドアが開き、アリシアが駆け込んでくる。

「ユウタロウ……よかった、無事だったのね……」

彼女は涙をこぼしながら僕に抱きついてくる。小さな腕で無理やり僕を抱きしめると、そのまま小さく震えながら声を漏らして泣いていた。

そんなアリシアに、彼女のことを否定する言葉をどうしてかけられるだろうか。“僕”達が言っていた言葉が少しずつ影を薄くしていく。

「もう起きないかと思った……。凄く……心配した」

「アリシア……」

でも、言わなければならぬ。そう、これはただモノに対する愛着のようなもの。壊れたらまた新しいモノを見つければいいだけ。壊れたら壊れたで一通り嘆いた後、すぐに僕のことを忘れて新しい相手を探すのだろう。

「出ていってくれ」

「……え?」

彼女はすっ頓狂な声を出して僕の顔を見上げる。

「今……なんて……?」

「だから、出ていってほしいんだ」

「な、なんで!?!」

彼女の顔が悲しそうに歪む。そんな表情で見つめられることが辛かった。

「邪魔……だからだよ」

「わ、私のことが嫌いな?!」

「そっだよ。そんなに何度も言いたくない。出ていってほしいんだ」

アリシアはゆっくり手を離すと、そのまま数歩後ろに下がった。

「なんで……わ、私、何かしちゃったかな!? あ、今日いっぱい荷物持たせちゃったね……。ごめん……」

「そんなことじゃない。もう、疲れたんだよ。君との生活にね……」  
「……そんな」

表情が絶望へと変わっていく。自分のモノに拒否の言葉を突き付けられたのだ。だが、所詮はモノ扱い。すぐに納得するような表情へと変わる。

「わかった……出ていく」

それだけ言うと、彼女は背中を向けた。そして、コウと同じように玄関から出ていく。

後には僕が一人だけ残された。僕はソファに身を沈めると、コップに半分残ったコーヒーを口に含む。

それは苦味と甘味、そしてさつきは感じなかったわずかな酸味を僕に感じさせた。それは後悔の念だろうか。

「これで……これでいいんだ……」

僕は呪文のように繰り返す。

心に従ったというのに、不思議と感じる不快感。これは一体なんなのだろうか。

そんなすっぱいコーヒーを飲みながら、僕はゆっくりと意識を閉ざしていく。僕はソファに体を預けたまま、眠ってしまった。

次の日、体の痛みはほとんどなかった。

久しぶりに一人で登校する。すぐ隣を冷たい風が吹き抜けていった。「いよう」

コウが十字路で現れる。最初は親愛の情を込めた表情を浮かべていたが、すぐに疑問へと表情が変わる。

「あれ、アリシアちゃんは?」

「今日は……いや、今日からいない。出ていった」

正確には追い出した、だ。こうとしか言えない自分に腹が立つ。

「はあ？ 昨日何があったんだよ？」

「もういいでしょ。僕はなんだか疲れてるんだ。もうほっといてよ」  
そう言つて僕は一人また歩き出す。彼はあっけに取られたような表情を浮かべてそこに立ちつくす。

「お、おい！？」

「ごめん。トモミ達には謝つといて。先に行く」

啞然とするコウを残して僕は歩みを進める。

「何が……何があったんだ？」

コウは一人呟いていた。だがコウなんかに構っていられるほど僕は精神的に余裕がなかった。

また一人になった。

再びすぐ横を冷たい風が吹き抜ける。

その風は、まるで一人で歩いてる僕を責めるように、骨身を凍えさせていった。

どこまでも青空が広がる。雲一つないそれはとても空虚で、どこまでいっても視界を遮るものはなかった。まるで、今の僕の心のよう  
に虚ろだ。

そう、僕の心は今氷のように冷え切っている。それはそう簡単には融かすことはできないのだろう。

友達だと思つて接してきたアリシア。だが、彼女の僕に対する意識はそれとは違つていた。

その裏切りに、僕の心は限界まで冷たくなつた。今はもう、誰かに裏切られることが怖い。だから、誰とも話したくない。

すぐに学校が見えてくる。昇降口から上がり、靴を上履きに履きかえる。

階段を上がり、教室へと向かう。当然のことながら、アリシアの姿はなかった。

僕は自分の席につくと、ぼんやりとしたまま何も書かれていない黒板を見つめる。

しばらくすると、コウがトモミ達と一緒に教室に入ってきた。トモミは僕に声をかけようとしたが、どう声をかければいいのかわからないようで、しばらく僕の席の前に立ちつくしていた。

「お、おはよう」

彼女は少し遠慮がちに言った。僕はそれに、うんとだけ答えた。

「あ、アリシアちゃん、いなくなっちゃったんだってね。何かあったの……？」

「別に……」

今はその話を聞きたくなかった。その様子を察したのか、彼女の方から話を逸らしてくれる。

「いい天気だね」

「うん……」

春だと思えないほど冷え切った空。まるで氷のように透き通り、どこまでも広がっている。

窓から冷たい風が入り込んでくる。それは僕達を隔てるようにトモミと僕の間を抜けて行った。

「先生、来ちゃうから戻るね」

そう短く言うと、彼女は席へと戻る。そんなトモミにリオナは何か話し掛けていたが、すぐに表情を曇らせると席に座った。

やがて担任の先生が教室に入ってくる。無味簡素な連絡事項を伝えると、アリシアがいけないことに気付いたのか、少し不思議そうな声をあげた。

「アリシア君はいないのか」

それはちよつとだけ嬉しそうな声だった。確かに勉強はできるが、かなり手のかかる相手だ。いなければそれだけ先生達も楽なのだろう。

持っていた帳簿にチェックをつけると、そのまま先生は教室を後にした。すぐに喧騒が教室を包み込む。だが、そんな喧騒から切り離されたように僕は一人席に座っていた。

昼休みになった。僕は購買でパンを買うと、一人で屋上へと向かった。

今日は春とは思えないほど風が冷たく、強い。他の生徒は誰一人いなかった。

ベンチに腰をかけると、サンドイッチを頬張る。ドレッシングの強い酸味と塩味が口の中いっぱい広がる。

「はあ……」

今日は確かに疲れない。だって、いつも騒ぎ回って僕を困らせる彼女がいないからだ。

だが、それと同時に少しだけ寂しさもあった。

「間違っていない。僕はこれでよかったんだ」

呪文のようにまた唱える。それで少しは不快感も収まった。

サンドイッチを食べ終わると、僕はベンチにあおむけになって倒れこんだ。

目の前に青空が広がっている。

強い風が吹き抜ける。心まで冷え込んだ僕にとっては、そんな風でも心地がよかった。

「ユウタロウ、いるね？」

そのとき、僕のすぐそばで声がかかる。僕は視線をドアの方へと向けた。

そこにはリオナが一人で立っていた。彼女は少し遠慮がちに視線を伏せながら、僕の方へと歩いてくる。

「アリシアとの間に何があったね」

彼女は戸惑うこともなく僕に尋ねた。それは強い口調。ごまかすこともできそうになかったので、僕は正直に言った。

「疲れたんだ。常識外れのアリシアを相手にしながら暮らしていくのがね……」

「そうなのね……」

彼女はそうとだけ小さく言うと、僕の隣に座った。

「いい気味なのね。アリシアも人に迷惑をかけるとどうなるかわかったのね」

リオナはカラカラと笑う。だが、それは上辺だけの笑い声。表情を見ればそれはわかる。暗く沈み込んだ顔。本気ではそう思っていないのだから。

「でも、ちよつと寂しいのね」

彼女はすぐに本音を漏らす。僕はそんな彼女の言葉を聞きながら黙っていた。

「いい競争相手だったね。でも、所詮私の敵じゃないね」

その声はとても得意気だった。だが、表情はやはり暗く沈んでいる。

「ウォーミングアップにはちょうどよかったね」

虚空に溶け込むように彼女の声は消えていく。

しばらくの間彼女は黙っていたが、やがて立ち上がると僕の前に立った。

「先に謝っておくね。ごめんなのね」

「……え？」

彼女の手の中で光が輝く。それはすぐに魔導書を形成する。

リオナの周囲に文字を浮かび上げる。

僕の寝ていたベンチが吹き飛ぶ。爆発と振動に煽られ一度僕の体は宙を舞った後、固い屋上へと叩きつけられる。

「いたた……」

「馬鹿ユウタロウ、なんでアリシアを追い出したね」

「い、言ったでしょ。疲れたからだって」

僕は起き上がって煤を払う。威力を抑えたのか、爆発の方はほとんど痛くなく、むしろ体を叩きつけられて痛い。

「自分勝手ね」

「自分勝手なのはどっちさ。いきなりやってきて、いきなり住みついて……」

「でも、ユウタロウは自分勝手ね。まるでユウタロウじゃないみたいなのね」

容赦なく次の攻撃が続く。爆風に吹き飛ばされた僕の体は壁に叩きつけられる。

「迷惑なんだよ。僕が日に日に疲れていったの、すぐにわかったでしょ?」

「でも、トモミは大丈夫だったね。私が迷惑をかけてもすぐに笑って許したね」

「僕はトモミじゃない」

再び爆風に包まれる。ごろごろと床を転がっていき、再び壁へと叩きつけられる。

「リオナ!」

そのとき、トモミが現れる。トモミはリオナに飛びつくと、魔導書を奪い取るうともがいた。

「何してるの!?!」

「トモミ、離すね。ユウタロウに一発お見舞いしないと落ち着かないね」

「もう十分でしょ!?! やめて!」

リオナの手から魔導書が引きはがされる。それはトモミの手の中に収まると、光へと還っていった。

「確かに私達は迷惑かもしれないね! でも、私達にも感情つてもはあるね! いきなり追い出されれば傷付くね!」

「じゃあ、僕は疲れなきゃいけないの? そんな君達に振り回されて、どれだけ僕達人間が苦労したと思ってるの?」

「それは……」

リオナの強い語気が失われていく。そう、どうせ自分のことしか考えていない。人間は自分達以下。彼女もその程度にしか考えていないのだ。だから、平気でこんなことが言える。

僕はふらふらと体を揺らしながら立ち上がる。

「もう付きまとわないでよ。あれだけ僕をふっ飛ばして気が済んだでしょ?」

「ユウタロウは……ユウタロウはそんな人間じゃなかったね! 何

があつたのね!？」

「僕はそんなに心の広い人間じゃない。生活領域をここまで侵されれば僕だって怒る」

それだけ言うと、僕は二人に背中を向ける。

「ユウタロウなんて大っ嫌いね!」

その言葉は僕の体を突き抜けていく。だが、すでに自分自身の言葉で穴だらけになった僕の心に、もう刺が刺さる余地はない。

僕は屋上を後にする。その後を追ってくる者は誰もいなかった。

僕は一人で帰宅の途についていた。

僕の周りにはもう誰もいない。これでもう、裏切られることもない。

「また一人なのね、くすくす」

そのとき、上の方から声がかかる。

僕は首を上に向けた。空には黒い羽をたたえたレルフィムがいた。

彼女はゆっくりと降りてくる。そして、僕の首に手を回した。

「今日こそあなたをいただいちゃおうかしら」

「……」

僕はそのまま彼女を置いて歩き続ける。もう、ユジューには関わらたくなかった。

彼女はあっけに取られたような表情を浮かべる。

「怖くないのかしら?」

「別に。でも、うつとおしい」

「あらあら、怖いわね」

彼女は妖艶な笑みを浮かべて僕の隣を歩く。

「今のあなたの心は穴だらけ。そんなあなたに苦痛を与えても、それを苦痛とすら感じることはなさそうね」

彼女は残念そうにそう言うと、僕の隣を歩いた。

「それじゃあ面白くないわ。そもそも、今のあなたの心は冷たくなって、もう何の味もしない。そんなあなたを食べても美味しくない

わ

「ふーん。それで君はどうするの？」

「そうね。あなたをそんな風にした相手をちよつと痛い目に合わせ  
てこようかしら。せつかくの私の新しい楽しみを台無しにした子に  
はちよつとお仕置が必要ね」

彼女は羽を飛ばしたかせると、空中へと浮かび上がる。

「またね。心が温かくなったら、また遊びましょう」

そう言い残して彼女はどこかへと飛んでいく。僕はまた独りぼつち  
になった。だが、今はその方が心地いい。

やがて僕は家に到着する。鍵を開けて中に入った。

靴を置いて、僕はため息をつく。ようやく一人だけの時間を得るこ  
とができた。もう、この時間を邪魔されることはない。

ふと、僕はアリシアが使っていた部屋がどうなっていたか気になっ  
た。僕は荷物を置いて彼女が使っていた客室へと向かう。

扉の前に立つて、思わず昨日の朝のことを思い出す。

彼女が起きてこなかった朝。彼女の寝ていたベッド。真つ暗な部屋。  
触れようと思えば触れることのできた肢体……。

「何考えてるんだ、僕は……。彼女は人間じゃないじゃないか。ど  
んなに可愛くたって……。そんな関係ない。それに、彼女は僕のこと  
とを同等に扱ってないじゃないか」

僕は臆することなくドアを開く。

「うわっ!？」

部屋の中に入っただけで、僕は何かにひっかかって倒れる。足元に感  
じる絡まった布のような何か。そして、倒れこんだ床の上の柔らか  
い感触。

「……?」

部屋はカーテンが閉まっていて暗い。僕は部屋の電気をつけた。

「うわ……な、なんだ?」

僕は客室を見て唾然とした。

散らばった何着ものドレス、ワンピース、ブラウス、スカートなど

の衣服……。脱ぎ散らされた、という表現が正しいのだろうか。

古今東西、実に様々な種類の服が散らばっている。いつの間に用意したのか、大きな姿見まであった。

「一体何がどうして……」

彼女はこんなにもたくさんさんの服を持っていたのだろうか。いや、今までいつものドレス以外見たことがない。となると、これは全て今日の朝取り寄せたものなのだろうか。

「ん……？」

ふと、僕はサイドテーブルに何か書き置きのようなものを見つけた。服の合間を縫って歩き、なんとかサイドテーブルにたどり着くと、その紙を拾い上げてみる。

「これは……？」

不思議な文字と、可愛らしいケーキやお菓子の絵がたくさん書き込まれていた。文字の方は読めそうにないが、絵の方はかなり写実的に描かれているためすぐにわかる。これはユジューの文字だろうか。中には僕とアリシアらしき人物が手を繋いで歩いている絵もあった。これは一体何なんだろうか。

「アリシアは……今日のことを楽しみにしていた？」

他に何枚も散らばっている紙を拾い上げる。そこにはたくさんさんの絵が描き込まれてあった。

美味しそうなお菓子を食べる僕とアリシア。景色を眺める僕とアリシア。座って話をする僕とアリシア。他にもリオナやトモミがいる絵もあった。だが、絵の中の僕は常にアリシアと一緒にだった。

この絵は一体何なのだろうか。僕のことをただの武器と想っていたなら、ここまでたくさんさんの絵が生まれる理由がわからない。アリシアの考えていることが……わからない。

『これは……』

心の中の“僕”達も動揺し始める。

こんなことは想定外のことだ。意味がわからない。

『やっぱり僕はただの武器じゃなかったんだ！』

“僕”の中の一人が声を上げる。それは徐々に波紋を広げていき、まるで池に一石を投じたかのようになっていた。

「僕は……僕は一人の友達として見られていたんだ！」

彼は大声を張り上げる。次々に武器派だった“僕”達に衝撃が走り、そして影を潜めていく。僕の心の穴を彼らは自らが土壌となることで埋まっていく。これは、アリシアに酷いことを言ってしまった贖罪のつもりだろうか。

気付くと、“僕”は一人になっていた。今まで反対派だった僕達は当にいない。それどころか、どういうわけか心の中がぼかぼかと温かい感じがする。

「この気持ちは……一体何？」

「これは……人の温もり、だよ」

心の中の僕が答える。それに僕は聞き返した。

「誰の……」

「決まってるじゃないか。アリシアの、だよ」

「アリシアの……？」

たくさんの絵に描き込まれた彼女の感情。それは絵から流れ込むように伝わってくる。

「今、やっとアリシアのことが僕にもわかったよ。彼女は……きっと寂しかったんだよ」

「寂しい……？」

「今まできつと一人だったんじゃないかな。だからあんなにも高潔で、それでいて幼くて……。人間の世界に来て、人の温かさを知って、初めて自分が孤独だったことに気付いたんじゃないかな？」

「それで……僕に構ってほしくてあんなことを……？」

“僕”はゆっくりと頷いた。

さっきまでの僕には理解できないだろう。あんなにもたくさんの心の闇が僕の心を支配していたのだから。でも、今それはこのたくさんの絵という光によって打ち消された。

「僕、とても酷いことを言ってしまった……」

『迎えにいったあげようよ。きつと、彼女も待っているはずだよ。』  
僕はその言葉に答えることもなく家を飛び出した。

## 第八話（後書き）

認めたり、疑ったり、忙しい主人公です。  
やっぱりコメントは付きませんでした。

## 第九話（前書き）

展開が怪しくなってきました。メインヒロインどんまいなお話です。

## 第九話

### 第九話

僕はひたすらに走り続ける。

今度こそ僕はもう迷わない。

アリシアを見つけ出し、そして謝らなければならない。

「はあ……はあ……」

なぜあんなにも心が凍てついていたのだろうか。こんなにも彼女を  
廃絶しようとしたのだろうか。

アリシアだけではない。コウヤリオナ、トモミにも酷いことを言っ  
てしまった。

自分自身なのに、まるで自分ではないかのような違和感。自分が自  
分で信じられなかった。

走っているうちに、やがてあの公園へとやってくる。ざっと見渡した  
感じ、彼女の姿はない。

トモミヤリオナ、コウが安否を聞きに来たということは、彼女はど  
こかにまた居候しているというわけではないはずだ。となると、彼  
女はどこか外にいるはずである。

公園の中をくまなく見る。草の茂み、遊具の中、そういった場所に  
も彼女の姿はなかった。

「アリシア……一体どこに……」

「失った、と気付いたときにはすでに時遅し。それが人間という生  
物の本質」

そのとき、どこからか独り言のようなものを呟く声が聞こえてくる。

辺りが暗くなる。

僕はこのとき、すぐにカードの仕業だとわかった。

徐々に世界は崩れていき、再構築される。

それは断崖。背後には広大な海が広がり、僕は崖の端に立たされて

いた。

そこにいた短い金髪の少年がカードなのか。彼は大きな岩の上に立ったまま、僕のことを見下ろす。

「君を探していた」

「僕は君なんか探していないんだけどな」

彼は薄い笑みを浮かべながら岩から飛び降りる。

「人間がユジューの力を借りずに僕のシグマを解くとはね」

「君の……シグマ？ まさかそれって……！」

「君の思っている通りさ。相手の心の中に疑似人格を植えつけ、心を冒すシグマ。それは相手を疑心暗鬼に陥らせ、心を孤立させる力さ」

彼は演舞でも踊るかのように軽い足取りで歩いてくる。

「でも、効果は十分にあつた。君は事実、今独り孤立していて、そして僕の前に独りで立っている」

「……ッ！」

今、僕のことを守ってくれる人はいない。アリシアやトモミ、リオナを拒絶し、そして自ら独りとなった。僕にはカードを倒すような力はない。

「なんで僕に目をつけたの？」

「簡単さ。君がリトマスだからだよ」

「直接テイオナを倒すのが怖いから、僕達弱い人間を狙うのか？」

彼は自嘲気味に笑う。

「ははは、僕は戦うのが嫌いだからね。そういう荒事は好きじゃないんだよ」

「それなら最初からカードなんかにならなければいいじゃないか」

「それとこれは話が別だよ。僕はカードになりたくてなったんじゃない。カードになるべくして生まれてきたんだ」

「カードに……なるべくして？」

「ふふふ、君に言ってもわからないだろうね」

彼は両手を大きく広げながら、断崖絶壁から広大な海を眺める。

「僕はカードの中でもかなり特殊だ。君の友達……レルフイムに引  
けをとらない、いや、それ以上だろうね」

「別に友達つてわけじゃない……」

彼女の名前が突然出てきたことに驚きつつも、僕は眉をひそめて否  
定する。

「ははは、でも彼女は君のことを親しい友達のように思っているみ  
たいだよ？」

「友達を普通、剣で突き刺したりしないよ……」

「それはどういうこと？」

気付くと、僕の胸の中心から鋼の刃が突き出していた。

「え……？」

引き抜かれて、僕はその場に崩れる。

「なーんてね、ちょっとしたスキンシップよ」

彼女は僕の体を抱き上げると、僕の唇に自身の唇を重ねてくる。

血に染まった傷口が撫でられるたびに激痛が走る。彼女はもう一度  
剣で傷口に触れた。

すると、胸の傷が徐々に塞がっていく。これは彼女の持つムーティ  
エンの力だろう。

「れ、レルフイム!？」

僕は急いで体を離すと、いつの間にか背後にいた彼女に向き直り、  
そして構える。

「あらあら、そんな構えないですよ」

彼女はくすくすと笑う。

「別に取りつて食おうつてつもりじゃないんだからあ」

「ってか、いきなりスキンシップで串刺しにしないでよ!」

「いやあねえ、ちょっとしたコミュニケーションじゃないの」

彼女はぱっちりとした瞳をウィンクさせる。

「でも、今回の私の用事は……そっち」

そう言つて、彼女は金髪の少年へと剣を向ける。

「よくも私の大事なモノに手を出してくれたわね。この代償は大き

いわよ？」

少年は面白おかしそうに笑う。

「僕に挑むというの？ 君は面白い人だね」

「最凶最悪と恐れられた私を前にしてその余裕……気に食わないわ」  
背中から羽を一本引き抜き、彼女は剣を構える。

「戦いは嫌いなんだけどな……。ロゼ・イエシクス、顕現」

彼の手に一本の大鎌が現れる。それは二枚の刃を携えた黒い鎌。彼の背の丈ほどの大きさを持つその鎌はレルフイム以上の濃厚な闇の気配を放つ。その恐ろしさに、僕は思わず一步身を引いた。

「少しはできるようね」

「少し、なんてもので済むかな？」

彼は大きく鎌を掲げると離れた場所から振り下した。

僕は思わずその瞬間目を見開いた。

何もなかったはずの空中からたくさんの刃が躍り出る。それは十枚とかそんな数ではない。ゆうに百を凌駕するような数に違いない。  
「ッ！？」

レルフイムはガードすることよりも回避することを選んだ。空へと飛び上がる。その瞬間、彼女がいた場所へと刃の嵐が襲いかかる。砂埃が舞い上がり、土煙がもうもうと上がる。それはつまり、あの刃が幻やまやかしの類ではなく、実体をもった攻撃だということを意味する。

「ムーティエン……あなたはティオナ？」

「僕はカードとして生まれるべく生まれし者、ノエル。ティオナとはむしろ敵対する関係にあるかな」

「ふうん……ともかく、私の敵であることはわかったわ。なら、選択肢は一つしかないわね」

彼女が羽ばたく度に何枚もの羽が抜け落ちる。それらは次々に剣へと姿を変え、彼女の周りにまといつくように宙を舞う。

「数には数……ってことかな？」

「あなたの刃、私の刃。数が多いのはどっちかしら？」

レルフィムは一際大きく羽ばたいた。その瞬間、剣の嵐が巻き起る。

宙を舞う数百本の剣は一斉にノエルの元へと飛翔し、彼の小さな体へと襲いかかる。

「無駄、だよ？」

再び彼は刃を振るった。その瞬間、またしても刃が雪崩のように震える。

剣と刃がぶつかり合う。それは激しい剣戟を繰り広げた。

「ぐ……！」

だが、明らかに押されているのはレルフィムの方だった。鎌は無限に現れるのに対し、剣の数は有限だ。

「さすがにムーティエン相手は分が悪いわね……。レミトネイション・ドルラス、顕現」

彼女は一度剣を飛ばすのを止めると、もう一本別の剣を取り出した。彼女がムーティエンだといっていた、斬っても回復する剣だろう。

「あなたには特別にこの剣の力を見せてあげるわ」

彼女は剣を構えると、じっくり相手のことを見据えた。

「どうしたの？ 力を見せてくれるんじゃないのかい？」

「かかっていらっしやいな。心配しなくても、見せてあげましょう」

「ふーん、面白いね」

そう少年は言う、何のためらいもなく鎌を振るった。

再び何十、何百もの刃が彼女へと襲いかかる。だが、レルフィムは額に汗を浮かべたまま、それを見据えて剣を構える。

「レルフィム！」

「大丈夫よ。あなたそこで見ていなさい」

刃が届くか届かないか、というそのときになってようやくレルフィムは剣を振るった。

彼女が振るった瞬間、風がざわめく。

空気の流れは無数の刃となり、幻想の刃と甲高い音を立ててぶつかり合う。

「ほっ……」

少年は面白いものでも見るかのような表情を浮かべてその剣舞を見守る。

レルフィムの表情にはいつもの余裕がない。これが彼女の本気、というやつなのだろうか。

「まだこれで終わりじゃないわ」

再び羽が抜け落ちると、無数の刃を作り出す。それは風の刃と合わさって、幻想をも超える数と密度で飛翔する。

「数も威力も、そう簡単には負けないわ」

「ちよつと厳しいね」

彼はそう言つと、鎌を振るうのを止めた。

途端に無数の刃が彼へと襲いかかる。

「ナヴィシイ」

少年がぽつりと呟く。

その瞬間、光の環が幾重にも浮かび上がった。

それは莫大な量の剣と風の刃を受け止め、なお震えることもなくそこに存在する。

「な……！」

その攻撃は彼女にとって最高ともいえる攻撃手段だったはずだ。それなのにもかかわらず、彼はそれをたった一つのシグマだけで止めてしまった。いや、あれはまだ発動してすらいない。彼の周りを回る力の循環が刃の飛来を寄せ付けることを許さないのだ。

「ど、どれほどの力が……」

あのレルフィムの表情にさえ驚愕が浮かびあがる。彼は微笑を浮かべたままその力を、片手でタクトを振るかのように操ってみせる。

レルフィムはキツと表情を引きつらせると、ムーティエンを持って飛び出した。

「レルフィム!？」

「はあっ!」

鈍い音。光の環へと刃を突き立てるレルフィム。だが、それは依然

として動きを止めることなく彼の周りを回り続ける。

「刃よ！ 力を喰らえ！」

そう彼女が叫んだ途端、刃が激しく震え始める。

彼女は言っていたではないか。その剣は相手から力を奪うことができる、と。

レルフィムの持つ剣は、光の環を貪るように侵食し始める。

「おっと、これはマズイな」

彼の周りで回っていた光の環が動きを止める。そして薄れて消えていく。

少年は大きく飛んで下がると、再び巨岩の上に立つ。

「ははは、君とは少し相性が悪いようだ」

「あら、私と相性がいいのは彼だけよ？」

さりげなくレルフィムはとんでもないことを口にする。少年は口元を笑みで歪めると、鎌を収めた。

「今日は様子を見にただけ。君とやりあつつもりはこれっぽっちもないんだよね。だから今日はもう退散するよ」

途端に背景が歪む。気付くと、そこは元の公園に戻っていた。

「待ちなさい。私がそう簡単に逃がすと思つて？」

再び酔うような感覚に襲われ、景色が変化する。それはいつもの黒い薔薇園。手入れする者のいなくなった、荒れ果てた庭園。彼女はその中心に立つてくすりと笑う。

「おお、怖い怖い。僕は怖い人は苦手なんだ」

「お姉さんが優しく残酷に折檻してあげ……う……」

だが、その途端背景がにじむ。気付くとレルフィムは肩で息をしていて、立っているのも限界なようだった。

「はあ……はあ……く……」

「お姉さんも限界みたいだね」

再び背景が歪み、薔薇園が消えていく。舞台はまたしても無人の公園の一角へと戻った。

「僕ももう疲れたから帰るよ。じゃあね、お姉さん」

「ま、待ち……う……」

レルフィムの体が傾く。僕は慌てて彼女に駆け寄った。

「レルフィム!？」

「はぁ……はぁ……」

彼女の体は大きな羽を携えている割に軽かった。薔薇の香りが鼻孔をくすぐる。

「大丈夫!？」

「はぁ……はぁ……ユウタ……口……」

そのまま彼女は目を閉じる。途端にレルフィムの体から力が抜ける。

「うわっと……」

握っていた剣は手からこぼれ落ち、光となって消えていく。

「ちよつと、大丈夫!？」

彼女の息は荒い。相当無茶をしたのだろう。

「ど、どうしよう……」

目の前の美少女は僕の命を狙う敵だ。だが、今はともかく守ってくれた。そんな彼女をここに放っておくのはいくらなんでも気が引けた。

「し、仕方ないなあ……」

僕は彼女の体を背中に背負い上げる。人形のように力の抜けた体は思った以上に軽く、柔らかかった。

「そついえばあいつ……ノエルは……?」

僕は視線を彼が立っていたジャングルジムの方へと向ける。すでにそこには彼の姿はなかった。

「よ、よかった……」

彼がすでに去った後であることに心から安堵する僕。もし、今彼の攻撃を受けていれば僕も彼女も生きてこの場を脱することはできないだろう。

「よいしょつと……」

レルフィムの体を背負い直す。自宅までほんの数分。思えば、アリアを探そうと思って家を飛び出してからまだほんの少しの距離し

か走っていなかった。

僕は彼女を背負ったままゆっくりと家へと向かった。

ドアを開き、家の中へと入る。そしてまっすぐにリビングへと向かうと、ソファに彼女の体を横たえた。

「ん……」

彼女は小さな呻き声を上げる。そのあまりの色っぱさに少しドキドキした。

アリシアも相当な美少女だったが、今こうしてまじまじと見つめると、レルフイムもかなりの美少女である。すらりとした肢体に、やや豊満なバスト。下手をするとアリシアよりも可愛いかもしれぬ。「でも、かなりSだよな……」

僕を痛めつけて喜ぶあたり、彼女の性格の残虐性が伺える。いくら可愛くてもカードはカード。恐ろしい存在であることには変わらない。

「なのになんで介抱してるんだらう……」

僕は一旦頭を冷やすために冷蔵庫からコーヒーと牛乳を取り出した。そして、コップに注ぎ込み、冷たいまま一気に傾ける。

「……ふう」

いくらか気分は落ち着いていた。冷蔵庫にコーヒーと牛乳を戻すと、再び彼女の前に座り込んだ。

「何やってるんだ、僕。アリシアを探しに行かないといけないじゃないか」

だが、レルフイムを置いて家を出るというのも不安だ。下手をする、戻ってきたときにはこの辺り一帯が焦土となっていてもおかしくない。

僕は仕方なく、向かいのソファに体を沈める。

すると一気に疲れが噴き出してくるのを感じた。ユジューと相対すると、ティオナであろうとカードであろうと非常に疲れる。戦いとなれば特にそうだ。

僕は少しだけ目を瞑る。そう、少しだけのつもりだった。だが、意識は徐々に沈んでいき、やがて僕の意識は深い眠りへと囚われていく。

「そう……少し……だけ……」

そう呟いた自分の声が最後に聞こえたような気がした。

「……はっ！」

僕は飛び起きた。ほんの少しのつもりがすっかり寝入ってしまったようだった。

時計を見ると既に時刻は夜の10時。すっかり夜になってしまった。レルフイムは!？」

僕は慌てて彼女が眠っていたソファへと視線を向ける。そこには彼女の姿はなかった。

「……黙って行っちゃったのは気に食わないけど、何かされるよりマシだったかな……」

「誰が行っちゃったのかしら？」

そのとき、僕の背後から妖艶な声が聞こえてくる。

「うわっ!？ れ、レルフイム!？」

「ふふふ、気分はよくて？」

彼女はステップを踏みながら台所へと向かっていく。そして手に何かを持って戻ってくる。

「あなたが眠っている間に作ってみたの」

彼女の手には何かキノコ料理が盛られた皿があった。それは美味しそう匂いを立てながら、湯気を揺らしている。

「うわ……凄い……。これ、レルフイムが作ったの？」

真っ白い身のキノコ。それを薄くスライスしたものと、何かの肉と一緒に炒めたものだ。キラキラと輝くそれは、シンプルだが実に美味しそう一品であった。

「はい、どうぞ」

彼女は箸を差し出し出してくる。折角作ってくれたのだ。食べない、というのはいくらなんでも失礼だろう。

「う、うん。ありがとう」

僕は彼女から箸を受け取って、さっそく肉のかけらを摘まみ上げて口に運ぶ。

「なんだか弾力があるけど、この歯ごたえがいい感じだね」

「そうでしょ？ 私、こう見えても結構料理とかできるのよ？」

次にキノコの方へと箸を進める。柔らかな食感と、塩コショウというシンプルな味付けが実によく合う。

「これも美味しいよ」

「喜んでもらえたようでよかったわ」

彼女はにこにここと笑う。こんな風に笑う彼女を見ると、なんだか彼女の恐ろしさが嘘のように思えてきた。

「これ、何の材料を使ってるの？」

「うふふ、よくぞ聞いてくれました」

彼女は嬉しそうにぴんと人差し指を立ててウインクする。そんな可愛らしい仕草に思わず動悸が少し早くなる。

「天然マムシのバラ肉と、ドクツルタケのスライスを合わせて、有機水銀で炒めたの！ 味付けはちよつと刺激の強い硫化水素！ 舌もがとろける素敵な美味なはずよ」

思わず僕は嘔き出した。

「ちよつと待って！？ それって毒ばかりだよ！？ ってか、ドクツルタケって名前からして毒キノコでしょ！？ さっきから舌がぴりぴり痛むのは硫化水素のせい！？ ってかツッコミどころ多すぎるから！」

「だってユウタロウが苦しむ姿が見たいんだもの……（はあと）」

彼女は恍惚とした表情を浮かべる。うつとりとしたその表情はまるで情事でも眺めているかのように蕩けている。

「う……お腹が……」

「ドクツルタケは腹痛や嘔吐、激しい下痢といったコレラによく似



僕はあまり眠れない夜を過ごした。

というわのも、僕がほんの少しでも隙を見せるとすぐに拘束して拷問にかけようとするからだ。

レルフイムは元気なもので、寝なくともまったく疲れを見せない。

ユジューだからか、それとも昨日ぐっすり寝たからか。昨日僕も睡眠を取はしたが、その程度の貯金ではちよつと敵しそつだった。

時計を見れば午前五時。すでに窓からは朝日が差し込んできている。僕は眠ることを諦めると、ベッドからもさもさと這い出た。

「起きるの？」

レルフイムは勉強机に備え付けられた椅子に座っていた。長時間の勉強にも耐えられるように、柔らかいクッション付きなので、座り心地は抜群だ。

「君がいるとなかなか寝られないからね」

僕は彼女に部屋から出ていくように促す。いくらなんでも女の子の前で着替えるのは気が引ける。

彼女は僕が何をするつもりかわかったようで、残念そうな表情を浮かべて部屋から出ていく。

僕はパジャマを脱ぎ捨てると、制服のワイシャツを羽織る。

部屋に置かれた小さな鏡に僕の姿が映る。目の下には小さなクマができていた。寝不足のせいだろう。

「はあ……なんだか色々振り回されてばかりだなあ……」

ズボンを履き変え、ブレザーとカバンを型に背負つと、僕は部屋を後にする。

「あれ……？」

部屋の前にレルフイムの姿はなかった。先にリビングに行ったのだろうか。

「レルフイム？」

リビングに顔を出してみるが、そこには彼女の姿はなかった。また怪しげな料理でも作ってないかと思って台所も見てみるが、やはり

彼女の姿はなかった。

どこに行っただのだろうか。彼女の性格ならば家の中を勝手に弄るようなこともしそうだ。下手をすると、部屋が一つ塵と化していてもおかしくない。

僕はリビングを後にすると、家の中の色々な部屋を見て回る。

両親の部屋、使われていないもう一つの客間、和室……。

僕の家はよく大きいと言われるが、生活している身からすればそう広くも感じない。隠れることができそうな場所はほとんどなかった。最後にアリシアが使っていた客間の扉の前に立つ。気付くと、その扉はきちんと閉まっておらず、少しだけ開いている。中からは楽しそうな鼻歌。この中にいるのだろうか。

「レルフイム、いるの?」

彼女は客間に置かれた大きな姿見の前でくるくると回っていた。

「ユウタロウ、見て見てー」

僕は思わず噴き出した。

僕の部屋を後にしたレルフイムは、いつの間に手に入れたのか学校指定の制服に着替えていた。

背中の羽はどういう理屈か知らないが、しっかりと収められている。赤いリボンが胸の中で輝き、指定のブレザーの腕には校章が光る。ふわふわとしたミニスカートは彼女がぐるりと舞う度にひらひらと空を泳いで、大変けしからない。

「それって、もしかしてアリシアの?」

「ここ、あの子の部屋だったの?」

逆に問い掛けられてしまう。彼女はそう言うということとは、つまりそういう意味なのだろう。

アリシアの私物に手を出したことにちょっとむっとしたが今、持ち主はこの場にいない。

「学校行ってみようかなあ?」

「え!?! だって、転入の手続きとかしてないんでしょ!?!」

「大丈夫よお。一人くらい紛れていたってわかりやしないわよ」

さすがに授業などは出られないだろうが、確かに彼女の言う通りである。一人くらい生徒が増えたって、別におかしいことなどないだろう。

「でも……」

「いいじゃない。さ、朝ご飯食べて行きましょう」

彼女に背中を押されてアリシアの部屋を後にする。勝手にアリシアの品を使わせてしまって、なんだか申し訳ないような気分になっていた。

いつもより少し早く家を出る。できることならば、コウ達……特にトモミヤリオナに会わせるのはマズい。僕が知っている限り、三人は一度……もしかすると何回も戦ったことがあるかもしれない。もし三人が出会えばどうなることか。あまり想像したくない。

いつもの十字路で友達に出会うことなく、僕達は学校に到着する。

「へえ……これが学校……」

レルフイムは感心したかのように大きな校舎を見上げる。

そして一歩、校庭の土をしっかりと踏みしめるように踏み出す。

「これがこの世界の学校……」

彼女はうきうきしてきたのか、自然と足取りも軽くなっていた。

「……はあ」

そんな浮かれている彼女をよそに、僕は大きなため息をつく。

「さ、行きましょ」

レルフイムは僕の手を取ると校舎へと駆け出していった。

「上履きは……アリシアのを借りるかな」

アリシアの靴箱から上履きを拝借する。ここまでくると、申し訳ないという気持ちは徐々に薄れつつあった。

レルフイムは珍しいものでも見るかのように壁に張り出された掲示物や、教室へと向かう生徒を眺める。

周囲では数人の男子生徒が彼女を囲んで何か囁きあっている。真っ

黒で長い黒髪に黒真珠のように深い黒の瞳……明らかに美人の部類の属するレル फिल्मだ。それも当然かもしれない。

「私、ちょっと探検してくる」

そう言つてレル फिल्मはどこかへと行つてしまふ。男子生徒達はつまらなそうに文句を口にすると散つていく。

「あ、ユウタロウ君」

気付くとトモミ達が昇降口に立っていた。昨日のこともあつて、少し顔を合わせ辛い。

「今日は早かつたんだ」

「ちよつと用事があつてね」

僕が言つべき言葉はそんなことではないだろう。昨日の非礼を詫びる言葉……謝罪の言葉が必要だ。

「じゃあ私達、先に教室に行つてるね」

だが、ついに口に出すこともできずに三人は行つてしまふ。

僕は昇降口に一人立ちつくしたまま、うつむいてメノリウムの床を見つめていた。

結局、謝罪の言葉を口にできないまま昼休みを迎えた。

購買でパンを二つ購入し、屋上へと向かう。なんとなく、トモミ達とは顔を合わせられない。

屋上に出ると、心地よい風が吹き抜ける。

「あ……」

ベンチにはすでに先客がいた。探検に行くと言つて姿を消したレル फिल्मだ。

「あらユウタロウ、いらつしゃい」

彼女は少し横にずれてベンチを空ける。僕は彼女の隣に座つた。

「人間を眺めているのは面白いわね。食べるだけじゃなくて、観察するのも結構いいものだよ」

彼女はそう言つと、流れ行く雲を見上げる。

僕はアリシアが好きだったあんパンを口にしながら、レル फिल्मと同じように空を見上げる。

「君にとっちゃ珍しいかもしれないけど、僕達にとっては当たり前の世界だよ。だから、その“当たり前”が壊れるのを恐れるんだよ」  
「……」

彼女は黙りこむ。

レル फिल्मに自覚はあるのだろうか。人間を襲い、心を奪うということは、その人間の世界を壊す行為だということを。それだけではない。その人に関わるすべての人に大なり小なり影響を与える。一緒に世界が壊れてしまう人だっている。

僕は彼女にそれを理解してもらいたかった。

雲が形を変えながら流れていく。それは時として馬のようになり、キリンのようになり、リンゴのようにもなる。時には僕達の姿を描くこともあるし、彼女達の姿を描くこともある。

ユージューカードに人間を完璧に理解してほしいなんて思わない。せめて、人間にも人間の世界があることを知ってほしかった。

「……ねえユウタロウ？」

「ん？」

彼女は突然、おずおずとした様子で尋ねてきた。

「もし、もしもの話よ？ 私があなたの大切な人の心を奪ってしまったら……あなたはどうする？」

「それは……やりきれないよ」

もし、そんなことが起きれば僕はどうなってしまっただろうか。コウ、トモミ……どちらが欠けても僕の日常は成り立たない。

「じゃあ、もし私があなたの……」

「レル फिल्मッ！」

そのとき、鋭い声が響く。

僕はぱつと振り返った。屋上の扉のところには……トモミとリオナがいた。

「ユウタロウに何してるね？」

「あら……いつだかの弱い子ね」

今までのしおらしさはどこへ行ってしまったのか。彼女はいつもの余裕の笑顔を浮かべる。

「ユウタロウは私がもらうの」

「それにユウタロウも……そんなヤツと何してるね？」

「た、ただ話をしてるだけだよ！今の彼女は何も悪いことなんか……」

僕は何を言っているのだろうか。いつの間にかレルフィムをかばうようなことを口に出していた。

「レルフィム……お前がユウタロウをおかしくしたね？」

「もし、そうだったら？」

「れ、レルフィム!？」

リオナは強く歯ぎしりをする。

「ムーティエン、フィニティン・モグリレイ、顕現！」

「リオナ！」

彼女の手には一冊の魔導書があった。

「今すぐ目の前から消え失せるね！ でないと容赦しないね」

「望むところ……かかってらっしゃい」

レルフィムの手にも一振りの剣が現れる。

「レルフィム！ ちょっと二人とも場所を考えてよ！」

「それならこれでいいでしょう？」

レルフィムを中心に真っ黒い世界が広がっていく。

彼女の黒薔薇のエルフィドに捕われた僕達は現実世界から切り離される。

「さあ、いらっしゃい」

「負けないねっ！」

リオナの手の本が強く輝く。

僕はトモミの方を見た。気付くと、彼女は僕の方を不安そうな表情を浮かべて見つめていた。

「トモミ……」

視線が合う。だが、トモミはすぐに視線をずらした。

「……ッ！」

僕は少し悲しくなった。今や、彼女達と築いてきた関係が崩れつつあった。

リオナとレルフィムの攻撃が激しくぶつかり合う。僕はすぐにわかった。リオナではレルフィムには勝てない。レルフィムの昨日の戦いを見て……レルフィムの本気というものを思い知らされた。

今の彼女は本気の半分も出していないのだろう。レルフィムの表情には微笑すら浮かび、そしてリオナの表情には苦悩が浮かぶ。

こんな戦いは無益だ。二人が戦う理由なんてないはずだ。

「二人とも……やめてよ……」

だが、僕の声は二人に届かない。

目の前で繰り広げられる戦いに、僕は思い切り怯えてしまっている。今二人の間に飛び込んでいけば……確実に死ぬ。

炎と刃、大地と風、光と闇がぶつかり合う。その度に激しい音を響かせながら輝かしいまでの光を放つ。

「センラ」

闇が一気に膨れ上がり、一本の槍となって突き出される。それをリオナは光の壁で防御すると、今度は刃の舞踊で反撃に出る。だが、それを幾本もの闇の鞭で絡めとる。

「まだ本気を出してないのかしら？」

「ぐ……絶対に……絶対に負けないね！」

一度距離を取ると、リオナは本を開いて手を突き出す。

「雷の諧謔曲、デンルス・ゾスケル！」

光が矢となって放たれる。それは雷のスケルツォ。急速かつ軽快な勢いで飛翔する弾幕は何筋もの軌跡を描いて飛び回る。

「リベラア」

だが、光輝なる雷の魔弾も闇の壁によって阻まれる。徐々に輝きを失いながら急激に失速していく。

「あなたでは私に勝てない。無駄なことはよしたら？」

レルフィムは攻撃の手を緩めて、そう問い掛ける。対するリオナは屈辱のあまり、顔を歪めて歯を食い縛る。

「諦めるわけにはいかないね……。だって……ユウタロウは……ユウタロウは……」

言葉は弾幕となって織りなされる。何百もの光の弾幕が視界を覆いつくすほどの圧倒的な量と圧力をもってレルフィムへと襲いかかる。「リベラア」

だが、またしてもレルフィムを囲むようにして展開される障壁に阻まれる。あれほどまでの絶対的量をもらった攻撃は一発も彼女へと届かない。

「あなたは私の壁すら打ち破れない。私の盾を貫通する一撃すら放てない。よってあなたは私に勝てない。絶対に……ね」

「う……ああ……」

「リオナ！」

そのとき、今まで黙っていたトモミが大きな声でリオナの名を呼ぶ。

「私は……私はもういいから……」

「いいわけないね！　だって……ユウタロウはトモミの……」

リオナの手の中から魔導書が消失する。トモミが消したのだろう。

「ようやく観念したのかしら？」

「う……うう……悔しいね……」

レルフィムはブーツで黒薔薇を踏みつけながら、リオナの元へと歩み寄る。

「レルフィム！」

僕はここでようやく声が出せるようになった。戦いは終わった。もう恐れる必要はない。

「ダメだ……。これ以上は……もう……」

「……ふん」

薔薇庭園が消失する。今までの戦いなどなかったかのように、元の校舎の屋上へと戻る。

「ユウタロウのおかげで命拾いしたわね」

レルフィムは二人に背中を向けると、僕の方へと歩いてくる。

「ねえユウタロウ。私のリトマスになる気はない？」

突然、レルフィムが問い掛けてくる。

「もし、あなたにその気があるのなら……私は人を襲うのをやめてもいいわ」

「……え？」

今、彼女はなんと言ったのだろうか。

「その代わりに、ユウタロウを好きなようにする。どう、魅力的な提案じゃない？」

彼女の言う好きなようにする、というのはどういう意味だろうか。

「もちろん、あの子……アリスアとの契約は絶つてもらおう。一人の人間が提供できる心はムーティエン一つ分。だから、あの子と契約したままでは意味がない。私の言っていることはわかるわよね？」

「でも、ムーティエンを作るためには心の他に……」

「言ったでしょう？ 私はティオナを殺してムーティエンを奪った。そこに一人の人間から奪った心をはめ込んである。あなたと契約すれば、その心を持ち主に返してもいい」

「持ち主って……」

「知っているかしら？ 東條ユイという少女の名前を」

僕はその名前に聞き覚えがあった。クラスメイトの一人、東條ユイ。直接の面識はあまりないが、何度か話をしたことがある。とても物静かな女の子だった。

僕は静かに頷く。

「彼女に心を返す。その代わりに、あなたは私に心を差し出す。あの子との契約も絶つ。いいかしら？」

僕一人が心を差し出す代わりに、一人の人間が救われるのなら……僕は心を差し出してもいい。

「わかった」

「ユウタロウ……」

トモミとリオナは悲しそうな表情で僕のことを見つめる。

「トモミ、リオナ。僕は……一人でも多くの人が助かるなら、その方法を取りたい。心配しないで。レルフィムは……確かにちよつと怖いけど、もう前みたいない悪いカードじゃない」

「そんなわけないね……。そいつは絶対にいつかユウタロウを裏切るね。そんな、簡単にうまくいくはずないね」

「でも、少しの間だけでも人を襲うのをやめてくれるなら……僕が心を差し出す価値はある」

僕はリオナの元へと歩いていく。

「僕は皆が嫌いになったわけじゃない。昨日のはちよつとした気まぐれだ。もう、大丈夫だから……」

「ユウタロウ……信じていいのね？」

リオナは悲しそうに表情を浮かべながら僕に尋ねる。僕は……頷いた。

「こんな……カードがテイオナになるなんて聞いたことないのね。どうせ……すぐにダメになるね」

リオナがそう呟いたのが聞こえた。確かにリオナはレルフィムのことを信じていない。でも……僕の場合は信じてくれている。それだけで嬉しかった。

「レルフィム。どうすればいい？」

「私と契約すれば、自動的に以前に交わした契約は上書きされて失効する。あなたは私と契約するだけでいいのよ」

レルフィムが手を差し出してくる。僕はその手を取った。

「あなたの心が私の中で形になるのを感じる」

レルフィムはもう片方の手を中空に差し出した。そして、彼女は宣言する。

「ムーティエン……リアヴァチオン・ドルラス、顕現」

光が徐々に集まっていき、彼女の手の中に光の剣が精製される。

七色に輝く虹色の剣。アリシアが持っていた剣にそっくりだ。

「これが……ユウタロウの心……」

レルフィムは満足そうな表情を浮かべて剣を振る。

「東條さんは？」

「心を返したわよ。しばらくすれば目を覚ますわ」

「そっか……よかった……」

クラスメイトが一人帰ってくる。それだけで僕は嬉しかった。

だが、ちよつとアリシアに悪い気がした。彼女に相談することもなく、勝手に契約を解除してしまった。彼女は怒っていないだろうか。

「これでユウタロウは私のもの……うふふ、ふふふふ」  
レルフィムは嬉しそうに笑う。

昼休みの終わりを告げる予鈴が校舎内に鳴り響いていた。

## 第九話（後書き）

mixiでは二つに分けていたので、間違えて投稿してしまった。

個人的にレルフィルムは僕のお気に入りなので、このままレルフィルムルート突入して、そのまま話を終わらせようか非常に迷った時期です。

読者の方からもレルフィルム可愛いって声があったので、もういいやつて思ってた時期でもあります。

## 第十話（前書き）

書き忘れてましたが、九話またパロディネタ出てましたね。

## 第十話

### 第十話

放課後、僕は東條さんが入院している病院を訪れていた。

彼女が学校を休んでから半年が経過しようとしていた。

面会バッチを胸に付けると、エレベーターに乗って入院病棟へと向かう。

H A S にかかった患者は最初 I C U に入っていたが、世界規模で一気に増加したため、一般病棟へ入れさせることが多かった。I C U のベッドが足りなくなったのだ。

彼女の名前が書かれたプレートを探す。一度だけ見舞いに来たことがあったが、場所をよくは覚えていなかった。

「ここか……」

東條ユイ。相部屋なのか、プレートには他に何人かの名前が書かれてあった。

僕はゆつくりと引き戸を開いた。中には四つのベッドが並べられ、そのうち三つのベッドに患者が入っていた。

「おや、お見舞いかね？」

部屋に入っていた老婆が声をかけてくる。

「あ、はい。東條さんのお見舞いに……」

「ふむ……私はここに来たばかりでよく知らないのだけれど、ずっと眠りつばなしだっというじゃないか」

「まだ目覚めないんですか？」

「私は東條さんが起きているのを見たことがないよ」

僕は部屋の中に入っていくと、東條さんのベッドの隣に折りたたみ式のパイプ椅子を持っていつて座った。

彼女のベッドの横には点滴台が置かれていて、大きなボトルに繋がれてあった。おそらく栄養剤だろう。そして、脈拍を図る心電計が

規則正しいリズムで音を鳴らしていた。

しばらく彼女の隣に座っていたが、一向に起きる様子はない。

レル फिल्मによると、心を戻された人間が再び意識を取り戻すためにはそこそこ時間がかかるらしい。それが実際に何時間なのか、何日なのか、彼女は語ってくれなかった。

「東條さん……」

彼女の胸が呼吸に合わせて小さく上下する。しっかりと命を刻み続けている証だ。

窓の外には沈む行く太陽が輝いていた。僕は窓から外の景色を眺める。

このまま彼女が起きるまで、僕にできることはないのだろうか。ただ、起きるのを待つしかないのだろうか。

しばらくの間、彼女の隣に座って回復を待っていたが、やがて時間も遅くなってきたので帰ることにした。

既に日は沈み、あたりは真っ暗になっていた。

そういえば、アリシアはどうしているのだろうか。レル फिल्मが来たせいで探しに行けなかったが、もう彼女が家を出ていつてから二日が経過している。

「アリシア、どこにいるんだろう……」

僕は公園にさしかかる。もうここまで来れば家まで後少しである。ふと、公園に人影が見える。

「やっと帰ってきた」

そこで僕を待っていたのはアリシアではなく、レル फिल्मだった。

「ああ、レル फिल्म」

「おかえりなさい」

僕は彼女と並んで歩き始める。

「ねえレル फिल्म。アリシア見てない？」

「何よ。まだあの子の心配してるの？」

彼女は不服そうに口を尖らせる。

「私があなたのリトマスになったんだから、あんな子のことは忘れちゃいなさいよ」

「そういうわけにはいかないよ」

僕のせいで彼女を追い出すことになってしまった。確かに彼女は迷惑な存在だったが、いなくなればやはり寂しい。

「そんなに探したいのなら、あのリオナって子に頼めばいいじゃない。メセブリーを通じて探し出せるかもしれないわよ？」

「わかった」

僕は携帯電話を取り出すと、トモミに向けてメールを打つ。

アリシアを探すのをメセブリーに手伝ってもらいたい。そういう内容だ。

しばらくするとすぐに返事が返ってきた。

『差出人：神崎トモミ』

宛先：坂下ユウタロウ

送信日時： XX / 04 / 28 21:17

件名： Re：お願い

わかった。リオナに伝えておくれ。

ところで、ユウタロウ君大丈夫？

レルフイムに変なことされてない？

それがとても心配なの』

僕は心配されている、ということがとても嬉しかった。

『差出人：坂下ユウタロウ』

宛先：神崎トモミ

送信日時： XX / 04 / 28 21:20

件名： Re：お願い

心配しないで。大丈夫だよ。』

それだけ打つと返信する。

「そんなにあの子のことが心配？」

「当然だよ。アリシア、一人で生きていくなんてできなそうだし……今ごろどこかでお腹空かせて倒れてるかも……」

自分で一瞬想像して笑いそうになってしまったが、実際あり得そうなことなので困る。誰か見ず知らずの人に襲いかかってたりしないといいのだけれども……。

「アリシア、お腹空くと何するかわからないからなあ……」

「あら、獣みたいね」

「いや、まあそのたとえは間違つてないけど……」

それで何度組み伏せられたことか。その度に気絶させられ強制的に夢を見させられては食べられた。あの小さな体のどこにそんな力が眠っているのかわからない。

やがて家が見えてくる。僕はレルフィムと一緒に家の中に入った。

「ご飯作るよ」

「私が作るわよ」

「いや、レルフィムに任せるとまた毒混ぜられそうだから……」

確かに不味くはなかったが、あんな料理をまた食べさせられても困る。

僕は一人台所に立つと、冷蔵庫から牛肉とピーマンを取り出してフライパンで炒める。

レルフィムは僕が相手できないことを知ると、一人でテレビを見ていた。アリシアが録り溜めた夢の美食ツアアのDVDである。

フライパンでじゅうじゅうと音を立てる肉とピーマンをかき混ぜながら、僕は一人アリシアのことを思う。

彼女は元気になっているだろうか。きちんとご飯を食べているだろうか。空腹で泣いていないだろうか。誰かを襲つてはいないだろうか。「あっ!？」

考え事をしながら手を動かしていたら、いつの間にか肉が焦げついていた。僕は慌てて火を止めると、皿の上に盛り付ける。

「レルフィムに悪いなあ……」

冷蔵庫の中を漁ってみる。冷凍室に冷凍のエビシューマイが入って

いた。それを電子レンジで温めればとりあえず食べるものはできる。夕食を用意すると、僕はテレビを見ていたレルフィルムを呼んだ。レルフィルムはすぐにテレビを消すと、うきうきしたような足取りでやってきた。

「あんな番組見てたらお腹空いちやったわぁ」

そんなに美味しそうなものを紹介しているのだろうか。低視聴率とというのは伝え聞いた話なので、もしかするとそうではないのかもしれない。

「あら、ずいぶんコゲコゲね」

「考え事しながら作ってたらさ……こうなっちゃったよ……」

「だから私に任せればよかったのに……」

レルフィルムは椅子に座ると、いただきますをしてから焦げた肉に手を付ける。

「うん、でも美味しいわ」

「そう?」

僕も食べてみる。確かに悪くはない。

だが、そう考えるとうまくできたときはどれだけ美味しくなったのだろうか。それが残念だ。

「ユウタロウ、料理上手なのね」

「そうかな……?」

レルフィルムはかなり早いペースで箸を進めていく。やはりユジューというものは皆大食いなのだろうか。

「エビシユーマイは冷凍?」

「うん、まあ焦げた肉だけじゃよくないと思ってさ」

「いい配慮ね」

時折羽をばたばたと動かしながらレルフィルムはエビシユーマイを食べる。……この羽は犬でいうところの尻尾のようなものなのだろうか。

「東條さん、今日は目を覚まさなかったよ」

僕はふと、東條さんのことを思い出す。今日見舞いに行ってきたが、

彼女は日が暮れるまで目を覚ますことはなかった。

「まあ、心を取り戻してもすぐに目を覚ますとは限らないわね。人によるけど、数日から数週間はかかると思っわ」

「そんなにかかるものなの……？」

「ええ。心が体に定着しても、きちんとリンクされなければ人は目を覚まさない。そのあたりの微調整に時間がかかるのよ」

「そうなんだ……」

それならば、明日は見舞いに行ってもあまり意味がないかもしれない。となると、明日の放課後はアリシアを探した方がよいのだろうか。

「とても美味しかったわ。ごちそうさま」

そう言うと、レルフイムは箸を置いた。見ると、すでに彼女の分は空っぽになっていた。

「まだ食べる？ 僕の分もあげるよ」

「いいの？ それならただこうかしら」

やはりユジューというものは大食いなものらしい。

夕食を終え、時間も過ぎてやがて寝る時間となった。

レルフイムは昨日ほとんど寝ていないようで、早々に部屋へと引き上げてしまった。ちなみに部屋はアリシアに貸していた部屋とは別の客間である。アリシアが帰ってきたときに、せめて居場所くらいは残しておいてあげたかった。

僕は一人ベッドに横たわると、一人真っ白な天井を見上げながら考える。

今、アリシアはどうしているのだろうか。それがとても心配だった。「ん……？」

こつこつ、と窓の方から音がする。風で何か飛んできたものでも当たったのだろうか。

もう一度、こつん、という音がした。僕はベッドから起き上がると

窓の方へと歩み寄った。

「ッ！」

家のすぐそばを通る道路。そこにアリシアが立っていた。

僕は急いで部屋を出ると、階段をかけ降りて家の外に飛び出した。

「アリシアっ！」

僕は彼女の名を呼ぶ。彼女は一瞬びくりと身を縮ませたが、おずおずと視線を合わせてくる。

「ユウタロウ……」

弱々しく僕の名を呼ぶ彼女は、数日前に家を飛び出したときに比べていくらか薄汚れていた。

「アリシア……」

僕はふらふらと一歩ずつ彼女のもとへと歩み寄る。

「ごめん、アリシア……」

「ユウタロウ……」

彼女も僕の方へと歩いてくる。僕は彼女の手を取った。

以前に触ったときはあんなにも滑らかだった肌が、今ではかさかさになっていた。

「ごめん……アリシア……ごめん……」

「私こそ……ごめん……」

僕はアリシアのことを抱きしめた。彼女も僕に体重を預けて腕の中へと飛び込んでくる。

「アリシア……僕は君に謝らなきゃいけないんだ」

「何……？」

「話せば長くなるんだけどね……」

僕はノエルのことやレルフィムと交わした契約について話した。

僕の心変わりやレルフィムという少年が原因であること。レルフィムが今後人を襲わない代わりに、レルフィムと契約したこと。そのため無断でアリシアとの契約を破棄したこと。一緒に住むことになったこと……。

そういったことをすべて説明した。彼女は乾いた笑みを浮かべながら

らその話を聞いていた。

「ごめん……」

僕はもう一度謝った。彼女は首をふるふると横に振る。

「ユウタロウが謝ることじゃないよ……」

「アリシア？」

「悪いのはノエルってカードよ。あなたは何にも悪くない」

「でも……僕は勝手にアリシアとの契約を破棄した。それは……アリシアに相談しないといけないことだよ」

「だって、あのレルフイムを押しえつけられたんでしょ？ 一人の人間を救えたんでしょ？ なら十分じゃない」

口ではそう言っていたが、やはり勝手に他人と契約したことが堪えたのだらう。彼女の表情には明らかに苦渋が浮かんでいた。

「ねえアリシア……戻ってきてよ。レルフイムがいるけど……でも、僕はアリシアに戻ってきてほしいんだ」

「それは……」

彼女は悲しそうな表情を浮かべる。

「できないわ」

「え……」

「もう、ユウタロウは私のリトマスじゃない。私達ティオナにはリトマスがいなければならぬ。だから、私は新しいリトマスを探さないといけない。だから……ユウタロウとは一緒にいられない」

「そんな……」

僕の身勝手が招いた結果とはいえ、それは僕にとってあまりにも酷な答えだった。

「でも……私はユウタロウのこと……好き……だから……」

彼女は頬を赤く染めて、うつむきながらぼそりと言った。

「え、ええ！？」

突然の告白に僕は慌てふためく。

「そ、そういう意味じゃないわよ！ ユウタロウのこと、友達として好きだったことよ！」

「あ、ああ……ごめん、変な勘違いして……」

「ううん、私の言い方が悪かったわ」

彼女は頭をぼりぼりと掻きながら言った。

「ユウタロウと仲直りできてよかった。じゃあ、もう行くね」

「本当に……戻ってこれないの？」

「うん……」

彼女はこくりと頷いた。

「ユウタロウ……これ持ってきてくれる？」

そう言っただけでアリシアが差し出してきたのは一つの宝石のような石だった。

「これは……？」

「お守り……かな」

「お守り……？」

「ピンチのときは必ず助けるから……だから、ずっと持っていて」

そう言っただけで彼女は僕に石を握らせる。ごつごつとした触感とは裏腹に温かい。

「わかった」

僕はその石をポケットの中にしまった。彼女は嬉しそうに頷く。

「じゃあ……またね」

「リトマスができたから……また会いに来てくれるよね？」

彼女はこくりと頷いた。それを見て僕は安心する。

アリシアは一人闇の中に消えていく。彼女の姿が見えなくなっただけで、せめてあんパンの一個くらい持たせてあげればよかったと思った。

僕はいつも通り学校へ行く。今日もレルフィムは学校にやってきた。彼女には好きなようにさせておく。

「はあ……」

僕はアリシアから預かった石を見つめながらため息をつく。

「どうしたんだ？」

そのとき、コウがやってきた。まだ彼とは仲直りしていなかった。

「コウ……」

「何かあったなら相談しろよな？ 話、聞け？」

あれだけ冷たい言葉を放つてなお、彼は自分に相談しろと言ってくれる。僕は石をポケットにしまうと彼の方を向いて座り直した。

「き、昨日はごめん」

「ん、ああ。たまには一人になりたいときもあるさ」

彼はそう言って、近くの椅子を引っ張り出してきて座った。

「そういつときはそつとしいてやるよ。でも、心の問題が片付いたら相談しろよ。できることならなんでもやるぜ？」

彼とは長い付き合いである。そんな親友の彼の言葉をここまで嬉しく思ったことはあっただろうか。

「ありがとう……」

「おう！」

そのとき、トモミとリオナがやってくる。

「あ、トモミ……」

「こんにちは、ユウタロウ君」

「レルフイムはいないのね……？」

「うん、今はないよ」

コウだけが話の展開を読めていなかったが、気にせずに話を進める。

「え、れるふいむ？ なんだそれ？」

「ちよつと僕の知り合いだよ」

「お前、外国人の知り合い増えたな……」

語感から外国人だと思ったらしい。半分はそれで当たっているからよしとする。

「それはさておき、アリスアの居場所のことね」

「え、アリスアちゃん見つかったのか！？」

「ばっちりね」

トモミは地図を広げる。その中の一点をリオナは指さした。

「このアパートに今は一人で住んでるね」

「笹瀬荘……？」

この学校からそう遠くない場所に立っているアパートのようだった。敷地面積の広さからいって、そう大きな場所でもないのだろう。

「でも、もう大丈夫かも。昨日、実はアリシアと会ったんだ」

「そうなのね？」

「うん。だから大丈夫」

「アリシアちゃん、お前のトコに戻ってこないのか？」

「うん。今はちょっとワケありだね……」

コウは少し悲しそうな表情を浮かべた。

「ちえ、せつかく友達になれたのにな……」

「学校、来れないのかな……」

トモミとコウは残念そうに呟いた。

「あのアリシアなら大丈夫ね。そのうちすぐに顔でも出すね」

「あら、私の噂？」

「うわ!？」

気付くと、アリシアがすぐそばに立っていた。

「なななな、なんでここに!？」

「居ちや悪い？　ここ、一応私も在籍してるんだけど」

そう彼女は頬を膨らませて不満そうに言う。

「ちょっと今朝は荷物の整理で時間食っちゃってね。ランチを取ってから出てきたらお昼休みになっちゃったのよ」

「なるほどな……いやでもよかった。アリシアちゃんが戻ってきてくれて、俺嬉しいよ!」

そうコウが本当に嬉しそうに言う。トモミも表情を綻ばせて笑う。

「アリシアがいなくて昨日は退屈だったね」

リオナも口を尖らせて文句を言う。

「悪いわね。でも、ちゃんと今日から学校行くわよ」

「よかった……。本当によかったよ」

僕も正直なところ、とても嬉しかった。彼女と再び会えたこと、そ

してこの学校に来れば彼女に会うことができるとうわかったことが嬉しかった。

「まったく、ユウタロウは昨日会ったばかりでしょ？ 涙なんか浮かべちゃって……男らしくないわよ？」

「な、涙なんか出てないよ！」

そっぴいっつ、僕はごしごしと目許を拭う。

「あはは、やっぱりユウタロウは見てて飽きないわ」

それが彼女のひっかけだったということに気付き、僕はぼりぼりと頭を掻く。

「あはははは」

「そんだけユウタロウは心配だったんだろ？」

三人も笑う。それにつられるようにして僕も笑った。

皆と別れた僕はレルフィムと一緒に病院へと向かっていた。

もうアリシアを探す必要もない。それならば、一日でも早く東條さんが復帰することが望ましかった。

「まあ、私が行っても大したことはできないでしょうけどね」

そう言いながらも、レルフィムは付いてきてくれる。なんだかんだいって責任を感じているのだろうか。

面会バッチを受け取って、エレベーターで病室がある階まで上がる。

「いらっしやい」

昨日の老婆が声をかけてくる。僕はそれに軽く会釈した。

二人分の椅子を用意し、レルフィムと僕は腰かけた。

「リンク切れね。まあ、このまま復帰するまで待つしかないでしょう」

彼女の目から見てもそういうことらしい。このまま待つしかないのだろう。

レルフィムは椅子の向きを変えて外を眺める。ここからの景色は確かにいい。

「ねえユウタロウ」

「ん？」

「あなた、アリシアのこと好きなの？」

僕は思わず噴き出した。

「ななななな、いきなり何!？」

「だって、昨日抱き合ってたじゃない」

「み、見てたの!？」

彼女はつまらなそうにこくこくと頷く。

「私のリトマスって自覚あるの？」

「う……それは……」

しかし、彼女は小さくため息を吐くとすぐに清々しい表情を浮かべる。

「ま、私がすぐに忘れさせてあげるわ」

彼女はそう言つと、椅子から立ち上がった。

「ちよつと空を見てくるわ」

「空……?」

「ええ。気晴らしよ。すぐに戻るからここにいてね」

そう言つと彼女はさつさと部屋から出て行ってしまつ。

「ほほ、女の子を二人もとは、君も隅に置けないわね」

気付くと、同室の老婆がいやらしい目つきで僕のことを見ていた。

「え、あ、いや、その……」

「何も言わなくともわかつておるよ。それに、今度はその子まで……」

…大胆すぎじゃな

老婆の視線の先を見ると、そこにはベッドで眠る東條さんの姿があった。

「な、そんなんじゃないです! 彼女は……その……」

「何も言わなくともわかつておるよ」

先ほどと同じセリフを老婆は繰り返す。思い切り誤解されているようだ。

「確かに可愛らしい子じゃな。笑ったらさぞ可愛いじゃろつて」

僕は東條さんの顔をちらりと窺う。確かに東條さんの顔つきはとも端正で整っている。笑ったら可愛いだろう。

(何を考えているんだ僕はっ！)

そんな邪念が浮かんできて、僕は首をぶんぶんと振る。

「ほほ、若いというのはいいものじゃのう。私も若いころはねえ…

…」

老婆の昔話が始まる。僕は小さなため息をつきながら老婆の言葉に耳を傾ける。

「わしがまだ14の頃じゃった。その頃は遊ぶところなんてほとんどなくてのお。いやはや便利な時代になったものじゃ」

「……はあ」

かなり長そうである。僕は仕方なしに老婆の方へと向き直る。

東條さんは今どんな夢を見ているのだろうか。それとも夢を見ていないのだろうか。

起きたら半年が経過していたと知ればどんな反応をするのだろうか。悲しむのだろうか。嘆くのだろうか。

僕だったらどうだろうか。一度眠って、再び起きたときには半年が経過していた。

何よりもまず驚くだろう。そして、やはり悲しむのだろうと思った。

「……あ」

そんなことを言ったら、自分の母親はどうなってしまうのだろうか。動いてる姿を一度も見たことのない母。ざっと計算すれば15年近く眠っている計算になる。

父親の話によれば、乳離れとほぼ同時くらいに眠りについたこととだ。自分の息子が一度寝て起きたとき、こんなにも成長していたら何を思うだろうか。

成長の様子を見ることができなかった悲しみか。それとも自立している息子の姿を見ることが嬉しいか。それともそもそも関心などないのだろうか。

もはや他人となりつつなる母にこんな思いを抱いたのは初めてだっ

た。

(でも……母は戻ってこないだろうな……)

東條さんの心は食べられずにムーティエンに使われていたから平気だっただけで、もし食べられていたらもう、意識が戻ることはないのだろう。

きつと、一度も母の声を聞くこともなく母は逝ってしまったのだろう。HASの末路は全身衰弱による筋肉の衰えからくる心臓の停止だ。筋ジストロフィーと同じである。使われない筋肉は衰えていく。

平均して眠りについてから20年程度でそれは訪れるという。免疫力の低下によつて感染症を発症することもあるという。

あと遅くても5年で自分の母はこの世から去るのである。そう考えると、少し悲しいような気もしてきた。

今まで考えたこともなかったことをなぜ考えているのだろうか。それは目の前に東條さんがいるからだろうか。

もし、母が帰ってくると言われたら僕はどう思うだろうか。一般的な母というものと触れ合ったことのない僕。

もし、母がいれば僕はどんな生活を送っていたのだろうか。

父親の話では模範的な賢母だったそうだ。

もし、母が……。

そこまで考えて、気付くと目許に涙が溜まっていたことに気付いた。

「いや、三人同時に手玉にとったときはいい気分じゃったよ」

老婆の声も耳には入ってこない。

僕は……母がいなくて寂しかったのだろうか。

ぼたり、ぼたりと涙があふれては落ちていく。それは止まるところを知らない。

話をしたこともない母親。今までいないものとして過ごしてきた母親。そんな母親を今ごろになって求めている僕。

一体何がどうしたのだろうか。

僕は眠っている東條さんを見つめる。

彼女が戻ってくるという話を聞いて、今まで諦めていたことに希望

が見えたからだろうか。

「む、どうしたんだい？」

ふと、老婆は心配そうな口調で僕に声をかけてくる。

「なんでもないです」

僕はごしごしと目許を拭う。

「ユウタロウ」

そのとき、レル फिल्मが戻ってきた。

「帰ろう」

「そうね」

「おや、残念だねえ」

老婆は残念そうな表情を浮かべた。

「また今度来ます」

「そのときはまた話を聞いてくれるかえ？」

ほとんど話を聞いていなかったが、僕はこくりと頷いた。

帰り道、僕は暗い夜道をレル फिल्मと並んで歩いていた。

「ねえ、レル फिल्म」

僕はレル फिल्मに声をかける。

「なあに？」

「HASの患者が心をどうしたか……つまり、食べられたか、それとも誰かが持つているだけなのかってわかる？」

「そうね……ちょっと難しいけど、わからないことはないわ」

「本当!？」

僕はレル फिल्मの手を取る。彼女は驚いたような表情を浮かべてぽかんとしていた。

「え、ええ」

彼女はゆっくり頷く。

「思い出があれば、ある程度までは探すことができるわ。その人に関する思い出、情報があれば一応探すことはできる。もし見つける

「ことができれば……その心の持ち主を倒して奪い取ることもできる」  
「もし、食べられちゃってたら……？」

「そのときはわからないわ。存在しないものを存在しないと証明するのは不可能。あなたたち人間の常識に乗っ取って考えれば、ユジーなんて存在は存在するはずがない。でも、私達は存在している。つまりはそういうことよ」

「探すことはできる。見つけることもできる。でも、ないものをないと断言することができない、という意味だろう。」

「手伝ってもらえる……？」

「あの子の心？」

「ううん。僕の母なんだ。もう15年も目を覚まさないんだ」

「それは……お気の毒だと思っけど……」

彼女は辛そうに顔を伏せる。

やはり、自分でもほとんど可能性のないことを言っているのだろう。

「まあ、やれる限りやってみるわ。あなたのお母さんの思い出の品とかはあるかしら？」

「うん。写真とかなら何枚か……直接会った方がいい？」

「それなら十分ね。別に会わなくても大丈夫よ」

母はここから離れた、母の故郷の病院で静養している。わざわざ会いに行くとなると大変だったが、その必要がないことを知って少しほっとする。

それと同時に、久しぶりに母に会う機会も失ってしまったのは少し残念な気もした。

「そんな顔しないでちょうだい」

僕が残念そうな表情を浮かべているのを見てか、元気付けるように彼女は言った。

「きつと見つけてみせるわ」

「ありがとう、レルフィム……」

長いこと歩いて公園にさしかかる。ここまで来れば家まで後少しだ。

「ッー」

そのとき、レル फिल्मが立ち止まった。

「……いる」

「え？」

レル फिल्मが突然僕の方へと飛びついてきた。

「うわっ!？」

彼女に押し倒される形となって僕は地面を転がる。

そのとき、何か火薬の爆ぜるような音が響いた。

「……失敗」

ジャングルジムの上に人影が見える。

長い銀髪。二本に分けられたツインテールは腰まで届くほど長い。

漆黒の衣装に身をまとった少女。見かけは僕とそんなに歳は変わらないように見えた。

両手には……煙を上げる二丁の銃。それを構え直すと、彼女は小さな声で呟いた。

「ターゲット、感知。指示を」

『そのまま倒しちゃっていいよ。心は持ってきてね』

どこから聞こえてくるのかわからないが、公園の中に少年の音が響く。

「了解」

レル फिल्मは強く舌打ちする。

「ノエル……ッ!」

「ターゲットの殺害申請承認。これより狙撃から直接戦闘による破壊へ移行」

彼女は両手の銃を構えると、エルフィドも展開せずに銃を乱射する。

「ッ!？」

とっさレル फिल्मは剣を抜いた。二発の弾丸を弾く。弾丸は激しい土埃を上げながら公園の遊具を破壊する。

「ちッ! エルフィドを展開する余裕もない……ッ!」

エルフィドは自分の力をその場に満たすシグマである。展開すれば力を自由に行使できる。だが、それを展開せずに戦うということは、

その必要もないほど弱い相手と戦つか、それともそれを展開できない理由があるのか、あるいはその手間すら惜しいということである。「ユウタロウ！ 走りなさい！ こいつは私が抑える！」

「ど、どこに行けば!？」

「あの子のところに行つて保護してもらいなさい！ エルフィドが展開される前なら逃げ切れるわ！」

「わ、わかった」

僕は公園から走り出す。だが、銀髪の少女はそれを阻止しようとして後を追う。

「待ちなさい、私の相手はあなたよ！」

レルフィムは何本もの剣を飛ばす。銀髪の少女は一度物影に身を隠すと、隙を見計らつて銃で攻撃する。

レルフィムが作つてくれたわずかな隙を生かして僕は逃げる。レルフィムも僕を抱えたままでは戦いにくいハズだ。

「ターゲットの逃走阻止失敗。指示を」

『そのカード……今はティオナかな。彼女から倒していいよ』

「了解」

僕はレルフィムを信じることにした。

彼女ならきつとやってくれるはず。

きつと……生き残ってくれるにちがいない。

## 第十話（後書き）

アリシアやっとなってきました。頑張れメインヒロイン！  
コメントは0件でした。

## 第十一話

### 第十一話

夜空に星が輝く。

僕は人気のない街を走っていた。

虫の声だけが鳴り響き、他には僕の吐息しか聞こえない。肌を撫でる風が気持ちよかった。

アリシアの住んでいるアパートの位置は頭の中に入っている。

あと5分も走ればたどり着くだろう。

「はあ……はあ……」

息が切れてきたので僕は一度立ちどまる。

途端にめまいと立ちくらみのようなものに襲われる。

相当死に物狂いで走っていたようで、かなり無茶をしていたようだ。心臓がどつくんどつくんと強く脈打つ。手に胸を当てなくともそれがわかる。

酸素が取り込まれ、脳へと血管を通って送られる。今まで麻痺していた感覚が徐々に痺れが取れていく。

そんな現実へと戻りつつある頭。そこにある疑問が過った。

なぜ、ノエルは自分で出てこないのだろうか。

おそらく先ほどの銃使いの少女は仲間だろう。口ぶりからして仲間というより部下の方が近いだろうか。

確実に仕留めるならば二人がかりでレルフイムを片付ければいい。

僕を倒したところで、ただの人間の僕には力はない。彼らにとって脅威となることもないのだ。

そこで考える。彼は戦うことが嫌いだ。この前も僕が一人でいるところを狙ってきた。

じゃあ、なぜ今回は二人で一緒にいるときを狙ってきたのだろうか。それも確実性のある二人がかりではなく、たった一人で最強といわ

れたカードの一人であるレルフイムに戦いを挑んだのだろうか。あの銃使いの少女の攻撃は遠距離を攻撃するのに都合がいい。その気になれば後ろに下がっている僕を狙い撃つこともできる。レルフイムはそれを恐れて、僕を逃がした。戦力にならない僕が彼女の足手まといにならないようにするために、そうするのであることとは誰もが考える手だ。

ならば、逆を言えばそれを敵も理解していたはずだ。気付くと、僕の足は固まって動かなくなっていた。

(動け、動け！)

そう強く念じるが、僕の足は動かない。

たった一人で銃使いの少女が挑んできた理由、それは……。こつん、こつん。暗闇の中にかかとの固い靴が大きな音を響かせる。根が張ったように動かない僕の足。なんとか無理やり地面から引きはがそうとするが、まったく動く気配がない。

「無駄だよ。影縫いのシグマをかけさせてもらったからね」  
暗黒の中から澄んだ声が響く。

一際高い靴音が鳴る。振り向かなくてもわかる。僕の後ろにはヤツが……ノエルがいる。

足元から寂れた世界が僕の日常を侵食していくのがわかる。僕の目の前には大洋が広がり、一歩でも足を踏み出せば下に向かつて落ちていくことは間違いないだろう。

そこでようやく足が動くようになる。僕は数歩下がり、崖から離れようとした。

そのとき、背中に何かかぶつかるのを感じる。僕は振り向いた。短い金髪、彫像のように整った顔……ノエルの姿がすぐ後ろにあった。

「うわあっ！」

僕は振り向いて数歩下がった。かかるとに空白を感じる。これ以上は下がない。

「僕はテイオナのリトマスとなった人間の心を求めていた」

彼の手に大鎌が光る。一振りで空気を裂き、心を奪い、命を刈り取るその刃は、僕にはあまりにも大きく見えた。

「リトマスとなった人間、正確にはテイオナが初めて姿を表した人間の心には素晴らしいまでの欲望が秘められている。強い欲は強い力を生み出す。僕はその力が欲しい」

「な、何を言ってる……」

「わからないかい？ ティオナは人間を選ぶ。より強い力を持ち、強い欲望を持った人間の元へと姿を現し、その力を借りる。テイオナが最初に姿を見せた人間は強い力を持っている。だからテイオナは現れる」

「僕が……強い欲望を……？」

僕にはそんな大望があっただろうか。

記憶を漁ってみるが、そんな覚えは欠片もない。

そもそも、アリシアが僕の前に現れたのは僕がカードに襲われているのを助けるためだったのではないのか。

彼女は言っていた。軟弱な心だ、と。

「欲望の強さと心の強さは必ずしも比例するものじゃない。強い欲望を持つているが、しかし心は弱い者も存在する」

僕の疑問に答えるように彼は呟いた。

「君はまさにその希少種……強い欲望を持ち、そして弱い心を持った人間だ」

彼は高く鎌を振り上げる。そして、叩きつけるように地面へと打ち込んだ。

亀裂が走る。地面が裂けるように盛り上がり、足元がぐらつく。

「君の心は強い欲望を秘めている。人間一人といえど、その力は無限大。歴史上に名を残す人間にも匹敵するほどの強い思いが秘められている。欲望がエネルギーならば、心はエンジン。エンジンはもうすでに揃っているのですね。エネルギーがほしいんだ。僕はその無限大の力が欲しい！」

彼の表情が歪む。口は耳まで裂け、目は暗く光る。欲望を求める獣

の表情となつて僕のことを睨む。

「さようなら、人間。君の思い、決して無駄にはしないからね」  
そして鎌が動き出す。

地面から引き抜かれた大鎌は恐怖に囚われ身動きのできない僕を狙つてまっすぐに落ちてくる。

「ユウタロウ！」

……それは誰の声だろうか。

僕は目を瞑っていた。その恐ろしい刃を見たくなかったから。だから、誰が僕の前に立つてくれたのかわからなかった。

僕をまっ二つに叩き割るはずだった刃は僕には届かず……代わりに僕の前に立ちふさがった誰かの体へと降っていった。

「ッ！」

彼女は声にならない悲鳴をあげる。そして、そのまま崩れ落ちた。

僕はゆっくりと目を開いていく。薄く開いていた目はソレを見た瞬間一気に広がり、僕は彼女に飛びついた。

「アリシアっ！」

彼女は右肩からざっくりと大鎌の一撃を受け、胸までばっさり切り裂かれていた。

「どうして……なんでアリシアがつっ!？」

彼女は閉じていた瞳をうつすらと開く。そして、左手で僕のポケットをさぐり、小さな輝石を取り出す。

「これが……あつたから……私は……ずっとユウタロウのこと……見てたから……」

それは僕がアリシアから預かった石だった。

「アリシアは……なんで……なんで僕なんかのために……?」

「アンタのことが……好きだからに決まってるでしょうが……」

その一言を呟いたとき、手から石が転がり落ちる。

「アリシア……? 僕のことを好きって……?」

腕が力なく投げ出される。

傷口からたくさん血があふれている。両手で押さえても止められ

ないほどのものすごい量の血があふれている。

「そんな……なんで……」

アリシアは口を動かさなかった。

虚空を見つめたまま目を見開き、けれどもその瞳に命はなく。

ただ、何を見ているのかわからない虚な表情で口を半分開いたまま黙っていた。

「なんで……なんでアリシアが……」

僕は初めて気付いた。

彼女が僕のことを好きないように、僕が彼女のことを好きだったこと。そして、そのことに失ってから初めて気付いたということ。

「うわああああああああああああああああああああッ

！」

感情が堰を切った堤防のようにあふれだしてくる。悲しみ、怒り、恐怖。そういつた負の感情が僕の中を渦巻き、そして口から絞り出されていく。

……それは一つの形を成す。

渦巻く感情は僕の周りをぐるぐると回りながら一つの定まった形を描き出す。

無意識のうちに僕は感情を形にし、一つのシグマを生み出していた。

「アリシア……帰ってきてよ……」

僕の言葉に反応するかのように魔法陣が輝く。

「な……これは……」

ノエルの表情に驚きが浮かび上がる。

「アリシア……帰ってきて……逝かないで……」

一言呟くたびに、感情は形を作る。それはアリシアの傷の上に集まり、深い傷を治していく。

「僕も……アリシアのことが好きだ」

負の感情が正へと転じる。その瞬間光が広がり、荒涼とした崖が一瞬で吹き飛ぶ。

それは元の世界をすぐに形作る。いつの間にか夜の街中へと戻され

る。

「馬鹿な……僕の世界が……破られるだって……?」

光はさらに強く輝く。今やそれは世界を覆いつくすほどまでに広がり、目を開けていることもままならない。

「ユウ……タロウ……」

今まで開くことのなかった口が開かれる。

「あ、アリシア……!」

「く……これが人間の欲望の力……!」

僕はふらふらと歩み寄り、アリシアの体を抱き抱える。

「ユウタロウ……なんだか暖かい」

「すばらしい……人間とはかくもすばらしい力を持っているのか!」

そして、僕はそのままアリシアの体を抱きしめた。

「おかえり、アリシア」

「はは! 僕が……僕が消える……ッ!？」

とくん、とくん。アリシアの鼓動を感じる。

「ただいま、ユウタロウ」

気付くと光は収まり、ノエルの姿もそこにはなかった。

「ユウタロウ……ありがとう」

「どういたしまして」

アリシアは僕の顔を見て嬉しそうに笑う。

僕も彼女の笑う顔を再び見ることができて、とても嬉しかった。

僕はアリシアを連れて公園へと向かう。

「レル फिल्म」

公園にもう銃使いのあの少女の姿はなかった。一人、レル फिल्मは公園のベンチに座り込み、ぼんやりとしていた。

「大丈夫?」

「ん、ああ、ユウタロウ」

彼女に声をかけて初めて彼女は僕の存在に気付いたのか、ゆつくりと体を起こす。

「大丈夫？」

もう一度僕は彼女に声をかける。レルフイムはゆつくりと頷いた。

「なんとかか……ね」

彼女の服はどこどころ乱れ、綺麗だった黒いドレスも縮れていたり、汚れていた。

「あのカード……とても強いわ。私でさえ、負けそうになるほどに……」

公園の惨状を見ればその様子はわかる。ところどころ遊具は破壊され、何本かの木が折れていた。地面には大穴が空き、煙を上げている。

「エルフイドを展開する暇さえないほどの連続攻撃。正直、ここできこうしてられるのが不思議なくらいだわ」

「どうなったの!？」

彼女はぶらりと腕を投げ出して答える。

「なんとか隙を作って、エルフイドを展開させてもらったわ。そうしたらあの子、逃げちゃったけどね」

「そっか……」

トドメを刺すには至らなかったようだ。それを聞いて少し安心する。カードといえど、誰も死んでほしくはなかった。

「そっちは無事だったみたいね」

「いや、あんまりそうでもなかったんだけどね……」

僕は身の回りで起こったことをレルフイムに話す。

ノエルに襲われたこと、アリシアが助けに来てくれたこと、アリシアが斬られたこと、アリシアを僕が助けたこと、ノエルがいなくなつたこと……。

「凄いわね……。ユウタロウ、人間なのにシグマが使えるの？」

「そりゃそうよ。私が見込んだ人間だもの。それくらいできてもおかしくないわ」

なぜかアリシアが胸を張って答える。

「今は私のリトマスだけだね」

ぷ、とレルフイムが笑って受ける。それにちよつと青筋を浮かべるアリシア。

「まったくあんた何様？ 人のリトマスにちよつかい出して……斬るわよ？」

アリシアがそう言うと、彼女の身の回りに風が螺旋を描き始める。

「あら、やる気？ 別に私はいいわよ？ 負けないから」  
レルフイムの周りにも闇が色濃く渦を巻き始める。

僕は慌てて二人の間に割って入った。

「ままま、待つてよ！ とமாகく二人ともここは抑えて、ね？」

唸りながら見つめあう二人のユジュー。視線の間を火花が飛び交っている。

「いいもん。いつか取り返してやるから」

「ええ！？ アリシア、別のリトマス探すんじゃないの！？」

「何よ。嫌なの？ 嫌なの？ そうならばつきり言いなさいよほらあ！」

アリシアは僕の口の端をつかんで思い切り左右に引っ張る。

「いひゃ、いひゃいいひゃい！ あいひあ！ ひよ、ひゃへへ！」

「えー？ 何言ってるのかわからないわよ？ もっかい言っ御覧なさい」

「ひゃははひゃへへっへいっへふほ！」

僕はアリシアの脇の下に手を差し入れてくすぐった。

「きゃ！ ちよ、ちよつとユウタロ！？ や、くすぐりたい！」

アリシアはきゃあきゃあと悲鳴を上げながら脇を閉じる。口への攻撃が緩んだ隙に僕は体を回転させてなんとかアリシアの拘束から逃れる。

「アリシア酷いよ……口が痛い……」

「あんたがあんなこと言うからいけないんでしょー！」

アリシアはぶつくりと頬を膨らませて口を尖らせる。

「べ、別に嫌だなんて……そんなつもりじゃ……」  
「嫌なのよ」

そのとき、レル फिल्मが突然口を挟む。

「ユウタロウは私と一緒にいたい。あなたのことなんてこれっぽちも想っていないのよ」

「ふん、せいぜいさえずるといいわ。カラス」

「カラス……ですって……？」

いままで余裕たっぷりの笑みを浮かべていたレル फिल्मの額に青筋が浮かび上がる。

「そーよ。真つ黒な羽なんか生やして、かーかーさえずるだけなんてカラスみたいじゃない」

「……へび女」

「どこらへんがよー!」

「そのへびみたいに長いドレスとか、へびの鱗みたいな甲冑とかそつくりよ。ただのへびじゃ可哀想だから、せめてキングゴブラと呼んであげるわ」

「なんかハシブトガラスがさえずってるわね」

「さすがキングゴブラ、発言も毒だらけだわ」

なんだか僕の目の前で底知れない戦争が勃発していた。

カラスVSゴブラ。普通に考えたらゴブラが勝つだろうが、このカラスは普通のカラスじゃない。まさに化け物ガラス。ハシブトガラスというたえは正確ではないだろう。

「まま、待つ……」

「何よ?」

二人同時に睨まれる。そのあまりの迫力に僕はしゅんとして縮こまる。

まさに一触即発というにふさわしい空気だった。

「ユウタロウ君!」

と、そこになぜかトモミとリオナが現れる。

「誰かが戦ってる気配がすると思って来てみれば、この公園の有様

は何事ね！ アリシア達がやったのね！？」

「私じゃないわよ。このカラスがやったのよ」

「私だってカードとやりあってたのよ」

「なぜエルフィドを展開しないね。現実世界にこんな大影響を及ぼすとはユジューの風上にもおけないね！」

「エルフィドを使うつもりだったわよ。でも、すばしっこい相手でなかなか使わせてくれなかったのよ」

「だからってここまで酷くなるまでやりあうね！？ ありえないね！」

トモミが心配そうな表情を浮かべながら僕の方を見つめる。

「ユウタロウ君、怪れない？」

「いや、うん。僕は大丈夫。アリシアが守ってくれたから……」

「やっぱりお前達二人がやったね！ ユウタロウを取り合うのはいけど……いや、よくないね。それはともかく、こんなになるまでやりあうなんて論外ね！」

「だからこれやったのは私じゃないわよ」

「もう許せないね！ 私がまとめてお仕置きね！」

炎を体にまとうリオナ。あまりのややこしい状況に僕は頭が痛くなってきた。

「この私とやりあうつもり？ この前コテンパンにされたことを覚えてないのかしら？」

「リオナ、あなたとはいつか決着をつけたいと思っていたわ」

ユジュー三人はぎゃーぎゃーとわめきながら夜の公園跡で戦闘を繰り広げる。僕とトモミは巻き添えを食わないように端っこの方へと避難する。

「大丈夫、ユウタロウ君？」

「僕は大丈夫だけど、アリシアもレルフイムも心配だな……」

一人は体を半分切り裂かれ、もう一人は限界ギリギリまで戦ったばかりなのだ。心配するのも当たり前だろう。

「何かあったみたいだね。話を聞いてもいい？」

僕はトモミに事情を話して聞かせる。彼女はうんうんと頷きながら、話の腰を折ることなく話を聞いてくれた。

「とうわけなんだ。だから、この公園がめちゃくちやになってるのは何から何までレル फिल्मのせいってわけじゃないんだよ」

「そういうことだったのね。納得納得」

トモミは壊れかけたベンチに腰かけながら話を聞く。僕も隣に座って話をしていた。

「とうわけで、リオナにもそう伝えてくれないかな？ 僕じゃ話を聞いてくれそうもないから……」

向こう側では風と炎と闇が荒れ狂っている。とてもじゃないが僕が止めることはできなさそうだ。

「そんなの私だって無理無理。あの中に飛び込んでいけるわけないでしょ？」

「だよー。あはははは」

豪快な破壊音と共に何かの破片が飛んでくる。もうこうなったらやるところまでやってしまえという気分になっていた。

「それにしても、ユウタロウ君はいいな……戦える力がその体にあるなんて羨しいよ」

「トモミだつて強いじゃないか。あんな強力な魔導書を作り出せるなんて……」

「ムーティエンを作れても、私はそれを扱うことができない。だから私にはあんなもの、角が厚いだけの本にしかないの」

「角で殴ったら痛そうだね……」

かなりあの魔導書は分厚い。それこそ一撃で脳震盪でも起こせそうである。

「そういう問題じゃないでしょ。ともかく、ユウタロウ君はどういうわけかシグマが使えたんだよね。それって、凄いことだと思うよ。そう言われると、自分でもなぜあんなことができたのか謎である。

いや、それ以前にどうやってやったのかも謎だ。たぶん、もう一度やれと言われてもできないだろう。

「でも、やり方もわからないし、あときは夢中だったから……」  
「一回できたってことはまたできるかもしれないってことでしょ？」  
確かに彼女の言葉には一理ある。

一度できたのだから、またできてもおかしくない。

「まあ、それはそうだけど……」

「だったら方法を考えましょ。自在に使えるようになったら戦力になるじゃない」

「うーん……あの後少しふらふらしたからな……そんなに何度もできないと思うけど……」

「それでも、戦うための力を持つてるんだよ？ もっと自信を持つようよ」

「まあ、そうだけどさ……」

僕のでノエルを倒したことは確かだったが、そう何度も使える能力ではないように思える。

今回だってアリシアが瀕死の重傷を負ったからこそ使えたわけで、またあのような状態にならないと使えないというのなら使い勝手が悪すぎる。それではたとえ戦う力になったとしても、戦力として考えることはできない。

「やっぱり僕が戦うなんて無理だと思っな。こんなに使い勝手が悪いんじゃ使いものにならないし……」

「私ね、ユウタロウ君が羨しい」

「……え？」

「いつもリオナは一人で戦っている。私は後ろに立ってただ見守ることしかできない。だから、それがとてつもなく悔しいの。私にも何かできることがあったらって思うのに……」

「トモ……」

彼女は背を向けて一人誰に語りかけるでもなく呟く。

「私はリオナの負担を少しでも軽くしてあげたい。あの子は頑張り屋だから……一人でなんでも抱え込んでる」

僕はリオナの方を見た。元気にレルフィムやアリシアと戦っている。

公園はますます酷い状況になってはいたが、なんだかその様子が楽しそうに見えるように見えた。

「最初にアリシアちゃんが一緒に戦ってくれたとき、本当は嬉しかったんだ。この前はアリシアちゃんを抱え込んだんじゃダメなんて言っただけど……ユウタロウ君ならうまくやれると思うから……アリシアちゃんをよろしくね」

「わかった。今は確かにレルフィムのリトマスかもしれないけど……アリシアも僕が面倒見るよ」

ようやく一段落ついたのか、三人はお互い構えを解かないままであったが、ともかく戦わずに睨み合っていた。

「終わったの？」

「一時休戦よ」

アリシアがそっけなく言う。二人はふいと横を向いた。

「皆力が尽きたね」

「特に私は連戦で疲れてるからね」

確かにレルフィムだけは連戦で力を使い切ってるはずだ。それなのにもかかわらずに二人と戦うだけの余力を秘めていたということになる。さすが最強と自称するだけのことはある。

「そんな理由にならないね」

「あら、何か言ったかしら、赤犬」

「あ、赤犬って何ね！」

「自分のことだってわかるってことは多少の自覚はあるってことね。まあ、ご主人様に尻尾振ってるだけなもの。犬と変わりはしないわ」  
「トモミはご主人様じゃないね！ 大事な友達ね！」

レルフィムはふふと笑いながらリオナの放った炎弾を回避する。

「ほんと、しつけのなっていない犬ね」

「がるるるるー！」

牙をむき出してレルフィムと向かい合うリオナ。確かに言われてみ

れば犬にちよつと似てるかもしれない。しかし、赤犬といえは某国では食用にされている犬種ではなかっただろうか。

「赤犬は美味しいわよ」

やはりそうであったようだ。

「ま、それはともかく私は帰るわ。疲れたからさっさと寝たいもの。そう言つてレルフイムは公園から去つて行く。その様子を額に青筋を浮かべながらリオナは見送る。

「リオナ、よく我慢したね。えらいよ」

「うー……やっぱりあいつ嫌いね」

リオナはしゅんとしながらトモミによりかかる。彼女は笑つてリオナを出迎え、その腕で抱いた。

「仕方ないね。でも今は味方だよ？ もう少し頑張つてみようよ」

「……わかつたね」

リオナはゆつくりと頷いた。

「アリシアはどうする？」

「私？ どうしよっかな……。もし、もしもの話だよ？ ユウタロ

ウが……。ユウタロウが私を迎えてくれるなら……」

彼女は頬を赤く染めてちらりとこちらを見る。彼女の言わんとしていることはわかつていた。

「もちろんだよ。アリシア、戻つてきてほしい」

「ありがとう……ユウタロウ」

アリシアはニコリと嬉しそうに笑う。

その表情を見て、僕まで笑いを浮かべていた。

「じゃあ、帰りましょうか」

「うん」

「あ、ユウタロウ君」

そのとき、思い出したようにトモミが声をあげる。

「ん？」

「また明日ね」

「うん」

僕達とトモミ達は公園で別れる。

僕は久しぶりにアリシアとの帰路を歩いていた。

「こうしてユウタロウと歩くの、何日ぶりだろう……。まだそんなに前のことじゃないはずなのに、もう何カ月も前のことみたいに感じるわ」

「そうだね」

日にちにして二、三日というところだろうか。たったそれだけの短い間離れていたただけなのにもかかわらず、僕は久しぶりの帰り道を満喫していた。

夜空には満天の星々が輝く。

名も知れない虫の音が響く夜道は、僕にとって何にも変えがたいものだった。

## 第十一話（後書き）

なんとか丸く収まりました。

さてさて、これから新キャラ登場です。

一体どうなることやら……。

## 第十二話（前書き）

おめでとう、ラブコメのバーゲンセールだよ！

## 第十二話

### 第十二話

「おはよー」

いつもの場所で皆と会う。

コウ、トモミ、リオナはすでに来ていた。

「いよう」

「おはよう」

「おはようね」

レルフィムとアリシアも頭を下げ朝のあいさつをする。

「おはよう」

「おはようございます」

「……誰？」

レルフィムを見てコウが硬直する。彼女はニコリと笑った。

「あ、えつと……その……従姉妹！　そう、従姉妹だよ！」

「……またか？」

「うん！　僕よりアリシアの方が近いかな！　レルフィムって言うんだよ」

「ご紹介にあずかりましたレルフィムです。以後お見知りおきを」  
そう言つてレルフィムは優雅な礼をする。

コウは僕の頭をヘッドロックで抱え込むと、そのまま万力のような力でギリギリと絞め始める。

「おい、こんな美女二人と同棲だなんてどういう見だあ？　ちよいとそこらへん、しっかりシメとかないとダメか？　ああ？　なんか言ってみるよ。おい、言ってみるよお！」

「いた、いたたたたた！　ちよ、コウ！　ストップストップ！」

レルフィムはくすくすと笑う。アリシアやトモミ、リオナも面白がるだけでちつとも助けてくれない。

「いや、コウ！ マジで痛いから！」

「そりゃそうだろうよ。痛くしてるんだからな」

今日も僕達の世界は平和だ。

こんななんでもないような日常が繰り広げられている。それはとても楽しいことだった。

そうして話しながら歩いているうちに昨日ノエルにあった場所まで到着する。

こうして今になって思うと、昨日の出来事がまるで嘘のように思えてくる。

本当に僕はあんな命のやりとりをしたのだろうか。隣で笑っているアリシアは死ぬような怪我を負った。レルフイムも苦しい戦いを強いられた。あんな出来事が昨日あったのだろうか。

今の平和な日常を思うと、まるで屋気楼のようにさえ感じられる。

「ユウタロウ？ どうかしたの？」

ふと、気付くとアリシアが心配そうな表情で僕の顔を覗き込んでいた。

「なんだか複雑な表情してるよ？」

「ん、なんでもないよ」

僕は頬をぱんぱんと叩くと、にっこり笑った。

「ただ、僕はこんな毎日を享受できて幸せだなんて思ったただだよ」

「？」

彼女は不思議そうな表情を浮かべる。

「さ、早く行こう」

「うん、そうだね」

僕らは並んで歩き始める。

今日も平和で楽しい一日になりそうだった。

「じゃあまた後だね」

昇降口でレルフイムと別れる。この瞬間が一番ほっとする瞬間だっ

た。

「一生戻ってこなくてもいいわよ」

「あなたこそ邪魔だからくつついてこなくていいわよ?」

アリシアとレルフィムの睨み合いが始まる。そこで僕はまた頭を抱えてうずくまりたくなる。

「レルフィムちゃんは学年違うのか?」

「んー、まあそんな感じ?」

階段を上ればそこは三年の教室である。

「てつきり同学年だと思っただぜ」

「女の子だと背格好大して変わらないからね」

もちろん、これはコウを納得させるための口実である。

だが、よくよく考えてみるとレルフィムの本当の歳を知らなかった。

「あら? 私は皆よりいくらか年上のお姉さんなのよ?」

レルフィムは妖艶な笑みを浮かべる。

「うおう、その言葉の響きはマジだな……」

「コウ、そろそろ僕達も行こう。時間がなくなっちゃうよ」

「ん、そうだな。じゃあレルフィムちゃん、またな」

「ご機嫌よう」

レルフィムは階段を上がっていく。僕達は廊下を進んで自分達の教室へと向かう。

僕はアリシアだけに聞こえるように小さな声で尋ねる。

「ところでレルフィムって何歳なの?」

「さあ? でも私達と大して歳は変わらないんじゃないかしら。いいとこプラス1か2くらいだと思っわ」

教室に到着し、席に腰を下す。あと数分でホームルームが始まる。

「ねえユウタロウ」

アリシアは自分の席に座ると一番に話し掛けてきた。

「私……またユウタロウと戦えるかな……?」

それはまた僕のリトマスに戻るのか、という意味だろう。僕は首を縦にも横にも振ることができない。

「わからない。レルフィムがそう簡単に諦めてくれるとは思えないけど……でも、僕はアリシアと戦いたいな」

「……それを聞いて安心したわ」

彼女はふつと笑う。僕の気持ちが彼女と同じでほっとしたのだろう。

「もうすぐホームルーム始まるよ」

僕がそう言うと同時に担任が入ってくる。

「そうね。じゃあ、また後でゆっくり話しましょう」

ホームルームが始まる。

僕らは姿勢を正して先生の話に耳を傾けた。

昼休みになると、僕達は屋上に集まった。

僕とアリシア、レルフィム、トモミにリオナ、そしてコウの六人である。

なんのことはない。皆でお昼ご飯を食べるためである。

僕とアリシアとレルフィム、そしてコウはコンビ二弁当。トモミとリオナは自分達で作った弁当だ。

「おいユウタロウ。お前はともかくアリシアちゃんとレルフィムちゃんまでコンビ二弁当ってのはおかしくないか？」

「え、なんで？」

「そんな女の子までそんなものを食わせて、すべての肌が荒れちゃったらどうするつもりだ！」

「私達は気にしてないからいいわよ」

「コンビ二弁当って結構美味しいのね」

アリシアとレルフィムは各々選んだコンビ二弁当を美味しそうに食べる。

「まあ、本人達が喜んで食べてるんだからいいんじゃない？」

「む……それはそうだが……」

コウはなんとなく納得できないようだったが、やがて自分の弁当を広げてご飯を食べる。

「まあまあ、最近のコンビニのお弁当は栄養面とかも考えているみたいだし、いいんじゃないかな」

「私はトモミのお弁当が一番なのね」

トモミにも言われて少ししょんぼりするコウ。

「そういえばコウタロウ、あの子の調子はどうなの？」

「あの子って……東條さん？」

「そうよ。そろそろ良くなると思うけど……」

「また女か？ ああ？ お前はどれだけ女の子と親しくなれば気が済むんだ？」

「いや、そうじゃなくて！ ほら、東條さんっているでしょ！ H A Sにかかって倒れちゃった人！」

「クラスメイトの……？」

コウよりも先にトモミが思い出したようだ。それにやや遅れてコウも思い出す。

「それがどうかしたのか？」

「聞いた話だと、彼女の体調が最近いいんだってさ。もしかすると意識が戻るかもしれない……」

コウにはレルフイムが彼女の心を解放したから、なんてことは言えない。

「H A Sの末路って、そのまま全身の筋肉が脆弱化していつて、心臓の筋肉が止まって死ぬんだよな。それ以外の症例なんて聞いたことないぞ？」

「彼女のは特別らしいよ」

「じゃあさ、皆でユイさんのお見舞いに行かない？」

トモミがそう提案する。コウもリオナも異論はないようだ。

「私はちよつと用事があるからパスね」

レルフイムはそう言うと、弁当のオムライスを一口食べた。

「私も。今日は美食ツアーの録り溜めしたのを見ないとね」

彼女たちがいない方が静かでもいいかもしれない。あまり多人数でおしかけても迷惑をかけるだけだ。

「決まりね。レル फिल्मちゃんとアリシアちゃんは仕方ないけど…私達だけでも行きましょ」  
「そうだな。もしかすると奇跡の瞬間に立ち会えるかもしれないんだからな」  
奇跡の瞬間、というのはいくらなんでも言いすぎだろうが、確かにHASから復帰したという例は聞いたことがない。  
「もしかすると雑誌の取材とか来るかもな!」  
「いや……さすがにそれはないと思うよ……?」

学校を終えた僕達は病院へと向かう。

受付で面会バッチを受け取ると、彼女の病室へと向かった。

「失礼します」

先日話をした老婆がいた。

「いらつしゃい。おや、今日はお友達も一緒かい」  
老婆は嬉しそうな表情を浮かべる。

「はい、今日も東條さんのお見舞いにきました」

「ああ、あの子かい。あの子は……」

ふと東條さんのベッドの方を見ると、そこには彼女の姿はなかった。

「今日のお昼くらいに目を覚まして、今検査に出かけているよ」

それを聞いて僕達は驚く。彼女が目覚ますことを信じていたが、こうして実際に目の当たりにするとやはり驚く。

「嘘だろ……? HASから復帰なんて話、聞いたことねえよ……」

「レル फिल्मちゃんの言葉を信じてよかったね」

僕はトモミの言葉にうん、うんと頷く。やはりレル फिल्मに心を差し出して正解だったようだ。

「あらシメコさん、お見舞いですか?」

ふと気付くと、扉の辺りに看護婦さんが立っていた。そして彼女が押していた車椅子に座っていたのは……。

「東條さん!」

「あら、東條さんのお見舞い？ 話が伝わるのも早いわね」

看護婦さんは車椅子を押していく。僕達は脇に逸れて道を空けた。

「えっと……坂下君……ですよね？」

彼女はベッドに戻ると、一番に僕へと声をかけてきた。

「う、うん。東條さん、意識が戻ってよかった……」

「あの、なんでなのかわかりませんが……ありがとうございます  
そう言っただけです。ありがとうございます。」

「え、何？ いきなりどうしたの？」

「なんでかわからないですけど……黒薔薇の女の子が、起きたら一番にあなたにお礼をしろと言っていた……気がするんです」

黒薔薇の女の子というだけです。誰かわかった。間違いなくレル  
フイムだろう。

「黒薔薇の女の子？ 誰だそりゃ？」

「コウだけが誰だかわからないようだった。僕はひとまず彼は放つて  
おいて、彼女のベッドの隣に椅子を置いて腰かける。」

「体の具合は大丈夫？」

「少しだるいですけど、大丈夫です。お医者様も来週からは学校に  
行けるとおっしゃっていました」

「来週？ ずいぶん早いんだな」

「聞いた話によりますと、この病気は体を蝕むわけではないそうなので、意識が戻らないこと他に異常が見つからないそうなんです。  
私が意識を失っていた期間はまだ短いそうなので、軽いリハビリを  
するだけで元のように体を動かせるようになるとお医者様はおっし  
やっています」

「ほ……。なんていうか、色々と拍子抜けするな。あんなにも世  
界を騒がせた病気が……意識さえ起こせばちよつとのリハビリで大  
丈夫とはな……」

彼女は小さなため息をつく。

「私、半年もの間、眠っていたんですね。なんだかそのことが私  
には信じられません。もし、半年も眠っていたのなら……」

彼女はそこで一息おくと、にこっと笑って話し始める。

「学校の出席率が気になります」

その笑顔は思っていたよりも可愛くて、僕は思わずドキッとしてしまった。

どこまでも広がるビル街。夜に沈んだ街並みには未だ活動の証の電灯が明るく灯っていた。

強い風が吹きすさぶ。その度に黒い羽が何枚か宙を舞う。

レルフイムは一人、街中のビルの屋上に立っていた。

背中には巨大な黒翼をたたえ、時折小さくはばたく。

「エルフイド」

彼女の手のひらが黒く輝くと、それに呼応するかのようにビルの屋上に黒い陣が浮かび上がる。

それはいつものように黒い庭園を展開することはなかった。だが、その効果に満足したのか、彼女はにこりと笑って手を下す。

「何をしているの？」

そのとき、鋭い声がかげられる。レルフイムはしばらくの間動かなかったが、やがてゆっくりと振り返った。

「あなた、夢の美食ツアーを見るんじゃないの？」

「こそこそと街の至る場所にこんなものを設置されたら誰だって気になるわよ。……一体何のつもり？」

アリシアの手が緑に輝く。それに呼応するように屋上に設置された黒い陣が光る。中心には一振りの剣。アリシアはそれに手をかけた。

「こんなもの……禁咒のエルフイドを使って何をするつもり？」

「あなたに教える義理も義務もないわよ？」

「もしユウタロウを巻き込んで何か危ないことをするつもりなら……」

より強い風が吹きすさぶ。アリシアの周りの幾重にも風が巻き起こる。

「私はあなたを倒し、やめさせる」

アリシアは真剣な表情でレル फिल्मを見つめる。しばらくの間レル फिल्मはアリシアに視線を合わせていたが、やがて大きな声で笑い始める。

「あはははは！ あなたって、本当におかしいわ！」

「何がおかしいの！」

「私はユウタロウのことが好き。あの心を思う存分味わい尽くすことができればどんなに幸せでしょうかね」

「それが……それが一体何よ？」

「そんな好きな人を危険な目に合わせると思う？」

アリシアは言葉を詰まらせる。

「手を離しなさい。この陣は別に彼を危険な目に合わせようとか、人を捕まえてどうしようとかってわけじゃないわ。目的はまだ秘密だけど、これだけは信用してほしいわね」

「誰があなたのことなんか……」

「私はユウタロウと約束した。もう人を襲わない、とね。私は約束を守る女よ？ 私達の間には交わされた契約するのはどれだけ重い価値を持っているか、あなたもわかるわよね？」

「それは……」

「なら、あなたは黙って指でもくわえて見てなさい」

レル फिल्मの黒い翼が大きく広がる。

「まだ私は他のエルフィドのチェックをしないといけないから行くわね。ユウタロウ達が戻ってくる前に家に戻って、テレビでも見たら？」

「待ちなさい！」

レル फिल्मは夜の街へと飛び出した。その姿はすぐに闇夜にまぎれて見えなくなる。

アリシアも後を追おうと思ったが、すぐに見えなくなってしまい、諦めることにした。探そうと思えば探すこともできたが、そりよりも彼女の言葉が気になった。

彼女のことを信じる、とはどういうことなのだろうか。信じるというからには目的を教えてくれてもいい気がする。だが、彼女は目的も告げぬまま行ってしまった。

確かに、ユジューにとって契約という言葉は重い意味を持つ。それが交わされたからには絶対に守らなければならぬものであり、カードであるうともそれを破ることは許されない。感情の力は信頼によって持続的に得られるものだ。信頼を裏切れば、感情の力を相手から得ることはできない。

それはユジューにとって食事を絶つことと等しい。エネルギーを得なければユジューも生きていくことはできない。

アリシアはビルの屋上に戻ると、レルフイムが残っていた剣を見つめる。

このエルフィドは禁呪のエルフィドと呼ばれるもので、複数同時にエルフィドを展開することによって、とてつもなく強い力を生み出すことができるため、人間界で行使することは禁止されているものである。

街中に散らばる幾十幾百ものエルフィドを同時に発動させればそれだけ力は何乗もされて、強力な力が生まれる。それほどまでに強力な力を発動しなければならぬ理由などあるのだろうか。

アリシアにはレルフイムが何を考えているのかわからなかった。

もうすぐ時間は19時となる。ここまで遅くなればユウタロウ達も帰ってきてしまうだろう。ユウタロウには余計な心配をかけたくなかった。

アリシアはもう一度剣を見たが、首をぶんぶんと振る。

「レルフイムを……信じましょう」

そう一言呟くと、剣をその場に残したまま飛び立った。

僕が家に戻ると、予想通りアリシアはテレビを見ていた。

「ただいま」

「おかえりなさい」

ぼりぼりとポテトチップスを食べながら、ソファに横になってテレビを見ているアリシアの姿は、女の子にあるまじき姿だと思った。

「まあ……アリシアだから仕方ないけどね」

「何か言った？」

「何も言っていないよ」

僕は荷物を置くと、冷蔵庫からインスタントコーヒーのボトルを取り出して、コップに注ぐ。

「レルフイムは？」

「まだ帰ってきてないわよ」

「そっか」

僕はコーヒーを飲む。ほろりと苦いコーヒーが舌を刺激する。

「そろそろご飯の支度でもするかな……」

時間は19時。そろそろお腹が空いてくる時間だ。

「でもまだレルフイム帰ってきてないしな……」

「いいわよ、あんなの放っておけば。さっさと食べましょ」

食べる気満々なのか、テレビを消して台所の方までアリシアはやってきた。僕はふうとため息をついて、立ち上がる。

「わかったよ」

コーヒーを片付けると、僕は台所に立った。

「ねえユウタロウ」

晩ご飯の準備に鍋を洗っている僕にアリシアは声をかけてくる。

「ん？」

「いつになったら……私のリトマスに戻ってくるかな……？」

鍋を洗う僕の手が止まる。

水道から水が流れ落ちる音だけが辺りを支配する。

「わからない……」

それだけ言うと、僕は鍋を洗う手を再び動かした。

「だよ。あのレルフイムが簡単に諦めるわけないもんね」

僕は汚れのついた鍋をこする手に力を込める。

「ごめんね、アリシア」

「ううん、ユウタロウは何も悪くないよ」

水の中にいっぱいまで入れて、洗剤の泡を落とす。そして、布巾を持ってきて水を拭く。

「レルフイムが人を襲わないって約束したのは大きいよ。メセブリイでもレルフイムの存在は脅威だったもの。それが今や私達の仲間となつて積極的に手伝ってくれる。昨日だってカードと戦ってくれた。それに、私よりもレルフイムの方が強いもん」

「そんな……アリシアだつて強いじゃないか」

「わかつてる。私とレルフイムが戦ったら負けるのは私。そんなことは戦わなくなつてわかつてるわ。だから、ここは私が身を引くべきなんだよ」

「アリシア……」

彼女はしばらくの間悲しそうな表情を浮かべていたが、やがてにっこりと笑つて顔を上げる。

「私はユウタロウと一緒にいれるだけでいいから！ だから、そんな悲しそうな表情を浮かべないで」

アリシアが僕の顔に触れる。そんなにも僕は酷い顔をしていたのだろうか。

「ありがとう、アリシア」

僕は鍋を置いてアリシアの体を抱きしめる。彼女は頬を赤く染めたが、嫌そうな表情は浮かべない。

顔と顔の距離がとても近かった。吐息が触れ合うほどの距離。僕はアリシアの目を見つめる。

「なんだか……恥ずかしい……」

「僕も少し……でも……」

アリシアも僕のことを見つめてくる。

「僕はレルフイムよりも……アリシアのことが好きだから」

「ありがとう……」

アリシアはそつと目を瞑る。僕も目を瞑った。

そして、彼女の唇に自分の唇を……。

「ただいま」

そのとき、玄関の方からレルフイムの声が聞こえてくる。僕とアリシアは慌てて離れる。

「ただいま……ってアリシア、台所なんて立ってあなた料理なんかできたの？」

「うるさい！ 馬鹿！」

アリシアはそう怒鳴るとどこかへ行ってしまう。

「変なの」

レルフイムは呆れたような表情を浮かべると、ソファに腰を下した。僕は自分の胸に手を当てる。心臓がばくばくと鼓動していた。僕はアリシアに一体何をしようとしていたのだろうか。

数秒前までの状況を思い出して、僕は思わず頬が熱くなるのを感じる。

「ユウタロウ、どうしたの？」

「え、あ、いや、そのご飯作ろうと思って……!!？」

そのとき、レルフイムが僕の額に手を当てる。

「頬が真っ赤だし、なんだか熱いわよ？ 風邪でもひいてるんじゃないの？」

「いや、大丈夫！ 大丈夫だから！」

僕はレルフイムを台所から追い出す。これ以上見られるのは恥ずかしい。

「レルフイムはそつちでテレビでも見てて！ 僕は料理作るからさ

！」

「?」

レルフイムは不服そうな表情を浮かべながらもリビングへと戻っていく。僕は彼女に背を向けると自分の頬に手を当てる。

彼女の言う通り、確かに熱くなっている。外見からわかるほどのだから、相当なのだろう。

「ああ！ 僕はなんてことをしてしまったんだろう……」

ちらりとアリシアの駆けて行った方を窺ってみる。もちろんのことながら戻ってきてはいない。

ちよっと惜しいような、後悔したようなもやもやとした気分の中、僕は晩ご飯を作り始めた。

せっかく作った晩ご飯だったが、結局アリシアは降りてこなかった。

## 第十二話（後書き）

ラブコメ展開になってきました。これから先はラブラブコメコメな展開が増えていくかと思われます。

## 第十三話（前書き）

ラブコメのバーゲンセールはまだまだ続きます。

## 第十三話

### 第十三話

摩天楼。

地上から数百メートルの高さの高層ビルが林立している。吹きすさぶ風に流されるように黒い羽が舞う。

強く吹き荒れる風に煽られることもなく、レルフィムはビルの屋上に剣を突き立てていた。

「これで100本目……。そろそろしんどくなってきたわね」

額に浮かべた汗が、発光する陣に照らされて明るく輝く。光る陣はすぐにその輝きを失い、また元の屋上の様相を見せる。

「さて、そろそろかしら？」

レルフィムは躊躇することなくビルの屋上から身を躍らせる。背中から大きな羽が広がり、漆黒の空を駆けるように飛ぶ。

「下準備は終わったわ。あとは……その時が来るのを待つだけだわどこまでも飛んでいく。眼下に広がる眠らない街は飛ぶように流れていき、やがて静かに眠る住宅街に到着する。

ばさばさと羽を動かして、レルフィムは公園に降りる。

「ぶっ」

羽を背中にしまうと、彼女は近くのベンチに腰かけた。

そして目を瞑り、大きく深呼吸する。

「……あら、あなたに用はないわよ？」

彼女は目を瞑ったまま、闇夜に潜むそれへと声をかける。

弾かれるようにレルフィムは立ち上がると、空中に踊り出す。

次の瞬間、彼女が座っていたベンチが吹き飛んだ。

午前五時。

僕は何とも言えない気配を感じ取って目を覚ました。すぐに直感する。この気配は『ヤツ』だと。

体が重い。何日もこの感覚を感じていなかったがために、判断が鈍ったのだろうか。

すでもう、『ヤツ』は僕の上、あるいはそばで僕を拘束しているようだ。そして、夢を食らっていたに違いない。

僕が目を覚ました今、きつと『ヤツ』は意識を沈めに殴りかかってくるだろう。だが、こうして体を拘束されてしまつては防ぐことも避けることもできない。

僕は諦めにも似た感情で目を瞑る。すぐに襲いかかってくるであろう衝撃に耐え、少しでも苦痛を減らすために備えることにした。

……そうして体を固めて何秒が経過しただろうか。いつまで経つても何も起こらないことに違和感を感じつつも、僕はゆっくりと目を開いた。

ようやくこの頃頭の感覚が冴えてくる。こうやって感覚を取り戻すと、僕は上から押さえつけられているのではなく、横からだき抱えられているということに気付いた。

僕はゆっくりと視線を上から横へとずらしていった。すると、そこには眼前一杯に広がるアリシアの寝顔があった。

「!?!」

思わず大声を出しかけて、それをなんとか飲み込む。僕の隣には、僕を抱えるようにして眠る一人の少女がいた。

混乱する頭でなんとか状況を整理しようとするが、考えがまとまらない。

そうしているうちに、彼女のぷつくらとした桃色の唇が目に入る。それを見た瞬間、僕の思考は真っ白になった。

思わずごくりと生唾を飲み込んだ。ほんの少し首を動かすだけで、僕は彼女の唇に触れることができる。目は閉じられており、小さく開いた口からは穏やかな寝息が聞こえてくる。

昨日の台所での出来事を思い出す。今ならば、ほんの少し顔を動か

すだけで彼女と接吻を交わすことができるのだ。

僕は目を瞑り、少し首を動かしたところで思いとどまる。意識がない相手の唇を奪ってもよいのだろうか。いや、いいわけがない。

こういうことはお互いの同意の上で行うべきなのだ。

状況で頭の中が困惑してしまっていたが、なんとか理性で引きとめる。数センチの距離のところにも愛らしい寝顔があっても、僕はその神域ともいえる空間を侵さないことに成功する。

あとはこのまま視線をずらすだけである。僕は体をもぞもぞと動かしながら顔の向きを変える。

「ん……」

そのとき、彼女の口から小さな声が漏れる。

ここで少し待て、と僕は静止をかける。彼女が僕を抱きしめているということは、パジャマという名の薄い布一枚に隔てられて肌は密着しているということである。

そのことに気付いた瞬間、僕の心臓は高鳴った。

体の一部に感じる温かくて柔らかい感触。ぎゅうぎゅうと押し付けられているのは彼女の小さな双丘。実物は未だ見たことがないが、それは外から見るだけでもまな板と表現するほどではないが、かなり小さいものだということがわかる。それでも、こうして密着するとその意外なまでの存在感に僕の脳裏は刺激されていた。

このままではヤバイ。変に動けば彼女を起こしてしまうし、かといってこのままの体制を保てば僕の理性の糸が引きちぎれてしまうのも時間の問題である。

「アリシア……」

僕は彼女を起こさないように小さな声で呼び掛ける。彼女にどうかしてほしいという思いと、起こしたくないという矛盾した思いが行動となって現れた結果だった。

「ん……」

だが、そんなことでは状況を打開できるわけがなく、それどころか

名前を呼ばれたことに反応したのか、腕にこめられていた力が強くなった。

「え、ちょ……!!」

ぐいぐいと押し付けられる小さな小さな二つの山。だが、そんなに小さなものであっても、僕を攻撃するには十分な大きさであった。

「ユウタロウ……」

名前を呼ばれてドキッとする。起きたわけではないようだったが、それでも僕の心臓が鐘を打つ速度は倍加する。

正直なところ、息苦しい。全身が酸素不足に襲われ、僕は大きく息を吸い込んだ。そのとき、鼻孔を甘い香りが刺激する。

「これがアリシアの匂い……?」

そんなことを考えた瞬間、息苦しさはさらに増した。ドキドキする、だなんて言葉では言い表せないほどドキドキしている。

「あ、アリシア……?」

僕は再び彼女の名を呼んだ。すると彼女はうつすらと目を開いた。

「ユウ……タロウ?」

焦点の合わない視線を投げかけてくるアリシア。僕はそんな彼女の目を見つめながら、つい息を止めていた。

彼女は体をもぞもぞと動かし、そしてそのまま首を僕の方に伸ばしてくる。

そして、僕の唇に触れるような軽いキスをした。

あれからどれくらい時間が経ったのだろうか。

僕は覚醒と朦朧の境目をさまよいながら、ぼんやりとした頭で考えていた。

あのキスで、僕の頭の中はメチャクチャになってしまった。だから、こうして僕はワケのわからない状態になっているのだろうか。

意識の外から何か少女の声が聞こえてくる。アリシアの声だろうか。ぼんやりとして聞き取れないほどぼやけているその声は、必死に僕

の名前を呼ぶ声のように感じた。

だが僕の意識ははつきりせず、甘いミルクの波で声はかき消されてしまう。

僕はそんな幸せな海に漂いながら、ぼんやりと考える。

アリシアと一緒に過ごせるようになって、僕はとても幸せな気分だ。今まで日常だったそれを失い、僕はその日常の尊さに気付いた。彼女をどれだけ想っていたかに気付いた。

そして、僕は今その日常を再び取り戻すことに成功した。それどころか、更に二人の距離を縮め、キスマでしてしまったのだ。

こんな日々を幸せと呼ばずになんと呼ぶだろうか。まるでクリームの海を泳いでいるような甘い日々。こんな幸福を享受できる日が訪れるなんて思ってもいなかった。

あとはレルフイムとの契約を解除し、再びアリシアと契約することができればどんなにいいだろうか。また僕は彼女と同じ土俵に立って戦えるのだ。

レルフイムにはちょっと悪いが、僕はそうなることを強く望んでいる。だが、僕はレルフイムとも契約をしたことを忘れてはいない。

僕が彼女と契約する代わりに彼女は人を襲わなくするという契約。それは今も効果を發揮し、そしてうつすらとした絆で二人を結んでいる。

「……！」

また声が聞こえる。

ごうごうと轟くミルクの波はその声をかき消してしまった。今はどうも周りの声が聞こえ辛いようだ。

こんなにも長い間、彼女からの呼びかけに黙っていたのは、きつと怒られてしまっただろう。クリームの海を泳ぐことは楽しかったが、そろそろ目を覚まさなければならぬようだ。

僕は陸へと目指して泳ぎ始める。急に感覚が研ぎ済まされてくるのを感じる。

そして陸へと上がる瞬間、かき消えそうほど小さな声を波間に聞い

た。

「ユウタロウ、助けて！」

目を覚ますと、アリシアが僕の顔を触っていた。

「きゃ！ ゆ、ユウタロウ起きちゃった！？」

「アリシア、何してるの？」

彼女は頬を赤く染めて、もじもじとしながら答えた。

「ゆ、ユウタロウの顔を……触ってた」

「正直で大変よろしい」

僕は上半身を起こす。

僕達の上にかけられていた布団がずり落ちる。

アリシアはピンク色のワンピースタイプのパジャマを身にまとって  
いた。

「可愛いパジャマだね」

「う、うん……ありがとう……」

彼女は更に頬を赤らめて視線をそらした。そんな彼女の様子がたま  
らなく可愛い。

「ねえ、ユウタロウ？」

「ん？」

「……してもいい？」

何かをもごもごと言っていたが、その言葉を聞き取ることはできな  
かった。

「え、何？」

「き……キス……」

彼女の頬はリンゴのように赤く染まり、目はうるうるると潤んでいる。  
僕はそんなことはなんでもないように、けれども心の内ではドキド  
キしながら頷いた。

アリシアは上半身を起こすと僕の体を抱きしめて、ゆっくりとキスを  
した。

「ん……」

長いようで短い一瞬。甘い余韻を残しながら僕達は離れた。

「なんだかすごくドキドキする……」

「ぼ、僕も……」

僕達は顔を見合わせて、笑い合う。

「うふふ、なんだかおかしいわ」

「あはは、そうだね」

アリシアは着替えに一旦部屋に戻ることにした。僕は彼女を見送ると、学校の制服に着替えた。

鏡の前に立って、ネクタイが曲がっていないか確認する。変な格好になっていたらアリシアに笑われてしまうだろう。

それにしても、こんなことを意識するのは初めてだった。そんな自身の変化に思わず笑いがこみあげてくる。

きちんと服装を整えた僕は階下のリビングへと降りていく。すでに準備を終えたアリシアが勝手に出してきたのか、あんぱんをもふもふと食べていた。

「レルフイムは？ まだ降りてきてないのかな？」

「さあ？ 私は見てないわよ」

時計の方を見る。時間は7時。彼女がいつも起きてくる時間とはとくに過ぎていた。

「ちよつと見てくる」

僕は少し心配になって、二階の彼女の部屋へと向かう。

「レルフイム？ ご飯の時間だよ？」

半開きになった扉に違和感を覚えつつも、僕はノックをしてから扉を開く。

「レルフイム……？」

いつもならば、黒薔薇の少女が安息の一時を過ごしているその部屋に、彼女の姿はなかった。

レル फिल्मがいないことに一抹の不安を覚えた僕だったが、時間になつたので家を出る。彼女には家の鍵を渡してあるので、家の戸締まりはきちんと済ませていく。

いつもの場所に到着し、いつものメンバーと合流する。

「あれ、レル फिल्मちゃんは？」

コウが不思議そうな表情で尋ねてくる。

「なんか出かけちゃったみたい……」

「は？ 出かけたって学校は？」

「サボリ……なのかなあ……」

「なんていうか、フリーダムな人なんだな……」

感慨深い表情でコウは頷く。

「きつとあいつのことだからまたよからぬことを考えているに違いないね」

「そう決めつけるのはよくないと思うけど…… ちょっと心配ね」

トモミは何か思うことがあるのか、顎に手を当てて考え込む。

「ともかく行きましょ。ここで待たたって来るわけじゃないし」

「そうだな」

僕達はそうして今日も学校に向かう。

元気に登校してくる生徒達。その中のどこかにレル फिल्मがいないかと僕は目をこらしていたが、その姿を見つけることはできなかった。

教室に到着するとすぐにホームルームが始まった。

いつも通りの一日を過ごし、いつも通りの昼食を済ませ、いつも通り放課後になる。

放課後になって皆と集合すると、この後どうするかを決めることにした。

「今日はどうするね？」

「僕は東條さんが気になるかな……」

「私も気になる」

昨日は大したことを聞き出せなかったが、もしかするとレル फिल्म

について、さらにはこの戦いについて何か覚えているかもしれない。そうだとすると色々と厄介だ。

「悪い、俺は今日部活行かないといけないんだ」

「え、部活？」

「部活なんか入ってたの？」

「…………どうせ俺は影の薄いエースだよ…………写真展にだって出品して、銀賞を取ったんだぜ？」

よくよく思い出してみると、写真展に出品したようなことを言っていた気がする。

「つて、お前そういえば来るみたいなこと言っていて来なかったろ

…………」

「あ！ そ、そういえばそんなこともあったかなー」

そういえばそんな約束をしたような気がする。その日はアリシアとのデートに振り回されてそれどころではなかったが。

「ったく…………。ともかく俺部活だから今日はパス。様子聞いたら報告よろしくな」

「わかった」

そう言っでどこかへと姿を消すコウ。僕達は東條さんの病院へ向けて出発した。

病室に到着する。老婆は検診か何かだろうが、そこにはいなかった。

「調子はどう？」

「大分よくなりました」

ベッドの上で半身を起こした東條さんは元気そうな笑顔を向けてくる。

「あれ、この方は…………」

アリシアを不思議そうな目で見る東條さん。半年前の記憶しかない彼女が知らないのも無理はない。

「この子はアリシアっていうんだ。転校生かな」

「そうなんですか！ よろしく願いします」  
「よろしく」

東條さんはぺこりと頭を下げた。アリシアもお辞儀をする。

「ところでさ、東條さんにいくつか聞きたいんだけど、いいかな？」

「なんででしょうか？」

僕は一度トモミと顔を見合わせると、頷いた。

「意識を失っていた間のこと、何か覚えてる？」

「意識を失っていた間……ですか？」

彼女はうーんと考え込む。

「この前言つてた黒薔薇の女の子の話、もっと聞きたいんだ。もちろんそれ以外のことも……」

しばらくの間考え込んでいたが、やがて顔を上げて話し始める。

「よく覚えていないんですけど……戦っていました」

「誰と……？」

「いろいろな人です。その中には坂下君や神崎さん………そういえばアリシアさんも見覚えがあります……」

「トモミ、アリシア、リオナ。やっぱり東條さんは覚えてる。どうしよう……」

「どうしようもどうしようもないね。このままこっちに引き込めばいいね」

「そういうわけにもいかないでしょ？ 東條さんは元々無関係なのよ？」

「引き込むにしても、人間はリトマスとならなければ戦えないし……」

……誰が彼女と契約するかが問題よね」

「あの……何のお話ですか？」

よくわからない言葉が行き交っているのに不安感を覚えたのか、東條さんが尋ねてくる。僕はどう話せばいいか迷って口をつぐむ。

「東條さん。それが全て事実だとしたらどうする？」

「全て事実……？ そんな夢みたいなきごとがあるんでしょうか……？」

「……それは夢じゃないの。私達が巻き込まれている戦いの一部。ティオナとカードの戦いの一部なの」

「戦い……？ ティオナとカード……？ よくわからないのですが……」

トモミは僕達が巻き込まれている戦いについて簡単におおまかな話をする。

ユジューと呼ばれる種族、ティオナとカードの闘争、僕達の置かれている現状、そして実在する黒薔薇の女の子……。

「そんな……いきなりそんな話をされても……」

「リオナ。あなたの力を見せてあげて」

「わかったね」

リオナは前に歩み出ると、人差し指を立てた。そして小さく何かを呟くと、まるでライターのように指先から炎が上がる。

「これがさつき話したシグマ。手品なんかじゃない、正真正銘の魔法のようなもののな」

「ど、どういう仕組みで……？」

「私達にはそれはわからない。でも、こうした人間とは違うことができるユジューという種族は確かに存在しているの。ここにいるアリシアもそう。そして私達は彼女達ユジューティオナに協力するリトマスという人間。そして、元はあなたもリトマスだったのよ」

「私が……そんな戦いに巻き込まれていたなんて……」

東條さんは視線を落とす。

「東條さん、私達からお願いがああるの。力を貸してほしい」

「私が……皆さんをお手伝いを……？」

「私達は常に人手不足なの。今も強力な敵が現れて……昨日からレルフイム……黒薔薇の女の子が行方不明なの」

「え！？」

「トモミ、それはさすがに無関係じゃないかな……？」

「可能性は無きにしもあらずよ。カードとの戦いに巻き込まれた可能性だって否定できないもの」

「あ、えつと……その……」

東條さんが何か言いたげにする。

「私、そのレルフィムさんに会ってみたいです！ 会えるんですね？」

「うーん……まあ、帰ってくれば会えるとは思っけど……」

残念ながら、彼女は行方不明だ。今すぐ、というわけにはいかないだろう。

「ともかく、会えたら連絡するよ」

「はい、ありがとうございます」

東條さんはぺこりと頭を下げる。

それにしても、レルフィムはどこに行ってしまったのだろうか。いくらなんでも、声もかけずになくなるというのは少しおかしい。

「ん……？」

今、ぼんやりとだが、何かが聞こえたような気がした。

「誰か僕のこと、呼んだ？」

「誰も呼んでないね」

「けど、今確かに」

『ユウタロウ！』

「誰かが……呼んでる」

「どうしたの？」

アリシアが不思議そうに僕の顔を覗きこむ。

「この声は……朝聞こえた……」

そう、ミルクの海の波の狭間で聞いたあの声。陸に上がる寸前に聞いた助けを呼ぶ声。

今の今までなんで忘れていたのだろうか。あの声は確かに僕に助けを求めていたではないか。

「ユウタロウ？」

僕は声のする方へと歩き出す。遠い距離ではない。彼女はきつとすぐ近くにいます。

「東條さん！ 着いてきて！」

僕はそれだけ言うと病室から飛び出した。

「ちよつとユウタロウ!？」

その後を慌てて皆が追いかけてくる。

『助けて……ユウタロウ!』

その声はどんどん近付いてきている。間違はなく、すぐ近くに彼女はいる。

階段を駆け上がり、硬く閉じられた屋上へのドアを体で押し開ける。屋上には白いシートが何枚も揺れていた。その白い林の中に彼女はいるに違いない。

「レル फिल्म!」

僕は大きな声で呼び掛ける。だが、返事はない。

「レル फिल्म、どこにいるの?」

そのまま白いシートが揺れる屋上を歩き始める。

しばらく歩いていくと、やがて給水塔にたどり着いた。僕はその裏側の暗い場所に回ってみる。

そこには、血まみれになった黒薔薇の天使が倒れていた。

その数時間前の公園。

ベンチへと放たれた一撃を回避したレル फिल्मは羽を抜くと、剣に姿を変えて構える。

「目標の暗殺に失敗。第一の命令放棄、第二命令へと移行」

両手に銃を構えた少女は高く飛び上がると、街灯の上に降り立った。

「第二命令、直接戦闘による目標破壊」

そして遠慮することもなく銃の引き金を絞った。

軽い衝撃とは裏腹に凶悪なまでの勢いを持った銃弾が飛び出す。

「くっ!」

レル फिल्मは剣で弾丸の軌跡をずらしてかわす。剣が弾丸に触れた瞬間、しびれるような衝撃が彼女を襲う。

「せめて名前くらい名乗ったら?」

「……………」  
銃使いの少女は返答の代わりに弾丸を撃ち出す。レルフィムは横に飛んで回避すると、剣を数本飛ばした。

街灯の上に立っていた少女をまっすぐに狙った剣は、しかし少女は再び大きく飛んで回避し、闇の中へと消えていく。

「センラ！」

蠢く闇が形を成し、槍となって少女へと襲いかかる。

だが、少女はそれを銃を交差させて防ぐと、小さく口を動かした。

「……………」

それは風に流されて聞き取ることはできない。だが、確かに効力を発揮したのか、彼女の手足を光るリングが包む。

「加速……………ね」

レルフィムは小さく舌打ちすると、剣を放った。

移動速度が数倍にまで加速された少女にその剣が当たることはない。銃声が一度轟く。レルフィムは剣を構えると、迫り来る一発の弾丸を防ごうと剣を振るった。

彼女の体を襲う“二度”の衝撃。

確かに一発は剣に当たり……………そしてもう一発は彼女の肩を貫いた。

「かはっ！」

レルフィムは傷口を押さえると、ふらふらと数歩よろめく。

それはクイックトリックと呼ばれる高速射撃術。

銃の引き金を高速で引くことにより、一回の銃声で二発分の攻撃を与えることができる。

「はあ、はあ……………くっ！ まずいわね……………」

弾丸は左肩を貫通したようで、前と後ろに二つ傷口が空いている。

「目標命中。続けて攻撃する」

少女が強く地面を蹴る。その瞬間、まるで飛んだかのように一気に距離を縮める。

「ッ……………」

二丁の銃を交差させながら強く打ちつけてくる。レルフィムはそれ

をなんとか片手で剣を操って防ぐ。

「私が手負いだから、もう弾を撃つ必要はないっていうの？ 舐められたものね」

レル फिल्मは深く踏み込んで相手の銃を弾くと、横向きに薙ぎ払った。

少女は後退して回避する。その隙にレル फिल्मは翼を広げた。

「でも、悔しいけど私の負けね」

「！」

彼女はそのまま深遠なる闇へと飛び出す。

下方から銃声が響く。そのうちの何発かがレル फिल्मの体をかすめ、貫いた。

「いつつ！」

ぼたぼたと血の滴が垂れ落ちる。

レル फिल्मは苦しそうな声を上げながら空を飛んだ。

「レル फिल्म！ レル फिल्म！ 大丈夫！？」

僕は倒れているレル फिल्मに大きな声で呼び掛けた。

彼女は呼吸は弱かったが、うつすらと目を開いて笑った。

「やっと来てくれたのね」

彼女はそう嬉しそうに言うのと体を起こした。

「う……」

だが、傷の痛みにうめいてそのまますぐに倒れてしまう。

「動かないで！」

僕はレル फिल्मに動かないように言うと、彼女の傷を見た。

全身至る場所にすり傷や銃創があった。いくつかは塞がりつつあったが、重傷なのはすぐにわかる。

「最強、とまで言われたカードがこのザマよ。まったく情けないわ」  
彼女は自嘲気味にそう言うと、薄く笑った。

「一体誰が……？」

「アイツよ。ノエルと一緒にいた銃使いの女。エルフィドを使わずに戦ったら負けちゃったわ」

「レルフィム!？」

その頃、ようやくアリシア達が到着する。傷付いたレルフィムを見て、一同は息を飲む。

「酷い怪我……私、お医者様を……」

「待ちなさい。それはちよっと困るわ……ごほっごほっ」

レルフィムはなんとか体を起こすと、医者を呼びに走ろうとした東條さんを止める。

「こんな状態じゃ羽がしまえないわ。このままじゃ私が人間じゃないということがバレてしまう。それは非常にマズイのよ」

「だからってこのまま放っておくってわけには……」

「そうだ！ リオナのムーティエンのシグマには回復のシグマはないの?」

僕はリオナの方を見る。だが、彼女は首を横に振った。

「ないね。そもそも再生のシグマは超高級のシグマね。発現できる者は滅多にいないね」

「そうだ！ 僕のシグマを使えば……」

しかし、そこまで言って僕は思い出す。僕は確かに回復のシグマを使うことができたが、その使い方がわからない。

「……クソ、使い方がわからない……」

「人間がシグマを使うことができたということがほとんど奇跡のよ。うなものよ。そう何度も簡単にできるようなことじゃないわ」

「なんで……僕はこんなに無力なんだ……」

このままレルフィムは死んでしまうのだろうか。折角仲良くなったのに、それは嫌だった。

「僕、レルフィムが死んだら嫌だよ。最初はカードだったけど、やつとわかりあえたのに……なんで僕はこんなにも無力なんだ!」

僕は思い切り拳を給水塔に叩き付けた。一際大きな音が響き、拳が痛む。

こんなことをしたところで無意味なことはわかってた。だが、このやり場のない怒りを何かにぶつけないと気が済まなかった。

「一つだけ方法があるわ」

「え……？」

レルフィムがぼそりと呟くように言った。

「私が……またあなたと契約して、レミトネイション・ドルラスを出せばいいのよ」

そう言つて、彼女が指をさしたのは東條さんだった。

「私と……契約……？」

「意識を失つていたとはいえ、確かにあなたは私のリトマスだった。そしてそのときに使えた剣の能力は吸収。相手から力を奪い、そして他の者へ与える能力。ちよこつとあなたの感情の力をもらつて、私を回復するのに使えば私の傷はすぐに癒えるわ」

「私の……感情の力……」

しばらくの間東條さんは黙っていたが、やがて決心したのか顔を上げて頷いた。

「私、契約します！」

「じゃあ、すぐに始めるわ」

レルフィムは東條さんの手を取ると、目を瞑った。

「ムーティエン、レミトネイション・ドルラス……いえ、これは…

…」

重なつた二人の手がより一層強く輝く。

「ソルバブ・ドルラス、顕現」

光が強く輝き、レルフィムの手に集まる。

そこには見事なまでの宝飾が施された長剣が現れる。

「これが……あなたの心の本当の姿」

レルフィムはその美しい剣をまじまじと見つめる。

「これが……ムーティエンなんですか……？」

東條さんもその神々しい剣に見惚れるように見入る。

レルフィムは目を瞑つて深呼吸すると、その剣のためらうことなく

自分の胸を貫いた。

一瞬ぴくりと震えたが、やがて深く息を吐いた。

「凄い……今までの剣とは比べ物にならないほどの力が流れ込んでくる……これが真のムーティエンの力……」

みるみるうちにレルフィムの傷が塞がっていく。

「もう大丈夫」

そう言うと、彼女はゆっくり剣を引き抜いた。

剣が刺さっていた傷口はすぐに塞がり、元のように戻る。

レルフィムはもう一度深呼吸すると、ぽんぽんと服の汚れを払って立ち上がった。

「助かったわ。礼を言わせてもらうわね。ありがとう」

レルフィムはそう言うときょこんと頭を下げる。

そんなレルフィムに恐縮してしまったのか、東條さんは首をぶんぶんと横に振る。

「そんな、私は何も……」

そう言うが否や、彼女の足元が少しふらつく。僕は慌てて東條さんの体を支えた。

「大丈夫？」

「ちよつと力をもらいすぎちゃったみたいね。あなたはゆっくり休みなさい」

そう言うて、レルフィムは東條さんの頭を撫でる。東條さんは小さく頷いた。

「やっぱり私にはこっちの方が合うかもしれないわ」

そう言うて、レルフィムはムーティエンを構える。

「ユウタロウと契約できないのはちよつと悲しいけど……でも、一緒に住んでいられればそれで問題ないわ」

「それって、つまり……」

「残念だけど、今日にて私とユウタロウの契約は終わり。またアリアとでも組むといいわ」

「人を襲わないって約束は……」

「それは守るわよ。今までお世話になったわけだし、これからもお世話になるわけだし……そういつわけでもよろしくね」  
そう言ってレルフィムはにっこりと笑った。

## 第十三話（後書き）

ついにレルフィムとの契約破棄が来ました。これでアリシアはまたユウタロウと契約を交わすことができます、やったねメインヒロイン！

## 第十四話（前書き）

今回は割とシリアスな展開です。

## 第十四話

### 第十四話

今日は土曜日。学校は半日の授業で終わりだ。

僕はうつらうつらとしながら教室の窓から校庭を眺める。授業中の校庭には誰もいない。

昨日はアリシアと契約を交わした。僕はまたアリシアのリトマスとなったのだ。それをとても嬉しく思う。

その後、久しぶりに長いこと話をした。あまりに話しこんでいたため、気付くと午前3時となっていた。

僕達はその後、どういうわけか一緒に布団で眠ることにした。彼女が僕の布団で寝たいと言い張ったのだ。

だが、そんな状況で落ち着いて眠れるわけがなく、結果として一睡もできぬまま朝を迎えてしまったわけだ。

そついうわけで、僕は今たまらなく眠い。まぶたがくっついた瞬間に眠りに落ちそうなほど眠い。できることなら、まぶたの上と下が結婚するのを妨げたくないが、数学の先生は生徒に居眠りを許すほど甘くない。

「その眠そうにしてる坂下。この問題を前に出て解いてみる」

案の定、指名される。僕はあくびを噛み殺しながら教壇の前に立つ。チョークを手に取り、答えを記述する。

「チツ」

数学の先生はここまで聞こえてくる舌打ちをする。この程度の問題を解けない僕ではない。

「次、アリシア。これを解いてみせろ」

今度はフェルマーの小定理を黒板に書きはじめる先生。アリシアは面倒くさそうにため息をつきながら黒板の前に立つ。

こうなると少し長そうだな、と思い僕は再び校庭の方を眺める。

僕は今こんなにも幸せだ。アリシアと一緒に生活がとても楽しいし、今ではあんなふうに肌が接触するほどの距離でもにっこりしたり…  
…こんなにも幸せでよいのだろうかと思えてしまう。

たしかにレルフイムと同居していたり、トモミの背中に感じる哀愁がなんとも言えなかつたりと、いろいろと大変なことはある。それでも僕は今の生活を続けていきたいし、このままの毎日が続けばいいなと思っている。

視界の端で先生の顔が歪んでいるのが見える。アリシアが凄いですピードでチヨークを動かしている。やはりアリシアにはその程度の問題は簡単なのだろうか。

僕は再び視線を外に向けた。

アリシアとレルフイムは出かけると言って校門のところまで別れた。

僕はトモミとリオナ、コウの三人と一緒に帰る。

「今日もアリシアちゃん凄かったよね」

「あんな数式よく解けんな……」

「アリシアは勉強バカね。逆に言うにあんなことしか取り柄がないね」

リオナは手厳しい様子でそう説明する。僕達はそれを聞いて笑った。こうして雑談しながら歩いているうちに別れ道までやってきてしまった。僕達は手を振り合って別れる。

一人だけの帰り道になるとなんだか少し寂しい気分になった。さつさと家に帰ってテレビでも見ようと思い、足を速めた。

最近アリシアの気分がわかったような気がする。確かにあの美食ツアーは面白い。最近はよく一緒になってアリシアと見ている。

昨日の回は料理中で見られなかったので、アリシアが帰ってくる前に見てしまいたい。

近道の公園の中を通り抜けて僕の家へと向かう。  
と、そこで僕の家の変な異変に気付いた。

家の前に何か大きなゴミが転がっている。一体誰が捨てたのだろうか。

僕は憤慨しながらそのゴミに近づいていく。だが、近くで見るとただのゴミではないようだ。

なんと、手と足と頭が生えているではないか。マネキンか何かだろうか。

僕はうつ伏せになって倒れているその向きを変えた。

「……………」

思わず見惚れてしまった。白い肌は陶磁器のように薄く透き通っている。整った顔は西洋人形のように美しい。長い亜麻色の髪はさらさらで、作り物とは思えなかった。

「って、これは人形じゃなくて人だ!」

僕は軽く肩を叩いてみる。ゆっくりとその女性は目を開いた。

「あ、あの……………」

「ど、どうしたんですか?」

その倒れていた女性はゆっくりと手を伸ばす。そして、きゅーという可愛らしい音が鳴った。

「な、何か食べ物を……………」

そしてそのままがくりと意識を失った。

「あのあのあの、その、何とお礼を言っていいか……………」

五杯目になるご飯を食べながらその女性はお礼を言う。それにしてもよく食べるものである。

「大したものじゃないけど、どうぞ」

彼女が差し出した茶碗に六杯目になるご飯をよそう。

「いえ、これはとても素晴らしいです。こんなに美味しいご飯を食べたのは何日ぶりでしょうか!」

長いその亜麻色の髪は外国人のものだろうか。それとも、またユジューだろうか。

ようやく気が済んだのか、彼女は箸を置くと頭を下げる。

「ありがとうございます、ご馳走様でした」

「お粗末様でした」

僕は彼女が使った食器の類を片付ける。

「私の名前はベアトリクスです。以後お見知りおきを」

「あ、僕は坂下ユウタロウ。よろしく」

その頃、ちょうどレルフイムが帰ってきた。

「ただいま。誰かいるのかしら？」

「おかえり。あれ、アリシアは？」

「アリシアはスーパーに行っただわ。で、その女は誰？」

「この人はベアトリクス。僕の家の前で……」

「ああーッ！ あなたはッ！」

突然、ベアトリクスが大きな声を上げてレルフイムを指さす。

「指名手配のカードのレルフイム！ 今すぐ討伐させてもらいます

！」

「え、ちょっと……！」

その女性を中心に光の陣が広がる。それは僕達を包み込み、異なる

世界へと連れていく。

輝きが収まり、うつすらと目を開く。目の前には荘厳な神殿があっ

た。

「え、やっぱりユジュー……？」

僕は剣を構えるベアトリクスを見てぼそりと呟く。

「ちょっと、待ちなさいよ！」

「問答無用です！ 神器エクスリブルカ！」

黄金に輝く剣が抜き放たれる。それはまさにその名の通りの神々し

い光を放つ。

「チツ、面倒ね！」

レルフイムも剣を手に取る。

「聖なる裁きを受けなさい！」

ベアトリクスは大きく剣を振り抜く。その瞬間、剣の切っ先に光の

柱が現れた。それはまっすぐにレルフイムへと伸びていく。

「え、ちよつと！」

レルフイムは大きく横に飛んでなんとか回避する。彼女の後ろにあった天使の石像が粉々に砕け散る。

「な、なんなのよ、一体！」

レルフイムはムーティエンを取り出すと、大きく振った。

ベアトリクスも剣を身構える。

「これは神器エクスリブルカ。異界の聖地アヴァロンより持ち帰った技術を用いて作られた聖なる剣です。振れば光が轟き、かざせばあらゆる攻撃を弾く。鞘は持ち主をあらゆる災厄から守り、柄は握る者に無限の勇氣と力を与える。確かにムーティエンも優れた武器ですが、妖精の加護を得た聖剣には到底かないませんよ」

「それはやってみなきゃわからないじゃないッ！」

レルフイムの動きが加速する。一瞬で距離を詰めるとソルバブ・ドルラスを叩きつけた。

「無駄です」

彼女の言葉通り、かざすだけで見えない壁が出現する。レルフイムの攻撃は見えない壁に遮られて受け止められる。

「く、なんなのコレはッ！」

レルフイムは大きく後ろに下がると、空いている左手を前に突き出した。

「センラ！」

彼女の手を覆うように丸く黒い陣が現れる。それはしばらくの間くるくると回っていたが、一瞬小さくなると黒い槍を撃ち出した。

だが、やはり見えない壁に突き刺さって止まる。

「その程度ですか？」

ベアトリクスはエクスリブルカを大きく振った。閃光が伸び、周りの神像を根こそぎ破壊する。

「危ない危ない危ない！」

僕は地面に伏せて頭を抱える。その上を光の剣が通り過ぎていく。

レルフイムは空を飛んでかわしたようだ。羽を大きく動かし、剣を飛ばす。

「その程度の攻撃！」

またしても神器をかざして攻撃を弾く。剣が次々と撃ち落とされていく。

「いつまでそうしてられるかしら？」

レルフイムは剣を飛ばすことを止めない。そのとき、ベアトリクス  
の表情に曇りが浮かぶ。

「まさか……気付いたというのですか!？」

今まで不動の体制で剣を掲げていたベアトリクスはいきなり剣を振  
った。それを少し体を反らしてレルフイムは回避する。

「やっぱりね……その防御、無限ってわけじゃないみたいね」

彼女はそのまま一気にベアトリクスとの距離を詰める。そしてムー  
ティエンで薙ぎ払った。

「ッ！」

ついに剣がベアトリクスの元へと届く。彼女はエクスリブル力で受  
け止める。

「私の攻撃はこれだけじゃないわ！」

エクスリブル力に弾かれて転がっていた剣がカタカタと音を立てて  
震える。

「さあ！ これでどう!！」

それは自然に起き上がり、ベアトリクスの方へと向いて飛び出し、  
空中で止まる。

「あなたが降参すれば命までは奪わないわ」

ベアトリクスの顔から表情が消える。

「あなたは勘違いしています」

「え？」

「ユージュ―界最高機関のメセブレイ議長力はこの神器が全てだと  
思っているのですか？」

「ッ!？」

レルフィムは翼を大きく動かして後ろに飛んだ。そこにいた彼女を空間ごとえぐるように光が集まる。

「神器だけで議長になれるならば、誰でも議長になれます。確かに人脈や人望は必要でしょう。けれども、それだけでは議長にはなれません」

七つの光の珠が彼女の周りを漂う。

「力なき者に誰が付いていくというのですか？ たとえ口がどんなに達者でも力なき者には何もできません」

光の珠はくるくるとベアトリクスを回る。それは少しずつ減速していき、やがてその動きを止める。

「悪しき存在に引導を渡す聖なる断罪者、それが私ベアトリクスです」

ベアトリクスは片手をまっすぐにレルフィムの方へと向ける。光の珠はその手の掲げるままに飛んでいき、レルフィムへと襲いかかる。

「まだこつちにはこれがあるのよ！」

一度は起き上がり、そして再び地に落ちた剣をもう一度浮かび上げらせる。

今度は途中で止めるなどということとはしない。その体を貫く勢いで飛翔させる。

「戻りなさい！」

光の珠は一瞬で戻ると、それぞれが頂点となって正八面体を形成する。

剣は光の壁に阻まれて止まり、力なく落ちる。

「まだ珠は一つ残っています」

正八面体を作り出してもなお一つの珠は余る。つまり、それを攻撃に使うことができるのだ。

「七分の一でどれだけ攻撃できるってどういうの？」

「あなたを倒すのに、七分の一の力ではもったいないくらいですよ。一つだけ中空に浮かぶ光の珠がより一層強く輝く。」

「ロイフ！」

光の珠は大きく強く輝いた。それは速度も何倍に増して飛び交う。

「その程度が一体なんだと言うの！」

レルフイムは大量の剣を飛ばす。だが、その剣のすき間を縫うように光の珠は飛翔する。

「く……!?!」

それはすぐにレルフイムとの距離を詰め、レルフイムの体を撃ち貫こうと迫り行く。

レルフイムは光の珠にムーティエンを叩きつける。その瞬間、閃光が弾ける。

「きゃああつ！」

レルフイムは大きく吹き飛ばされて地面を転がっていく。

「レルフイム！」

僕はレルフイムに駆け寄る。抱き起こしてみると彼女は気を失っていた。

「離れてください」

ベアトリクスは七つの光の珠を従えてやって来る。彼女は僕のすぐそばまで歩いてくると、感情のない瞳で見下ろした。

「私はカードを倒さなければいけません」

「殺さなくたっていいじゃないか！」

「カードは倒すべき存在。ここでトドメを刺さなければいつまた人々の生活を脅かすかわかりません」

エクスリブル力をまっすぐに僕へ突き付ける。

「私は恩人を傷付けたくありません。離れてください」

「嫌だ！」

「……ふう。困った人ですね」

彼女は剣を握り直す。

「私は恩人ごと討伐すべき者を斬らなければなりません。私としてもそれは避けたいです。どうかどいてもらえませんか？」

僕は口を真一文字に結んでベアトリクスを睨みつける。

彼女は目を瞑って剣を構え直す。

「では……とても悲しいことですが、あなたとはわかりあえなかつたということですね」

そして目を見開き、剣を振り上げる。

「さようなら、ユウタロウさん」

僕は堅く目を瞑る。

そのまぶたの裏側に様々な思い出が蘇る。

アリシアと会った日のこと。アリシアと出かけた日のこと。一緒に寝たときのこと……。

死ぬ直前になって自然と愛しい人の姿が思い浮かんできたのは嬉しかった。せめて死ぬ前にもう一度会いたかったが、それは叶わないだろう。

僕は心の中で彼女に謝る。

勝手に先に逝ってしまったでごめん。

「待って！」

そのとき、神殿に声が響いた。

その声の主が誰かに気付き、僕は目を開いた。

「いえ、待ってください！」

「アリシア！」

視界の端に彼女の姿が映る。

買い物袋を片手に仁王立ちするアリシア。それを見て目を細めるベアトリクス。

「あら、あなたは……」

「ベアトリクス議長、お久しぶりです」

アリシアは彼女の元へと走り寄り、頭を下げた。

「昔私の秘書だった……」

「アリシアです」

彼女は頭を上げると、まっすぐにベアトリクスのことを見据える。

「またですか、ベアトリクス議長」

「え、またって……？」

僕は彼女の言葉の真意を理解できずに聞き返す。

「また勝手に勘違いして関係ない人を討伐しようとしてるじゃないですか！」

「え、だって彼女はカードの……」

「報告書出したじゃないですか！ レルフィムは改心してティオナになったって！ ちゃんと事務の許可もらってるんですよ！」

「あ、あれ……？ そうでしたっけ……？」

「これ、ちゃんと見てください！」

アリシアは何かわからぬ言葉で書かれた紙をベアトリクスに見せる。

「これ、捏造とかじゃないですよ……？」

「違います！ ちゃんと真正銘本物の許可証です！」

ベアトリクスは力無い笑いを浮かべる。

「あ、あれえ……？ また私、やつちやいましたか？」

「まったく！ ベアトリクス議長は勝手に一人で突っ走り過ぎです！ 正義感が強いのはいいことですが、いきなり討伐しないでせめて確保して、審議にかけてから処分を決めるようにしてください！」

「は、はい……。ゴメンナサイ……」

あれほどまでに恐ろしく見えたベアトリクスがアリシアの前ではぺこぺこ頭を下げている様子を見て、僕は思わずぼかんとした。

「ああ、ごめん、ユウタロウ。この人はベアトリクス最高議長。私達の一番トップの人で、議会一のおつちよこちよい。いつも勝手に突っ走って独走して取り返しのつかない事態を引き起こすトラブルメーカー」

「あ、アリシア！ それはちょっと言い過ぎですよ！」

「いいえ、言い過ぎじゃないです。いつも何かしら取り返しのつかない事態を引き起こしてるのはベアトリクス議長じゃないですか！」

「た、たまにはいいことしてるもん……」

「確かに、大罪人レベルカを捕えた功績は大きいですが、なにもその場で消し飛ばすことないじゃないですか！」

どうやら彼女の話の聞いている限り、とんでもないおっちょこちょいのようなようだ。

つまり、僕達は彼女の勘違いのせいで命を落としそうになったということだろうか。それはちょっと納得できない。

「まったくもう、ベアトリクス議長は……私が来なかったらどういうことになってたか……。ユウタロウ、レルフイムは大丈夫？」

「あ、えっと、気を失ってるみたいだけど、普通に息してるよ。多分大丈夫だと思う」

「そう……ならよかったわ。……議長。何逃げようとしてるんですか？」

「あ、えっと、ダメですか？」

「ダメです」

アリシアはにっこりと笑った。

僕はその先は見えないよう、聞かないよう、耳を塞いで目を閉じて隅の方で縮こまっていた。

「で、議長はなんでこっちの世界に来たんですか？」

レルフイムをひとまずベッドに寝かせた僕達はリビングでお茶を飲みながら話し合う。

「そうですね……。まあ、最近カードによる被害が増えつつあるから、というのは表向きの理由ですね」

「本当の理由は……？」

「……ノエルが出たから、です」

その名前は僕にも聞き覚えがある。幾度となく僕達を狙ったカード。彼は特殊なカードなのだろうか。

「人間のユウタロウさんが知らないのは当然ですが……アリシア、あなたは五年前のあの事件を覚えていますか？」

「あの事件……と言いますと、例の爆発事故ですか？」

二人はその事件について説明する。

ユジューは生きていくために人間の感情をエネルギー源としているが、その人間だけに頼った生活を変えようと提唱した者がいた。彼は研究所を設立し、潤沢な予算の元、人間に頼らずに生きていく生命エネルギーを生み出す研究を始めた。

精神サイドに大きく偏ったユジューは物理的なエネルギー摂取だけでは長期間生きていくことはできない。多少は大丈夫だが、すぐに精神面にガタが来て、心を壊してしまうという。

だが、そのエネルギーをもし自力で生み出すことができるようになればどうなるか。それを考え実行に移したのがその研究所だという。しかし途中で実験は失敗したのか、研究所を巻き込むほどの大爆発が発生し、数人の研究員が帰らぬ人となった。

「あの事件とノエルがどういう関係が……？」

「これはあまり外に話しちゃいけないのですが……あなたならば大丈夫でしょう。それと、アリシアが信用するユウタロウさんも……」  
彼女は椅子に座り直してお茶を少し飲む。

ベアトリクスが話した内容をまとめるところのことだ。

その実験は実は成功していたのだ。だが、エネルギーを自力で生み出すということは、すなわち無から有を作り出すということにほかならない。その能力は更なる大きな力を生み出し、この世界に破壊をもたらしたというのだ。

「虚無から引き出した力は危険です。それは無限大に膨れ上がり、止まることを知らない。わかりますか、いくらでも増え続ける強いエネルギー。それがたった一人のユジューによってもたらされるということの恐ろしさ。この世界を支えるパワーバランスが崩れるのです」

「ぼ、僕達が相手していたのはそんな恐ろしい存在なの!？」

他のカードより少し強い程度にしか思っていなかった。だが、実はその程度では済まない強力な力の持ち主だというのだ。

「事故はノエルが？」

「いえ、彼を討とうとした我々の攻撃によって引き起こされた爆発

です」

「討とうとした……？」

「そんな者が存在することを許せばそれこそ世界の危機です」

「ちよつと待つてください。議長達は……自分で生み出した存在に手をかけようとしたのですか？」

「そうですね。彼を放っておくことは危険でした」

彼女の言葉の裏側に僕は何か違和感を感じる。それに気付くよりも早くアリシアは立ち上がった。

「議長、それはつまり何も危害を加えようとしなかった彼を討とうとした、という意味だと捉えてよろしいのですか？」

「……」

「議長！」

アリシアはドンとテーブルを強く叩いた。ガラスのコップの表面についた水滴が滑り落ちる。

「……」

「そうではないと言ってください。彼が暴れたから、だから倒そうとしたと……」

「いいえ、彼は何もしていません。けれども、私達は彼が恐ろしかったから討伐しようとしたのです」

「そんな……それって……」

アリシアの足からすとんと力が抜ける。そのまま椅子に座り込むと、力なく背もたれに寄りかかる。

「絶海の岸壁……あのエルフィドはそういうことだったのね……」

「あれがどうかしたの？」

「あのエルフィドには孤独と憎しみが渦巻いていた。表面ではうまく取り繕っていたかもしれないけど、心の姿を映し出すエルフィドまでは騙しきれなかったというわけね」

「彼は……憎んでいましたか。討ち滅ぼそうとした私達のことを……」

「……」

「誰を憎んでいるかまではわかりませんが……私はあの世界にいる

だけで気分が悪くなりました」

僕はそこまでは感じることはできなかった。これが人間とユジューの差なのだろうか。

「議長はまた……彼を殺しに？」

「……そうです」

「それは……彼が恐ろしい力を持っている存在だからですか？」

「いえ、もうその言葉だけではくなくなりました。彼は実際にカードに力を与え、この人間の世界に住まう人間達の心を確実にすり減らさせています。このままでは人間が滅びるのも時間の問題です。彼は文字通り危険な存在となっているのです」

「でも……そのきっかけを作ったのは議長達ですよ……？」

「……そうですね」

彼女は立ち上がると、背を向けた。

「でも、私達は彼を倒さなければなりません。この世の平和のために……」

それを理解できない僕ではなかったが、アリシアはもちろん、僕も納得できなかった。

「何か……その力だけ取り除くとかの方法はないの？」

「わかりません。でも、現時点では倒す以外の方法は見当たらない、としか言いようがありません」

「……」

僕は彼のことごとくても可哀想に思えた。勝手な都合で生み出されて、勝手な都合で消されようとしているのだ。そんなこと、誰が納得いくのだろうか。

ベアトリクス表情を伺う。彼女もまた納得のいかない一人だろう。彼を生み出したのは彼女だけではないはずだ。

「そういうわけで、こちら側の世界にしばらく滞在させてもらいます」

「え……？ ちょっと待って、それってもしかして……」

「こちら側に滞在する間、置いてもらえませんか？」

やっぱりそういうことですか。

僕の家はユージュ専用宿か何かだろうか。

「もちろん、お礼はします」

彼女がそう言うと、懐を探り始めた。

「これでいかがでしょうか」

そういつて彼女がテーブルの上に置いたのは……日本円の札束だった。それが次から次へと積みまれていく。

「え、ちょ、な、これは一体何!？」

「足りませんか……?」

これだけあれば良質のアパートを数年間借りられそうに思うのだが、そういうことには疎いのだろうか。それともここでないと何かダメな理由でもあるのだろうか。

ざっと見て一千万円はある。謝礼としては十分過ぎるほどであった。

「いや、こんなん受け取れませんか!」

「食費とか、各種光熱費とかが必要になりますよね。それにアリシア達の迷惑料ということも含めて……」

確かに迷惑である。だが、こんなに受け取ってもいいものだろうか。

「受け取らないなら燃やします。私には必要ないので」

「わ、わかりました! 受け取りますよ!」

つまり、僕に選択権はないようである。受け取って彼女を住まわせるか、受け取らないで彼女を住まわせるかのどちらかで、彼女を追い出すという選択肢はないようだ。

「ありがとうございます。では、よろしく願います」

彼女はぺこりと頭を下げる。この家はいつから異世界人専用宿泊施設になったのだろうか。

何はともあれ、また一人僕の家に住人が増えてしまった。

## 第十四話（後書き）

またしても新キャラが出てきてしまいました。

某RPG第九作目に出てくる女騎士は関係ないです。

## 第十五話（前書き）

今回はかなりギャグに走っています。この時期は大魔法峠に影響された時期でした。

## 第十五話

### 第十五話

「まったく、酷い目に遭ったわ」

「本当にね……」

僕とレルフィムは二人で買い物に来ていた。

レルフィム曰く、いきなり攻撃されたことに対する迷惑料とのことだ。もちろん、アリシアは猛反対したが、僕はこうして拉致られてしまった。具体的に言つと、アリシアと二人で歩いている最中にいきなり空中にさらわれた感じとでも言えばいいだろうか。

こうして僕は強制的に拉致されてどこぞのショッピングモールに連れてこられていた。せつかく土曜日の午後はアリシアと出かけようと思っていたのに台無しである。

ベアトリクスはあの後昼寝の時間だと言って与えられた部屋に引き籠ってしまった。彼女はユージューだというのに睡眠をきっちり取るのだろうか。

「あ！ あれ可愛い！」

そう言つて彼女はガラスのショーウィンドウに張り付く。僕はため息をついて彼女の隣に並んだ。

レルフィムが指さすのはロザリオのついた黒のリボンである。彼女はただ長い髪を伸ばしているだけだったが、こういうアクセサリーもつけてみたいのだろうか。

「付けてみたいな……ユウタロウの首に」

「なんで僕！？ ってか首輪！？ 意味わかんないよ！」

「えへへ、冗談！ でも、付けてみたいのは本当かな……」

彼女は両手を後ろに回し、上目遣いで僕を見上げる。こうしてまじまじと見るとアリシアに負けず劣らず可愛い。

「わ、わかったよ！ 買えばいいんでしょ……」

僕はずんずんと店の中に入り、リボンを買ってくる。値段は1000円ほど。ちょっと高いが大したことはない。

「はい」

僕は彼女にリボンの入った袋を放った。

「ありがとう」

レルフイムはさっそくりボンを取り出す。二つ一組となっているそれは細かいレースの刺繍が入っている。

「ほら、やっぱり可愛いじゃん！」

そういつて彼女は僕の首にロザリオのついたリボンを巻いた。

「だあかあらあッ！」

「あははっ！」

彼女は笑うと、それで自分の髪を結んでみる。右と左の二カ所。長い黒髪に黒のリボンはとてもよく似合っている。

「どうかな……？」

「似合ってると思うよ」

「ほんと？　ありがとう」

もう一度彼女はにっこりと笑った。

「あんの黒カラスうッ！」

アリシアは一人絹布茶房に入ってデザートをヤケ食いしていた。

「ま、まあアリシアちゃん。落ち着いて」

「まったく、こんなの相手することないね。トモミ、領収書だけ置いてさっさと行くね」

いや、正確には偶然発見したトモミとリオナを伴って、である。

せっかくデートに出かけようとしていた時に彼氏を別の女に拉致られればそりゃヤケ食いしたくもなるだろう。

「ちよつと！　デリシャスパスタパフェはまだなの！？」

「しょ、少々お待ちください！」

店員の対応スピードが追いついていない。すでに彼女の前にはたく

さんの空の器が積み上げられている。

「あのカラスめえ……見つけたら羽を全部むしって引っこ抜いてやるわ！」

「ま、まあアリシアちゃんが怒るのも無理はないと思うけど……」

「放っておけばいいね。アリシアとレルフィルムが戦っている間にトモミが取ればいいね。これぞ山賊の利ね！」

「漁夫の利だと思うけど……」

「そうとも言うね」

「そうとしか言わないから」

そのとき、どこかで聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「ふう、暑くなってきたわね」

「そうだね」

「あの声はッ！」

アリシアの手が止まる。そう、それは紛うことなき愛しのユウタロウと憎きレルフィルムの声だった。

「ここで会ったが百億年、塵芥と変えてくれるわッ！」

「ちょ、アリシアちゃん落ち着いて！」

トモミは憤怒するアリシアをなんとか座らせると、落ち着くように諭した。

「ここで戦ったらアリシアちゃんがヤケ食いしてたのがユウタロウ君にバレちゃうよ！　ここはひとまずさりげなく店を出て、外で待ち伏せしましょう。そうした方がいいから、ね？」

なんとかして落ち着かせないと、明日働く職場がなくなってしまうと思ったトモミはどうにか彼女を落ち着かせる。

「そうね。ここはぐっと我慢だわ」

アリシアは氷の入ったお冷やを一気に飲み干す。ちようどそのころデリシヤスパスタパフェがやってくる。

「これを食べたら出ましよう」

二人に気付かれることなく店の外に出たアリシアだったが、その顔は林檎のように真っ赤である。

「なによなによなによ！ ほっぺたに抹茶がついてたからってそれを舐め取るとかありえるの！？ 死ね！ 死ね！ 死んでしまえッ！」

「まあまあ、落ち着いて……」

トモミも確かにイラツと来たが、ここで取り乱したら荒れ狂うアリシアを止める者がいなくなってしまう。そこでなんとか堪える。最初からリオナには期待していない。

「絶対殺す。あのカラスは絶対に私が殺す」

「落ち着いて……。ともかく、二人を引き離しましょう」

「そうね。あの二人が出てきた瞬間シグマで……」

「それはダメ！ お店が……じゃなくてユウタロウ君が危ないですよ！ 建物の外に出るまでは堪えるのよ！」

「うう……そうね。狭い場所でシグマを使えば巻き込んでしまうかもしれないわね……」

「ひとまずその喫茶店に入りましょう。あの席からなら入り口を監視できるわ」

三人は一度喫茶店に入る。

各々品を注文し、今か今かと目を見開いて店の入り口を見張る。

「美味しかったね」

「うん、そうだね」

店から二人が出てくる。

「な！ レルフィム！」

なんと二人は腕を組んでいた。ユウタロウの方もまんざらではないようである。

「胸が腕に当たってるね」

「何よ！ そんなんがよければ私だって……私……だって……」

そこまで言ってから自分の胸に手を当てる。

「なんで私はまっ平らなの！ なんでよ！」

「し、知らないよ！　なんで私に聞くの!？」

「私は少しはあるね」

「あの牛カラスめえ……絶対殺す」

二人は店の入り口から離れていく。三人は飲み物を飲み干すと、その後をこっそり付ける。

「今度はジュエリーショップ行きたいわ!」

「ジュエリーショップ？　まあ行ってもいいけど……何も買えないよ?」

「いいのよ、見るだけでも面白いわよ」

そうして今度はジュエリーショップに入る二人。アリシア達三人はこっそり店の入り口から中を覗く。

中では二人が楽しそうに、そうとても楽しそうに指輪やネックレスを見ていた。

「なんで黒カラスとあんなに楽しそうなのよ！　私といるときより笑ってるんじゃないかしら?」

「黒カラス……」

やがて二人は店から出てきた。

「触らせてくれればいいのになあ」

「さすがにそれはダメだよ……。一個何万円とかするんだもん」

二人は今度はカジュアルウェアの店に入っていく。

「これ、似合う?」

「可愛いんじゃないかな」

レルフィムは黒いレースのワンピースを体に当ててみたりしている。それを見てコメントするユウタロウ。服は好きなデザインをメセブリイから入手できるアリシアにはない楽しみである。

「あ！　これとかユウタロウに似合っていない?」

そういつて彼女が手に取ったのは黒いジャケット。レルフィムがユウタロウの肩にかけてやる。

「え、こんなカッコいいの似合わないよ」

「とりあえず着てみてよ、ね?」

「しょうがないな……」

言われるままにユウタロウはジャケットを羽織る。

「結構じっくり来るんじゃない？」

「そ、そうかな……？」

ユウタロウは頬を赤らめながら頭をぽりぽりと掻く。

「よし、さっそく購入ね！」

「いや、今日そんなにお金持ってきてないよ……」

「なんだ、つまらないのー」

レルフイムはぶーつと頬を膨らませる。

「じゃあ次はこっちなね！」

「はいはい……」

レルフイムはびったりと体をくつつけて腕を組んでユウタロウと歩く。傍から見ればカップルに見えること間違いない。

「あの……レルフイム……？」

「なあに？」

「その……さつきから胸当たってるんだけど……」

「当ててるのよ。悪い？」

「いや、その、別に悪く……ないけど……」

「なんでそこで言い返さないのよバカ！」

アリシアが小声で叫ぶ。幸い二人には聞こえていないようだが、今にも飛び込んでいってしまいそうなアリシアを押さえるのにトモミは必死だった。

「僕はちっちゃい子の方が好きっていいなさいよ！」

「自分が小さいってことは認めるのね……」

「……そう言うトモミだってそんな大きい方じゃないくせに……」

「ひ、酷い……密かに気にしてることなのに……」

ともかく、胸がぽよんぽよんと腕に当たっていて、ユウタロウは頬を赤く染めつつ、けれども嫌そうな素振りは見せない。それがたまらなくアリシアは悔しかった。

「何よ……ユウタロウもあんなに笑っちゃって……楽しそうで……」

「アリシアちゃん……」

トモミもユウタロウのことは好きだったが、アリシアのような顔はできないと思った。こんなにも悲しそうで、哀しくて、そして寂しそうな表情をすることはできない。

「ユウタロウの……バカ……」

ぼそりと弱々しく呟かれた言葉には彼女の感情が込められていた。愛情、哀愁、そして愛憎。こぼれ落ちる涙。震える拳。揺れる体。

「アリシアちゃん!」

アリシアは駆け出していた。行く宛などない。どこかへ消え去ってしまいたいと彼女は思った。

夕日は西へ沈みつつある。

ジャングルジムの天辺で彼女は座ったまま西日を見つめる。

そばにはトモミが何とも言えない表情を浮かべたまま立ちつくしていた。リオナはそのそばで帰ろうと催促しているが、トモミは黙って立ち去ることができなかった。

「アリシアちゃん……」

トモミにはアリシアの気持ち痛いほどよくわかった。大好きな人が自分以外の人と一緒に歩いている。楽しそうに笑っている。それが許せないという気持ちは彼女もかつて味わったことのある感情だ。嫉妬の炎はゆらゆらと極微に、それでいて猛烈な勢いで燃え上がる。

「今日は楽しかったね」

「うん、まあまあだったかな」

「あはは、言うじゃないっ!」

二人が歩いてくる。言うまでもない、ユウタロウとレルフィムである。

今まで微動だにしなかったアリシアが立ち上がる。その背後には陽炎のようなオーラが立ち上る。

「あ、アリシアちゃ……」

そのとき、トモミは酷い酸欠状態にも似たような感覚に陥る。トモミは悟った。今の彼女には話し掛けてはいけない、と。その怒りの衝動の標的が自分へと向けられた瞬間、五体満足では立っていないだろうと感覚的に察知する。

「あら、誰かと思っただらキングゴブラじゃない。何か用かしら？」

「……私のユウタロウを返して」

ぼそり、と囁くように呟く。

「はあ？ そんな小さい声じゃ何言ってるか……」

「私のユウタロウを返せッ！」

その瞬間、世界が崩れる。

次の瞬間には心に描き出された風景へと世界は染められる。

燃え上がる森。普段ならば静かでおとなしいその森も、怒りと妬みの炎に彩られて激しくその身を焦がす。

「ッ！？」

「うわっ！」

無意識的にユウタロウを突き飛ばし、ムーティエンを構えるレルフイム。次の瞬間、激しい烈風が彼女を襲う。

「きゃあっ！」

抵抗も虚しく、秒速数百メートルを超える旋風は小さなレルフイムの体を巻き上げる。それを追ってアリシアは空中へと飛び出した。なんとか空中で体制を整えると、ムーティエンを構えて相手を探すが、その姿が彼女の目に映ることはない。

再び全身を殴打されるような感覚の後に吹き飛ばされるレルフイム。その先にはすでにアリシアは居て、その手にはゆらゆらと揺れる森羅万象の姿を映し出すムーティエンがあった。

「くッ！？」

レルフイムはソルバブ・ドルヲスを構える。だが、その剣を遙かに超える長さの刀身が彼女へと襲いかかる。ゲンチャ・ドルヲスは無  
限変化の剣。心の在り方によってその姿を自在に変え、どんな姿に

も変わる有為転変の剣。それは心の持ち主だけでなく、その剣の持ち主の心にも反応する。

何十メートルもの剣を叩きつけられ、レルフイムの体が吹き飛んだ。そのまま激しく燃え盛る森へと突っ込んでいく。それを追ってアリシアも森へと飛び込んでいく。

地面にめり込むようにして横たわるレルフイムの上にアリシアは馬乗りになって飛びかかる。

「あなたなんかに負けるわけ……ないんだからッ！」  
レルフイムが突き出した手のひらに黒い陣が収束する。

「センラ！」

陣からは黒い槍がゼロ距離で放たれる。しかし、それをアリシアは素手で受け止める。

「ッ!？」

「許さない。絶対に許さない」

レルフイムはじたばたと羽を動かし、何本もの剣を放つ。それが飛ぶ度にアリシアの体を剣がかすり、血の滴が飛び散る。だが、それでもアリシアは表情を変えことなくレルフイムを見下ろす。

「なんで……なんで効かないのッ!？」

「許さない」

「センラ・ロムトス！」

再び陣が現れる。その数数十。絶対的量を持った魔弾は一気に解き放たれる。

「かッ！」

アリシアが目を見開いて息を飲み込むように吐き出す。その瞬間、気魄だけで無数の黒い槍が消し飛ぶ。

「ば、馬鹿な……」

「覚悟はいいわね……?」

レルフイムはごくりと唾を嚥下する。そして、両目を瞑って次に襲い来るであろう烈風の砲撃に備える。

だが、次にアリシアがとった行動は陣を結ぶことではなかった。血

だらけの拳を握りしめ、彼女はそれを振り下す。

「いつツ!？」

それはレルフィムの左頬に吸い込まれるように入った。レルフィムの口から一滴の血が吐き出される。

続けざまに左手で右頬にもう一発。そして右手で左頬にもう一発。

それは果てしない乱打へと変わり、止まることを知らない怒りの鉄拳となつて降り注ぐ。

「許さない、許さない、許さない……」

一言呟く度に落ちる鉄拳。それはあんなにも気高く瀟洒だったレルフィムをボロボロのくず切れに変えていく。

「あ、ありしツ! あッ! ちょッ! 待ちなッ! あッ!」

「許さない、許さない、許さない、許さないッ!」

拳が痛み、その反動で肉が裂けても、骨が砕けても殴るのをやめない。その殴打には憎しみと嫉妬の炎が込められていた。

ひとしきり殴り終えてアリシアは立ち上がる。そこにはボロボロになった拳をだらりとぶら下げたアリシアと、血みどろになったレルフィムの姿があった。

「一回」

それでもまだ満足しないのか、倒れ伏すレルフィムの両腕を自分の腕を絡めて持ち上げ、やや腰を腰を落として、そのままレルフィムを持ち上げながら後方へ振り返る。

「死んで」

そのままシグマも使つて空中に投げ飛ばすと、アリシアも飛んだ。空中で脛をレルフィムの首にしっかり合わせ、全体重をかけて地面へと落ちていく。

「来いッ!」

次の瞬間、誰もが目を背けたくなるような一撃がレルフィムへと下される。

Guillotine of Hell。全体重を首へと叩き込む恐怖の一撃。まさにその名の通りのものである。

肩で息をしながらアリシアは立つ。そして、ふらふらと歩いていく。そこへ駆け付けたユウタロウはあまりの凄惨さに息を飲む。そんなユウタロウを見つけたアリシアは嬉しそうに笑ってユウタロウへと駆け寄る。

「えへへ、やっちゃった！」

そういつて血まみれのままにつこり笑う。

ユウタロウはごくりと生唾を飲み込む。今の彼女に逆らったら殺される。そう本能的に悟った彼は無難そうな言葉をかけることにする。

「あ、うん、おつかれさま」

「えへへへへ、次はユウタロウの番だねっ」

「え、あ……マジ？」

「うん、マジマジ大マジだよ」

ユウタロウは数歩後ろに下がる。だが、アリシアにしっかりと服を掴まれて二人の間に一步の距離も開くことはない。

「あのさ、冗談はやめようよ。ね？ 僕、ほら人間だからさ。シグマとか食らったら死んじゃうよ。ね、聡明なアリシアならそれくらいわかるよね？ お願いだからホント頼むからギヤアア！ やめてやめて死んじゃう死んじゃうッ！」

トモミは両目を瞑って耳を塞いで縮こまる。何も見ない。何も聞かない。そしてちよつと大きめの声を出す。アアアキコエナイ状態である。

「だから付き合っていないでさっさと帰ろうって言ったね」

「今の私は何も聞いてないし、何も見てないの。さ、リオナ。帰るか」

二人は燃え盛る森をどこまでも歩いていく。行く宛もなく、行き先もない旅路はどこまでも続くのであった。

End

というわけではないですよ。

「はい、ユウタロウ、あなたの好きな人は？」

「アリシアです」

「胸は大きい方が好き？」

「小さい方が好きです」

「カラスとヘビ、どっちが好き？」

「ヘビです」

「よろしい」

調教を終えたアリシアは一息ついてお茶を飲む。

「さて、これでユウタロウは誰のものかはっきりしたわね。いいわ

ねカラス」

「そうです……く、屈辱だわ……」

「こつちのカラスはもっとお仕置きが必要なのかしら。議長、お願いします」

「ロイフ」

「ひぁッ!? く、くすぐりたい! ダメ、やめ、きゃあああああ  
!」

威力を調節すればこちょこちょマシンにもなるベアトリクスのシグマは実に万能と言えるだろう。

「はい、もう一回。黒カラス、ユウタロウは誰のもの?」

「アリシアのものです……」

「はい、よろしい。今日はこのくらいにしてあげようかしら」

「今に見てなさい……絶対奪い返してやるんだから」

「何か言ったかしら? ご希望とあれば議長のシグマを連続一時間食らわせてもいいのだけれども」

「覚えてなさい!」

そう言っレルフィムは部屋へと駆けて行く。完全なる敗走である。

「まったく、いきなり起こすから何かと思えば……お仕置きなんて  
ずいぶん懐かしいですね」

「何かいい罰はないかなって考えたらちよつと議長のお仕置きを思  
い出しまして……さ、ユウタロウ! ご飯食べよ!」

「う、うん……」

こつして坂下家の夕食は今日も平和だった。

## 第十五話（後書き）

嫉妬とは恐ろしいものです。皆さんも女性の方は怒らせないようにならな  
いように。

## 第十六話（前書き）

なんだか新しい登場人物が出てきて、お話も不穏な方向へ……。

## 第十六話

### 第十六話

昨日の晩、夜寝る前に見た彼女の目が忘れられない。

まるで何か下卑たものを見るような眼つき。あれは軽蔑の視線だ。

今日も彼女は怒っているのだろうか。

午前6時。

朝起きて、一番に確認したのは彼女の気配だ。だが、僕の部屋には彼女はいないようだ。

僕はベッドがから起き上がると、布団を整えて着替えを済ませた。

ドアをゆっくりと開け、外の気配を伺ってみる。どうやら誰もいないようだ。

そのまま僕は階下の居間へと向かう。その途中で特に誰かに会うこともなく到着した。

「アリシア、いる？」

僕はゆっくりと居間へのドアを開いて声をかけてみる。

「いるわよ」

僕が部屋の中に入るのとほぼ同時に声が返ってきた。僕は恐る恐る声をかけてみる。

「怒ってない……？」

「何が？」

「昨日のこと……」

僕が彼女に尋ねてからいくらかの時間が経つ。しばらくしてから答えが返ってきた。

「そうねえ……怒ってるかしら」

僕は目を瞑って身を縮こませる。やはり彼女は怒っているようだ。

「そんなに怯えなくていいわよ」

彼女がすっと僕の前に立ち、肩に手をかける。そして優しい口調で

僕に言った。

「嘘よ。もう怒ってないわ」

僕はゆっくりりと目を開く。目の前には穏やかな笑顔を浮かべる彼女が立っていた。

アリシアは僕の首に手を回すと、体重を預けてくる。

「その代わり、今日はちゃんと埋め合わせしてくれるのよね？」

「うん！ もちろんだよ！」

彼女はにっこりと笑った。そして、軽い触れるようなキスをする。

「朝ご飯にしましょうか」

「そ、そうだね……」

僕はぱーっとした頭のままキッチンへと向かった。

朝ご飯の準備が済んだ頃、他の住人たちが続々と現れてくる。

「おはよう」

「おふあようございます……」

レルフィムはしゃっきりとした目で、ベアトリクスは眠そうに目をこすりながら席についた。

朝食はフレンチトーストとサラダ、そしてコーヒーである。

ベアトリクスは湯気の立ち上るホットコーヒーをすすずとする。

「砂糖五つとミルクもらえますか……？」

「い、五つ……？」

僕は彼女にコーヒーシユガー五本を手渡す。それを遠慮することもなくぶちまけ、ミルクを混ぜてスプーンでかき混ぜてからする。

「ほあ……至福の時ですねえ……」

「議長は大の甘党なのよ」

アリシアが耳元でぼそりと呟くように言った。こんなに砂糖をとつたら糖尿病まっしぐらである。

「今日はどうしようかしら」

レルフィムがフレンチトーストをかじりながら言った。

「ユウタロウとまた一緒にでかけたいわ」

「ダメ！ ユウタロウは私と出かけるんだから！」

「一匹のキングゴブラと一羽のカラスがにらみ合う。昨日の勝負はキングゴブラの勝利だったが、今日の勝負はどちらに軍配があがるだろうか。」

「二人とも、朝ご飯の時くらい落ち着いて食べられないのですか？」  
ベアトリクスがサラダにドレッシングをかけながら言った。二人は一時休戦し、それぞれの食事に戻る。

「ねえユウタロウ？ 今日はどこ行こっか？」

レルフイムがニコニコとした笑顔で話し掛けてくる。

「あ、えっと……」

そのとき、お尻をアリシアにつねられる。

「いたた……きよ、今日はいいかな？ あ、アリシアと一緒に出かけたがつてるし……」

「あら、そう。残念だわあ」

そう言いながら彼女は背中に羽を生やす。そして、その一本を僕の方に飛ばした。

剣は僕の顔の横数センチのところを通り抜けて後ろの壁に突き刺さる。

「私、やることなくともっと羽を飛ばしてしまいそうだわ」

「あ、あはは……そういうことは別の場所でやってもらえると嬉しいかな……？」

「こんなところで毛繕いなんて、カラスって生き物はずいぶんと節操のない生き物なのね」

「あら、こんなところで狩りをするキングゴブラも節操がないと思うわよ？」

狩りの獲物は当然ながら僕のことを指しているのだろう。

「二人とも少しは静かにしましょう。私の朝食を邪魔する者は何人たりとも許しませんよ？」

ベアトリクスはそう言いながらコーヒーだった液体をすすする。

二人はそこで一度言葉を切る。そしてそれぞれの朝食に戻った。

しかし、またしばらくしてこっそりとレルフィムが話し掛けてくる。

「ユウタロウはどこか行きたい場所ないの？」

「え、えっと……その……」

その会話を目ざとく聞き付けたアリシアはムーティエンを取り出し、僕達の間突き出した。

「ユウタロウは今日、私と出かけるって決めたんだから。邪魔しないで」

「何よ。ユウタロウは昨日私と出かけてあんなにも楽しそうに笑ってたのよ？ ユウタロウは今日も私と出かけたいわよね？」

「それはあんたが無理やり連れ回したから仕方なく笑ってただけなのよ」

「それはどうかしら？ ねえ、ユウタロウは昨日は楽しかったわよね？」

「あなた達、いい加減にしなさいッ！」

七つの光の珠が現れ、テーブル上をびゅんびゅんと飛び回る。

アリシアとレルフィムは光の珠の直撃を食らって席からぶっ飛んでいった。

なんとか朝食を終えた僕はまたしても誰が僕を連れて出かけるか、という戦争に巻き込まれていた。

「今日は私と一緒に行くの！」

「ユウタロウは私と一緒に行きたいわよね？」

「いや……その……」

ソファに座る僕の右腕をがっしりとアリシアが抱きしめ、左腕はレルフィムに甘噛みされている。二人の美少女に挟まれていることは嬉しいが、少々暑い。

「そもそも、ユウタロウは私のリトマスなの！ 今はあんたのリトマスでもなんでもないんだから、あんたがここにいること自体がお

かしいじゃない！」

「もともと私のリトマスよ。それに、一緒にいる代わりに人間を襲わないって約束だもの」

「その前は私のリトマスよ！ 別に人間を襲ってもいいわよ？ 今ならベアトリクス議長が直々に討伐に出てくるけどね」

そのとき、誰かに後ろから首に手を回される。

「一番最初に目を付けてたのは私なのに……皆酷いよ」

「と、トモミ!？」

「こんにちは、ユウタロウ君」

後ろを振り返るとそこにはトモミが立っていた。

「な、なんでここに!？」

「新しく仲間が増えたんだよね？ どんな人かなって思って見に来ちゃった」

確かに昨晚彼女にメールを送ったが、まさか来るとは思ってもいなかった。

「議長が来るなんて何事ね。ノエルってカードはそれほどまでに大物なのね？」

トモミがいるということは、やはりリオナも一緒に来ているようだ。

「で、そのベアトリクスさんはどこにいるの？」

「さっきまであそこでコーヒー飲んでたみたいだけど……」

「議長ならきつと今ごろお休みになられてると思うわ」

「え、コーヒー飲んだのに!？」

「あの人の眠気がそんなもので抑えられると思ってるのかしら」  
なぜかアリシアが誇らしそうに言う。

「いや、まあそういう人もいるだろうけどさ……」

「なんだ、せっかく来たのに会えないのね。ちょっと残念」

「議長は居眠り議長の名がつくほど寝るのが好きね」

「まあ、しばらく待ってれば起きてくるよね」

そう言っつて、トモミとリオナは僕達の向かい側のソファに腰を下す。

「え、それはここに居座るってこと?」

「迷惑だったかな……?」

僕は別に構わないが、出かけようと思っっている二人はどうなんだろうか。少しも拘束を緩めないアリシアに尋ねてみる。

「いいんじゃないかしら。私達は出かけて彼女はここに置いていけばいいと思うわ」

「いや、さすがにそれはまずいんじゃないかな……」  
と、そこで突然来客を知らせるチャイムが鳴り響く。

「あ、誰か来たみたい。ちょっと二人とも離してくれるかな」  
ようやくがっちりとした拘束から解放された僕は玄関へと向かう。

「こんにちは、坂下君」

そこに立っていたのは東條さんだった。

今まで見慣れていたパジャマ姿ではなく、夏らしい薄いブラウスとふわりとしたスカートに身を包んでいた。

「東條さん? もう体はいいの?」

「はい、すっかりよくなりました」

彼女はにっこりと笑う。

「ちょっとレルフイムさんとお話したいと思ひまして、押しかけてきちゃいました。迷惑だったですか……?」

「いや、迷惑じゃないけど……ともかく上がってよ」

「はい、お邪魔します」

僕は彼女を家に上げる。

「東條さん?」

「神崎さんもいらつしゃったのですか?」

東條さんはトモミの隣に腰を下す。

「ほら、あなたのリトマスが来たわよ。あっち行きなさい」

「嫌よ。私はユウタロウと一緒にいるんだから」

再びソファに戻るとやはりがっちりとしたホールドされる。僕は諦めの気持ちを込めてため息をつく。

もはや誰が来ても二人は動じないのだろう。こうなったら誰でも来いと、僕はヤケクソにも似た思いを抱く。

「あの、レルフィムさん！」

「なあに？ 私、ちよつと忙しいんだけど？」

僕の左腕を話してレルフィムが東條さんの方を向く。

「あの、その……私、レルフィムさんとお話がしたいと思ひまして

……」

「何？」

「えーっと……た、戦いのこととかいろいろ聞きたいんです。昨日とか、何も無いのに胸がドキドキすることがあったんです。それって、やっぱりレルフィムさんと関係があつたりするんですか……？」

「ああ、昨日ね。ちよつとムーティエンを使つて戦つたからじゃないかしら」

レルフィムは僕の腕から手を離し、ムーティエンを取り出す。

ソルバブ・ドルラス。東條さんの心を元に作り出した心の剣である。

レルフィムは朝食の時に飛ばした剣を壁から引き抜くと、それでソルバブ・ドルラスを軽く打った。

「ほら、あなたも感じるでしょう？」

「なんだか、胸が熱いです……」

「ムーティエンは心を感情で武装した武器。だから、ムーティエンが受けた衝撃はリトマスの心に少なからず影響を与えるのよ」

レルフィムは剣を羽に戻し、ムーティエンを収めた。

「そういえば、なんで壁に剣が刺さつてたの？」

トモミが至極当然な質問をする。

「ちよつと朝ご飯のときに一騒動あつてね……」

「そうなところだろうと思つたね」

レルフィムは戻ってきて、僕の横に座つた。

「他に質問は？」

「眠っていたときに夢を見ていました。レルフィムさんが戦っている夢です。やっぱり、それもレルフィムさんやこの戦いと関係あるんですよね？」

「そうね。恐らくそれはムーティエンとあなたがリンクしていたと

き、心が見た映像が夢として現れただけだと思っわ。だから、その夢はたぶん全部実際にあつたことね」

「そうなんですか……」

東條さんは沈んだ表情を浮かべる。恐らく彼女は人間をレル फिल्मが刈る瞬間も見ていたのだろう。それを知つてなお、レル फिल्मに協力しようとするだろうか。

「でも、今はあんなことはしないですよね？」

「ええ。ユウタロウのような人間もいるって知つて、人間を刈ることとはやめたわ。今では人間をもつと知りたいたいと思うの。確かに人間の心は魅力的な輝きを放っているけど……今は心が生み出す感情の方がもつと魅力的だわ」

「よかつた。レル फिल्मさんからその言葉が聞けて……。でも、昨日はどうして戦つていたんですか？」

「ちよつとそのアリシアつてのとやり合つてたのよ。それだけよ」

「そうなんですか……」

その言葉を聞いて、東條さんは少しの間考え込む。

「アリシアさんって強いんですね」

「はあ？ 確かに昨日は負けただけど、昨日は昨日よ。普段は私の方が強いんだから」

「何言つてるの、カラス。あんたが負けたんだから素直に負けを認めなさいよ」

「あんなの認めないわ。なんだつたらもつかいここでやる？」

「望むところよ？」

二人は立ち上がるとムーティエンを取り出す。

「待つて待つて！ ここは僕の家だから！」

「ならエルフィドを出せばいいじゃない」

と、そのとき再びチャイムが鳴る。

「二人とも、ここで戦わないで待つてて！」

「チツ」

二人は一時剣を収める。誰だか知らないけれども助かつた。僕はほ

つと胸をなでおろす。

「はい」

僕はドアを開く。するとそこにはよく見知った人物が立っていた。

「よう。今日暇か？」

コウである。

「ん、なんだか騒がしいな。誰かいるのか？」

「トモミヤリオナ達が来てるんだよ」

「お、そりゃいいや。俺も混ぜろよ」

そう言っつてコウは上がりこんでくる。

「いよう、お前から来るんだつたら俺も誘えよ……つて、東條？」

「こんにちは。えつと……どちらさまでしたっけ？」

「……どうせ俺はアルゴンよりも存在感ありませんよ。数日前に見舞いに行つても顔すら覚えてもらえない空気みたいな存在ですよ」

「えつ、お見舞いに来てくださつたんですか？ そつえばそんな気も……」

「瀬川コウだよ。この前一緒にお見舞いに行つたよね？」

「瀬川さん……瀬川さん……あ！」

その名前を聞いてしばらくの間彼女は考えていたが、ようやく思い出せたようだ

「そつえば来てくださいましたね。今思い出しました！」

「はは、思い出してもらえたんだつたらいいんだよ」

コウは苦笑いを浮かべながらリオナの隣に座つた。

僕は東條さんの耳元で囁く。

「彼は無関係の人だから、ユジューとかの話はしないでね」

「あ、はい、わかりました」

東條さんはうんうんと頷く。

「なんだか騒がしいですけど、誰か来たんですか？」

突然パジャマ姿のベアトリクスさんが現れる。

「え、あ……誰？」

それを見て、コウがとりあえず硬直する。

「おい！ てめえまた女を家に連れこんだのか！ しかも今度は年上かよ！ てめえは見境つてものが……」

「あ、えつと彼女はベアトリクス。僕の……親戚のお姉さんだよ！」

「また親戚かよ！ 畜生、お前は羨しいなあ……こんな美人の親戚ばっかりいやがつて……俺と交代しろよ！」

「いや、そんなこと言われても……」

「うるせえ！ てめえ羨しすぎんだよっ！」

そのまま殴りかかってくるコウ。僕は体を逸らしてとりあえず避ける。

「まあまあ、二人とも落ち着いてください」

ベアトリクスは落ち着いた様子でアリシアの隣に座る。

そして、コウの死角の位置に珠を浮かび上がらせる。

「！？」

瞬間、珠から一筋の光が伸びる。それはきゅきゅきゅとコウの首に巻きつき、そして首を絞める。

「あがつ！」

そして鈍い悲鳴を上げながらコウは倒れた。どこから持ってきたのか、ベアトリクスは落ち着いてお茶を飲んでいる。

「あの……彼は無関係なんだけど……」

「ちよつと騒々しかったので黙ってもらいました」

「ずずず、とお茶を飲むベアトリクス。僕は黙ってソファに座った。

「ところでユウタロウさん、ガムシロップはありますか？」

「あ、ちよつと待ってて」

僕はガムシロップの袋を取り出すと、念のため袋ごともってソファに戻る。

「ありがとうございます」

ベアトリクスはガムシロップを四個取り出すと、お茶に混ぜて飲む。

「はあ……至福の時です」

彼女は幸せそうな表情でお茶を飲む。

僕はソファに座った。やはり右からアリシアが、左からレルフィム

が抱きついてきた。

「ところで……レルフيلمさんと坂下さんはどういう関係なんですか？」

ふと、東條さんが尋ねた。レルフيلمはくすりと笑って小指を立てる。

「こ・う・い・う・関係よ」

「はわわわ……一緒に暮らしているということはあるんかやこんなことが……」

「いや、さすがにそれはないし、そもそもレルフيلمの嘘だから」

「え、そ、そうなんですか？」

レルフيلمはくすくすと笑う。

「ユイに好きな人はいるの？」

「すすす好きな人ですか!？」

「恋愛はいいわよ。嫌なことも全て忘れてそれだけに没頭できるわ」

「そ、そうなんですか……」

「せっかくの青春なんだから、恋愛の一つでもしないと損よ？」

「わ、わかりました!」

東條さんはレルフيلمに何かを吹聴されている。感化されて怪しげな方向に向かわないと助かるのだが……。

「私、頑張って恋を見つけます!」

何故かやる気モードに入ってしまった東條さんであった。

「そうそう、あなたにちよっと便利な道具を渡しておくわ」

レルフيلمは懐に手を入れるとしばらくの間何かを漁っていたが、ようやく目的のものを見つけ出したのか、小さな指輪を取り出した。

「はい、どうぞ」

「これは……?」

七色に輝く宝石をたたえたその指輪は、蛍光灯の光を受けてキラキラと輝く。

「それは……シグマティームの一つですね」

「シグマ……ティーム?」

「シグマの力を宿らせた道具よ。早い話がインスタントシグマ発生器って感じかしら」

「宝石の中にシグマを宿らせておいて、即座に発動できるようにしてある道具です。それはポウリアンのシグマチームですね。火行・木行・土行・水行・金行・月輪・日輪の発動式を封じ込めたチームです。それにしても、シグマチームを人間の世界に持ち込もうとすると、大体は壊れてしましますが、よく持ち込めましたね」

「ちよつと特別な方法を使ったのよ。ま、ともかくそれを着けていれば襲われたときに自衛くらいはできるわ。ちよつと着けてみなさい」

東條さんは指輪を指にはめてみる。

「少し大きいのですが……」

「まあちよつと待ちなさいな」

それはすぐに縮み、東條さんの指にぴったりサイズのになった。

「す、凄いですね……」

「装着者の指に合わせたサイズに自動的に縮んだり、伸びたりするシグマがかけてあるのよ」

「どつやつて使うんですか？」

「んー、なんていえばいいのかしら？　ねえユウタロウ、あなたがこの前シグマを使ったとき、どつやつたの？」

「え、それと何か関係が……？」

「同じよ。発動式を書く必要があるかないか、の違いはあるけどね」

「は、発動式……？」

「これよ、これ」

レルフィムの指先に小さな魔法陣が浮かび上がる。いつもシグマを使うときに浮かびあがるアレのようだ。

「これは感情の力をシグマに変換するための式なの。これさえあれば誰でもシグマを使えるわ。ただ、私達はもう慣れちゃって無意識のうちに使ってるから、イマイチ使い方とか考えないのよね……」

「つまり、使い慣れてない僕みたいな状態の方が他人には教えやす

「いつてこと？」

「そういうことね」

僕は腕を組んで考え始める。あのときの感覚を思い出そうとする。

「確か……凄く感情が昂ぶっていて、アリシアを救うことだけしか頭になかった気がする……」

「シグマの発動はイメージね。起こしたい現象を強くイメージすることで、その現象を発生させるね。ただ、ユジューは自分の力に限界を定めている場合が多いから、発動できる現象には限界があるね」

「リオナ、よく知ってるね」

リオナの説明にトモミは頷いた。

「それでも向こうの世界ではシグマの研究をしてたね。だから私のムーティエンは私にぴったりね」

「イメージ……ですか？」

東條さんは目を瞑る。すると、指輪の宝石が輝いた。

部屋の中に微風が吹く。窓がカタカタと揺れている。

ぴしぴし、という音がした後、テーブルから小さな木の芽のようなものが生えてくる。

それは一枚の木の葉を出したところで成長が止まった。

「ど、どうですか？」

「ま、最初はこんなものね。無駄なところに力が入りすぎて、肝心のシグマの方にほとんど力がいつてないわ。人間でも、うまく扱えば大樹の一本くらい召喚できるわよ」

「そうですね。でも、もともとはユジューのシグマに色をつけるためのものなので、大きな力を生み出すには少し鍛錬が必要かもしれませんね」

東條さんは木の芽を摘み取る。何の植物かはわからないが、それは彼女の力によって生み出されたれっきとした命だった。

「人間もエルフィドが使えれば効率的にシグマが使えるのにね。エルフィドはかなり高位のシグマだから、私達でも習得するのに苦労するけど」

「そういえば前から疑問に思ってたけど、エルフィドってなんなの？」

僕は疑問に思っていたことを聞いてみる。それに対しリオナが答えた。

「エルフィドは心象世界の具現化ね。その辺り一帯を心の中にある世界と置き換えるシグマのことね。周りは自分の心そのものになるから、生み出される感情で場が満ちることになるね。よって、生み出される感情の力は莫大なものとなり、シグマの効率が大幅にアップするね」

「なんだかわかりにくいけど……まあ要するにシグマをすごく強くするシグマのことなんだね」

「わかりやすく簡単に説明するとそうなるね」

リオナはうんうんと頷く。

「それはどうやってたら使えるようになるんですか……？」

「人間には無理ね。シグマチームにエルフィドの発動式を書き込むことに成功した例は未だないね。人間は通常、シグマチームなしに発動式を書くことはできないね。でも、たまにユウタロウみたいな例外があることはあるね……」

「じゃあ、僕ならできるかもしれないってこと？」

「まあ、そういうことになるね」

僕はあの時の感覚をもう一度思い出そうとする。

あの時の感覚をもう一度思い出せれば、またシグマを使うことができるかもしれない。

目を瞑って、イメージを頭の中に思い浮かべる。

そして、アリシアのことを考える。

「あー！」

僕はその声を聞いて目を開く。

僕の手の上に魔法陣のようなものが現れていた。

「これね！　これが発動式ね！」

「ずいぶんと粗削りだけど……シグマを発動させるには十分ね。ま

あそのままやってみなさいよ」

僕はレルフイムの言うことに頷く。なんとなく感覚はわかる。描き出した発動式に感情の力を乗せていく。少しずつ流し込んでいけばいいのだ。

「あんっ！」

そのとき、今まで黙っていたアリシアがすっ頓狂な声を上げる。

「え！？」

そのあまりの色つばさに、僕は思考を一瞬停止する。瞬間、僕の手の上に刻まれていた発動式は消失してしまう。

「え、な、何があつたの？」

未だ自分の体を抱きかかえるアリシアを見る。彼女は頬を真っ赤に染めて、目をうるうるとさせている。

「ユウタロウの……バカあ！」

その瞬間、アリシアの蹴りが入る。僕はソファから吹き飛ばされ、ごろごろと床を転がっていき、壁に頭をぶつけてようやく止まる。アリシアは席を立ち上がると、二階へと駆け上っていく。

何がなんだかわからない僕は、ニヤニヤとした表情を浮かべ、何が起こつたのかわかっているようなレルフイムに尋ねてみる。

「レルフイム……？ 何が起こつたの……？」

「あの発動式を見た瞬間、本当にユウタロウは大胆だなんて思ったわあ」

彼女は顔をニヤけさせたまま言う。

「今のシグマはかんのうね」

「かんの……う……？」

「ユウタロウのアリシアに対する思いがそのままシグマになったんじゃないかしら？」

「ユウタロウ……不潔ね」

「ええ！？ かんのうって官能のこと！？」

僕は顔が真っ赤になるのを感じる。二人が何を言っているのか、ようやく理解できたトモミと東條さんも頬を赤く染めて何か囁き合っ

ている。

「僕、アリシアに謝ってくる！」

僕はすぐに立ち上がると、アリシアの後を追って階段を駆け上がった。

## 第十六話（後書き）

ユウタロウ、卑猥だなー。自分で書いといてアレですが。アリシア、どんまい。まあ、そんなわけで続きます。

## 第十七話（前書き）

大和田先生、すみません。

ネタをパクりました。だって面白かったんだもの……。ってか後  
楽メグミが可愛すぎる件について。ぷにえちゃんに負ける展開があ  
ってもいいじゃない。

大魔法峠という漫画です。皆さんご存知ありませんか？

## 第十七話

### 第十七話

「アリシア？」

僕は彼女の部屋のドアをノックしてみる。部屋の中から返事はない。

「アリシア……？」

僕はゆっくりとドアを開く。

「入ってくるなバカあ！」

ドアが開いた瞬間、キリモミ回転しながら枕が飛んでくる。僕はそれを顔面に直撃させ、ぶっ倒れた。

彼女の手によってドアが閉められる。そして鍵をかけられてしまう。

「ごめん、アリシア……」

僕はドアにもたれかかって床に座る。中から返事はない。

「ぼ、僕、そんなつもりじゃなかったんだ！ ただ、なんて言うのかな……アリシアのことを想って、それをそのままシグマにしたらああなっちゃって……」

やはり返事はない。僕はどうすればいいかわからなくて、ただ言い訳を続ける。

「なんて言うかな……悪気はなかったんだよ。それは本当だよ。だから……」

「わかってるわよ」

とん、とドアに何かに触れる。ドア一枚隔てて、背中合わせに彼女が座っているのを感じる。

「私だって初めてシグマを使ったとき、変なシグマを暴発させたわ。思った通りの結果にならないなんてよくあることよ」

「アリシア……」

「恥ずかしかつたけど……ゆ、ユウタロウの想いが流れ込んできて……気持ち、よかつたんだから……」

彼女の声が上ずっている。きっと頬は真っ赤に染まっているのだらう。

僕はドアから離れて立ち上がった。ゆつくりとドアが開いていく。瞬間、扉の隙間から僕の胸へと飛び込んでくるアリシア。僕は彼女を抱き寄せ、頭を撫でた。

「ユウタロウ……」

彼女は普段着にしていたドレスとは違い、外出しやすい薄着に着替えていた。

「い、今から……デート……しない？」

頬を真っ赤に染めて、目を閉わせて、小さな体を精一杯背伸びさせて、僕の目の前へと顔を寄せる。

そんな彼女の様子がとても愛おしかった。僕はすぐに首を縦に振った。

自室へ戻り外出用の荷物を取ると、誰にも気付かれないように、足音を忍ばせて家を出る。

家を出ると、僕は指を絡ませて手を繋ぐ。アリシアのやや冷たい手が気持ちいい。

二人で足音を揃えて歩き出す。特に行き先があるわけではない。

空はよく晴れわたり、どこまでも雲一つない青空が広がっていた。

「いい天気ね」

僕は彼女の言葉に頷く。目を瞑り、胸一杯空気を吸い込んでみる。太陽の香りを含んだ初夏の空気だった。

自然と足が軽くなる。こんな日はどこか歩いて出かけるのもいいかもしれない。

「映画……見に行きたいな……」

「そういえば最近行ってなかったね。一緒に行こうか」

僕は駅前へと向かう。

駅前の映画館、スクリーンショットでは季節毎に様々な映画を上映している。

今の時期はどんな映画を上映しているだろうか。

「ファイナルブシドウ2か……ちょっと気になっているんだよね……」

この前に見たファイナルブシドウの続きである。最後のシーンで無事黒船を沈め、アメリカ海軍を撃沈した慎太郎は今度は世界各地で猛威を振るうアメリカを成敗するために海を渡るといふ話だ。

中でも銃弾を日本刀で弾くシーンは殺陣シーンの中でも臨場感溢れるシーンだという。

「ねえユウタロウ、あれが見たい！」

そう言っただけで彼女が指さすポスターは……極の道、という実に渋いタイトルの映画だった。

これは聞いたことがある。後楽メグミという、ラーメン職人を父に持つ少女は国の圧政から逃れるために国外逃亡し、そこでラーメン屋を始める。だが、禁断のラーメン技術を国外へ持ち逃げしたために、自分がかつて住んでいた国から追っ手がやってきて、彼女の命を狙うというものだ。

メグミは最強のラーメンを生み出し、そして追っ手を退けることができるのだろうか。

「確かに料理系だから美味しそうな映画かもしれないけど……どうなんだろう……」

「ゆうーたーろーうー！ 見ようよ！」

アリシアは僕の手を引っ張って催促する。

「仕方ないなあ……」

僕は極の道の手ケットを二枚買う。

「ありがとうございます。ゲートから入って左側の四番劇場です」  
売店でアリシアの分のポップコーンとナチョス、ホットドッグ、そしてフランクフルトとジュースを買ってやる。もちろん持つのは僕だ。

「早く早く」

「ちょっと待ってよ……うわっととー！」

ふらふらしながらも、なんとか四番劇場へと向かう。

『シンデレラ味の密輸はラーメン取締法違反よ。王家の人間として見過ごせないわね』

後楽メグミは生唾を飲み込みながらも、右手にラーメンの入った湯切りを構える。

『だったら取り締まってみなさいよッ……、あんたらが消費税80%なんて無茶な圧政をしukから……』

ここでメグミの左足が動く。そして、自然な動きでそのまま右足が前に出る。

『地上に逃げてきたんでしょーがっ！』

そのままの動きで右手を振るう。湯切りから湯が噴き出し、地面を伝って敵へと襲いかかる。

だが、敵は大きなジャンプで湯をかわすと、距離を詰めるために一気に前進する。

メグミはそこで武器を持ち変え、おたまへと切り替える。

そしてぶつかり合う二人。おたまが尋常でない速度で動き、敵を斬り刻もうと襲いかかる。

だが、それを紙一重のバックステップで回避する敵。それにメグミはびったりついて距離を詰める。

『刀削麺！』

メグミは麺をこねる前の塊に包丁をあてがうと、それを迅速の動きで削り出す。それは敵へと飛翔する無数の矢となって敵を穿つ。

『ちいッ！』

ガードのためを手を前へかざす敵。だが、そこへ容赦無く麺が突き刺さる。

『とどめだ、伸麺！』

ラーメンを伸ばす前の塊を両手に持つと、メグミはそれを勢いよく地面へと叩きつける。

それは徐々に引き延ばされながら絶対の強度を誇る極上麺へと仕上

がっていく。

瞬間、世界がスローになる。

僅かな隙を狙って、麺が相手の首へと絡まる。

それは一瞬で首を一周し、そして一気に絞め上げる。

『かはッ……!』

料理人ラーメン職人の必殺技、ラーメンハング。四千年という永きに渡る時の間誰にも破られなかった無敵の技。強烈な麺のコシが弾力となり、絶対に引きちぎれない。まさに悪魔の技である。

麺のコシとは元来このラーメンハングを頑強にするためのもの。この技が極まれば相手が誰であろうと為す術はない。

敵は最後の断末魔の声を上げながら堕ちていく。

『またのご来店をお待ちしています』

「なんていうか、物凄い映画だったわね……」

彼女は少し膨れたお腹をさすりながら僕の隣を歩く。僕の両手には山ほど積み上がった食べた後の残骸があった。

「ラーメンを武器にするなんて普通考えないよね……。原作者の大和さんは凄いよ……」

僕は原作者のことを褒めながらゴミをゴミ箱に捨てる。

「勝手にシーン引用して、原作者が知ったらどう思うことやら……」

「まあ、パロディってことでいいんじゃない?」

「パロディっていうより、そのまんまだよ……」

僕はぼそぼそとアリシアの言葉に受け答えしながらベンチに腰を下す。ひんやりとした感触が気持ちいい。

「ああー、それにしてもお腹空いたあ〜」

「さっきあれだけ食べたじゃないか……」

「あれは十時のおやつよ」

そう言いながらアリシアは大きく伸びをする。なんともよく食べる子である。

「もうお昼だね。皆のこと、放って来ちゃったけど大丈夫かな……」  
「いいんじゃない？ 勝手にやってるわよ」

レルフイムに家を預けていることが少し心配だったが、今が楽しいのでとりあえずよしとする。

「ご飯食べに行きましょうよ」

「それもそうだね」

映画館はデパートに併設されているので、レストランなどもたくさんある。

その中で、安くて美味しい、そしてたくさん食べられるお店を探す。  
「あ、ここがいい！」

彼女が指さすのは通称KCF、カーネル君フライドチキンである。

にこやかな笑みを浮かべるカーネル君人形がトレードマークのお店だ。

「じゃあ入ろうか」

僕達は店の中に入る。お昼時ということもあって、店の中はとても混んでいた。

「うわー……混んでるね……」

「でも、ちらほら席空いてるよ？」

「先に席を取るうか」

奥まった場所にある二人席を見つけると、そこに荷物を置いた。

レジの方へ戻ると、注文を済ませる。

「カーネル君セット二つと、カーネル君バーガー二つですね」

品物を受け取ると、それを持って今か今かと待ち続けるアリシアの方へと戻る。

「はい、お待たせ」

さっそくアリシアはカーネル君バーガーを手に取る。僕はカーネル君セットの骨無しチキンをかじる。

「美味しいー！」

「それはよかったね」

僕はにこにここと笑うアリシアを見て微笑みながらチキンを頬張る。といつても、一瞬で消えていくカーネル君バーガーを見ていると、微笑ましさは半減するが。

さつそく二個目に手を出すアリシア。カーネル君バーガー二つと、カーネル君セツト一つはアリシアの分である。実によく食べる。

「ねえユウタロウ」

アリシアは食べる速度は僅かたりとも落とさずに尋ねる。

「ん？」

「ユウタロウはさ、この戦いとか全部なくなったら、私をどうしたい？」

「それはどういう意味……？」

この戦いが終わったら、なんてことは考えたこともなかった。

アリシアとの日常はこの戦いが存在しているから成立するもので、この戦いがなくなったら、脆くも消え去ってしまうものだ。

「アリシアは……どうしたいの？」

「私のことじゃなくて、ユウタロウのことを聞いているの」

「僕は……」

彼女を僕達の世界に縛り付けることは僕の傲慢だろうか。もともと彼女は僕とは違う世界の住人だ。その彼女を元の世界には返さない。これは……残酷なことなのだろうか。

「僕はアリシアと一緒にいたい。ずっと一緒にいたい」

それでも僕は僕の想いを素直に告げる。アリシアと一緒にいたい、別れたくない。この想いは本物である。

「そう言ってくれて嬉しい……」

アリシアは頬を赤らめて喜んでくれる。僕はそれを見てホッとした。

昼食を終えた僕達はぶらぶらと歩いて回る。

「ねえユウタロウ……。私、甘いものが食べたいなあ」

「じゃあ、いつものお店に行く?」

いつもの店とは当然ながら絹布茶房である。だが、彼女は首を横に振った。

「今日はケーキが食べたいな……」

「じゃあ、この前行ったところに行く?」

スターフロンツに到着する。以前皆で映画を見に行ったときに利用した店だ。

店の中に入ると、濃いコーヒーの匂いに包まれた。客の入りは半々といったところ。席は十分空いていた。

彼女はレジへと向かうと、さっそくケーキを注文する。

僕は隣に並んで彼女の注文の後、自分の分を注文した。

「当店自慢のブレンドコーヒーと、カカオフラペチーノです。ケーキは後程お席にお持ちします」

僕達は番号札を受け取って、空いている席へと腰を下す。

さっそくコーヒーを一口含んでみる。深い味と、濃厚な香りがいっぱいに満ちる。これはとても美味しい。

アリシアはアリシアでとても美味しそうにフラペチーノを飲む。

「美味しいね」

彼女はそう囁くにつこり笑う。僕は彼女の言葉に頷いた。

「ねえユウタロウ」

「何?」

彼女は不意に僕の名前を呼ぶ。

「ユウタロウはさ……私と一緒にいて、楽しい?」

「楽しいよ。でも、どうしていきなりそんなことを……?」

アリシアは言うか言うまいかしばらく悩んでいたようだったが、やがて意を決したのか言った。

「昨日、カラスと一緒にいるとき、凄く楽しそうだったんだもん。

私なんかでいいのかなって、時々思うんだ……」

「何言ってるんだよ」

僕はアリシアの額を指でピンと弾いた。

「僕はアリシアのことが好きなんだよ。レル फिल्मより、トモミよ  
り、ずっとずっと好きなんだ。そんなに好きな人と一緒にいて、楽  
しくないわけないよ」

「ユウタロウ……」

彼女は嬉しそうににっこりと微笑む。

「グランドチョコレートケーキ、お持ちしました」

店員がケーキを持ってやってくる。瞬間、アリシアの顔がぱあーっ  
と輝いた。

「あはは！ 待ってました〜！」

彼女は先ほどよりも嬉しそうな表情を浮かべてケーキを食べ始める。  
僕はちよつとがっかりな気分になると同時に、微笑ましい気持ちに  
もなる。

なんだかんだいって、こんな彼女の無邪気さが可愛い。素直なとこ  
ろが可愛い。子供のように純粹なところが可愛いのだ。

巨大なケーキが瞬く間に減っていく様子を見るのはとても楽しかつ  
た。

「とても素晴らしい食べっぷりだね」

そのとき、どこかで聞き覚えのある声が耳につく。

まさかそんなことがあるわけがないと否定しながらも、僕はその声  
の主の方へと顔を向ける。

「久しぶりだね、シグマを扱える人間」

「……ノエル」

僕の口から自然と彼の名が紡ぎ出される。

漆黒のローブに身を包み、得体の知れない深い闇を目の奥にたたえ  
た少年は、僕達の席の隣の席に座った。

その後を銀髪の少女がついて歩く。やはり彼女も長いローブに身を  
包んでいる。手には二丁の銃……ではなく、二つのコーヒーカップ  
だった。

「クラウディア、ありがとう」

クラウディアと呼ばれた少女はコーヒーカップをテーブルの上に置

いて腰を下す。

ノエルはコーヒーカップを一つ手に取ると、ゆっくりと口元へやって味わうように飲む。

「ふう。人間とは素晴らしいものを作り出すね。このコーヒーという飲み物はまた格別だよ」

「……………」

銀髪の少女も黙ってコーヒーを飲む。

僕は二人を順に見ると、ノエルの方を見て尋ねる。

「何をしに来たんだ？」

彼はコーヒーをすすると、含みのある笑顔を浮かべて答える。

「コーヒーを楽しみに、そしてついでに宣戦布告かな」

「宣戦布告……………」

「威嚇は終わりだよ。本格的にやるうじやないか」

彼は笑いながらそう言うと言とコーヒーを一口飲んだ。

「つと、その前に君には協力を要請したいんだ」

「協力……………」

「そう。シグマを扱える人間なんて滅多にいないからさ。そう、僕のリトマスにならないか？」

「悪いけど、断るよ」

そのとき、コーヒーカップを片手に話を聞いていた銀髪の少女が懐から銃を出し、僕に突き付ける。

「クラウドディア、銃を下げるんだ」

「……………」

彼女はこくりと頷くと、銃を下してローブの内側に仕舞いこんだ。

「タダとは言わないよ。君のお母さんの心を僕は持っている。それを返してあげてもいいよ」

「僕の……………母の心？」

「心を集めるのが好きなカードがいてね。彼が持っていた心を全て頂いたんだけど、その中に興味深いものが混ざっていたんだよ。十何年も前に刈り取られて、未だ人としての形を保ちつつある強い心。

よくよく観察してみると、君の心に凄くよく似てるんだよ」

「それが……ぼくの母の……？」

「君は興味深い。強い力を持っている。特に人への想いはまた格別強い。一人のユジューを生き返らせてしまうほどにね。強い力を持つ僕にもない力だ。是非とも欲しい」

「その力を手に入れてどうするつもりだ……？」

「滅ぼすんだよ。僕を殺すために生み出したユジュー達も、僕を生み出すきっかけとなった人間達もね。でも、君だけは助けてあげよう。なんなら君のお友達を全員助けてあげてもいい」

「断るわ」

僕が言うよりも早く、今まで黙っていたアリシアが口を挟む。

「最初はあなたのこと、可哀想だと思ってた。でも、今のあなたは私の世界や、ユウタロウの世界を滅ぼすという。いくら生み出してその直後に滅ぼそうとしたからなんて、そんなことをするなんて絶対に間違ってる！」

「君には聞いていないよ。僕が聞いていたのは彼だ」

「ユウタロウだってそうでしょ？ こんなヤツに力を貸すわけないよね？」

答えは決まっている。

「僕は断じて君達には力を貸さない。母の心も君を倒して取り返す。それ以外に選択肢はない」

「そうか……それは残念だよ」

言葉とは裏腹に、彼は笑みを浮かべる。

銀髪の少女は視線を厳しくしながらも、相変わらず黙ってコーヒーを飲み続ける。

「君とはわかりあえなくて残念だ」

そう言つと、彼らはコーヒーカーップを持って立ち上がる。今日はどうも戦う気はないようだった。

「次に会ったときは戦いだよ。それじゃあ、僕達はお暇するかな」  
最後にくすりと笑って視線を投げかけると、彼らは店を出ていく。

瞬間、今まで肩にのしかかっていた重みが落ちるような気がした。

「ユウタロウ……さっきはああ言っちゃったけど……本当にいいの？」

アリシアが恐る恐る、という様子で僕に尋ねてくる。

「何が？」

「ユウタロウのお母さんの心……あいつが持つてるんでしょ？」

「そうみたいだね。でも、いいんだ。僕は物心ついたときから母と話をすることがないし……」

そうは口で言っても、もし母と会えるならば会いたかった。

子供のときから、授業参観に母親がやってくる友達が羨しかった。

今ではそんなことに羨しさを感じることはないが、母親のいる日常というものを持っていてる人が少し羨しく感じる。

母と一緒に暮らす日常がほしい。ただそれだけの理由だ。ただそれだけの理由で僕は母の心が欲しかった。

「母には会いたいけど……でもいいんだ。十五年も話をしたことがないんだもの。何話せばいいかわからないよ」

「そう……わかった」

アリシアは最後の一寸片のケーキを口に運ぶと、フラペチーノを口に含んだ。

「負けないから。絶対に負けないから」

「うん……」

彼女の言葉がとても頼もしかった。

## 第十七話（後書き）

宣戦布告。ついにお話も終盤に向かってきています。最終話まであと少しです！

## 第十八話（前書き）

まもなく最終話です。一日で上げてきたけど、コピペとはいえない。読んでいると結構疲れますね。

## 第十八話

### 第十八話

僕達は自宅へと戻る。ノエルのお話を皆に伝えるためだ。

「あ、ユウタロウ。どこに行ってたの？」

帰って一番にレルフイムになじられる。

「いきなりいなくなっちゃんで、心配しましたよ？」

次に東條さんにも心配される。

「せめて一言言っただけ良かったな……」

そしてトモミに怒られる。

「ごめんごめん。でも、皆に重要な話があるんだ」

「重要な話ってなんだ？」

コウが尋ね返す。彼がいては少し都合が悪い。

「アリシア」

「ええ」

アリシアは駿足でコウの後ろへと回りこむと、延髄の辺りに一撃を叩き込む。

ぱたりと糸が切れたように倒れるコウ。なんだか今日は気絶させてばかりのような気がするが、気にしないことにする。

「彼を眠らせるといふことは、“私達”の話ですね」

紅茶を少し口に含んでからベアトリクスが言う。僕は頷いた。

「ノエルがこれから本格的に攻撃をしてくるらしい。今までののはただの威嚇だって……」

「ふーん、威嚇ね。そんなの関係ないわ。もう負けてあげる気はないからね」

レルフイムは立ち上がって勇ましく言う。

「そうと決まれば特訓ね。ユイ、あなたの力を確かなものにしなければならぬわ。私は人間を信じることにしたから。だから、人間

の力にあえて頼らせてもらおうわ。行きましよう」

「は、はい！」

ユイは力強く頷くと、立ち上がって部屋を出ていく。

「頼もしいですね。ユジューの中には人間の力を軽視する者がたくさんいます。彼女のように人間と手を取り合える者がたくさんいてほしいと私は願っています」

僕はアリシアを見た。僕はアリシアのことを信じている。アリシアも僕のことを信じてくれている。僕達もお互いを信じ、手を取り合うリトマスとテイオナだ。それはトモミ達も同じはずだ。

「ベアトリクスは……人間の力を信じているんですか……？」

「そうですね……人間はあなたのように時として私達にも予想できない力を発揮します。だからこそ、私達は人間の心の虜となり、そして人間達に頼って生きているのです。私はそんな人間の力を……奇跡の力を信じます」

その言葉を聞いて安心する。この先、ユジュー達は人間と手を取り合う未来を選んでくれる。だから……またノエルのような悲しいユジューを生み出してしまふことはないだろう。

「いつつ……」

そのとき、コウが後頭部を押さえながら起き上がる。

「なんか頭痛いな……何があっただ……？」

「あ、コウおはよう」

「あれ……レルフイムちゃんとユイちゃんは？」

「なんか用事あるって言って帰ったよ」

「ふーん」

コウはつまらなそうな表情を浮かべる。

「それなら俺も帰るわ」

「わかった」

僕はコウを見送りに彼の後をついて玄関まで出向く。

「なあ。一つ尋ねたいんだけどよ」

「何？」

「仲間外れ」ってどう思うよ？」

「え……？」

一瞬、彼の言葉の意味が理解できなかった。

僕はもう一度、彼に尋ね直す。

「もう一回、言ってもらえる？」

「仲間外れだよ。お前ら、俺の知らないところでどんどん友達作りまくって、なんだか置いていかれてるような気がしてよ」

「それは……レルフイム達のこと？」

「まるでトモミやりオナは元から知ってるみたいに驚かねえじゃねえか。あれは気のせいなのか？」

僕は一瞬答えに詰まる。なんと答えればいいのかわからなかった。

「そんな……そんなつもりはないよ！ トモミはそういうところあるじゃん！ 動じないっていうか、あまり気にしないっていうかさ！」

コウはそれを聞いて黙っていたが、特に表情も変えずに背を向ける。  
「そうか。ならいいんだけどよ」  
靴を履いてドアに手をかける。

「俺はお前のこと、仲間だと思っているからな」

そう言い残すと、僕が何か言葉を発する暇さえなしに彼は出ていってしまった。

けれども僕は彼の後を追うこともできず、ただその場所に立ちつくしていた。

空には高く満月が上っていた。

星々は薄い光を街に投げかけ、今宵を無事に終えることができるか不安げに輝いていた。

高いビルが林立する摩天楼。その頂上に一人の少年と一人の少女が並んで街を見下ろす。

「準備はいいかい？」

少年は傍らに立つ少女に確認するように尋ねる。

「仰せの通りに。私はどこまでもあなたの後についていきます」  
黒い少年はくすりと笑うと、何事かを呟き始める。

街を風が吹き抜ける。

黒い風は徐々に光を蝕み、闇へと塗り潰していく。

夜の街から明かりが消えていく。しかし、それを疑問に思う人は一人もいない。

「エルフィド」

小さな声で彼は呟く。そのとき、街全体にうつすらと光の線が浮かび上がる。

何十、何百、何千と引かれたその線は街を一つの魔法陣の中へと取り込んでいく。

「ンイシフ ムヨウニシ」

月の光は暗雲に閉ざされる。町全体を闇のように濃い霧が覆い尽くした。

それは暗闇の雲。あらゆる命を奪い、全てを無に帰す泥の大海。

「バムシミレガケ ウキクラツセ」

動いていたものは全てが動きを止める。まるで深海へと沈むように、月へと伸びていたビルが沈んでいく。

大地は腐った海と化し、全てを飲み込んでその無限大の空腹を満たすことはない。

「ハチオニチテ ムテハトスキベ」

空が落ちてくる。まるで一つの塊へと変化するようになると渦を巻いて蒐められる。

「トンコヨン ニコデイヨイコ」

生み出されるは混沌。光も闇もない、無秩序な一つの塊。

ケイオスの支配する天地開闢そのもの。

「スユツマトエ ベキチミ」

導かれる先は終焉。全ての終わりであり、そして始まりでもある究極的存在。

「ムキヨシグマ ナヴィシイ」

虚無のシグマ、ナヴィシイ。

それは世界を原初の混沌へと帰すシグマ。

ありとあらゆる存在をひとまとめにし、そして事象の地平線へと放り込んで消滅させる。

無から生み出される力の反作用で生み出される、有を無へと変える力。それはありとあらゆる存在を虚無へと変える。

全ては無の島に浮かぶ一つの夜。

彼のエルフィドによって作り出された孤島と、その上に置かれた夜の街。

天上に浮かぶは黒い月。人を見ることのかなわない、新月。

「ふふ、これが満ちたとき、すべては終わる」

「なるほどなるほど、これが虚無なのね」

そのとき、彼の後ろから声が響く。黒い少年は驚くと同時に、笑みを浮かべた。

「こんなに早くに仕掛けてくるとは思わなかったけど、ちゃんと準備してよかったわ」

彼らの前に姿を現すは、背に黒翼を抱く背徳の悪魔。

彼女は楽しそうな笑みを浮かべながら彼らの前に舞い降りる。

「やはり、そう一筋縄ではいかないみたいだね」

少年も微笑みを浮かべながら少女を迎え入れる。

「街を丸呑みとはやってくれるじゃない」

「僕がリトマスの力を借りたところでのこの程度。世界を滅ぼすなんてとんでもない」

「そうね。確かにあなたの方だけでは世界を滅ぼすなんて大それたことはできないわ。けれども、世界の消失はその世界に大きな影響を与える。消滅した部分へと残った世界が一気に流れ込み、その爆発的衝撃は消失した範囲以上の世界を消失させる。結果として、世

界が持つエネルギーで自ら消えてしまふ。それがあなたの狙いでしよう?」

しばらくの間少年は黙っていたが、やがて大きな声で笑い始める。

「ふ、ふふ……ふふふ……あっはっはっは! その通りさ。世界一つが消えれば、周りの世界も消えた領域へ流れ込む。その繰り返しで連鎖的に消失は起こり、そして全ては無に帰るんだ!」

黒い少年は大きな声で笑う。まるで喜劇でも見て楽しむように、少年は笑う。

それにつられるように、少女の顔にも笑みが浮かび上がる。

「うふふ、素敵な話ね。何もかも消えてなくなってしまう。幼き頃の私ならば喜んで力を貸したでしょうし、その結果を受け入れるでしょうね」

「さあ、君も歌うといい。全てを無に帰す、虚無の調べを!」

少女はしばらくの間笑っていたが、やがて一振りの剣を抜き放つ。

「まさか。それは幼き頃の私。今と昔は違うのよ」

「君にどんなことができるっていうんだい?」

少年はまるで羽虫でも眺めるかのように少女を見下す。だが、少女は依然笑みを崩さず、その剣を大地へと突き刺した。

「あなたの虚無も所詮はシグマ。どんなに強大なものであっても、私達の力の法則に則った力であることには変わらないわ」

そこで彼女は指をぴんと立てる。

「じゃあ、法則を無視した力がそこに介入したらどうなるかしら?」

「そんな力が行使できるっていうのかい!? やれるもんならやってみるがいい!」

その問いに答える声はない。少年は勝利を確信し、そして両腕を広げる。

「さあ、後は世界が消えていく様を見守るだけだ。もはや虚無は止まらない。どんな手段によっても世界の消失を止めることは叶わない!」

まるで虚無を受け止めるかのように、少年は大きく腕を広げる。

月は徐々に満ちていく。それはすぐに三日月を迎え、やがて半月となる。

……しかし、そのとき変化が起きる。

ガラスの窓に強い力を与えたかのように、月に亀裂が走る。

「な、何が起きて……!?」

瞬間、世界は崩れ落ちる。

「うふふ、あなたは私の世界をも取り込んだ。ならば、この世界の主導権を握る権利は私にもあるはずよ」

黒い孤島を徐々に黒薔薇が覆いつくしていく。月は赤く濡れ、茨によつてがんじがらめに縛られる。

「これは……」

それは黒い薔薇庭園。庭師を失った、かつては美しかった花園。今では闇に食い荒らされ、荒れ放題になってしまった。

「僕のエルフィドに自分のエルフィドを重ねるとはね……」

そこにレルフィムの姿はなかった。だが、ノエルはそんなことを気にすることはなかった。

少年は額に冷や汗を浮かべながらも、うつすらと笑みを浮かべる。

「月は縛られても、徐々に満ちていく。それを完全に止めることはできない。月が満ちたとき、それが僕の勝利だよ」

少年の足に一本の茨が絡み付く。だが、彼は自らの体が傷付くのも省みずに乱暴に引き抜く。

「さあ……本当の戦いの始まりだ!」

「ちょ、ちょっと! これは一体なんなのよ!」

アリシアはユウタロウと一緒に部屋の窓から外を眺める。

空には血のように赤い半月が輝き、大地は一面黒い薔薇の蔭にて覆われている。

「これって、レルフィムのエルフィドだよね」

「まさか……アレを実行したっていうの!?!」

レルフィルムが仕掛けていた街全域をも覆う、百重結界“シクスエルフィド”。何重にも重ねることによって効果は高まるものの、世界への影響力が大きくなるため、安易に用いるべきではないと封印された禁咒のシグマである。

「シクスエルフィド……一体彼女はどいつもりで……？」

ベアトリクスも額に皺を寄せながら窓の外を眺める。蠢く鳶は命ある者を狙って自らの養分にしようと、そこらを這い回っている。

「急いでとっ捕まえて事情を聞き出さないと気が済まないわ！」

「でも、これじゃあ外に出られない……」

トモミはドアを力いっぱい押す。しかしドアにはがっしりと鳶が絡まり、微動だにできなかつた。

「そんなの問題じゃないわ」

アリシアは目を瞑り、小さな声でシグマを唱える。

無色の魔法陣が浮かび上がり、それは風の力を生み出す。

「やああああっ！」

彼女は思い切り拳を振る。それは風の力を伴って、窓枠ごと鳶を吹き飛ばす。

「うわああ！ ちょ、アリシア！？」

「こうでもしなきゃ出られないわよ。さ、行きましょ」

アリシアはユウタロウの手を掴む。そして、窓枠に足をかけると空へと飛び出した。

「う、うわ！？ お、落ちる落ちる……！」

「私の手を繋いでいる限り落ちないわ。もう少し落ち着きなさい」

その後をトモミを伴ったりオナ、そしてベアトリクスが続く。

「あのカラスはどこかしら」

「少し待っつね」

リオナはフィニティン・モグリレイを開くと、シグマを読み上げる。

「ミエクスネ・ドロン」

奏でられるは回旋曲。舞うように流れる調べは辺りの状況をくまなく察知し、術者へと知らせてくれる。

「こつちね」

リオナが先陣を切って飛ぶ。その後をアリシア達について飛んでいく。やがて駅前のビル街が見えてくる。

ビルはびっしりと蔦に覆われて見る影もない。街も廃墟となっており、生きている者は誰もいない。

「街にいた人達はどうなっちゃったの……？」

ユウタロウは恐る恐るアリシアに尋ねた。

「ここはあいつが元の世界を半分取り込んで作った疑似世界。ここにあるべき人間達は残りの半分の世界で元気にやっているはずよ。で、私達はあいつに呼ばれてこの世界にいるってこと」

リオナはビルの群れの中をまっすぐに飛ぶ。やがて、一際高い摩天楼が見えてくる。

「これが中心のようね」

ちよつど街の中心に位置する巨大な高層建築。見上げるほどの高さのソレからは真っ黒な薔薇が何百何千と咲き乱れ、まるで縦に続く花畑のようだった。

リオナはビルの窓を覆う薔薇を炎で焼くと、ガラスの窓を突き破って中に入る。

「遅かったわね」

ビルの中は暗闇に包まれている。その奥から聞き覚えのある声が響いてくる。

「あんたちよつと一体どういうつもり？ 確かに私はあなたを信じることにしたわ。だからあんたがこつちよつとやってエルフィドをいくつも設置するのをただ見ているだけだった。だけど、なんでそれを今発動させたの？ この力がとてつもなく危険なものだって、あなたにだってわかっていてでしょ！？」

しばらくの間レルフィムは黙っていたが、やがて彼女は大きなため息をついた。

「あら、私は守ったのよ。この街を崩壊させるお馬鹿さんからね」

「ちよつと！ ふざけるのも大概にしなさい！」

「ふざけてなんかいないわ。あのお馬鹿さんが虚無を発動させたから、それを妨害してやったわ。こうでもしないと今ごろバーンよ」「バーンって何よ」

「さあね。それはわからないけれども、とにかく危険なものね」「レルフィムは一人で闇の中から現れる。」

「今、この世界には私達とノエル、それとその部下の銃使いがいるわ。このまま放っておけば月が満ちてあいつの虚無が発動してお終い。逆に私達が勝てば何も起こらずハッピーエンドね」

「ふーん、なるほどね」

アリシアは手にゲンチャ・ドルヲスを構える。

「要するに勝ってことね。簡単な話じゃない」

「そうということ」

レルフィムは手近なところにある椅子を引っ張ってくると、腰かける。

「じゃ、頑張つてね」

「はあ！？ あんた何様のつもり!?!」

戦う気力を見せず、あくびをしながら伸びをするレルフィムにアリシアは文句を言う。

「まったくヘビは馬鹿なのね。このエルフィドが消滅したら誰があいつのエルフィドを止めるのよ。つまり、私達の敗北条件は私が敗れること。その私が戦うわけじゃないじゃない」

「そ、そりゃそうだけど……なんかムカつくわね……」

アリシアはふうと頬を膨らませる。

「し、仕方ないよ。レルフィムの言う通り、僕らだけで頑張ろう」

「ユウタロウがそう言うなら……」

「ふふ、素直な子は好きよ」

レルフィムはユウタロウの首に手を回し、顔を近付ける。

「あーバカバカ！ 私のユウタロウにくつつくな!」

「何よ、あなたのとっていつ決まったの?」

「決まってるものは決まってるの！ はーなーれーなーさーいー!」

アリシアはレルフィムをユウタロウから引き離す。

「まったく、嫉妬狂いは見苦しいわよ」

「人の恋人に手を出す方がよっぽど見苦しいわよ!」

アリシアとレルフィムは激しくにらみ合う。

「まったく、二人ともバカね」

「それには同意」

トモミとリオナがぼそりと呟く。

「ま、まあそれくらいにしてさ。そろそろ行った方がいいんじゃない?」

「く……それもそうね。行きましょ、ユウタロウ」

アリシアはユウタロウの手を引いて窓辺へと向かう。

「私は一人でいいわ。どうせここは私の世界。逃げるのは簡単よ」

「言われなくてもそうするわよ!」

アリシアはトモミとリオナ、ベアトリクスを連れて窓から飛び出していく。そんな仲間達をレルフィムはため息をつきながら見送る。

「さて……それで隠れているつもりかしら?」

音もなく、机の影からゆらりと少女の輪郭が浮かび上がる。

「……」

「ようやく思い出したわ。もう何年も前のことですからっかり忘れていたけどね」

彼女の言葉は嘘だった。忘れるはずもない。もう、何年もかけて探し続けてきた。ただ、あまりにも彼女の姿が変わりすぎて、気付かなかっただけだ。

無言の少女は両手に銃を構えると、そのまま大きく飛翔する。

レルフィムもソルバブ・ドルラスを抜くと大きく飛んだ。

二人は空中で激しくぶつかり合う。

「クラウディ……なんて懐かしい響き。私がまだ向こうにいた頃の唯一のお友達。本当に……本当に久しぶりね」

「……」

クラウディアは表情をぴくりとも変えず、銃を払って後退する。



ぎ出していく。

聞けば聞くほどに少女は吠え、そして猛った。

「あ、ああ！ やめ……やめろ……ッ！」

「でも、別れは唐突だったわ。あなたは私の前からいなくなった。ただ、それだけよ」

「あ、ああああああああああああああああッ！」

それが彼女の限界だった。

彼女は両手で銃を構えると、精一杯の力を込めて引き金を引いた。生み出されるは暴風。コンクリートで作ったビルでさえたやすく吹き飛ばすほどの威力を秘めた嵐。それを二つの銃口から同時に解放つ。

摩天楼が爆ぜる。

その大嵐は中心を通る支柱にまで届き、無残にも二つに叩き折る。そびえ立つ塔は見るも無残に崩れていく。

後に残ったのは大量のガレキの山と、静かに主の行方を見守る薔薇園だけだった。

## 第十八話（後書き）

次回、レルフィムの意外な過去のお話となります。

## 第十九話（前書き）

今回はレルフィムの過去編です。

## 第十九話

### 第十九話

私は望まれない存在としてこの世に生を受けた。

高いだけで手が届かない空。いつも這うようにして生活する大地。空気は汚れていて、まともに吸うと頭がくらくらした。

そんな中をぼる布をまとって私達は生きていた。

生きていくための糧には困らない。ただ、毎日に生き甲斐もなく、生と死の狭間をさまよっているような毎日だった。

私はどんな目をしていたのだろう。濁った泥水のような目、という喩えで済めばいいものだろう。

生きるのが苦しかった。死ぬるものなら死んでしまいたいとすら思った。

けれども、私は死ぬのが怖かった。だからいつまでも生きる目的もなく、ただひたすらに生きていた。

そんなときだった。彼女に出会ったのは……。

雨が降っていた。冷たい雨だった。

薄いボロ布には敵しすぎる水滴。私は体を縮こませながらガレキの廃墟の下で、体を抱きしめて震えていた。

周りには似たような境遇の仲間達が黙って火を焚いている。だが、私はそこに行くこともせず、何かをぼんやりと見つめながら座っていた。

声をかけようとする者はいない。ここでは誰が死んで、誰が仲間に加わろうと関心はないのだ。

そのときだった。私の前に彼女が立ったのは。

同じようなボロ布を身にまとい、その端からぼつぼつと水滴を滴ら

せている。

腰まで届く、綺麗な銀色の髪が水の滴に濡れてキラキラと光っている。

目の前に立つ少女は私に尋ねた。

「と、隣、座ってもいい？」

私には断る理由もなかった。こくりと首を縦に振る。

彼女は遠慮もなく私の隣に座ると、ほっと一息吐いた。

「あ、雨の中走ってよかった……あ、あなたの名前は？」

「……名前なんてないわ。名付けられる前に捨てられた」

私はぶっきらぼうに答える。それは事実だった。

捨てるくらいなら、名前など最初から付けはしない。それを聞いて少女はすまなそうな表情を浮かべる。

「ご、ごめんなさい……」

そのままくしゃりと顔を歪めて、顔に両手を当てて肩を震わせる。

「ちょ、ちよつと泣かないでよ……私が気分悪いじゃない……」

「だって……だって……ごめんなさい、ごめんなさい……」

少女はひたすら謝り続ける。私は少し居心地が悪くなったが、立ち上がりもせずにそのまま彼女が泣き止むのを待った。

「……ぐすつ」

「ようやく泣き止んだかしら？」

「ごめんなさい……」

水を吸ってすっかり固くなった服の袖で彼女は涙を拭う。

「もういいわよ。そういうあなたの名前は？」

「私は……クラウドディア」

少女は自分の名前をクラウドディアと名乗った。

「そう、いい名前ね」

私はぶっきらぼうにそう答えた。尋ねはしたが、彼女の名前なんて興味はなかった。

「えへへ、ありがとう」

けれども、少女は私の方を向いて笑って礼を言う。その表情に嘘は

ないように思えた。

「へくしゅん！」

少女は大きなくしゃみをする。服がぐしょ濡れなのだ。寒くて当然である。

私はため息をつく、立ち上がって火を焚いている彼らの元へ向かい、燃え盛る焚火の中から一本薪を失敬し、代わりに汚れたコインを投げる。彼らは黙ってコインを受け取ると、そのまま再び焚火を見つめる。

私は穴の空いたバケツを持ってくると中に乾いた木材を放り込み、燃え盛る薪を突っ込む。炎の勢いが少し強くなり、少しだけ温かくなる。

「わぁ……」

クラウディアという少女は表情を輝かせながら火を見つめる。私は黙って彼女の隣に座り直すと、彼女と同じように焚火を見つめる。

「あつたかい……」

「……」

なぜ、私はこんな面倒事を抱え込んでしまったのだろうか。貴重なお金を支払ってまで、彼女のために火を用意してやったのだろうか。自分でも自分の行動を理解できなかったが、不思議と悪い気分はしなかった。

「あ、そうだ！」

少女はごそごそとポケットを探ると、中から何かを取り出した。

「食べる？」

彼女が取り出したそれは、こちらの世界では嗜好品として扱われている食べ物だった。

食べなくとも、人間が出す感情を吸っていれば生きていることができる私達にとって、食べるものとは贅沢品だったのだ。

彼女の手にあるのは紙に包まれた飴玉。お菓子なんて生まれてこの方一度も食べたことなかった。

けれども、私は首を横に振る。

「あなたのものよ。あなたが食べなさい」

「ううん。火のお礼だよ」

「別に礼が欲しくてしたんじゃないわ」

本当のことを言えば、喉から手が出るほどそれが欲しかった。食べるなんて行為、一体何力月していなかっただろうか。未だにきちんと味覚が機能しているか確証はなかったし、そもそも味覚というものとはどんな感覚か思い出すことすらできなかった。

けれども、それを受け取ってしまったら最後、とことん彼女の面倒を見なくてはならないような気がした。

クラウディアは残念そうにうつむくと、それを再びポケットにしまった。

「あなたがいららないなら、私も食べない」

私はそんな彼女の行動が理解できなかった。そして呆れもした。

「……あなたバカ？ 自分のものを何の代償もなしに人にあげるなんて、どうかしてるわ」

彼女は不思議そうな表情を浮かべて私を見つめる。

「そう……？ だって、嬉しいことは分かち合いたいもん」

無垢な笑顔で彼女はそう言った。私にはその言葉の意味が理解できなかった。

「はあ……？ 分かち合ったら半分になるじゃない。一人で楽しむば二倍なのよ？」

「二人が嬉しかったらやっぱり二倍嬉しいよ。それに、嬉しそうなの顔を見て三倍嬉しいでしょ？」

人のことなど考えたこともなかった私にはまったくわけがわからなかった。けれども、それを彼女は当然のことでも言うように言っている。それを聞いてみると、まるで自分がおかしいのではないかというような印象さえ受けた。

私は頭を抱え込む。おかしいのは彼女なのか、それとも私なのか。クラウディアは鼻歌を歌いながら焚火を木の棒でつつ突き回す。

「あ、そうだ！」

少女は何かを思いついたのか、私の方に向き直る。

「あなたの名前、私が決めてあげる！」

「はあ………？」

「うーんと……えーと………」

彼女は困惑する私にも構わず、一人でうんうんと悩み始める。

「そうだ！ レル फिल्म！ レル फिल्मにしよう！」

「……念のため尋ねておくけど、なんで？」

彼女は少しの間悩んでいたが、やがてにっこりと笑って答える。

「なんとなく！」

それからの毎日は、今までよりも賑やかなものになった。

彼女に誘われるままに様々な場所に引つ張り回され、下らないことをして遊び、時には失敗して、あるときは成功して思いがけないものを手に入れたり、少しだけ張りのある生活を送るようになった。

天気がいい日はスラムから遠く離れた郊外まで出かけて川で遊んだり、雨の日はガレキの下で焚火を見つめながら語り合う。曇り空の日はあまり遠くまで出ないでスラムの中を掘り出し物を求めてさまよったり、霧が出た日にはこれ好都合と市民街まで出て盗みを働いたりもした。

少しずつ毎日が楽しくなって、少しずつ毎日が豊かになって、相変わらず服はボロ布のままだけれども、私は以前と比べ物にならないほど充実した毎日を送るようになっていた。

けれども、そんな日々は続かなかった。

終わりは唐突に訪れる。

その日はしとしとと雨が降っていた。空は暗く曇り、時折稲光で明るく輝く。

偉大なる太陽も、小さな星々も、すべてを映し出す月も顔を見せは

しない。

ただ、天から降り落ちるものは神々の涙のみで、私は体を濡らしながらそれを仰ぎ見る。

私は転がったバケツにたまった水をすくい上げ、それを一気に飲み干す。このスラム街に水道なんてものはない。久しぶりに喉の乾きを癒す水を流し込んで、私は命を吹き返したよう感じる。

「ふう……」

口の中に泥の苦みが残る。だが慣れたもので、しばらくすればそれも消え失せる。

「レルフイム、出てきちゃダメだよ！」

私の姿を見つけたクラウディアはすぐさま走り寄る。

「少し、喉が乾いたの……」

「言ってくれば持つていったのに……」

軽いめまいが私を襲う。彼女に肩を抱かれて、私はしぶしぶガレキの廃墟の奥へと戻される。

そこには少しでも寝やすいようにとこしらえられた、ボロ布を積み上げたベッドと、穴だらけの毛布があった。

「病人は寝てなきゃダメ！」

「悪かったわ……」

私は彼女に言われた通り、寝床に戻る。体を横たえた瞬間、吐き気がするほどの倦怠感が体を包み込む。

私はガラにもなく、風邪をひいていた。

クラウディアが水を浸した布を額に当ててくれる。ひんやりとした感触がとても気持ちいい。

「ねえクラウディ。あなたは神様って信じる？」

「神様……？」

「苦しい生活の中にあっても、どんなに酷い暮らしをしても、万人を隔てることなく助けてくれる存在。そんな存在があったらいいなって、たまに思うのよね」

私は腕を伸ばす。まるで見えない神の手を掴もうとしているかのよ

うに。だが、それは虚しく空を切り、やがて力なく落ちる。

「こつやって苦しいとき、ふとそんなことを考えてしまうのよね。そんなものはない、なんてことはわかりきってるのにね」

私は嘲う。こんな人間以下の暮らしをしているような家畜に神などいない。いや、彼らを守り育てる主もない時点で、家畜以下の存在ではないだろうか。

「私、神様を探しに行く！ レルフィムのことを助けてくれるようお願いします！」

そういうと彼女は立ち上がり、雨の中どこかへと駆けていく。

私はそれを止めようと体を起こすが、襲い来る倦怠感に勝てずそのままベッドの中へと沈み込む。

「ふう……」

しばらく放っておけば帰ってくるだろう。私はそう思ってそのまま睡魔に身を任せる。

一体、どれだけの間そうしていただろうか。

私はうつすらと目を開く。大地を打つ雨の音は聞こえない。

いくらか体の調子もよくなったようで、私はベッドから起き上がると外へ出る。

空は綺麗に晴れ渡っていた。東の方から日が姿を覗かせている。

結局一日眠ってしまったのだろう。それほどまでに体が休むことを必要としていたことに私は驚く。

再び私はベッドの方へと戻る。そういえばクラウドディアはどこに行ったのだろうか、私は辺りを見回す。

すると、枕元に何か小袋が置いてあるのに気が付いた。

私はそれを手に取ってみる。中には小さな瓶が入っていて、風邪薬と書いてあった。

自然と微笑みが浮かぶ。私は世話を焼いてくれる少女のことを思いながら瓶の中の錠剤を口に含んで嚥下する。

きつと、これを手に入れるのに彼女は相当苦労しただろう。薬なんてものはこんな乞食が手に入れられるものではない。

今に笑いながら彼女が訪れるだろう。そう思いながら辺りを見回す。しかし、それはいつまで経っても訪れることはなかった。

「クラウディ？」

私は彼女の名を呼びながら部屋を出る。

水たまりに足を突っ込んで、泥水が服に跳ねる。けれども私はそんなことを気にも留めず、スラム街の中を駆ける。

「どこ？ クラウディ、どこなの！？」

いつでもどこでも後についてきて、につこり笑ってなんでもしてくれた可愛い女の子。気付かない間に私の胸を占め、大事な存在となっていた可憐な少女。

「げほ、げほっ！」

これ以上走るなど体が悲鳴を上げる。だが、それにも構わず私は走り、そして叫び続ける。

「クラウディア！ 返事をしなさい！ クラウディアーツ！」

そのとき、靴音が響く。

こつり、という堅い地面を踏み占める音。

目の前にはローブをまとった少年と、もう一人ローブをまとった少女がいた。

「……」

彼女は何も言わない。だが、口だけは動く。

ごめんね。

四度だけ、唇が動いて……少年は踵を返す。それに付き従うように少女は歩いていく。

「待って……！」

私は手を伸ばす。だがそれは彼女へ届くことなく……。

「クラウディアあああああー！」

少年と少女は雑踏に消えていく。そこはスラム街から市民街へと出る通り。すぐに二人の姿は見えなくなった。

「どうして……なんで……」

レンガ敷きの道路に涙が染み込む。

「うわあああああああああああああああああああ！」  
乾いた絶叫が裏通りに木霊した。

雨が降っていた。

晴れたと思っていた空はすぐに暗く曇り、そして空気はどんよりと湿り、重くなって雨粒となり、降り注いだ。

絶望に打ちひしがれた私の体を冷やすには十分なものだった。

「げほっこほっ！」

風邪はますます酷くなり、全身を酷い倦怠感が襲った。

やがて、私はその場に横たわる。堅い地面が冷たかった。

このまま放っておけば、私は死んでしまうだろう。だが、彼女がいないのならば、それもいいだろうと思った。

私はそのまま目を瞑る。

徐々に手足の感覚が痺れていくのを感じる。これが『死』というものだろうか。

思ったよりも、恐ろしいものではないな、と私は思う。

そのまま死に全てを委ねるように、私は目を瞑った。

暖かい。

死んだ後の世界というものはなんて死者に対して優しいものなのだろうか。

こんなにも気持ちのいいものなら、死ぬのも悪くない。

ほのかなスープの匂いが漂ってくる。死後の世界では死者に暖かいスープを振る舞うのが習慣なのだろうか。

そこでようやく頭がはつきりしてくる。死者をスープでもてなす死神がどこにいるだろうか。

私はゆっくりと目蓋を開く。

柔らかい光を放つ焚火。コトコトと音を鳴らしながらいい香りのスープを温める鍋。怪しげな道具。本棚に並ぶ無数の本。

天井があるということはどこかの家か、あるいは小屋だろうか。視界の端にようやく人の姿を見つめる。いかつい顔をした老人だった。

「起きたか」

老人は私が目覚めたことに気付くと、鍋を火から下す。

それを木のお碗によそうと、木のスプーンと一緒に私へ差し出してきた。

「飲め」

私はそれを受け取って、一匙すくうと口に運んだ。

ほど、涙がこぼれ落ちた。これほどまでに美味しいものは今まで一度も食べたことがなかった。

私は無我夢中になってそれを飲む。泣きながら飲んだスープは優しい味がした。

何度もお代わりをして、ようやくお腹が膨れる。

「風邪を治したらとっとと出ていけ。ベッドが占領されてかなわん」

老人はそう言っていると、不思議な道具を弄り始める。

「あなたは……？」

「……シグマ研究者の端くれだ」

短くそう言っていると、老人は相変わらず薬を混ぜ合わせたり、何かを計測したりと忙しい。

「何してるの？」

「……お前のために風邪薬を調合してやってるんだ。いちいち口出しするな」

私は老人にキッと睨まれて口をつぐむ。

仕方がないので、私は周りにある道具などを眺める。

天井からは何に使うのかよくわからない道具がぶら下がり、壁には無数の文字が刻まれた紙が貼られている。文字の読めない私にはなんと書いてあるのかわからない。

すぐに行うことができなくなる。黙っていると言われたが、私は老人に尋ねた。

「どうして私を助けてくれたの？」

「……さあな。俺にもわからん」

老人は短く言うと、やがて小さな瓶を差し出してくる。

「こいつを飲んで寝ている。二、三日でよくなるはずだ」

私はそれを受け取り、一気に飲み干した。とても苦くて、吐き出しそうだった。

老人は薬の調合を終えると、今度は書棚にある本を取り出し、読み始めた。

「何を読んでいるの？」

「……病気の治療法に関する本だ。さつさとお前を追い出さなければ俺が迷惑するからな」

ぱらぱらとめくりながら、それをしかめ面して読む老人は何かとても恐ろしいもののように感じた。私は毛布を頭まで被って目を瞑ると、すぐに眠気がやってくる。私はそれに任せて眠りに落ちていった。

目を覚ますと老人はいなかった。

私はベッドから起き上がると、不思議な道具に手を出してみる。

「触れるな」

すると、すぐに厳しい声が飛んでくる。

老人は屋根裏から降りてきて、私のそばの椅子に腰かけた。

そして大きな紙を広げると、それとにらめっこを始める。

「どうしたの？」

「……お前に話してもわかるまい」

老人はしばらくの間紙を睨み付けていたが、やがてため息をつく、グラスに発泡酒を注いであおった。

私は横に並んでそれを眺める。

その紙には月と太陽、木、火、土、金、水が描かれていた。ほかにも細かい文字がびっしりと刻まれている。

「これ何？」

「……発動式だ。不完全だがな」

「はつどうしき……？」

「シグマを発動する際に、エネルギーを通す式だ。この式に感情の力を流し込み、変化させて現象を引き起こすのがシグマだ。この式はいわば、エネルギーを変換する方程式だな」

彼の言葉の意味がまったくわからなかったが、それはシグマを扱うのに必要なものだということはわかった。

「だが、まだ足りない。俺の理論では完全なる結晶を生み出すシグマを作れるはずなのだ。クソッ！」

老人は机を思い切り蹴った。ガラスの小瓶が音を立てて倒れる。

私はその紙を眺めた。老人の言葉の意味は理解できなかったが、この図はなんとなく意味がわかる。

「……月と太陽が大事なんだよね？」

「お前に何がわかる……？」

私はその図にいくつかの記号を書き込む。足りないものはわかる。これは不完全なものを完全なものにするための式だ。木や火、土などは不完全な要素、月と太陽は完全なものを表すシンボルだ。

記憶の奥底に何かがあった。それを元に、この図に足りないものを書き足す。

全てを巻き込み、一なる全を意味する存在。あれはなんと言ったか。黒くて丸い、竜のようなものである。

「な、まさか……」

老人は私から筆ペンを奪うと、続きを書き始める。

「お、おお……これは……」

いろいろな文字を書き込み、線や図形を書き足せばそれは完成である。

「マピルタメリア……あとはこれさえ手に入れれば……！」

そう言うと、老人はその紙を掴んで部屋の外へと駆け出していった。  
「マピル……タメリア……」

私は彼の言葉を繰り返す。私はそれが何か知っている。第一の物質と呼ばれる、その道のシグマには必須で、なおかつ入手難な物体。世界のこぼした涙を集めたものと言われている、私も一度だけ目にしたことがある。

かつてシグマの研究者であった父がそれを手に入れたと騒いでいたのを目にしたことがある。最も、それが家族の離散する原因となった思むべき存在でもある。あまりにも高価なそれを手に入れるために、父は全てをなくしたのだ。

あの老人はそれを手に入れることができるだろうか。いや、きっと無理だろう。それは私の父が全てを売り払っても手に余るものだった。金を借りた相手が最悪で、父は恐らく死ぬまでこき扱われるだろう。

「クソ……」

老人はすぐに戻ってきた。マピルタメリアの高価さを思い出して冷静になったのだろう。それは一介のシグマ研究者に手に入れられるようなものではない。

「これさえ手に入れれば……。だが、この発動式を売れば……」

老人は自らが手掛け、そして私が少しだけ付け足した発動式を眺める。

「いや、これは俺が……。俺が作るんだ……」

老人は紙をぎゅっと抱きしめる。そして、私の方に向き直る。

「お前、名前は……？」

「私はレルフイム」

「そうか。帰る家は？」

私は首を横に振った。

「……ならば、ここに住む気はないか？ あの発動式の意味を読み取り、そして俺すら気付かなかった発想をしたお前ならば、きっと

素晴らしいシグマ研究家になれる」

……私はその質問に対し、首を縦に振った。

「ふう……」

レルフイムは自分の上に降り積もったガレキを崩す。

相変わらず、世界は彼女の黒い薔薇とノエルの半月が全てを支配していた。

黒薔薇は崩れたビルを覆い始め、それもまた庭園の一部へと変えようとしていた。

「それは困るのよねえ」

彼女は指を鳴らす。ガレキの山を覆い尽くそうとしていた茨が青く燃え上がる。

「さて……と……」

レルフイムを黒い魔法陣が取り囲む。それは辺りに降り積もっていたガレキの山を一瞬で吹き飛ばす。

「まったく、昔から無茶するのは変わっていないんだから……」

レルフイムはガレキの山の中から少女を見つけ出す。彼女はまだ気を失ったままだった。

彼女はクラウディアの傍に腰を下すと、思い出を一つずつ、言葉にして綴る。

「あなたと食べた飴玉、とても美味しかったわ。今まで食べた何よりも、とは言わないけれど、けれども甘くて、飢えてた私の渴きを癒すには十分なものだったわ。それに、一緒に駆けずり回った雨の下。あれもとても楽しかったわ」

レルフイムの透明な瞳から涙がこぼれ落ちる。

「あなたを探すために強くなった。そのためには血反吐も吐いたし、死ぬような怪我だって何度もしたわ。同族を何度も殺したし、人間だって手にかけた。それも、あなたを探すためだった。いつになったら見つかるのかわからなかったけど、それでも私は探し続けた。」

そして今日、ようやくあなたを見つけた。私はもう、あなたを離しはしないわ」

レルフイムはクラウディアの体を抱き寄せる。その体は冷たかったが、彼女はそれをとて心地よいと思った。

「一体彼女はどれだけの時間をそうして過ごしていただろうか。」

レルフイムはクラウディアの頭を膝の上に乗せ、彼女の頭を撫でていた。

「ん……」

やがてクラウディアは目を覚ます。ゆっくりと青い瞳を開いていく。

「目は覚めたかしら？」

レルフイムはクラウディアの額に手を当てる。

「な……！」

「あなたが体調を壊したとき、よくこうしていたわよね」

「知らない……ああッ！」

少女は体を折り曲げる。

「あなたが苦しんでいるのは知っている。けれども、あなたはこのままではいけない」

「あ、やめ……ッ！」

「思い出して。私と過ごした日々を……」

レルフイムはクラウディアの額に小さな魔法陣を刻み込む。それは失われた人格を取り戻すルーン。彼女を育てた親とも言える者から教わった、人を助けるためのシグマ。

「ロメミィ」

魔法陣が白い光を放つ。やがてそれは少女の全身をも包み込むほどのまばゆい光となる。

「あ、あああ……ああああッ！」

「さあ、思い出して。優しくった本当のあなたを……」

それは一際強い光を放ち、やがて少しずつ弱くなっていく。

「……はあ……はあ……」

少女の息は絶え絶えで、とても苦しそうである。レルフィムは彼女の額に浮かぶ汗を拭ってやる。

「……………れ、レルフィム……………?」

「おはよう、私のクラウディ。目覚めはよくって?」

第十九話（後書き）

いよいよお話も終わりに近づいています。続く！

## 第二十話（前書き）

ついにお話は最終章に。

## 第二十話

### 第二十話

荒涼とした大地に息付く黒薔薇の園。

それはどこまでも地平線の限り広がっており、街を黒一色に染めていた。

真っ赤な夜に浮かび上がる紅色の半月は蔓のような物で縛られており、月齢を増やすのを留められているように見える。

レルフイムの話によると、月が満ちたとき、それが僕達の敗北を示すタイムリミットのようだ。ああやって縛られてはいるものの、徐々に満ちつつあるのだろう。

「で、どうやってアイツを探すのよ」

アリシアはふわふわと空中に漂いながら怒ったように言う。

「それは私に任せるね」

リオナは魔導書の上に手をかざす。

「ミエクスネ・ドロン」

調べの回遊曲。ゆったりとしたロンドが奏でられる。それは音程を合わせるように、徐々に方向を絞りながら流れている。

「大幅な位置は掴めたね。駅のすぐ傍にある大きな公園、中央公園のどこかにアイツは根を張って待ち構えているね」

「どこかかってどこよ」

「それは行ってみるまではわからないね」

アリシアは呆れたように首を振る。

「まったく、役に立たないわねえ」

「何もしてないアリシアに言われたくないね」

僕達は紅の夜を飛びながら中央公園へと向かう。中央公園は商店街の広がる北側とは反対の、駅の南側に広がる広大な領地を持つ公園だ。四季折々の花々が咲き乱れ、そして広い広場がいくつもあるそ

の公園は市民にも人気が高いスポットだ。

だが、それも今は黒薔薇一色に染められている。僕達は黒薔薇に染められた公園に降りる。

「まったく悪趣味ね」

足に絡み付いてこようとする黒薔薇の蔓を風で切り飛ばしながらアリシアは言う。

「で、アイツの位置は？」

「待つね。今探っているね」

真剣な表情を浮かべてリオナは魔導書の上に手を掲げたまま目を瞑る。

「ユウタロウ君……私達、勝てるのかな……」

リオナが不安そうな表情を浮かべて僕に尋ねてくる。

「大丈夫、大丈夫だよ」

僕は彼女の問いかけに答える。その答えに根拠はなかったが、けれども僕だけでもそれを信じたかった。

「何があっても、私が彼を仕留めます。それは世界を守るためにしなければならぬ義務。そして、私の任務でもあります」

ベアトリクスは剣を抜き放つと、剛と言い放った。

「そうだよ！ ベアトリクスもいるじゃないか！ 彼女がいれば大丈夫だよ！」

ユジュー達の中でもっとも高い位置にいる彼女がいればきっと大丈夫だろう。僕は見たではないか。圧倒的なまでの力を持つ彼女の力を。目で見ただけを信じずに何を信じるといえるだろうか。

「議長がいてどうにもならなかったら、私達ではどうにもならないわ。逆を言うと、議長がいればどんな事態でも大丈夫、そうに決まってるわ」

アリシアはそれほどまでにベアトリクスを信頼しているのだろう。

彼女の口ぶりからもそれが窺える。

「……見つけたね」

しばらくの間瞑想するように目を瞑っていたリオナが目を開く。彼

女の手の上に公園の俯瞰図が広がりその中の一点が光り輝く。

「ここに一つ、強い力が集中しているね」

「そこに……アイツが……ノエルがいるのね」

僕はごくりと生唾を飲み込んだ。決戦の時は近い。

「行きましよう。戦いを終わらせるために」

僕達は歩き始める。その場所へと向かって……。

僕は何のために生まれてきたの？

僕はそれを目の前にいる人に尋ねる。だが彼は答えずに剣を振りかざして襲いかかってきた。

僕は首を振って力を放つ。彼は粉々に引きちぎれながら四散した。

僕は何のために生まれてきたの？

僕はそれを目の前にいる人に尋ねる。滅びろ、悪魔め、と言って彼は力を放つ。

僕は難なくそれを退けると、逆に力を跳ね返した。彼は自らの攻撃を受けて吹き飛んだ。

僕は何のために生まれてきたの？

僕はそれを目の前にいる人に尋ねる。しかし彼は大声を上げながら走ってくる。

僕はそれが恐ろしかったので、力の限り両手を前に突き出す。彼はそれを受けて倒れる。

僕は何のために生まれてきたの？

僕はそれを目の前にいる人達に尋ねる。それに答えられる人は誰もいない。誰もが僕を滅ぼそうと襲いかかってくる。

僕はそれが怖かった。だから、僕は使つてはいけないといわれていたそれを使ってしまった。

彼はそこにいた。

真つ黒な笑顔を浮かばせて、彼はにこりと笑う。

「待っていたよ」

彼に影のように付き従う少女はいない。

「クラウドディアは……敗れたようだね」

「まさか、レル फिल्मに……？」

「そう。でも、どうやら彼女の力はクラウドディアのそれを上回っていたようだ」

少年は近くの切り株に腰かける。その彼へと黒い薔薇の蔓が近付くが、ある距離をおいて近付くことはなかった。

その蔓達も彼のことを恐れているのだろうか。彼を中心に一定の距離をおいてぐるりと円を描くように密集している様子は、まるで蔓が平伏しているかのように見える。

「僕の夜を上書きし、さらには街まで巻き込んでしまつとは、彼女の力にはただ恐れ入るよ」

彼の足元から“彼の夜”が広がる。

「でも、僕は自分の世界でなければ戦えない、というより戦いたくない」

それはじわじわと広がりながら自らの領域を広げていく。

「ま、ポリシーとでも言えばいいのかな。どうも体が鈍くなつてね」

黒薔薇の園は無色の炎に包まれたように燃え上がり、灰も残さずに消えていく。そして、それは孤独な孤島のそれとなる。

僕達の背には広大な海が広がり、足元には切り立った崖が下へ伸びている。

……いや、これは崖ではない。よくよく地面を見ればつつすらとブロックがあるではないか。

海上から伸びるは巨大な塔。そう、これは海底に直接建造された巨大な塔なのだ。

強大な力を誇示する存在であると同時に、孤独ですべてを拒絶し、我こそが王と独りで君臨するための塔。それは彼の悲しき心を映し出した存在なのだ。

「さあ、始めようじゃないか」  
彼は鎌を片手に構える。

瞬間、彼の表情が消える。

振るわれた斬撃は無敵。それは岩の塊を吹き飛ばしながら僕達へと迫り来る。

ベアトリクスが神器を振るう。ぶつかり合う光と刃。それは輝かしい閃光を放ちながら火花を走らせる。

「こつちに来て！」

僕はアリシアに服を引っ張られて物影に放り込まれる。

「議長が本気を出したらとんでもないことになるわ……ッ!？」

そのとき、早速僕達が隠れた岩が光の刃に叩き壊される。

「早くこつちに来て！」

次の岩へと向かって僕は手を引かれて走る。だが、そこにたどり着く前に巨大な鎌が破壊する。

「こつちね！」

リオナが手招きをする。僕達は彼女達の元へと駆けよった。

「アリシア、本当は力なんか借りたくないけど、力を貸すね！」

「うるさいわね！何をすればいいのよ!？」

リオナは魔導書を取り出すと、その上に手をかざす。

「私が四大の地・水・火を補うから、アリシアは思い切り風の力を叩きつけるね。四大の力をすべて集めた盾を生み出せば、大方の攻撃は無効化できるね」

「わかったわ。やってみる」

二人は向かい合うように本の上に手を出すと、それぞれの呪文を唱え始める。

「ヤザケ！」

「シレイエヨ！」

ふわりと本の上に魔法陣が浮かび上がる。それは四つの力を混ぜ合わせる方程式。

「ブセネトワラキトニコマツヨエ」

「ミアキコニワタグソノソサワラエ」

陣の上をぐるぐると回りながら力が集まってい。それを僕達は黙って見つめる。

「イエチオ」

「イエチオ」

二人の声が重なる。それは高位の合体魔法を呼び出すための呪文。

「ニアチソラカタチオツチノコケ」

「ノソワタグソアサワラン」

アリシアの言葉の後にリオナが続ける。そして二人は重ねた手を上に挙げる。

僕達四人の周りを何色もの光が回る。赤、橙、黄、緑、青、藍、紫と変化するその環はやがて薄い膜となつて僕達を包み込む。

そのとき、光の刃が飛んでくる。それは七色に輝く薄い膜に弾かれる。

「見た目の割に頑丈なんだね」

「精霊の加護を得た防御壁ね。そう簡単には破れないね」

「私の力も混ざっているのだもの。結構頑丈なはずよ」

「アリシアの力なんて1ピコグラム程度しかないね。ほとんど私の力ね」

「何よ、えらそーなこと言っちゃって」

二人は早速言い争いを始める。僕はそんな二人は無視してベアトリクス達の戦いの方へと目を向ける。

華麗なステップを踏みながら剣と鎌をぶつけあう二人。そのたびに光り輝く火花が飛び散りまぶしく爆ぜる。

隙のない連続攻撃を繰り返すノエル。それに対して、強力な一撃で多段攻撃を打ち払うベアトリクス。その戦いは互角のように見える。

「素晴らしいですね。さすがメセブリー議長と言わざるをえません」  
「そういうあなたこそ、虚無の力を使わずにここまで私と渡りあえるとは驚きです」

二人は一度距離を置いて攻撃の手を休める。だが、それは第二ラウ

ンドへの架け橋でしかない。

二人の手が輝く。ベアトリクスは白、そしてノエルの手は黒。

「ロイフ！」

光の珠がひゅんひゅんとベアトリクスの周囲xを飛び回る。それは七つともまっすぐノエルへと向かう。

「ナヴィシイ」

一方、ノエルの方には黒い穴が開く。それは徐々に周りの空間を取り込むと、強烈な爆発を起こした。

光の珠は大爆発によって撃ち落とされるも、すぐに爆発する穴を迂回してノエルへと向かう。

「無駄だよ」

すぐにその経路を塞ぐように穴が開き、爆発を起こす。それは直後に連鎖的に爆発を引き起こし、ベアトリクスの方へと連鎖爆発する。

「戻りなさい！」

彼女が号令をかけると、爆発が到達するよりも早く光の珠が六つ戻る。それは正八面体を形成すると、彼女を爆発から守る。

そして、残った一つの珠は攻撃へと向かう。

「まだだ！」

黒い穴が開き、光の珠を吸い込んで爆発を起こす。だが、光の珠は輝きを失わず、少しの距離を吹き飛ばされただけだった。

「……頑丈だね」

「私の力は虚無とはいえど容易く消されるようなものではありません」

光の珠は複雑な軌道を描きながらノエルへと近付き、ついに彼の身を襲う。

「くっ！」

彼は自分の近くを爆発させて光の珠の直撃を防ぐ。だが、爆発に巻き込まれてごろごろと床を転がっていく。

「やった！」

「ま、まだわからない……」

トモミは不安げな表情を浮かべてノエルを見つめる。彼は僕の予想に反して起き上がった。

だが、すぐに光の珠の直撃を受けた。ブロックの床を転がっていく彼は、体が幼いだけあってとても痛々しかった。

「うああッ！」

そのままベアトリクスの前まで彼の体は転がされていく。そして、彼の体がベアトリクスの前まで転がされると、光の珠による追撃を止める。

「跪きなさい」

ノエルは体を起こすことも辛いようで、なんとか起き上がると、ぐったりとした様子で体を投げ出して座る。勝負は決まった。

リオナは防壁を解除する。僕達は彼女らの元へと駆け寄った。

「跪くのです」

光の珠が彼の体を襲う。彼は床に激しく叩きつけられると、体をそこに横たえた。

「もうやめてください、議長！　彼はもう動けないじゃないですか！」

「けれども、彼は大罪人。ここで厳しくしなければつけ上がり、勝手気ままにするでしょう。ここで彼の身の待遇を思い知らさなければならぬのです」

「ふ、ふふ……ふふふふ……」

ノエルは笑う。地に体を横たえてなお、彼にはまだ余裕があるというのだろうか。

「何がおかしいのです」

「ぐあッ！」

光の珠が七つ、一斉に彼の体を襲う。彼の体は地面に叩きつけられると、そのまま跳ね上がったのもう一度地面に叩きつけられる。

「ふふふふ……そうやってお前達は罪もない者達を罪人と決めつけて幽閉する。僕が何をしたいというんだい？　なぜ僕はあんなにも酷い目に遭わなければならないんだい？　お前達が僕という存在を

生み出したから、僕は今こんな目に遭っているんだよね？ じゃあ僕なんて存在は最初から生み出さなければよかったんじゃないかい？」

「黙りなさい」

再び七つの光の珠が彼を襲う。ノエルは血を吐き、苦しそうな咳をした。

「ッ！」

「アリシア……！？」

アリシアは小言で呪文を唱えると、思い切り風をベアトリクスに叩きつけた。

彼女の体は風に吹き飛ばされて転がっていくと、大きな堅い岩に体を叩きつけて止まった。

「もう……見ていられなかった……」

彼女はがくりと膝をつく。僕はアリシアの肩を抱きしめると、背中をさすった。

「ふふふふ……いやあ助かったよ」

そういうと、ノエルはふらふらとしながら立ち上がった。慌ててトモミが駆け寄る。

「大丈夫！？」

彼は体を支えられながらもなんとか立つ。

「ありがとう、お姉さん」

だが、彼はトモミを振り払う。

「離れているといい」

彼がそう呟いた途端、彼の周囲を風が渦巻く。

「なに……なんなの……？」

トモミは僕達の方へと戻ってくる。それを見て、安心したようにノエルは笑う。

「優しい人は傷付けたくない。離れていてほしい」

そう言うと、彼は目を瞑った。彼の周囲を吹きすさぶ風はさらに幕を厚くし、強烈な勢いを生む。

「この程度で僕は負けやしない。虚無の力を……甘く見ない方がいい」  
彼の周囲にいくつもの穴が開く。そして、彼の姿をも取り込むと、大きな大爆発を起こした。

それが収まったとき、そこにあったのは巨大な影だった。

「な、馬鹿な……」

「一体何なのよ！」

「冗談じゃないね」

「これは……」

一言で表すなら……竜。

巨大な姿を持った影の背中には大翼が広がり、それが震える度に嵐が巻き起こる。

天上には暗雲が広がっていく。真っ黒な雲の中を雷が時々轟と鳴った。

「そんな……竜!?!」

「竜は太古に絶滅したはずね。これはその形をまとい、姿を真似ているだけにすぎないね!」

竜は尾を振るう。その一撃は僕達を吹き飛ばす。

「うわあああつ!」

「きゃあああつ!」

大地を滑りながら僕達は跳ね飛ばされる。

「く……」

アリシアは立ち上がると、両手を高く掲げる。

「ユウタロウ、力を貸してっ!」

その手に光が集まり、七色の物体を構成していく。

「ムーティエン、ゲンチャ・ドルラス、顕現!」

七色の光はやがて一本の剣を引き抜く。それはまさしく僕の心を武装した剣。

「やあああああつ!」

アリシアは思い切り剣を突き立てる。真っ黒な血を噴き出しながら

大きく腕を振るう。それを受けてアリシアは思い切り叩き飛ばされる。

「あっ！」

「アリシア！」

僕はアリシアの元へ駆け寄ると、体を抱き起こす。アリシアは片腕を抑えながら起き上がる。

「腕が……」

「大丈夫!？」

左腕がぽつきりと折れ、あらぬ方向へとねじ曲がっていた。だが、彼女は舌打ちだけ打って立ち上がる。

「こんなんでは負けてられない！」

かろうじて無事だった右腕で剣を持つと、再びアリシアは立ち上がる。

「ドルラス・ナセツド！」

リオナも負けじと呪文を唱える。剣の舞踊は次々とノエルの皮膚を傷つけ、肉をえぐり取っていく。

「イエザゴ！」

アリシアの右手に風が集まり、圧縮しながら密度を上げていく。

それは風の魔弾。嵐の力を込めた強力な一撃。

「いけええええええええええっ！」

剣を振り払うように弾丸を撃ち出す。風の弾丸はまっすぐに飛ぶと、ノエルの腕に当たって弾ける。表面が吹き飛んで、中の肉が露わとなる。

「まだまだあっ！」

さらにアリシアは剣を携えて大きく飛ぶ。そして、そのままの勢いを殺さずに傷ついた腕へ攻撃を叩き込む。

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAA！」

竜は咆哮をあげる。だが、攻撃の手は休まらない。

「デnlルス・ゾスケル」

リオナの手から雷が矢となって放たれる。それはむき出しになった



大きく一閃する。横真一文字に切り放たれた斬撃はノエルの胴体を叩き割る。

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

悲鳴さえも許さぬ一撃。それは深々と刻まれると、そのまま倒れ伏した。

「やった……の?」

アリシアは剣を杖代わりにしてなんとか立つ。僕は慌てて彼女の元へ駆け寄ると、その体を支えた。

「アリシア!」

「ありがとう」

僕達はゆっくりとノエルが倒れた場所へと近づく。そこには体を横たえた小さな少年がいただけだった。

「ああ、僕の完敗だ」

ノエルは倒れたまま僕達を見上げるとそう言った。塔は一瞬で瓦解すると、軽い浮遊感を経て元の黒薔薇の庭園へと戻る。

「どうやらやったようね」

ふと、凜とした声が響く。僕達が振り返ると、上空から三人分の人影がやってきた。

「おつかれさま」

レルフイムとそれに掴まる東條さん、そしてもう一人はレルフイムを襲ったあの少女だった。

「そう構えなくてもいいわよ。もうこの子は何も悪さをしないわ」  
レルフイムはその少女をかばうように前に出る。彼女の言葉を信じることにした僕は頷く。

「それはそうと、さっさとこの奇妙な夜を終わらせてしまいたいわ  
さあ、この夜を終わらせる方法をさっさと吐きなさい」

レルフイムは倒れているノエルのそばにしゃがみこむと、足のつま先でつつく。だが、ノエルは薄い笑いを浮かべたまままで答えない。

「あなたの負けよ。もう悪あがきしても無理だわ」

「……く、くくく……」

ノエルはふらふらとしながら上半身を起こすと、近くの木によりかかる。そして気味の悪い笑みを浮かべたまま、恐ろしいことを口にする。

「この夜を終わらせる方法？ そんなもの、ありはしないよ」

「……え？」

思わず僕は尋ね返す。

「君がこの夜を起こしたなら、君が解除方法を知っているはずじゃ……」

「もう遅いよ。始まってしまった。もう止められないんだ。虚無の暴走は確実に起こり、今夜この街は消滅する。そしてそれが引き金となって破壊が始まるんだ」

「ちよつと！ ふざけるのもいい加減にしなさい！」

「彼はふざけてなどいませんよ」

そのとき、ベアトリクスが体をふらふらさせながら現れる。

「あ、ぎ、議長!？」

「久しぶりに攻撃というものを受けました。受け慣れていないとやはり痛いものですね」

「あ、その、さっきは……えつと……」

だが、ベアトリクスはさきほどの攻撃など一切気にしていない様子でノエルの前に立つ。

「通常の方法でこの夜を止めることはできません。なぜなら虚無の力は一方通行の片道切符。一度発動させてしまったらもう止める術はありません」

「そんな！ じゃあ私達はなんのために……」

しかし、ベアトリクスはぴんと指を立てる。

「ただ一つ、例外があります」

「例外……？」

「同等の力をぶつけて反作用で消失させるのです。これはノエルにしかできないこと。だから私達はノエルを完膚なきまでに屈服させる必要があったのです」

「……ふ、ふふふ、あはははははっ！」

それを聞いて突如ノエルが大きな声で笑い始める。

「やはりお前達は弱者を切り捨てるのが好きなんだね！ それはつまり、僕が自分の存在すべてを賭けてこの夜を消滅させるっていう意味だよね！？ あはははははっ！ どの道僕に生き残る術はないんだね！ これは愉快だ！」

「黙りなさい」

ベアトリクスはノエルの側頭部に思い切り蹴りを入れる。彼は横っ飛びに吹き飛んで地面を転がっていく。

「あなたが起こした不祥事なのだから、あなたが責任を持って決することは当然の義務です」

「は、はははは！ それは確かにそうだ！ でも、相変わらずメセブリーは他人任せな方法ばかり取って愉快だな！ はははははは！」  
彼はひとしきり笑うと、突如真顔に戻って尋ねる。

「もし、嫌だと言ったら？」

「そのときは殺さず、生かさず、あなたが首を縦に振るまで闘うだけです。幸いまだ時間はあります」

ベアトリクスは月を見上げてそう言う。

「ぎ、議長！ また弱い者を犠牲にしようというのですか！」

「弱い者ではありません。この事態を引き起こした張本人の命によって事の收拾をつけるだけです。これは彼の責任であり、彼がしなければならぬ義務なのです」

「ですが、他にもっと方法があるはずですよ！ そんな誰かの命を使う方法だなんて……」

間違っている。そう、そんな方法は間違っているのだ。

ノエルは死ぬべきユージューなんかではない。生きて、こんな恐ろしいことには目もくれず、彼なりの人生を全うすべきなのだ。人生には楽しい時間もたくさんある。こんなことで終わらせるだなんて間違っているのだ。

「そうね、気に食わないわ」

そのときレルフィルムが言う。それに続くように皆も反対の意を唱える。

「絶対に間違っています！ そんな……誰かを犠牲にするなんて……」

「ノエルにはもっと別の生き方があるね。こんな憎しみにまみれた生き方じゃない、もっと素晴らしい人生があるはずね」

「今は間違えてしまったけれども……でも、きつともっといい生き方があったはずだよ。そんな生き方を模索する時間がこの先彼に残されていないなんて……悲しすぎるよ」

「ならばどうやってこの夜を無事に終わらせるといいますか？」

問題はそれだ。仮に何か方法があったとしても、全員激しく疲れている。どうしようというのだろうか。

「簡単よ。この夜ごと事象の地平線の向こう側……虚無の世界に送り返してしまえばいいのよ」

そのとき、レルフィルムが答えを述べる。その言葉の意味はよくわからなかったが、何か方法があるということだけはわかった。

「それね！ 虚無の力を虚無の世界に返すだけなら何も問題はないね」

「でも、うまくいくか……」

リオナが言葉を詰まらせる。何か不都合なことでもあるのだろうか。

「リオナ、今はつべこべ言ってる場合じゃないわ。たとえ確率が100パーセントじゃなかったってやるしかないのよ」

「ユイ、あなたのシグマでユウタロウ達を外に出してちょうだい。

やり方は教えたわね。私達は残ってこれを片付けるわ」

「わかりました」

「僕達に手伝えることはないの……？」

アリシアは僕の手を握りしめる。

「そうね……せいぜいうまくいくように祈ってることくらいかしらね」

「……わかった」

僕はアリシアの手を握り返す。アリシアは笑って頷いた。

「じゃあね」

「うん、頑張つてね」

僕はアリシアの手を離す。だが、アリシアはまだ僕の手を握ったままだった。

「アリシア……?」

「目を瞑って」

彼女はそう言うと、僕の体を引き寄せて抱きしめ、口付けをする。

「!?!」

僕は突然のことに驚きながらも、ゆっくりと目を瞑った。

「まったくお熱いことね」

「はわわわ……」

レルフィムは呆れ、ユイは両手で目を覆う。といっても、指はだだっ広がっているが。

「アリシアは節操つてもものがないね」

「まったく酷いわね……」

リオナとトモミも呆れ顔を浮かべる。

長いようで短い接吻から解放される。アリシアの頬は赤く染まっていた。

「ほら! さつさと行きなさいよ!」

どんと僕の体は突き放される。だが、それは彼女なりの恥ずかしさを隠すためのものだろう。

「じゃ、じゃあ行きますよ……?」

ユイは指輪を高く掲げる。

「カリへ!」

青い光が指輪に集まっていく。それはやがて僕達の姿を包み込み、そして視界を黒で塗り潰した。

## 第二十話（後書き）

次回、最終話。長かったお話もついに終わります。

**最終話（前書き）**

ついに最終話です。

## 最終話

### 最終話

あれから何日が経っただろうか。

僕は今までと変わらぬ日常を送っていた。

いや、変わったことはある。彼女達がいなくなってしまったことだ。学校に席こそ残ってはいるものの、欠席扱いになって通ってはこない。

それはアリシアも、レルフィムも、もともと学校にいたりオナも同じである。

最初はとても寂しかったが、そのことに慣れつつある自分がとても恐ろしかった。

僕はいつもと同じようにトモミとユイの三人で帰宅路についていた。

コウは写真部の活動があるとかで、今日はいない。

季節は少しずつ移り変わり、ヒグラシが鳴く季節となりつつあった。徐々に夕暮れの中に満ちつつあるセミの声。もの悲しげな合唱が僕の心により哀愁を呼び覚ます。

「アリシア達、どうしたんだろうね……」

僕はぼそりと呟く。その問いかけに答えられる者はいない。

「皆がいなくなって、なんだか寂しくなったなあ……」

「そうね……。今までは騒がしいくらいだったのに……いないのはいないのでまた静かすぎてつまらないわね」

「皆さんがいるのが当たり前前の日常だったのに……この感覚はなんなんでしょうね……？」

やがて分かれ道に差し掛かる。十字路で正面は僕、右はトモミ、左はユイの家へと繋がっている。

「じゃあまた明日」

「またね」

「さようなら、皆さん」

やがて僕は自宅に到着する。いつもなら騒がしい声がいっつもあつたはずなのに、家の中は閑散としていてとても静かだった。

それが当たり前の毎日の毎日を送っていたはずだったのに、どうしてそれを寂しく感じるのだろうか。

「はあ……」

僕は戸棚からあんぱんを取り出す。アリシアがお腹が空いたときにいつでも食べられるように用意してあるパンだ。だが、もう賞味期限が近い。僕は封を破ってかじってみる。ぱさぱさで乾いた口あたりのそのパンは、なんだかやけに味気なかった。

そのとき、今にベルの音が鳴り響く。電話だ。

僕は電話の子機を取り上げると、口の中のあるぱんを飲み込んで応対した。

「もしもし」

「桐生病院です」

はて、なぜ病院などから電話がかかってくるのだろうか。最近病院に行ったことといえば、東條さんを見舞いに行ったときくらいだろうか。

「あの、何か……」

だが、その電話主の答えは驚きのものだった。

僕は子機を叩きつけるように戻すと、制服を着替えもせず家に飛び出した。

自転車のペダルを思い切り強く漕いで病院へと向かう。途中の信号待ちがうっとうしい。

やがて桐生病院に到着する。

「先ほど電話をいただいた坂下ですけど……！」

受付のお姉さんはにっこりと笑って面会バッチを手渡してくれる。

エレベーターに飛び乗ると、6階のボタンを押す。

一度だけ記憶に残っている道のりを辿る。そして、その扉の前で僕は立ち止まった。

プレートには坂下と書かれている。僕は唾をぐくりと飲み込むと、扉に手をかけた。

窓際のベッドには一人の女性が腰かけている。その女性は僕の顔を見るとにこやかに笑った。

僕はなんと声をかければいいかわからなかった。なにせ15年も会っていない人物だ。15年前といえば僕はまだ2歳だ。それでも、記憶の端にこびりつくように、その笑顔だけははつきりと残っていた。

「母さん……」

「ユウタロウなのね……」

僕は数歩前に進む。父に連れられて一度だけ来たときにはまったく表情を動かさずに眠っていた母が、目の前で笑っている。

「大きくなったわね……」

僕はその場に立ちつくしたまま、母の顔を見つめる。

「15年も会わなければ大きくなって当たり前ね。はあ、母さん15年も時間を無駄に過ごしちゃったのね。まったく損しちゃったわ」  
母は少し悲しそうな、けれども嬉しそうな表情で言う。

「でも、ユウタロウがこんなに大きくなって嬉しいわ」

「母さん……」

「父さんは元気にしてる？ 相変わらず仕事であちこち飛び回っているのかしら。忙しい人だからね」

「父さんは昔とちっとも変わってないよ。いまだに元気に地方行ったり海外行ったりしてるよ」

「相変わらず元気にしてるのね。私が目を覚まさなくてめめそしてたらどうしようと思ったわ」

母さんはからからと笑う。そんな母の様子は15年も眠っていたようには思えなかった。

「あなたは元気にしてた？」

「うん、僕は元気だよ」

「ちゃんと自炊してるのかしら？ レトルト食品ばかりじゃ体壊しちゃうわよ」

「な、ちゃんと料理くらいできるよ！」

「よかった、安心したわ。あ、そうそう。目が覚めたらこれが置いてあったの」

母はテーブルに置いてあった封筒を僕に渡す。それはすでに開封されている。おそらく母が読んだのだろう。表にはForユウタロウと書かれてあった。

『メリークリスマスにはちよつと早いかしら。ともかくあなたへのプレゼントよ。屋上で待ってるわ。来ないと怒るからね！』

「母さん、ちよつと僕行ってくる！　すぐ戻るから！」

「はい、行ってらっしゃい」

母にそう言い残すと、僕は部屋を飛び出した。エレベーターを待っているのがもどかしくて、階段を駆け上がる。

重い扉を肩で押し開けると、風にたなびく白いシートが飛び込んでくる。

その波間にちらほらと影が見える。

僕はその影へと走り出す。途中で転びそうになりながらも、笑って待っている彼女の元へと駆け寄る。

「アリシア！」

「まったく、来ないかと思ったわよ」

アリシアは少し頬を膨らませて唇を尖らせる。

「あら、私の名前は呼んでくれないの？」

「どうせユウタロウの眼中にはアリシアしかないね」

「レルフイム、リオナ！」

給水塔の上に立っていた二人を仰ぎ見る。二人は給水塔から降りてくると、アリシアの隣に並んだ。

「久しぶりね、ユウタロウ。会いたかったわあ」

レルフイムの僕の首に手を回してくる。

「ちょ、ちよつと！ あんた何してるのよ！」

「なあに？ 私の大事な人を抱きしめて何が悪いの？」

「大事な人って、クラウディアはどうしたのよ！」

「クラウディアはクラウディア、ユウタロウはユウタロウよ」

レルフィムはわけのわからないことを言いながら唇を突き出して僕に迫ってくる。

「ッ！」

それをアリシアがシグマを使って阻止する。

「まったく、隙も何もあつたもんじゃないわ！」

「やあねえ。ちよつとしたスキンシップじゃない」

「スキンシップでキスするなバカ！」

「あら、バカって言った方がバカなのよ？」

「うっさい！ バカ！」

二人はいがみあい、そして呆れるようにリオナがため息をつく。僕はリオナに気になっていたことを尋ねた。

「今までどうしてたの？ 皆心配してるよ？」

「ノエルが集めてた心を元の持ち主に返したり、ノエルの処分について決めたり、まあ色々あつて忙しかったね」

「それならせめて一言くらい言ってくればよかったのに……」

「忙しいものは忙しいんだからしょうがないね。けど、すぐにこっちに戻ってこれたからこれで万事OKね」

「明日からは皆と一緒に学校に行けるの？」

「大丈夫ね。引き続き私達はカードを討伐するティオナとして人間界に留まるね。まだしばらくはこっちにいることになるね」

「そっか……よかった……」

また明日からあの賑やかな日常が戻ってくると思うと、とても安心した。

「皆に知らせなくちゃ！」

僕は携帯電話からトモミとユイにメールを送る。すぐに安堵したという旨のメールが返ってくる。

「まったく、カラスはぴーちくさえするしか能がないの!？」

「あら、コブラなんかさえすることすらできないじゃない」

いつまでやっているつもりなのか、アリシアとレルフィムはまだ言い合っていた。

「二人とも、そろそろ終わりにしてさ。帰ろうよ」

「まったく……。ユウタロウに呆れられるまでやってるなんて、私もヤキが回ったわねえ」

「うっさいわね! あんたが最初にあんなことやったのがいけないんでしょ!」

「もうその辺にしてさ、ね?」

僕はなんとか二人をなだめる。まだやりたりないようだったが、とりあえず牙を収めてくれる。

「じゃあ……。帰りましょうか」

「あ、ちよつと待って。ちよつと寄っていきたいところがあるんだ」

「なあに?」

「アリシアを……。僕の母に紹介したいんだ」

アリシアは突然頬を真っ赤にしてうろたえる。

「え、ちよつと、それってまさか……!」

「え……。いや、そんな! そういうわけじゃないよ! ただ、今ウチに住んでるから一応顔見せくらいはしておかないといけないなあって思ってたさ!」

「な、なんだ……。そういうことなのね」

アリシアはなんだか少し残念そうに言う。

「あ、アリシアはさ。僕のことどう思ってるの……?」

「そ、それは……。もちろん……。す……。き……」

そう言うアリシアは耳まで真っ赤だった。

「バカップルね」

「バカップルよねえ……」

「うっさいわね! あんたらは黙ってればいいのよ!」

リオナとレルフィムはアリシアをからかう。それにムキになって反

抗するアリシア。

こんな日常が戻ってきたことが単純に僕は嬉しかった。いつまでも、そういつまでもこんな毎日が続けばいいのになど、僕は思った。

病院の廊下に元気な声が響く。少し異様な出立ちのメンバーに母はなんと言うだろうか。

賑やかな友達がいることを嬉しく思うのか、それとももう少しまともな友達を作れと諭すのか。

それはまだ僕にもわからない。それは誰にもわからないことだった。けれども、きっとこの日常は続くのだろう。

終わる日はいつか来るのだろうけど、そう近い日ではないハズだろう。

その日まで、僕は楽しくやっていきたいと思っている。

F i n n .

## 最終話（後書き）

終わりました。今日一日で上げましたがこれ、実のところ半年かけて連載していました。

非常に長いお話になってしまいました。公開していたところがm i x iというだけあって、最終話まで読みきってくださった読者はほとんどいないかと思われます。あまりにも感想が少なかつたので、こちらでも公開させていただくことになりました。皆様から感想がいただけると思います。

では、これにてユジューティオナを終わらせていただきます。最後まで読んでいただいております。ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5461i/>

---

ユジューティオナ

2011年2月2日14時17分発行